
ファッキン・シスターズ・クライスト

酒井しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファツキン・シスターズ・クライスト

【Nコード】

N7823I

【作者名】

酒井しのぶ

【あらすじ】

片桐有二は、二十五年前に体験した事件のトラウマに悩まされて生きている、女好きで、酒好きで、自堕落な、探偵家業。ある依頼がきっかけで、変態的な性癖が原因の、セックス&バイオレンス事件に巻き込まれていく。恋人と呼ぶには少し気が引けるふしだらな関係の、恋多き女、酒井しのぶと共に、事件の真相を探るべく調査を開始するのだが……

プロローグ

朝帰り いや、朝帰りと言うには太陽がずいぶん昇っている
／もつ午前九時をまわった。

家に戻る前に立ち寄った近所のゲームセンター／コインゲーム
あくびが出る／酒臭い コインはあつという間になくなる／か
ねもあつという間になくなる 朝からやかましい店内／タバコを
吸いに喫煙ブースに移動する。

平日だというのに学生服の子供がたくさんいる／狭い喫煙ブース
／タバコの臭いが充満している／ガラス張りの喫煙ブース／小さな
空気清浄機がフル回転しているがまったく意味を成していない。

女が一人 太いブヨブヨの足を丸出しにした制服姿の女子高生
制服姿で堂々とタバコを啜えている／いや タバコじゃない／
マリファナのまどろむ香り

マリファナ

思い出す 二十五年前／あの日／あるとき／あの男もマリファ
ナの匂いをさせていた

二十五年前 おれは十一歳だった／姉貴は十四歳／親父はいな
い／おふくろはアバズレ

おふくろの行動は二つに一つだった 酔っ払って寝ているか／
男と寝ているか。

おれはおふくろが大好きだった／母親としてではなく エロい
女として。

おふくろが知らない男と抱き合っているのを覗いて興奮していた
／抱き合ったあとで風呂に入るおふくろを覗いて興奮していた／脱
いだばかりの下着の臭いを嗅いで興奮していた そんなろくでも

ない子供だったおれ。

あの日　おふくろは酔っ払って寝ていた／おれは風呂の脱衣場にいた／洗濯機の前／おふくろの染みだらけのショーツ／鼻に押しつけて目を閉じていた

突然／脱衣場のドアが開いた　姉貴がいた／おれを見つめる姉貴　おれは姉貴の部屋に連行された。

姉貴はおれを裸にした　そして言った　ママには内緒にしておいてあげる

そしてさらに言った　だから言うことを聞きなさい　そう言つて姉貴はいやらしく微笑んだ。

姉貴はおれの顔におふくろの汚れたショーツをかぶせた／おふくろのストッキングでおれを後ろ手に縛った　そしておれの股間を撫でまわした。

まだ皮も剥けてなきや毛すら生えてないカシューナッツ　姉貴はそれをしごいた／勃起すらまともにしなないカシューナッツ／おふくろの臭いに包まれる／興奮／高揚／光悦／姉貴の手の中　生まれてはじめての射精。

おれと姉貴の内緒の遊びは毎日繰り返された　その都度おれはストッキングで縛られていた／その都度おれはおふくろのショーツをかぶっていた／その都度おれは姉貴の手に射精していた／そしてその都度　姉貴のショーツはビショビショに濡れていた。

そんなことがしばらく続いた／姉貴が学校から帰るとその遊びは始まる　あのときもそうだった

あのとき　おれは姉貴の部屋にいつも通りに呼ばれた／いつも通りに縛られた／いつも通りにおふくろのショーツをかぶされた／いつも通りにおふくろの汚れたショーツの匂いを嗅いでおれは幸せだった／いつも通りに姉貴のやわらかい手がおれのカシューナッツをしごくのを待っていた／いつも通りにこの上ない快樂の時間に浸っていた　だが　そこから先がいつも通りじゃなかった。

突然／部屋のドアが開いた　そこには知らない男が突っ立って

いた／知らない男が啜えるタバコからはまどろむ香りがしていた
そこから先は壊れたテレビのようだった／目の前が上から下へ／
高速でスクロールしていた

おれが見た物　けちよんけちよんに蹴飛ばされる姉貴／フラン
ス人形のように振り回される姉貴／染みのついたシヨーツを脱がさ
れる姉貴

おれがしたこと　知らない男に飛びかかった／姉貴に後ろ手に
縛られていたから何もできずにぶっ飛ばされた

おれがされたこと　殴られた／蹴られた／殴られた／姉貴のベ
ツドに縛りつけられた　そしてまた殴られた／蹴られた／殴られ
た

おれは叫び続けた　知らない男に犯される姉貴を見ながら／知
らない男のオスカー・シュニツェルが姉貴の卑猥な秘部にめり込
んでいくのを見つめながら　とにかく叫んだ／叫んだ／叫んだ
知らない男が腰を振りながら姉貴の腹を殴打するのを見つめなが
ら　叫んだ／叫んだ／叫んだ

姉貴の卑猥な秘部から知らない男の精液が溢れ出すのを見つめな
がら　叫んだ／叫んだ／叫んだ

股を開いて卑猥な秘部をあらわにしたままピクリとも動かな
った姉貴を見つめながら　叫んだ／叫んだ／叫んだ

そしてまた知らない男に殴られた／蹴られた／殴られた
意識がなくなりそうになったとき　男は殴るのをやめた／そし
てまた姉貴を犯した　もう抵抗もせずピクリとも動かない姉貴を
舐めまわした／オスカー・シュニツェルがメリメリと音を立てて
姉貴の膣にめり込んでいった。

おれは叫んだ　口から血を噴き出しながら／姉貴の名前を／お
ふくろの名前を／神の救いを

だが助けは来なかった／姉貴はピクリとも動かなかった　おふ
くろが現れたのはそれからずっとあとだった／おれが何度も殴られ
たあと／姉貴が何度も犯されたあと／おれの叫びが地球を飛び出し

月を何周もまわったはずとずっとあとだった

姉貴の部屋のドアを開けたおふくろの顔　恐怖／驚愕／狂気／
そしてオスカー・シュニッツェルを剥き出しにした男を見たときの
怒りに満ちた顔。

急に／目の前が真っ赤になった

気がついたとき　おれは病院のベッドに横たわっていた

姉貴が生きていることを知らされた／知らない男が殺されたこと
を知らされた／おふくろが死んだことを知らされた

まったく記憶にないおれ　目の前が真っ赤になった瞬間から病
院で目が覚めるまで。

看護婦／警察／新聞／テレビのニュース　経験したはずのこと
を第三者からの情報として手に入れたおれ。

死んだ知らない男　マリファナでぶっ飛んだおふくろの交際相
手の一人／姉貴の部屋に飛び込んだおふくろ／姉貴の机にあった裁
縫バサミ／おふくろにめった刺しにされる

おふくろ　別の男とホテルにいた／帰宅して事件を目撃／男を
殺したあとに首を吊って自殺

姉貴　知らない男の暴行により意識不明の重態／眠ると恐怖の
フラッシュバック／ベッドの上でのた打ちまわる／精神はボロボロ
／体もボロボロ

そしておれ　記憶にある部分／記憶にない部分／どっちもひっ
くるめてフラッシュバック／姉貴と同じ／眠ると恐怖が繰り返され
る／精神はボロ雑巾／肉体もボロ雑巾

忘れられない匂い　人間の生臭い血の匂い
忘れられない匂い　マリファナのまどろむ香り

狭い喫煙ブース／まどろむマリファナの煙／女子高生

おれは言った　「昼間っからこんなところでマリファナとは、

いい度胸だな」

女子高生はギョツとした　ブサイクな顔がさらにブサイクになる／ブヨブヨの太ももが波打って震える／汚い制服にタバコの灰が落ちる。

市販のタバコ／先っぽに仕込んであるマリファナ／慌てる女子高生／一気に煙を吸い込む／マリファナタバコを灰皿に突っ込もうとする　その手を掴むおれ。

「何すんだよ!!!」

まだぶっ飛んでいない女子高生／おれの威嚇にビビッてわめく。

「このタバコは証拠品だ。おまえはおれの目の前でマリファナを吸った。逮捕する」

泣きそうな女子高生／おれの手を振りほどく／急いで喫煙ブースから逃げ出す

落っこちた吸いかけのマリファナタバコ／拾う／灰皿で揉み消す

男が喫煙ブースに入ってくる。

白髪／大柄／ヨレヨレになった茶のスーツ　警視庁／生活安全

部／少年育成課／栗田孝一郎

おれは栗田に揉み消したマリファナタバコを投げた　「証拠品だ」

「それはわかるがな。おまえは刑事じゃないだろう」

栗田は優しいバリトンの声を響かせてそう言った　その通り／

おれは刑事どころか警官ですらない／ただの一般人／生意気でブサイクでデブの女子高生をビビらせたただけだ。

「捕まえなくっていいのか」

おれは自分のタバコに火をつけた／ハイライト・メンソール。

「ほかに巡回している警官がいる。それよりおまえ、こんなところで何をしているんだ。しかもこんな朝っぱらから」

「ゲームセンターですることと言えば、ゲームしかないだろ」

栗田はククツと笑った　「相変わらずタフガイを気取っているのか。まあいいさ。姉さんは元気か？」

おれの手／震える　　姉貴のこと／二十五年経っても恐怖は消えない。

「さあな、もう何年も会っていない。生きているのかも知らん」

タバコを吸う　　震える手／震える唇／震えながら吐き出される煙。

「まだ怖いか」

「何がだ」

「いまだに眠れんか？」

「だからなんのことだ」

手が震える／目の前が高速でスクロールしそうになる　　震える手を握り締める／歯を食いしばる／なんとかスクロールを止める／まだ酔っ払っているのが幸いした／酒さえ飲んでいれば恐怖のトラウマでフラッシュバックすることはない。

栗田はタバコを灰皿に突っ込んだ　　「おれに隠したって仕方ないだろう。二十五年前のあの事件のトラウマは、いまだにおまえを襲うのか？」

あの事件　　姉貴がレイプされた事件／おれが暴行された事件／おふくろが人を殺し自殺した事件　　栗田はその事件の担当刑事だった／そしておふくろの知り合いだった／孤児になりボロ雑巾になったおれと姉貴の面倒を見てくれた。

「今はもう大丈夫だ。フラッシュバックも滅多に起こらない。記憶はないままだが、二十五年も前の記憶がしつかり残っているやつなんてそうそういないだろ。だからべつに記憶なんかなくていい。事件のことは思い出さないほうがトラウマに囚われなくていいんだ。いや、そういう問題じゃない。あんたに隠すとか隠さないとかじゃない。あんたに話したっておれのトラウマが消えるわけじゃない。だから話す意味がない。それだけのことだ」

急所を突かれてベラベラと話し出す情けないタフガイなおれ。

「そうか。すまん、思い出させるようなことを聞いてしまって」

おれはタバコを消した／喫煙ブースの出入り口に向かった。

「おれのことには構わなくていい。おれは一人で生きていける。あんたは姉貴の心配でもしている」

栗田が姉貴を気にかけるさまが尋常じゃないのは、二十五年前から知っていた。姉貴を救うために自分の家族を犠牲にし、離婚までしたくらいだ。おれは所詮、姉貴のおまけだつてことくらい知っていた。栗田はおふくろの友人だつた／おそらくおふくろを愛していた／おふくろに似ている姉貴にただならぬ思い入れがあつたのかもしれない 歳を重ねるごとにおふくろに似ていく姉貴に。

喫煙ブースを出るおれ 栗田がブースの中からおれに手を振つた／昔ながらの人情派の刑事／態度は刑事らしく横柄／だが心は優しい 二十五年前の事件でボロボロになつた姉貴を社会復帰させた／高校に通わせた／就職の世話までしてくれた。

おれは中学を出て悪いことをいっぱい経験した／栗田が通わせてくれた高校は中退した／一人で暮らし生きてきた／姉貴と一緒にいるのが辛かつたから／姉貴のおまけで栗田の世話になるのが嫌だつたから。

あのおとき おれと姉貴が秘密の遊びをしていなかったら おれはおふくろのストッキングで縛られてなんかいなかった／もしかしたら姉貴を救えたかもしれない／もしかしたらおふくろは自殺しなくて済んだかもしれない おれがおふくろのシヨーツをかぶつておふくろのストッキングで縛られてさえいなかったら

もういい 忘れよう／おれはもう大人だ／二十五年も前のことで、もしかしたらだの／こうだつたらだの／ああだつたらだのなんて考えても仕方がない 忘れよう

ゲームセンターの広いフロア／入り口近くの端っこにある喫煙ブース／反対端のトイレに向かう／さっきの女子高生がトイレから出てきた 別の女子高生と一緒に／違う制服／肩にかかるくらい茶色い髪／身長は一五五センチくらいだろうか／デブでブサイクのほうとは違い少女漫画のように細い体をしている 距離が遠くてどんな顔かまではわからない。

ブサイクな女子高生がおれを見た／もう一人に何やら言っている
あいつ刑事だよ、さっさと逃げよう！ とかなんとか言っ
ていそうな感じ。

もう一人の女子高生ノクスクスと笑う あんな格好した刑事が
いるわけないよ とかなんとか言っ
ていそうな感じ。

栗田の仲間が巡回している？／でたらめだな 巡回していたら
あの女子高生たちは今ごろパトカーの中だ。

どうでもいい 帰ろう／帰って寝よう。

自堕落に／自虐的に／自己破壊的に 自己嫌悪を忘れるために
／酒を飲んで寝よう。

電話が鳴っている　聞き慣れた呼び出し音が頭の中のはるか彼方から聞こえる／音はだんだんと大きくなる

突然／頭の中で鳴っていた音が耳から聞こえるようになる／目が覚める。

バーカウンターに突っ伏して寝ていたおれ　ハイスツールから飛びおりる／アンティークなコーヒー色の机に向かう／プッシュ式の電話／耳障りな電子音／灰色の平たい電話／灰色の平たい受話器

「はい、片桐探偵事務所」

自分の声が寝起きであることをはっきりと相手に伝えてしまっていることがわかる。

「五分十二秒だ」

電話の向こう／声の主／高橋　仕事仲間／盗聴のプロ／本業は風俗雑誌の編集長　三十九歳／タフガイ／声の調子から機嫌がいいのがわかる。

「朝からずいぶんとゴキゲンだな。なんだその五分十二秒ってのは新聞と週間誌だらけの机　隅に置かれているマグカップ／昨日のコーヒー／飲む　不味い／一昨日のだったかもしれない。」

「おまえが電話に出るまでにかかった時間が五分十二秒だ。それに今は朝じゃない、昼だ。十二時を過ぎたところだ」

腕時計を見る　クッションがべっちゃんに潰れたアームチェアに座る／机の上／新聞だの雑誌だのを端に寄せる。

「ま、おまえの飲みすぎはいつものことだからな」

高橋がタバコに火をつけた音が聞こえる／煙を吐く空気音が聞こえる。

受話器を耳と肩で挟む／アームチェアを背中側に回転させる／窓のカーテンを少しだけ開ける　眩しい日差し／暑い　外はいつも通り／新宿南口／裏通り／雑多な賑わいを見せている。

「で、五分十二秒も鳴らし続けた理由はなんだ？」

アームチェアを机に向け直す／背もたれに頭を沈める／足を机に投げ出す。

「たまに小遣い稼ぎ程度の仕事をくれるヤツから依頼があった。本格的な仕事のような感じだから、おまえを紹介しておいた。今日の午後二時、恵比寿のマエストロソってイタリア料理店に行け。遅刻はだめだ。店に入ったら店員におまえのフルネームを伝えれば依頼人のところに案内してくれる」

タバコ／ハイライト・メンソール 火をつける／吸殻が山盛りになっている灰皿／手前に寄せる。

「ずいぶんと急だな。あと二時間しかないじゃないか」

「急なのは、おまえが昨日の夜も一昨日の夜も電話に出ないからだ。どうせ飲み歩いていたんだろう」

そうか このところ仕事がなくって飲んでばかりいたからな／そういえば今日も さっき帰って一杯飲んでいたところだった／いくら寝ていないのに何日も眠ったように頭がぼやけている。

尻のポケット／携帯電話 取り出す／ディスプレイ 高橋からの着信が何件も続いている。

「人に知られたくない依頼か」

笑う高橋 「探偵に頼む仕事で人に知られたい内容なんてあるわけないだろう」

おれも笑う／ニヒルに 「社会的地位つてのを確立してるヤツなんだろう？ スキャンダルを避けたいからって理由で、かねをばら撒いて探偵をこき使うんだ」

電源が入ったままのデスクトップパソコン 恵比寿／マエストロソ／検索 ホームページをクリック。

「かね持ちのホストがいなきゃ、おれたちみたいのは生きていけないからな。皮肉を言ってもはじまらんさ」 おれの戯言なんていつものことだと言わんばかりの高橋。

超高級な雰囲気／創作イタリアン 住所／電話番号 メモ帳

に書き取る。

「オーケー、行くだけ行ってみるさ」

一昨日のコーヒーに手を伸ばす　飲み干す／不味い。

「ところで話は変わるんだがな」穏やかだが少し緊張気味な声に変わった高橋　「一昨日、めぐみに会った」

脳みそがドスンと揺れた　震度六／一瞬にして体がゼリーのよ
うにグニヤリとなった。

「新大久保でな、ちよつとした仕事のあとで夜食用にチヂミを買っている最中だった」

なるべく面白く話をしようとしている高橋　だがぜんぜん面白くない。

めぐみ／おれの姉貴　生きてりゃ三十九歳／何年か前までは高橋の恋人。

「それでちよつと、話をしただけなんだがな」言葉を選ぶように間を置く高橋　「おまえのことを心配していた」

目の前が急に堕ちた　ガクンツと音が聞こえるほど／いきなり／勢いよく／一瞬で

壊れたテレビ画面のように高速で下へ下へスクロールする　違
う／おれがぶつ飛んでいるだけだ　マツ八六で大気圏を突っ切る

／あつという間に冥王星までぶつ飛んだおれ　冥王星にはねずみのカウボーイがオスカー級のイチモツをぶら下げてニタニタと笑っていた／おれはおふくろの下着を漁っていた／めぐみがおれのカシ
ューナツツをしごいていた

「おい、有二！」

受話器をつんざく高橋の大声　われに返る／汗が噴き出す／肩
がガクガクと音を立てて震えている　その肩に挟まれた受話器が
腹にずり落ちる。震える手で啜っていたタバコを灰皿に突っ込む／
受話器を拾う　耳にあてる。

「ああ、聞こえている」　声も震えている／しゃべると歯が力チ
力チと鳴る。

「すまん、余計なことを言っちゃまったな」

大きく息を吸い込んで落ち着こうと思ったが、まとも息が吸えなかった。

「いや、大丈夫さ」

大丈夫じゃない　手の震えを止めなければ／机から足をおろす／ジョーンズを握りしめる／拳が真っ白に浮かびあがる。

「おまえやつぱり、まだ……」　まだトラウマに囚われたままなんだな　とは言わない高橋／そうだともしうじゃないとも言われないおれ。

なにも考えないようにするために部屋の中をゆっくり見まわした　机の前に黒い牛皮のソファ／ガラスのソファ／テーブル／その先に出入り口のステールドア／ドアの脇には腰の高さのステールロッカー／木製の帽子かけ／右のほうに目を動かす　ハイスツールが三つ並んだカウンターバー／その中がミニキッチン／酒が並ぶ棚／バーの右隣にドアのない出入り口　中は突きあたりが洗面所／右のドアがトイレ

視線を大きく右に　おれの真右に居住スペースに続くドア／中はベッドルームと壁一面のクローゼット／それに個人用のトイレとバスルーム

入り口に視線を戻す　向かって左側／壁一面にステールロッカー／ステールラック／本棚／おれの背中側は腰から端から端まで窓／床は傷だらけのフローリングで土足生活　店舗を改造したオフィス兼居住空間　ここがおれの根城／片桐探偵事務所／いつもと変わらぬ乱雑な事務所／窓の外／いつもと変わらぬ新宿南口／雑居ビル街／いつもとかわらぬ二階からの眺め　いつもと変わらぬ二〇〇九年の三十六歳になったばかりの九月／何も変わらない／何もかもいつも通り　酒とタバコと埃の匂い　いつもと変わらないことで少しだけ落ち着きが戻る。

息を大きく吸い込んだ　今度はちゃんと吸えた／ゆっくり吐いた。

「で、めぐみは元気だったか？」

根性をこんこんと沸きあがらせて、なんてことないって素振りでお話す。

「ああ、元気だった。昔よりも綺麗になっていた。旦那と離婚したって言うていた。綺麗になったのはそのせいだな、きつと」

旦那と離婚　高橋と別れたのは四、五年前／別の男と結婚したのは三年前　おれたちなんかとは違うもつとずつとまっとうな男

「あ、いやその」言葉を選ぶための間をとる高橋　「離婚の理由は聞いてない」

おれのトラウマ／めぐみのトラウマ　恐怖のセックス&バイオレンス体験　たぶん理由を聞いている高橋／たぶん恐怖のトラウマが原因の離婚／たぶんおれにそれを隠すための嘘　手がまた震え出す／汗が沸々と噴き出す。

「すまん、話題を変えよう」　気を使う高橋／咳払いをする。
もう強がる余裕がないおれ　根性はこんこんと湧きあがらなくなつた。

「この前、吉原に取材に行つたんだ」
取材／ソープランド無料体験　インタビューはほんのちよつと／ネタになりそうな世間話はいつまでも／一流遊女との戯れ。

「その店のナンバーワンのソープ嬢が言うていた。ここ一ヶ月くらいでマリファナがとんでもなく溢れ出してららしい」

いきなり／まったく／ぜんぜん関係のない話題に飛び移つた高橋
ネタには苦労しない仕事　盗聴も／風俗情報誌も。

わざわざ話題を変えてくれた高橋に敬意を表して元気な振りをするおれ。

「そりゃきつと、毎朝欠かさずに水をあげている素人売人がいるせいでらろっ」

笑つ高橋　「おれに言わせりゃ、毎晩欠かさずに酒を浴びてるヤツも同類だな」

景気のいい皮肉を食らうおれ　手はまだ震えていたが頑張って笑ってみた。

「浴びるなんてもつたいたい。一滴残らず飲んでるさ」

笑う高橋　「それじゃあ、午後二時に頼んだぜ」

「ああ、遅刻は厳禁だったな」

「依頼人は生意気なヤツだが、かね払いはいい。怒らせないようにして稼ぐことだ。それじゃあまたな、相棒」

電話は切れた　平たい受話器を置く。

そういえば　今朝のゲームセンター／マリファナを吸っている女子高生がいた／溢れ出しているマリファナ　二十五年前の恐怖が溢れ出している気分になる／栗田はなぜあいつらを補導しないんだ／くそつたれの警官ども／くそつたれのジャンキーども／関わりを持たないように生きるくそつたれのおれ。

めぐみ　おれの原子爆弾／忘れた記憶／失われた記憶／記憶を思い出させるものに遭遇すると、脳みそが震度六で打ちつけられる。目の前が高速で墮ちる。そしてマツ八六で冥王星までぶっ飛ぶ感覚に襲われる／冥王星で恐ろしい幻覚を見る／恐ろしい幻聴を聞く／ポロポロになって地球に舞い戻る。

フラッシュバック　キーワードはいろいろ／恐ろしくて言葉にできない／なにが起こったのか／死ぬほど怖くて言葉にできないめぐみ／おれがあのととき叫び続けた名前／血を吐きながら叫び続けた名前／そして叫び続けた果ての記憶がないおれ　手がまたガタガタと震え出す

突然／ドンツと入り口のスチールドアが開いた。

「相変わらず汚い事務所ね、ここは」

まるで警察署の取調室にでも入ってきたかのような嫌悪感を、包み隠さず具現化して吐き捨てる言葉使い。

真っ白なピンヒール／真っ白な生足／真っ白なミニスカート／真っ白なシャツ／真っ白な顔／つばの広い真っ白な帽子　長い髪だけがクリスティーナ・ヘンドリックスを思わせる綺麗に染めた赤毛

大きな目と細い眉毛をすっかり隠す色の薄い大きなサングラス／すらつとした鼻／小さく分厚い唇は髪よりも深い赤い色に塗られている　身長一四五センチの小さくて細い体　酒井しのぶ／三十二歳／独身。

おれの天使／いや　墮天使

おれにはしのぶがすっかり見えていた／脳みそは揺れていなかった／冥王星にぶっ飛んでもいなかった／ひどく冷静だった／すべてがスローモーションに見えた　そして全身がガクガクと震えていた。

帽子を帽子かけにヒョイツと引っかけ、サングラスをはずしたしのぶ　真正面で全身を震わせているおれを見る／何も言わずに足早に近づく／バッグをソファアに投げる／おれの目の前でカツカツと甲高いピンヒールの足音が止まる

おれはしのぶを冷静に見ているわけじゃなかった　全身が硬直し視線を入り口のドアから動かすことができないだけだった　必死になって目を動かそうとしたがだめだった／首をまわそうとしたがだめだった／アームチェアを回転させてしのぶのほうに体を向けた

おれの恐怖の真相を知っているしのぶ　おれが恐怖を懺悔したただ一人の女／何もかもを懺悔した／おふくろの下着の匂いを嗅いでいたこと／めぐみにカシューナッツをしごいてもらっていたこと／おれがボロ雑巾にされたこと／めぐみがレイプされたこと／そし

てめぐみがレイプされているのを見てカシューナッツがポークビッツくらいにはなっていたこと　何もかも／全部。

おれは格好つけて何か言おうと思った／気の利いた何かを　口は開けた／歯がカチカチと鳴るだけだった／言葉が出てこなかった／出るのは汗だけ　どうせ喉がカラカラに渴いて、声が出たとしてもしゃがれているだろう。

おれを見つめるしのぶに向かって　おそらくは青ざめ引きつっている顔で　無理やりニヤツと笑顔を作ってみた／だが　どうやら失敗だったようだ　しのぶの目が痛々しいものを見る慈愛に満ちていた。

しのぶは目を閉じた　そしてすぐに開いた／その目はレオナルド・ダビンチの描く聖母マリアよりも高潔な母性に包まれていた　おれを抱きしめるしのぶ　聖母マリアのような／マドンナたちのララバイが聴こえるような温もりで

「大丈夫よ……」

それは天使の声だった　今さっき入り口で怪訝な声を出していたのと同じ女から発せられたとはとても思えない　美しく／やわらかく／温かく／世界中を包み込む声

そのまま何も言わずただじつとおれを抱擁してくれるしのぶ

赤毛がおれの顔を覆う／シャンプーの匂い／香水の匂い／しのぶの汗の匂い　おれの震えは徐々におさまっていった　十秒だか十時間だか／しのぶはおれを抱きしめてくれていた。

しのぶの真つ白な腕に手をかける　もう震えてない　しのぶはおれからゆつくりと離れた。

おれは半袖Tシャツの袖で顔の汗を拭った　アームチェアから立ちあがる／キッチンに向かう／冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出して一口飲む　机まで戻りタバコを取る／啜って火をつける　その一部始終を黙って見ていたしのぶ

「真由美さんがサンドイッチを作ってくれていたわよ」
いつも通りの高飛車なしやべりに戻るしのぶ。

「そうか、そりゃありがたい」

おれはまたアームチェアに座った。

真由美／この五階建てビルの家主／一階で喫茶店を経営／二階はここ／三階からは上はマンション／真由美は五階で暮らしている。面倒見がよく、おれのことを何かと気にかけてくれ、食事の世話から掃除、洗濯までなんでもやってくれる三十七歳／独身。

ソファーまで行きドカツと座るしつぶ　勢いがよすぎてバウンドする小さな体。

「あんたシャワーくらい浴びたら？　汗臭いわよ」

もうまったく聖母マリアの面影はない　そしておれが震えていたことにはまったく触れない／いつものことだ／おれの発作　おれを抱きしめるしつぶ。

「これから出かけなきゃならない。サンドイッチを食ったら浴びるさ」

机に足を投げ出すおれ。

「あら、仕事が入ったの？」

「まあな」

「あんたに仕事を頼むなんて、よっぽどな物好きかただのバカね」
しつぶがおれに向かって手を伸ばした　おれはしつぶに向かってタバコを投げた／ナイスキャッチ　一本取り出し啜る／バッグを開ける／高価なものにしか見えない細長いライターを取り出す／火をつける

じいさんの遺産で手に入れたマンション／貸しビル／駐車場／その他もろもろのおかげで、働かずにかねが転がり込んでくるしつぶ。
天使のように透き通る肌／処女の少女のような幼さと男を引き寄せる色気を合わせ持つ／聖母マリアのような温もりまでもを自在に使いこなす　喜怒哀楽が激しく勝ち気で大ざっぱなくせに感受性がとても豊かな女。

「ところで、探偵つてのはストーカー退治も仕事のうち？」

「普通の探偵ならな」

「あんたは？」

「内容による」

おれはタバコを消すために、足を机からおろして体を起こした。

「内容ってどんなのよ」

「かねになるかならないかだ」

「それって内容じゃないじゃないの」

しのぶがソファーから立ちあがってキッチンに向かった。

「かねより重要な内容なんてそうそうないさ」

バーカウンターにおれが置いた水を取り一口飲むしのぶ。

「まあいいわ。あたしストーカー被害にあってるから、あんたなんとかしなさい」

「なんだって？　おれに仕事を頼むなんて、よっぽどなもの好きかただのバカだぞ」

おれはわざとクールにノわざと関心なさげにノわざと素っ気なく返答した。

「無駄口叩いてないで、引き受けなさい！」

わかっている　しのぶの命令に逆らえるほど、おれはまともな思考回路を持ち合わせていない。おれはしのぶの願いならなんでも聞いてやる男なんだ　ただしちよつとだけケチをつけたくなる

男として女のいいなりになるもんかというプライドの現れ。

「おれを雇うなら、普通の探偵よりも高いかねを払う覚悟が必要だぞ」

「あんた、あたしの頼みが聞けないって言うの？」

「時給三万で経費は別払い。それ以上は負けん」

あんぐりと口を開けるしのぶ。

「時給三万って……あんたバカ？」

「依頼するの？　それともしないの？」

ペットボトルを潰れるほどの力で握りしめ、水をゴクゴクと飲むしのぶ。

「時給二万で経費込み！　足りないぶんはいつもの通りよ！」

いつもの通り／体で払う／しのぶはおれに貸しを作りたがらない／頼みごとがあるときは必ずかねと体を差し出す。

「契約書にサインしな」

机の引き出しを開ける　二〇〇七年以降、国の拘束を受けるようになった探偵業務　必要な書類を数枚取り出す／しのぶに向かってヒラヒラとはためかせる。

おれの隣まで来てその書類をひったくり、いらだたしげに乱雑にサインするしのぶ。

「足りないぶんは体で払いますって書いたほうがいいのかしら？」

上から目線でおれを睨み、書類をヒラヒラさせている　おれは書類を奪い取り、サインを見もせず机にほうり投げた。立ちあがってしのぶを引き寄せ、前かがみになりキスをした

「なによ急に」

「契約金代わりだ」

ニヤリとするしのぶ　「相変わらずの格好悪い格好つけね。でもそこが、あたしがあなを唯一気に入っているところかもしれないわ」

唯一つてことはないと思うが　まあそれでもいい。

「それじゃ、もう少しだけ払ってあげる」

おれの首に手を絡め背伸びをするしのぶ　八センチのピンヒールを履いているから背伸びにあまり意味はない／おれの目を捉えたままのしのぶの目／半開きの真っ赤な唇　おれは体を屈めた／しのぶの唇がおれの唇を飲み込んだ

真っ昼間からの熱いディーブキス　タバコの匂い／しのぶの口の匂い／化粧品の匂い／しのぶの舌がおれの唇を押し開く／おれの口の中で絡み合う舌と舌　ジーンズの奥で息子のジョンが窮屈そうにジャンプした。

スチールドアが開く音　真由美がサンドイッチとコーヒーを乗せたトレイを持って立っている／おれとしのぶの抱擁に気がつく　別に驚くでもない真由美。

「あら、失礼」　　と言つて、トレイを腰の高さのロッカーの上に
乗せ、ニヤニヤしながら手を振つて出て行った

おれは横目でそれを見ながら手を振り返し、その間もずっと股間
と脳みそを刺激するキスを続けていた

恵比寿 駅から五分ノ創作イタリアン料理 マエストロソ

黒い漆塗りの木枠と白い漆喰の壁ノ店の中が見えない薄暗いガラス窓 手押しノガラスドアの前ノ午後二時三分前。

依頼人は時間にうるさい人物らしい あるいは忙しくておれに使う時間があまりないノあるいはおれを試している なんにせよ遅刻はいけないってことに変わりはないノ変わりはないが だからといって何分も前に現れて米搗きバツタのようにペコペコと愛想を振り撒くつもりもない。

店のガラスドアを押す 店内も漆の柱と枠ノ漆喰の壁 右側にレジカウンターノ厨房に続くであろう廊下ノ左側にはでかい観葉植物ノその先に床が一段下がったこじんまりとしたテーブル席のフロア 正面に廊下ノ途中で左に曲がる廊下 全体にルクスの低い店内。

バーテンみたいな制服を着た背の高いウェイターが近づいて来た。「いらつしゃいませ。お一人様ですか? ご予約は?」

物静かで丁寧で落ち着いた物腰の男 インチキマジシャンのようなちよび髭を剃つちまえばなかなか男前。

「片桐有二だ」
「伺っております、どうぞこちらへ」

ウェイターはやわらかい笑みを浮かべたまま腰を少し曲げた。無表情のおれをチラリと見てるノおれの進むべき方向に手を向けながら歩き出す おれはあとに続いて歩いた。

左手にテーブル席のフロアを眺めながら進むノテーブル席が見えなくなるノ右も左も壁になるノ左に曲がる 観音開きのドアが左右に二つづつノ全部で四つノ右手の奥のドアの前に黒いスーツを着た男が立っている 体格が良いと言うわけではないノ中肉中背ノボディーガードってわけじゃないだろう。

ウェイターはその男の前で止まった。黒い男はドアを軽くノックした。少しだけドアを開き中に入った。すぐにまたドアが開いた。黒い男がおれを中に招き入れた。

部屋の中　六人掛け程度の長テーブル。おれの目の前に椅子。右側にはさっきの黒い男と店の制服を着た女。左側にもう一人の黒い男。手にはセカンドバッグ。こいつのほうは背は高いが、やはりボディーガードってわけじゃなさそうだ。

長テーブルの先に女が座っている。見たことがある。テレビ雑誌。インターネット。この何年かこの女を目にしない日はない。話題を耳にしない日はない。カリスマメイクアップアーティスト。遠藤奈津子。歳はたしか四十くらい。世間一般的な常識で考えてもかなりな金持ち。肩につかない程度の海外モデルのような撫でつけられた黒髪。細い切れ長の目を大きく見せる化粧。鋭い鼻。痩せた頬をふっくら見せる化粧。硬そうな唇をやわらかく見せる化粧。美人じゃないとは言わないが、化粧を落とせばごく普通の顔だろう。

奈津子はおれを吟味するように見ている。おれの脳みそが揺れそうになった。なぜだ。そうか。奈津子がめぐみに似ているからだ。顔が似ているわけじゃない。雰囲気。かもし出すオーラ。めぐみにとつともなく似ている。だがしかし。めぐみはこんな女じゃない。こんな売女のような風貌の生き物と一緒になんかしたくない。

奈津子は言った。「あなたが高橋君の紹介してくれた人だという証拠はあるのかしら」

「日本の探偵には免許証がないからな」

おれはそう言いながら、西部劇のガンホルダーのようにゴツゴツとした皮のウエストバッグに手を突っ込み、車の免許証と探偵用の名刺を取り出した。黒い男その一がそれを受け取る。奈津子に渡す。確認後に免許証だけが戻ってくる。

「名刺はいただいておくわ。ちゃんと許可を得て開業しているのね」

おれは何も答えなかった　おまえらのような薄汚いかね持ちのためだけに裏仕事をやって生きていくわけじゃないんだとは言わなかった。まともな探偵業務をまともな料金で請け負ったりもしているんだとは言わなかった。

黒い男その一がおれの目の前の椅子を引いた　おれは椅子の前に歩み出しゆっくり腰をおろした／腰をおろすタイミングに合わせ、て前に押される椅子。

「ワインはいかが？」

奈津子がしゃべった　冷たい声。

「まさか、仕事だからなんて警察のようなセリフは言わないわよね？」

フツと鼻にかけた笑みを浮かべる奈津子／身振りも／手振りも／しゃべりも／すべてが気取っている／すべてにかねがかかっている／かねで仕立てた作りものの女。

「プロセッコを。フェラーリ・ブリュットがあればそれがいい」

奈津子を見たまま、行儀が良いと思われぬようにだらしく椅子に座り直し、足を組む　わざとタフガイを気取る／かぶっている黒の中折れ帽をウェイトレスに向かつて差し出す　部屋の角に立っている帽子かけに中折れ帽をかけたウェイトレス／おれの注文したワインをオーダーしに出て行った。

「見た目とは違ってワインには詳しいのね」

おれの見た目　ボサボサ頭は中途半端な長さのすず色があった黒髪／スカイブルーに薄つすら光る度入りのサングラス／紺のタンクトップと白地に紺の花柄の開襟シャツ／ブーツカットのジーンズ／水牛をあしらったどかいかい銀のバックルがついたベルト／蛇革のポインテッドトゥ／首と指にはシルバーのアクセサリー　言われた通り／行儀の悪い姿勢が似合う／チンピラみたいな格好　しのぶに言わせると朝帰りの三流ホストにありがちなファッションらしい。

ドアがノックされ、さっきのウェイトレスとソムリエらしき男が

入って来た。ソムリエはおれの脇に立ち、ソムリエらしい立ち振る舞いと話し方でフェラーリ・ブリュットをおれのグラスに注いだ。

役目を終えたソムリエは、ワイン・クーラーにフェラーリ・ブリュットを突っ込んで、部屋から出て行った。ドアが完全に閉まる。

奈津子は話し出した。「高橋君から、あなたはとても優秀だと聞いてます」

「それはどうも」

おれはグラスを手に取り、ワインの作法など無視して一口飲んだ。おれの素行の悪い態度は気にも留めていない様子の奈津子。

「探偵に依頼するのはこれがはじめてなの。何をどう話せばいいのかわからないわ」

奈津子は細くて長いタバコに火をつけた。

「まず、おれが何をすればいいのか言えばいい。おれが依頼を受けると言ったらかねの話をして、最後に依頼の詳細を話せばオーケーだ」

口からゆっくりと煙を吐く奈津子。

「ある人間の素行調査のようなことをしてもらいたい」

フェラーリ・ブリュットを飲むおれ。

「一般的な調査でいいなら、おれじゃなく普通の探偵に頼んだほうがいい」

「私は高橋君に、絶対に私の名前が外部に洩れない方法で調査をしてくれる探偵を紹介してほしいと頼んだの。最近は法律で仕事の内容が書面に残るんでしょ？もしもその書面が外部の人間に渡るようなことになったら困るの」

タバコに火をつけるおれ。黒い男その一が灰皿をおれの前に置いた。

「なぜ困る？」

「単純に立場の問題よ」

灰皿に灰を落とすおれ。

「法律の外でするほどの仕事と思える事実を何か教えてもらえなけ

れば、引き受けられん。おれはあんたのために、ほんのちよつとかもしれないし、あるいはかなり大胆にかもしれないが、法を犯すことになるわけだからな」

「おかねならそれ相応に払うわ。引き受けてもらえるのなら、調査の相手を教えます。でも調査をお願いする理由は言えません。私が想像するに、それほど危険な仕事だとは思わないけどね」

おれは奈津子の目をずっと見ていた　詳細を話してくれるとは思えない目　おれの口からは溜め息しか出ない。

「契約金は百万、一日の仕事料は三十万、経費は別に請求する。それが嫌なら普通の探偵に頼んで、理由を洗いざらい話してから書面にサインを残すんだな」

金額をふっかける　眉毛一つ動かさない奈津子。

「それでいいわ、契約します。私に結びつく証拠は何一つ残したくないの。支払いはすべて現金にさせてもらおうわ」

黒い男その二ノ手に持っていたセカンドバッグ　封筒と写真を取り出しておれの前に置いた。

「二百万入っているわ。当面はそれでお願い。依頼が長引いて足りなくなったら、秘書に持って行かせます」

おれは封筒の中身をあらためた　百万単位でくられた札束が二つ／封筒に戻す／写真を手に取る　遠くから望遠で取ったようなスナップ写真／女／長い黒髪／メガネフェチが喜びそうな赤縁メガネ／美人とはいえないが魅力的な笑顔／凛々しい眉毛／おしゃべりじゃなさそうな横に長い口／鋭い鼻／薄い化粧／紺かそれに近い暗い色のスーツ姿／黒の片がけバッグ／そのバッグの肩紐を握る手　色の暗いスーツに栄える金色のブレスレットだか腕時計だかが光っている／こんな荒い写真でもそれが高級品であることがわかる輝き　望遠のスナップ写真なせいで目の雰囲気は良くわからない／二十代後半くらいに見えるが凛々しさのせいかもしれない　実際には二十代前半くらいか。

「株式会社フリージアの企画部の社員だと思うわ。性はたぶん門脇、

名前はたぶんななみ、七つの海で七海。右手の甲に一円玉より小さな痣があるの。その女性の生年月日、血液型、ご両親の名前、それに普段何をしているのかを調べてほしいの」

フリージア/たしか 一部上場の化粧品会社だ。

写真をもう一度見る 金色のブレスレットだか腕時計だかをしている右手の甲/痣のようなもの/見える気がする かすかに/ごくわずかに

「この写真を撮ったときに、尾行もしたんだらう？ おれに頼まなくとも住んでいる場所くらいわかるんじゃないのか？」

「私の部下には、あなたのようなプロはいないの」

つまり 尾行は失敗しているってことか。

「普段というのは、仕事中心か？ それとも」

「プライベートよ。仕事に関しては部署と役職と、できれば待遇も調べて」

フェラーリ・ブリュットを飲み干す/タバコを消す。

「あなたとこの女の関係は？」

「言えません。言えるならあなたに依頼なんてしていません」

きつちり/きつぱり/キリツと おそらくこのセリフだけはおれに会う前から用意していたのだらう。

「わかった。さっそくこれから調べにかかる」

「何かわかってもらわなくても、毎日連絡してちょうだい」

黒い男その二/おれに名刺を差し出す 立川千鶴/携帯電話の番号 黒い男その二/じゃないだろう/千鶴なんて美しい名前が似合う顔じゃない 女と思える名前/ここにはいない別の人間か。

「ここに連絡すればいいのか？」

「そうよ」

おれは立ちあがってドアのほうを向いた そのドアからノックの音/黒い男その一がドアを少しだけ開ける/廊下に顔を出す黒い男その一 ドアが大きく開けられる/女が一人中に入って来る。

女はおれを見て軽く会釈してから、奈津子のもとへ 耳打ちノ

ヒソヒソ話。

「まったく、何をやってるのあなたたちは！」

声を荒げる奈津子　頭をさげて謝る女／アドレナリンを放出するために溜め息をつく奈津子　何か思案している顔／おれには関係ないだろう　中折れ棒を手に取ってドアに向かう。

「待つて、あなたにもう一つ依頼したいことができたわ。娘の監視よ」

は？　なんだって？　「監視つてのが探偵の仕事だと思える理由を詳しく話せ。でなきゃ、やるともやらないとも言えん」

タバコに火をつけるおれ／奈津子に向き直る。

「娘の名前はあいり、愛情の愛、草冠に利益の利で愛莉、十七歳。悪い友達とばかり交際しているの」

さっきまでは無表情と言っていたいくらいに平静だった奈津子今は顔を真っ赤にして怒っている。

「つまり、スキヤンダルに巻き込まれやすいつてことだな。そして、スキヤンダルはあなたの立場を脅かす」

おれはキザな男がやるようにニヤリ顔で右手をクルリとまわして二本指で奈津子を指差した　眉間にしわが寄る奈津子。

「その通りよ。監視して面倒なことに巻き込まれそうだったら捕まえて。捕まえられないなら、面倒を揉み消して」

おれはテーブルに近寄り、タバコの灰を灰皿に落とした。

「断る。おれは探偵で、ベビーシッターじゃない。それに探偵がやるのは調査で、揉み消しじゃない。さらに言えば、おれがそれを引き受けたら、その女が失業するんじゃないのか？」

奈津子のそばで小さくなっている女　怒られ慣れているのだから／オドオドとはしていない。

「四六時中監視しろとは言わないわ。普段はこちらで監視します。愛莉は私が相手をしてあげられないから、やけになっているところがあるの。あてつけでわざと悪い友人と付き合っているのよ。私が用意した目付け役たちの言うことは聞かないの。それに、私が用意

した人間が、愛莉を無理やり連れ出そうとしたり、問題ごとを揉み消したりして騒ぎが起これば、私の仕業だつてことがすぐにわかつてしまう」

本気で困つた顔をしている奈津子／やれやれだ　そんなことまでしなきゃならないとは。

「日当を四十万にしてもらつことになるな。それに揉み消しにはかねがかる。経費はかなりの額を請求することになるかもしれん」
タバコを灰皿に擦りつけて消す。

「わかつたわ。でも、揉み消しは最終手段です。問題を起こさないことを最優先にすること。愛莉が監視されているとか、軟禁されているような疑いをまわりの人間に与えないようにすること。あの子はあくまでも、親孝行な普通の娘で、私に迷惑がかかるようなことはしない、そう誘導していくのが、あなたの仕事よ。あなたの事務所まで送らせるから、詳しいことは車の中で聞いてちょうだい」

冷静な顔に戻る奈津子。

「で、今日はこれからどつちに手を出せばいいんだ？」

細くて長いタバコに火をつける奈津子。

「愛莉の行方は、今のところわからないわ」

「それじゃ、予定通りフリージアに行く。せいぜい娘が悪さしないようにお祈りでもしてるんだな」

急に硬い顔を崩した奈津子。

「仕事で私にそんな口の聞き方をした男なんて、この何年かの間であなただけだわ」

おれは小粋にウインクしてみせた　ポール・ニューマンを意識して。

「あんたはおれみたいな人間がいるってことを知らない狭い世界で息を吸っているってだけさ」

フツと微笑む奈津子　そうかもね　って顔。

おれは奈津子に背中を向け、自分でドアを押して部屋を出た女がおれのあとについて来た。

株式会社フリージア／本社　どでかい社屋／それは原宿駅から神宮に向かう途中にそびえ建っていた。

一階の正面玄関は端から端までガラス張りで、真ん中にどでかい自動ドア　おれは何食わぬ顔で自動ドアの前に立った／開くドアの中に入る　三階までの吹き抜けロビー。右側の壁にはショーウィンドウがあり、この会社の製品である化粧品が綺麗にライトアップされ飾られていた。それ以外にはこれといって目につくものはなく、壁も柱も床も石張りで、左奥のトイレと自動販売機コーナーがある場所で社員証を首からぶら下げた中年の男たちの会話が響き渡っていた。

正面に受付がある　中の上って感じの受付嬢が二人。背中 of 壁にどでかい金色の社章をあしらった壁掛けが飾られ、一流企業らしい社屋のロビーで、会社の顔として凛とした姿勢で座っている。

おれは何食わぬ顔のまま、石張りの床をカツカツと踵を鳴らしながら歩いて、受付嬢の前まで行った。

「企画部の門脇七海に会いたい」

明らかに怪訝な顔をした右側の受付嬢　そりゃそうだ、朝帰りの三流ホストファッションのままなのだから　左側の受付嬢は営業用の笑顔を作りしやべった。

「失礼ですが、どちらさまでしょうか？」

ここでまず悩む　本名を使うか偽名を使うか　まあ悩むほどのことでもない。

「藤井だ」

藤井つてのは、おれが頻繁に使う偽名　藤井俊夫　気に食わない杉並警察署の刑事の名前。

「ご用件はなんでしょう？」

ここで再び悩む　用件は何にしようってことじゃない　どう

考えても、門脇七海には合わせてもらえそうにないってことだ。こ
ういうときは無理に会わせると言っても無駄／アプローチを変えて
みる／門脇七海を呼び出してもらうのは半ば諦め半分のアプローチ
に

「アフターファイブを早く二人で過ごしたくってね」

怪訝な顔をした右側の受付嬢に向かって、ウインクしながら気取
ってそう言ってみた　右側の受付嬢は怪訝な顔にさらにしわを寄
せた／左側の受付嬢は営業スマイルを忘れてクスツと笑った。

おれは左の受付嬢に向きを変えた。

「君と二人つきりになるのも悪くないかもな」

右側の受付嬢は今にも通報しかねない顔をしている。

「まだ仕事ですので、緊急でなければプライベートなご用件は承
れません」

そう言って、おれを見つめる左側の受付嬢。

「それは門脇七海のことかな？　それとも君のことかな？」
クスツと笑う左側の受付嬢。

「どっちもですよ。でももうすぐ五時ですから、どこかで待ってい
れば、少なくともどちらかには気兼ねなく声をかけることができる
かも知れませんよ」

すっかり営業スマイルは消え去っている左側の受付嬢　おれは
腕時計を見た／午後四時四十分

「ありがとうございます、試してみることにしよう」

おれは左側の受付嬢に向かって、指を二本、額にあててからスツ
と振った／ロビーを見まわす／隅っこに芸術的としか表現のしよ
うがないベンチがある／真っ赤でいびつなそのベンチに向かって歩く
／一瞬どう座ればいいのか悩む／普通に座る　左側の受付嬢がま
だ笑っている／田原俊彦の真似をして大げさに足を組む　左側の
受付嬢がプツと噴き出す／その声がここまで聞こえる。

座り心地をまったく考えていないベンチに十分も頑張って座って
いた　座りづらい／長居はするなどの警告にしか思えない／尻が

痛くなる／むかつくベンチ　おれは立ちあがって外に向かった／左の受付嬢に手を振りながら／受付嬢は手を小さく振り返した。

入ってきた自動ドアを出て辺りを見まわす　右の隅に灰皿のあるごく普通のベンチを発見／迷わず直行　ベンチに座りタバコに火をつける／入り口から七海が出て来ないか見張る。

奈津子のところからは、怒られていた女が運転する車で事務所に戻った。

女の名前　立川千鶴／二十代半ばくらいだろうか／奈津子の付き人の一人／連絡用にもらった名刺の相手がその女だった。

千鶴の日課／愛莉が学校に行っているか監視／学校からどこに遊びに行っているかを監視　愛莉のほうが一枚上手／三回のうち二回は見失う。

それでも、愛莉が出入りしている店を何件かは抑えているらしく、見失ったときはそのどれかにいることが多いそうだ。

ジャンキーが集まる狂ったクラブ／子供がたむろする下種なゲームセンター／終夜営業の汚い喫茶店

愛莉はそのいずれかで、その晩の遊び代と寝床を提供してくれる人間を探すらしい　ようするに単なる家出少女／プチャ家出っただつだ　監視付きのお嬢様つてところが普通と違うだけ。

おれの仕事は、それらの店のいずれにも出入りさせないこと／それらの店に出入りしている友人と付き合わせないこと／万が一出入りさせてしまったら連れ出すこと／騒ぎになったら揉み消すこと

おれと奈津子の関係を／愛莉が不良少女だということを／それをごまかすための監視班が存在していることを　公にしないために揉み消す／いったいどうやるんだかはおれもよくわからない／おれにそんな権力はない／奈津子は私立探偵をCIAやKGBのスパイ、あるいはFBIのタフガイと勘違いしているようだ。

ともかく、千鶴と連絡を取り合っただけの連携行動／なんともまあ面倒な仕事を引き受けてしまったもんだ

尻のポケットから携帯電話を取り出す　アドレス帳／高橋／通

話ポタン　呼び出し音三回

「かね持ちのホストはゲットできたか？」

「ホストじゃなくなつてホステスだったがな。それほど悪くない仕事だ。だが、少々面倒な仕事まで引き受けちゃった」

「なんだ、どんな仕事だ？」

「娘の監視だ」

笑う高橋　「それだよ、おれがたまに小遣い稼ぎで引き受けていた仕事つてのは」

笑うおれ　「だったら今まで通りおまえに譲つてもいいぞ」

「遠慮しておくぜ、あの小娘は本当にやつかいだからな」

やれやれだ　「まあいいさ、適当にやつてのける。電話したのはそのことじゃないんだ。実はしのぶからも仕事を依頼されていてな。一気に三つの仕事をこなさなきゃならなくなった。だが、おれの体は一つしかない」

「バイトか？　本業に支障が出ない範囲でならいいぞ」

本業／風俗情報誌の編集長／編集長の割には肉体派の仕事ばかり
肉体派の仕事／ソーブランドの体験取材　うらやましい仕事

だがしかし／そうでもない／風俗なんてのは暴力団相手の仕事だ／いちいち因縁をつけられる／いくらかのかねを請求される／従わなきゃ本当の肉体派な仕事に突入する　命さえ脅かす仕事だ。

「しのぶのマンションに深夜近くになるとストーカーが現れるらしい。張り込みをしてほしい」

口笛を鳴らす高橋　「しのぶちゃんはストーカーに狙われているのか。あれだけいい女なら当然だな」

いい女　しのぶは飛び抜けた美人でもなきゃ、峰不二子のようなグラマーでもない　あいつから発せられる妖艶な妖力に男はみんなノックアウトされる。

「しのぶの話だから、どこまで真に受けていいのかわからんがな。とにかく、引き受けちゃったから形だけでも調査しておかないとブーわめき出す。わめくだけならほつときゃいいんだが、鍋だの

フライパンだのが飛んだりする」

大笑いの高橋 「で、バイト代はいくらなんだ？」

「時給一万、経費は出す」

「おまえにしちや気前がいいじゃないか。かね持ちのホストからよっぽどふんだくったんだろ」

「そうでもない、それなりだ」

「まあいい、それでオーケーだ。さっそく今夜から張り込みするぜ、ボス」

電話を切る 入り口／門脇七海らしき女はまだ現れない

さらに三十分 タバコ四本ぶんの時間／入り口を監視。

門脇七海が現れる前に、左側の受付嬢が現れたら、今夜の尾行はおじゃんになるな なんてことを考えながら さらに三十分／缶コーヒーを一本／タバコ三本を費やす。

上手い具合に、門脇七海らしき女が左側にいた受付嬢よりも先に出来た 紺のパンツスーツ／白いワイシャツ／写真と見比べる／間違いないだろう 肩掛けバッグのストラップを握る右手／金色に光る腕時計／小さな赤ワイン色の痣らしきもの 確定だろう。

門脇七海が会社の敷地から出るまで待つ／わずか三秒／おれは立ちあがって尾行を開始した

七海は同僚らしき女二人とくつちゃべりながら、どこに寄るでもなくおそらくは駅に向かつてのんびり歩いていた。おれはその間ずっと、その三人だけを見て歩いた。おれが駅からフリージアに向かったときより、二倍近い時間をかけて駅に到着した女三人 辺りは薄暗くなっている／ネオンが輝く原宿駅の周辺。

改札を抜ける おれのスイカ／残高三二四〇円 原宿から新宿へ／女たちはそこで立ち話をして別れる／別れるまでに二十分／門脇七海は一人で中央線へ 高円寺で降りる／南口を出て歩く／二十メートルほど離れて尾行するおれ

十二、三分歩いた 人通りのまったく細い通りに入る／尾行の距離を広げる／五十メートルほど進み右側の路地を曲がる七海

／おれはあとに続いてその路地を曲がった　路地は車が一台通れる程度の幅でゆるい登り坂／十メートルほどでアスファルトから砂利に変わる／そしてその先は路地から右側に開けた空き地に変わる／これ以上進む道はない。

正面と左手側には一軒屋が密集している／右にどでかいマンションの裏側／さらに右手前に小さなこじんまりとした五階建てのマンション　入り口の先のエレベーターに七海／ドアが閉まった。

エレベーターが動き出すのを待つ　動き出す／エレベーターの前まで行く／三階で止まったのを確認する／階段をなるべく静かに／なるべく早く駆け上がる。

三階に到着する手前で足音を殺す　エレベーターホールを忍び足で歩く／外部廊下のほうにそば耳を立てる　鍵が開きドアが開く音　外部廊下に向かって歩く／七海がドアの中に入るのが見える　四つあるドアの三番目　鍵が閉まる音。

足音を立てないようにゆっくり歩いて三〇三号室と書かれたドアの前まで行く／ドアにプラスチックの表札　ローマ字／K A D O W A K I　おそらくはキッチンであろうドアの脇の格子付きの窓／蛍光灯らしき白い明かり／曇りガラスで中は見えない　人影も見えない。

廊下を見まわす　短い廊下／この幅に四部屋　小さなキッチン付きのワンルームだろう。

ドアを背にして外を見る　目の前から右／エレベーターホール側に向かって、このマンションよりも高い工事現場／左はここよりも背の低い雑木林　その先に尾行してきた細い通りが見える。

誰からも見られていないことを確認して、三〇三号室のドアに耳をくつつける　かすかなテレビの音／かすかな足音　エレベーターホールに戻る／階段で一階に戻る。

エレベーターホールから入り口のほうに歩いて行く／誰もいないのを確認する／集合ポストの前で立ち止まる　三〇三と書かれたポストを静かに開ける／空っぽ　集合ポストの下／床に散らばる

エロ広告のチラシ　　独身ばかりのマンションだと言うことがわかる。

マンションを出て入り口のほうを見る　　今通って来た通用路／コンクリートのアーチの上に書かれたマンション名　　アーバンビルド高円寺

マンション全体を見まわす　　打ちっぱなしのコンクリートは塗装なし／打ちっぱなしが流行った頃に建てられたのだろう　　どう見ても都会的じゃないがアーバンビルド　　建てられた当ても都会的だったとは思えないがアーバンビルド

細い通りまで戻る　　工事現場の斜め向かいに小汚いビル／二階がビリヤード場になっている／建物の端から端まで窓　　キューを持って立っているヤツらが数人見える。

そのビルの入り口に自動販売機　　ブラックの缶コーヒー／買う／都会的じゃないアーバンビルドの三〇三号室が見える場所を探す／ビリヤード場のビルの隅っこまで細い通りを戻る／工事現場が邪魔して三〇三号室が見えない　　この位置からだとな階から上の四号室しか見えない。

さらに細い通りを戻る／やっと三〇三号室が見えるところで止まる　　マンションに入る路地から三十メートルほど戻ったところ　　電柱に寄りかかる／タバコに火をつける／缶コーヒーのプルトップを弾く　　三〇三号室を見つめる。

タバコ三本　　夜九時／七海の動きはなし　　そのうちどこかへ出かけないとも限らないが　　月曜日から飲み歩くようなタイプには見えなかった。

おれは来た道に戻り、駅に向かった　　もう一つの仕事に取りかかる。

千鶴に聞いていた店ノ歌舞伎町ノクレイジー・クレッシェンド
ここに来る前にダッシュとかいう名前の店にも行ってみたが、愛
莉はいなかった。

地下に降りる階段 壁にも天井にもあちらこちらにそれらしい
チラシが無造作に貼られている。入り口の前に突っ立っている男に
入場料を取られた このまま引き返して帰りたい気分だ。

重いドアを開けるノ大音量でトランスミュージックが流れている
このまま引き返して帰りたい気分だ。

店内は薄暗く狭い 壁も床も天井もなにもかもが黒いノスポッ
トライトが煌めくノミラーボールみたいな光線がグルグルとまわる
ノ何もかもがめぐるしいノ何もかもがやかましい ああ、本当
にこのまま引き返して帰りたい気分だ。

左側にバーカウンターノ右奥にDJブース 蹴っ飛ばしてやり
たくなるような生意気な顔をした若い男ノどう考えてもラリッたと
しか思えない顔

フロアノごった返しているといったほどではないが混んでいる。
バーカウンターに進む 酒の匂いノタバコの匂いノ汗の匂いノ
そして絶対に間違えようのないまどろむマリファナの匂い ある
いはハイになるハシシの匂い。

こんな店じゃ、奈津子が入りさせまいとするのもわかる気がする
愛莉が何者が明るみになれば、奈津子の立場は非常に悪くな
るのは間違いない。

カウンターの中の店員ノ初顔のおれを警戒しているノチラチラ見
ている おれはタバコに火をつけるノ財布から千円札を出すノカ
ウンターの男の前に置く。

頑張ってでかい声を出して言う 「サザン・カンフォート、口
ツクで」

「は？」

客に対して口の聞き方がなっていない店員　頭の中で妄想する
ノ十二番口径のショットガンノトリプルAの鹿弾ノ詰め込むノ店員
の頭をぶつ放すノ後ろの壁ノ店員の脳みそノ弾け飛んで貼り付く
首から上がなくなつた店員ノ想像するのをやめる。

もう一度でかい声を出す　「ビール」

店員は何も言わずに缶のハイネケンを冷蔵庫から出すノ釣り銭を
ハイネケンと一緒にカウンターに置くノ汚れた爪をした手　千円
札を掴む。

小銭をジーンズのポケットに突っ込むノハイネケンのプルトップ
を弾くノ一気に三分の一を飲む　フロアを見る

千鶴に渡された愛莉の写真ノ顔はしつかり覚えた　身長は一六
二センチだと言っていたノ長い黒髪ノ真つ黒な瞳ノ切れ長の目ノ細
い眉毛ノ尖つた鼻ノふつくらした頬ノ横に長い唇ノ奈津子と同じパ
ーツでできた顔ノ奈津子よりもバランス良くまとまつた顔　探す
ノ右ノ左ノ右ノいた

黒いTシャツノ膝より短いジーンズノライダースブーツノベルト
やアームバンドやネックレスにイヤリングと、装飾品は金色ばかり
腕時計だけは安っぽい銀色ノ背の高いスケベな顔の男とフロア
の隅で話しをしている。

おれはそこに向かつて歩き出した　タフガイを気取つてノハイ
ネケンでグビグビ言わせながら飲んでノハイライト・メンソールを
ブカブカ言わせながら吸つてノ愛莉の前に到着　レストルームに
向かう廊下の手前ノほかの場所よりは幾分静かだ。

おれを見る愛莉とスケベ男　スケベ男のスケベ顔はムツとした
顔になつてもスケベなままだ。

愛莉はおれを吟味したノ上から下ノ下から上ノまた上から下ノ最
後におれの顔に視線を戻す。

「誰？」　眉をひそめる愛莉。

タフガイぶつて格好つけるかノナンパな男を演じるか　そもそ

も女子高生を相手にするなんて慣れていないから悩む　悩む時間
／わずか一秒　面倒だから超タフガイに決める／一歩前が出る。

「遠藤愛莉だな」

眉と眉がくつつきそうなくらいに眉間にしわを寄せる愛莉。

「そうだけど？　誰？」

スケベ男がおれの肩に手をかけた　爪に汚れが溜まっている／
汚い手で触られるのは好きじゃない／しかもそれが男じゃもつと好
きじゃない　スケベ男を見ずに手を払いのけるおれ。

「片桐有二だ。一緒に来い」

左の眉毛が上にピクツと動く愛莉　顔を斜めにして腕を組む／
おれを値踏みするように眺める　おれは名前と電話番号だけが書
いてある名刺を差し出した　その名刺を受け取る愛莉／またもや
上から下／じつくりと／おれを観察する愛莉。

スケベ男がまた肩に手をかけてきやがった　顔を見ずにその手
を払いのける。

「とにかく、少し話したい。もっと静かな店に行こう」

おれは愛莉だけを視界に入れて話をした。怪訝な目が少し和らい
だ／くつつきそうだった眉毛が元に戻った。

「ママ？」　声はまだ警戒警報を発しているトーンのまま／奈津
子の差し金だと早くもばれる／だがしかし　愛莉にとっては何者
だかわからない男ってよりも、奈津子の差し金で送り込まれた男っ
てほうが気楽なようだ。

「極秘事項だ」

FBIの間抜けな下っ端タフガイのように真面目な顔をしてそう
答えたおれ／プツと嘔き出す愛莉　冗談を言ったつもりはないん
だが　笑ってくれるとは幸いだ／こっから先の話が進めやすくな
る。

スケベ男のスケベな汚い手が、またもやおれの肩を掴んだ　ス
ケベな声で何か言っている／無視する／スケベ顔を見ずに再度手を
払う

突然／スケベ男の手が拳になって飛んできた

おれは反射的にその拳を避けた　顎をかすめて空振りした拳／
バランスを崩すスケベ男／ビククリする愛莉

おれと愛莉の間／バランスを崩しているスケベ男　邪魔だ／足
を払う／前屈みにすつ転ぶスケベ男　おれは愛莉の腕を掴んだ。

「行くぞ」

「ちよつと！」

嫌がる愛莉　無理やり引つ張る／出口に体を向ける／手を握つ
たまま進む／スケベ男を踏んづける愛莉／入り口周辺／どう考えて
も喧嘩腰な男が数人／おれの行く手を阻んでいる　ああ面倒くせ
え／愛莉を引つ張る／嫌がる　おれは愛莉に向きなおつて大きな
声で言った。

「いいか、おれはおまえの親から別の仕事の依頼を受けて雇われて
るんだ。おまえの子守りをするために時間を費やしているほど暇じ
やない。わかつたらおとなしくついて来い」

おれのでかい声にびっくりする愛莉　おれはまた出口に向かい
愛莉の手を引いて歩き出した。スケベ男が立ちあがる／またもお
れの肩に触る　今度は力強く／グイツとおれの肩を引つ張る
おれは腹が立っていた／こんな小汚い店／こんな小娘の相手／著し
くイライラしていた／さらに　汚いスケベ男の手がおれに触れる
もんだから余計に腹が立っていた　振り向きざま／スケベ男目掛
けてハイネケンを顔にかける／目にしみる／両手で顔を押さえるス
ケベ男／うめき声がトランスミュージックにかき消される　愛莉
の腕を引いて出口に進む。

嫌がる女を引つ張るつてのは大変だ／なかなか前に進まない
喧嘩腰の男たちがおれを取り囲む　ああ本当に面倒くせえ。

戦つか／それとも逃げるか　どっちにしても愛莉の捕獲はかな
り困難な状況になった　揉めごとはご法度／だがしかし／揉めな
いで済みそうじゃなくなった。

仕方ない　愛莉のほうに振り向く

「外で待っている」　そう言つて腕を離す／愛莉は走つて店を出て行った／待っているはずがないことはわかつていたが、待っていることを祈つてみた。

そしてさらに祈る　スカイブルーに光るサングラスが壊れないように　あつちからもこつちからも拳が飛んで来る／拳／拳／拳
避ける／避ける／食らう　いてえ／ファッキン！！／反撃し
そうになってやめる　合わせ技で毎日四十万の仕事なんだ　我慢しろ。

腹に拳が食い込む　胆汁を吐きそうな苦味／頭の上から拳／サングラスが吹っ飛ぶ　祈りは通じなかった／踏まれて碎かれるサングラス／ジーンズのポケットに手をつ込む　いざつてときの
ブラスナツクル／触れる／だめだ　四十万を棒に振るな／背中に
肘鉄　前屈みに倒れる／倒れるのだけは避けたかった　蹴り／
蹴り／蹴り　蹴りの嵐／頭を抱えて体を丸める　もうどこが痛いのかわからない　蹴りが止むまで意識があるのを祈ることしか
できなくなつた

店の外 左足が言うことを聞かない／痛い／どこもかしこも／
とにかく痛い 顔だけは二、三発で済んだ／だがしかし／度入り
のサングラスを失った 景色がぼんやりとしか見えない。

財布を抜き取られそうになったところで、思わず相手を殴ってしま
ったが、一発くらいは反撃しても問題ないだろう。その反撃でお
れを取り囲んでいたヤツらが怯み、逃げ出すのに成功した。

外に出ちまえばこっちのモンだ 違法ドラッグで蔓延している
店が揉め事を起こしたなんてのはまずい／店の目の前でぐったりし
ていても追いかけてはこない。

店のまわりをぐるりと見まわす 愛莉はいない

少し離れたところに自動販売機 足を引きずって歩く／ジーン
ズのポケット／小銭を出そうと頑張る／踏まれた指が痛い／小銭を
出せない ファツキン・ジーザス！！

なんとか小銭を取り出す／だがしかし／今度はその小銭を落っこ
としてしまう オー・マイ・ガット！！／血の味がする唾／道に
吐き捨てる／血の色をした唾／自動販売機に寄りかかる

突然／女が目の前に現れた おれの落とした小銭を拾った／自
動販売機に投入した 「何が飲みたかったの？」

おれは女の顔を見ないで答えた 「ブラックのアイスコーヒー
だ」

ガコンツと転がる缶コーヒー／それを取り出す女／プルトップを
弾いておれに差し出す女／そこでおれは女の顔を見た 子供／愛
莉より幼く見える／大きな目／茶色の瞳／小さな鼻／小さな口／肩
にかかるくらいの茶色い髪／ノースリーブの青いシャツ／ローライ
ズのブラックジーンズ／派手なサンダル／少女漫画のように細い体
／身長は一五五センチってところだろう。

「すまない」 おれは女から缶コーヒーを受け取った／一口飲ん

だ 口の中のあちこちにしみた／腰のバッグからタバコのケースを出した ペっちゃんに潰れたソフトパック／タバコが出ない／不自由な指のせいだ。

女はおれからソフトパックを奪い取った／ひん曲がったタバコを一本取り出した／まっすぐに伸ばした／おれに渡した。

タバコを啜えジッポで火をつける 口の中のあちこちにしみる。

「大丈夫？」

どっからどう見ても大丈夫そうじゃないおれだったが、女の前で情けない態度はしたくない。

「大丈夫だ」

「あつちに座るところがあるから行こうよ」

女はそう言っておれの腰に手をまわした おれは女に体重を預けないように踏ん張った／足を引きずって歩いた。

コマ劇場の前 五分も歩けば着くところが十五分もかかった
座るおれ／その隣に座る女 大きな目がネオンの光に反射する／キラキラ輝いている。

「あの店は荒っぽい男が多いんだよ」

そう言いながらバッグをゴソゴソしている女 ハンドタオルをおれに差し出す／受け取らないおれ／おれの唇にハンドタオルをあてる女 痛い／根性をこんこんと沸きあがらせる／痛い顔をしない。

「店にいたのか？」

血のついたハンドタオルを膝の上に置く女。

「あなたが入ってから出るまでずっと見ていたよ」

タバコに火をつけようと思って、新宿は路上喫煙禁止だつてことを思い出す。

「愛莉に用だつたの？」

女はおれを見ずにどこか遠くを見ながらしゃべっていた。

「愛莉を知っているのか？」

「友達だよ、学校も一緒」

やはり子供だったか　子供が堂々と出入りするマリファナの香しい香りがする店／ファツキン／くそつたれだ／世の中くそつたれ過ぎる。

「わたしは結衣、よろしくね」

結衣はおれを見て微笑んだ　かわいい笑顔／おれの墮天使が天使になったときのようなやさしい笑顔　しのぶにどこか似ている

見た目が似ているわけじゃない／雰囲気／妖しい色気　おそらく／危険とスリルに濡れる女に違いない／安定と安息の安住の地を求めない女に違いない。

「有二、片桐有二だ」

「愛莉の彼氏？」　尻の両脇に手をつけて足をブラブラさせる結衣／おれのこととは見ていない。

「おまえは自分の男がこんな姿になるのが予測できる状況で逃げ出したりするのか？」

クスクスと笑う結衣／笑いながらおれに視線を投げる　その仕草／しのぶに似ている　魅入られる／妖しさに抗えない哀れなおれ

「そうだね、あなたはわたしたちなんかよりずっと大人みたいだもんね。あの店にいた男たちよりもずっと。本当は強いのにわざと負けるような大人だもんね」

ほう　観察力に優れている／こんな子供がよくそんなことを見抜けるもんだ。

「おれは別に強くなんかない。わざとじゃないさ」

またクスクスと笑う　この笑い／おれを癒す／結衣の笑い／しのぶと違い毒がない　危険もスリルも何もないときの／高飛車モードじゃないときの／しのぶの笑い／似ている　強がっていないしのぶのときの／あどけない笑い

「彼氏じゃないなら何者なの？　愛莉になんの用だったの？」

「極秘事項だ」

愛莉のときと同じように下っ端のタフガイを演じて答えた　プ
ツと噴き出す結衣／子供の感性はわからん。

「あなた面白いね。いつもの女の人はどうしたの？」

いつもの女／千鶴のことだろう　よくもまあこれだけの会話で
そこまで見抜けるもんだ／それとも愛莉と千鶴の鬼ごっこは結衣や
あの店のヤツらにとつて日常茶飯事なのか。

「普通の女じゃあの店は手に負えないからな」

またクスクス笑い　傷が癒えるほどの効力。

「てことはやっぱり、あなた愛莉の監視役なんだ」

おれを上目使いで覗き込む結衣　ニヤリとする顔／輝く目／ピ
クツと片方の頬が持ちあがる　しのぶが男を惑わすときのそれに
似ている

「極秘事項だ」

アハハと笑う結衣　本当にアハハと言った

「ぜんぜん極秘になってないけどね」

小娘にやり込まれるおれ　小娘を捕り逃す／小娘に魅せられる
／探偵失格／やれやれだ

「愛莉はどこに行ったかわかるか？」

結衣はまたどこか遠くを見た／斜め上／ビルの向こう／空の彼方

「さあ、どこかほかの店か、それともどこか友達の家か、そこまで
わからないよ」

「連絡は取れないのか？」

「それって、わたしに友達を売って言ってるの？」

視線がおれに戻ってくる　またもやニヤリ顔

「売るんじゃない。差し出すんだ」

アハハと笑う／足をブラブラさせる結衣

「愛莉はこういうとき、たとえ連絡が取れても戻って来ないよ。前
に一度、戻ってきて捕まったことがあったからね。あなたの前任者
に」

あの手この手ノ千鶴もいろいろと試みているわけだ　まあ、監禁でもしない限り、十代の女を手元に置いておくなんてのは無理に決まっている　無理難題を押し付けられたおれノ無理難題と知っ
ていて押し付けた奈津子

結衣の携帯電話が鳴るノメールノ短文ノ度入りのサングラスがなくなつたから文字は読めない。

「愛莉か？」

「残念、違うよ」

返信文を打つ結衣　両手の指が素早く動く。

おれは立ちあがつた　リュウマチのじいさんのようにノゆつくりとノゆらゆらとノ体中がミシミシと唸りをあげる。

「世話になつたな」

イタリア映画に出てきそうなキザ野郎の振る舞いでそう言ったおれ　笑わない結衣ノハリウッド映画じゃないとダメなのかもしれないノ結衣も立ちあがつた

「一人で大丈夫なの？」

「大丈夫だ」

おれは歩き出した　左足を引きずりながら　隣に並んで歩き出す結衣。

「駅まで一緒に行くよ」

「一人で大丈夫だ」

「それじゃ、そこまでね」

大通りまでくつついてきた結衣。

「ねえ、また会えるかな？」

「さあな、おまえが会いたいと願えば会えるかもしれんさ」

クスクスと笑う結衣　「今度は元気なときに会えるといいね」

あからさまに誘惑されているおれ　小娘に。

「本当に一人で大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。心配しなくていい」

ガードレールに手をつけて体を支えていたおれ　手を離して胸

を張る／あちこち痛い但我慢してみせる。

「それじゃまたね」

結衣は胸の脇で小さく手を振った　おれに背中を向けて歩き出す／歩道を十五メートルほど進む／路上駐車していたステーションワゴンの前で止まる／助手席のドアを開ける／また小さく手を振った　度入りサングラスが砕け散ったから結衣の表情はさっぱりわからなかった／乗り込んだ／閉まるドア　ウインカーの瞬きと共に走り出した車　ぼやけた視界で車種もナンバーもわからなかった／グレーの車

車持ちの男がいる少女　心を惹かれつつあるおれ。

車が見えなくなつてから、もう一度ガードレールに手をついた。

電話をかける　千鶴へ／呼び出し二回

「愛莉に逃げられた。これからどうすりゃいい。どこかほかに探す場所は？」

「この時間だと、泊めてくれる友達を探しているか、もう見つけてその家にいるかでしょう。今夜は諦めたほうがいいですね」

「そうか」

「一筋縄ではいきませんよ。捕まえて連れ帰る仕事じゃないんです。愛莉さんの好きにさせつつ、行動を制限させるように仕向ける仕事なんです」

「やれやれだ」

「やれやれです」

おれは電話を切つて歩き出した　このまま帰るのは負け犬のようで気に食わない／だからといって愛莉の足取りはわからない／おれの行く場所は一つ　七海のマンション　もう一度張り込み

もうすぐ深夜　高円寺／七海の張り込み／電柱の下／定位置になるであろう場所。

平日のこんな時間に外出なんてそうそうないだろう　だがあるいは／コンビニ／DVDレンタル　可能性がないわけじゃない。なにしろ体中が痛いんだ　このまま帰って寝たとして、明日からまたやる気を出すだけの根性と勇気が今はない。

勇気を得る　それがおれに今もつとも必要なアイテムだ。

外灯がまばらな細い通り　真っ暗とまではいかないが人影を見分けるだけの明るさはない。ビリヤード場の窓から洩れる明かりが通りをわずかに照らしているが、それが逆に、その明かりより先を見えなくしている　暗さにも明るさにも目が慣れない／中途半端な世界

三〇三号室　おそらくキッチンであろう格子付きの窓の向こう　蛍光灯らしき白い明かりはついている／まだ寝てはいない

チャンスはある。

ドアが開く音が響く　三〇三号室じゃない

ドアが閉まる音が響く　三〇三号室じゃない　どこだろうか

／あの都会的じゃないマンションからなのは確かなのだが　見えるのは三階から上の三、四号室だけ。

四階にその音の発信源を発見　四〇四号室のドアの前／鍵を閉める人影／ドアの上　古びてたいした明るさを発揮できてない外灯／人影を照らす　男のようだ。

男はエレベーターホールのほうに向った／手前の工事現場が邪魔しておれの視界から消えた／そのすぐあと　三〇三号室の窓の明かりが消える／ドアが開く／閉まる／鍵をかける　サングラスを失ったからはつきりとは見えないが　七海に間違いなさそうだ。

七海もまた、エレベーターホールに向かう／おれの視界から消え

る　そのまましばらく待つ／啞えていたタバコを消して待つ。

最初に出てきたのは四〇四号室の男　ビリヤード場の明かりで薄っすらと光が届いているマンションに通じる細い路地から出てくる　こちらに向かつて歩いてくる。

おれは息を殺す／気配も殺す　おれの近くを通り過ぎる男

おそらく、昼間は無造作ヘアになるようなワックスを使って、ツンツン頭になっているのであるう短髪／太めの眉／細い目／四角い顔／何の特徴もない普通の男　グレーのＴシャツ／ストレートのジーンズ／スニーカー。

だが、尾行相手は男じゃない　七海が細い路地から登場　もう一度息を殺す／気配も殺す　電柱に身を潜めるゴキブリ野郎なおれ。

七海もおれに気がつかずに通り過ぎる　白いＴシャツ／細いジーンズ／白いスニーカー／ラフな格好　数をゆっくり心の中で数える／度入りのサングラスがない／あまり離れると見失う／カウントは十だ／十までゆっくり／尾行開始

引きずった足／引きずった足音を立てる　七海のペースに付いていけない／体中痛い／耐えるおれ　尾行の興奮でアドレナリンを放出させる！／根性をコンコンと沸きあがらせる！

なんとかばれずに七海の尾行は続く　最寄のコンビニを通り過ぎる／どうやら駅の方角に向かっている　繁華街に入ったから明るい／サングラスがなくても目が見える。

七海は十メートルほど先を歩いている　キョロキョロせず／目的が決まっている様子／おれは見失わないようにただひたすらくつついて行くことに専念した。

高円寺の駅　南口／スイカで改札を抜ける七海　こんな時間に電車？　どこに行くのだろうか。

新宿方面のホーム　七海の少し先／四〇四号室の男がいる　どういうことだ？

同じマンション／別々の部屋／同じ時間／別々に外出／男と女／

同じ方向に向かって電車を待つ　深夜に。

一緒に行動しているようではない　七海と男の距離「おれと七海
の距離と同じくらい／つまり　尾行か。

七海が男を尾行しているってことか　なぜ？　そもそも男が
部屋を出たのがなぜわかった？

単なる偶然か？　偶然に／同じ時間に家を出る／同じ方向に向
かっている　あり得ない／そんなことあり得ないだろう。

これは奈津子の依頼と関係があるのだろうか？　奈津子はこれ
をおれに探らせたかったのだろうか／あるいは　七海を通じて男
を調査するのが本当の目的だったのだろうか。

電車が来る　七海は男と同じ車両の別のドアから電車に乗った
／おれはさらにその隣の別のドアから乗る。つかず離れずの距離
走り出す電車。

新宿で降りる　丸の内線に乗る七海／当然男も乗っている。

南阿佐ヶ谷で降りる　おれの前を歩く七海／そのさらに前を歩
く男　住宅街に入る。

まばらな外灯／閑静な住宅街　静まり返っている。

男は迷わずスタスタと歩いて行く　その男の後ろ／足音を忍ば
せて歩く七海／そのさらに後ろ／足を引きずって歩くおれ

突然／ふと瞬く　さらに面白いことになってきたことに気がつ
く／なぜかって？　ここはしのぶが暮らすマンションの近くだか
らだ。

細い路地を左折　しのぶが暮らすしのぶが家主のマンションが
見える／一階の角部屋／しのぶの部屋／明かりは消えている

マンションの向かい　駐車場／その先二十五メートル　外灯
の下／路上駐車しているワゴン

男はしのぶのマンションの前で止まった　七海は男から少し離
れた電柱に隠れた　尾行は確定だろう／男を尾行する七海　な
ぜだろうか。

おれは素知らぬ振りで二人を通り過ぎようと思ったがやめにした

こんな時間にこんな閑静な場所で、足を引きずった傷だらけの男じゃ見過ごしてもらえそうにない。

二人の記憶に鮮明に留められるのはまずい／面倒なことを招きかねない　おれは来た道を急いで戻った／一本隣の通りを懸命に走った／大きく迂回して男と七海の向かい側からしのぶのマンションの前の通りに入った。

外灯の下に止まる車／その車の前で足を止める／後部座席／静かにドアをノックする　ドアロックがはずれる音／なるべく静かにスライドドアを開ける／なるべく静かにスライドドアを閉める　スライドドアを静かに閉めるのは無理だった。

「どうした、かね持ちのボスに仕えていたんじゃないのか？」

運転席でタバコをふかしている高橋がそう言った

「なんだ、ずいぶん痛い目にあつたようじゃないか。大丈夫なのか？」

高橋はそう言つて、助手席に転がつていたペットボトルを差し出した。おれはそれを受け取り、キャップを捻つて一口飲んだ。
緑茶。

この位置からだ、しのぶの部屋とマンションの入り口が一望できる。七階か八階建てくらい賃貸マンション／賃貸にしちや豪華な造り。マンションの端から端まで奥行きが四、五メートルほどもある綺麗に刈られた植え込み／その植え込みの中央／タイル張りの通路の先／マンションのエントランスホール。入り口の自動ドアの中／日中は管理人がいるのである。管理入室らしき扉／中からカーテンがかけられた横長の小窓／ここからでは見えないが、その向かい側に集合ポストがあつたのを記憶している。オートロックではないから、管理人がいない時間なら誰でも出入り自由だ。

しのぶの部屋は、こちら側から一番遠い角部屋。ほかの部屋と違い、四、五メートルもある植え込み部分の半分ほどまでウッドデッキのテラスが広がっている。バーベキューパーティーくらいなら築にできそうなほど広い。テラスにはウッドデッキと同じ色の木製のテーブルと椅子／そのテーブルの中央／刺し込まれた深緑色のパラス／テラスから直接この通りに出てこれるように扉がついている。柵／人が一人通れるほどの幅で、植え込みを突っ切る石畳の小道が作られている。

もっとも、しのぶがベランダでバーベキューなんてやりそうもなけりや、自分の家に客を招いたりなんてまずしそうにない。おれはしのぶの部屋に何度も入つたことがある／あいつの部屋は何もない／女とは思えないほどに何もなし／三部屋のうち使っているのは一部屋だけ／その部屋を寝室兼衣装部屋にしている／それ以外はどで

かいりビング・ダイニングに生息している。

「ちょうど今、妖しい男が登場したところなんだ。おまえも見てみるよ」

高橋が指差したところ／しのぶの部屋／テラスの中　男はテラスに忍び込んで窓に耳をあてている。

「あいつがどこに住んでいるのかは、もうわかったぞ」

「なんだって？」　　啜っていたタバコを口から落としそうになる高橋。

おれもタバコに火をつけた。

「もしかして、別件の調査ってのはあの男のことなのか？」

「いや違う、あいつを尾行している女のほうだ」

おれは高橋のそばに身を乗り出して、七海が張り付いている電柱を指差した　ここからじゃ見えづらいが、人影らしきものは確認できる。

「なんだおい、何がどうなってるんだ？」

おれは体をもとに戻した／タバコを深く吸い込んだ　そしてゆっくりと吐き出した。

「おれだって何がなんだかさっぱりわからんさ。おまえが紹介してくれたかね持ちの女は、おれに何も教えてくれない」

「奈津子はいつもそうなんだ。なにも言わない。そして、聞かないでいればかねは払ってくれるんだ。だが、おれのバイトにも関わっているようだから、おまえが知っていることくらいはおれにも教える」

おれはタバコを消して、体を横に寝かせた　狭い車の中だから足は伸ばせないが、起きているよりはずっと楽な気がした。

「門脇七海、あの女の名前だ。そいつの生年月日、血液型、親の名前、職場の部署と役職、それにプライベートの行動を調べると言われた。それだけだ」

高橋はタバコを消して、缶コーヒーを一口飲んだ。
「なるほど、それで尾行していたらここに来たってわけか」

「そつだ。あの男の名前はまだわからんが、七海と同じマンションの四〇四号室だつてことはわかつた。高円寺南口から十二、三分歩いたアーバンビルド高円寺つてマンションだ」

高橋は男に視線を向けたまま話を続けた。

「それで、なんでおまえはそんなボロ雑巾みたいなんだ？」

「やれやれだぜまつたく」「愛莉を捕まえ損なつてこつなつた」

笑う高橋「おまえ、タフガイ戦法に出たんだろ」

「違う、超タフガイ戦法だ」

大笑いする高橋「声が外に洩れたかも知れない。」

「上手くいつてたんだ、たぶんな。スケベ面で愛莉を口説いていた男が邪魔しやがつて、気がついたらこのざまだ」

「ああ、たぶん上手くいつてたんだと思つぜ。アホな男がたくさん寄つてこなきや上手くいつてたんだろつ」

まるで見ていたかのような高橋の言葉「高橋も同じ経験をしたことがあるのだらう」「愛莉のことで。」

「まあとりあえず、あの店から愛莉を追い出すことには成功した。それになかなかかわいい女とも話ができたしな」

「ほう。おまえはただ突つ立つてるだけで女が寄つて来るからつらやましい」

「ただ突つ立つてたわけじゃない。ボロ雑巾になつて小銭を落つことしたら寄つて来たんだ」

笑う高橋「なんだかわからんが、小銭に感謝だな」

「いや、小銭を生んだハイネケンに感謝だ」

笑いながら大きなあくびをする高橋。

「で、あのストーカー野郎はどうする。捕まえるか？」

「現行犯でいけそうか？」

「どうかな。ストーカーつてのは何か盗んだり、侵入したりした証拠つてのが残らないと、現行犯でも立件は難しい」

「しのぶんちのテラスはウッドデッキだ。足跡くらい残るだらつよ」「そうかもしれないが、そうじゃないかもしれない。せめて、郵便ポス

トでも漁つてくれりゃいいんだがな。あそこなら明るいから写真もちゃんと撮れる。なにしろ、おれたちは警察に嫌われている。確固たる証拠がなきゃ、捕まえたって警察の嫌がらせに合うだけだ」

おれは体を起こした　男はまだしのぶの家のテラスにいる。今は何もせずにただ座りこんでいるだけだ。

「このまま夜を明かしそうな勢いだな」

「あれを写真に収めることはできるか？」

「できなくもないが、この距離じゃ顔がちゃんと映らんだろうな。暗いしな」

どうしたものか

「住所はわかっているし、名前だつてすぐにわかる。とつ捕まえて脅してもかけりゃ、もうやらなくなるんじゃないか？」

「おまえは超タフガイ戦法ばかり使うから、ボロ雑巾になつちまうんだ」

「なににせよ、捕まえたい」

「なぜだ？ ストーカーしなくなればいいんじゃないのか？」

「しのぶがそれで納得するわけないだろう」

笑う高橋　笑い終わったあとで、もう一度おれの言ったことを噛みしめてまた笑う。

「そうだった、これはしのぶちゃんの依頼だったな。あれだ、見てみる」

おれは高橋の指差すほうを見た　しのぶの家のテラス。

「下着が干してあるのが見えるか？」

テラスの隅に下着とタオルが数枚干してある。

「あいつがあれに手を出したらとつ捕まえよう」

男はその洗濯ものを目の前で眺めてモゾモゾしている　下半身をいじっているようにしか見えない／しのぶの下着で自慰

おれは七海がいる電柱のほうに目をやった　遠くて表情まで見えない／いったい七海は変態自慰行為野郎を尾行してどうする気なのだろうか　いくらなんでも男の野外露出オナニーを観察するの

が目的ってわけじゃないと思うのだが

「で、捕まえたらどうすんだ？ 警察に突き出すのか？」

「さあな、それはしのぶに聞かなきゃわからん」

笑う高橋。

「あいつのやることは、ときどき想像するのが無理なほどぶっ飛んでいるからな」

そう言っておれも笑った　そしてふと思った。

「ぶっ飛んでるで思いだしたんだがな」

「なんだ？」

「おまえが言っていたマリファナの話だ。あれは女子高生の間で広まっているってことじゃないのか？」

男から視線をはずさない高橋　「さあ、そこまでは知らないがな。麻薬常用者が低年齢化しているのは今にはじまったことじゃないしな。何か心当たりがあるのか？」

「今朝、ゲームセンターでマリファナを吸っている女子高生を見た」

「なんだって！？ ゲームセンターでか？」　驚く高橋。

「ああ、ゲームセンターの喫煙所でだ。しかも仲間がいた。さらにだ、栗田が巡回していたんだが、そいつらを補導しなかった」

「栗田ってのは、めぐみの後見人のあの栗田か？ たしか、今は少年課にいるんだったな」

「そうだ」

「まあ、栗田は情に厚いタイプの警官だからな。子供に優しくなってしまうのかもしれない。それにしても朝っぱらからゲームセンターでマリファナとは、驚きだ。犯罪には犯罪の、ルールだの賭け引きだのつてのがあるんだがな。その辺を理解していない、マリファナくらいは犯罪とも思っていない子供たちの間に、むやみやたらに出回っちまっているってことだろうな」

マリファナ　まどろむ香り／子供／栗田がマリファナを見逃すとはな　マリファナが二十五年前のレイプ事件を生んだと言うのに／マリファナが栗田の大好きなめぐみをボロボロにしたと言うの

に。

電話が鳴る　同時に尻のポケットをまさぐるおれと高橋／鳴っ

たのはおれの電話だった　知らない番号／誰だこんな夜中に

「もしもし」女の声　誰だろうか。

「誰だ」

「遠藤愛莉……」

「なんだって？　「どこにいる？」」

「新宿……」

「一人か？」

「うん……」

なぜ電話してきたのだろうか

「ねえ……」

「なんだ？」

「迎えに来れる？」

そりやもう今すぐにぶっ飛んで行くに決まっている　合わせ技

で一日四十万の片割れなんだからな。

だが　「どこに誰を迎えに行くんだ？」

わざと素っ気なく　タフガイなおれを演じる　返事が帰って

こない／やり過ぎたか　仕方ないなこんちくしょう／本当に子供

相手は面倒だ。

「新宿のどこにいる？」

「東口……」

「そんなところにいたら、交番のおまわりに捕まっちゃうぞ。どっ

かに隠れている、すぐに行く」

「うん、わかった……」

おれは電話を切った。

「誰だ？　女だっただけはわかったぞ」

「愛莉だ、とっ捕まえに行ってくる。ここは任せた」

高橋はタバコに火をつけた　「おまえが捕まえるのはかわいい

女。おれが捕まえるのは変態男。それでいいんだな？　あの女はど

「うつする？」

「とりあえずほつっておいていい。男の始末を先につけよう。今すぐにも事件が解決しないとヒステリーを起こすような依頼人だからな」

噴き出して笑う高橋　しのぶがおれに向かってわめき散らしている姿が目には浮かんだのだろう。

「悪さをしたら捕まえる。しなかったら尾行を続ける。それでいいな？」

「ああ、それでいい。それじゃ頼んだぜ」

おれはスライドドアに手をかけた。

「ああ、そうだ。どうでもいいことなんだがな、しのぶちゃんに言っておけ」

「なんだ？」

「下着は外に干すな。ストーカーだけじゃなく、おれまで興奮しちまう」

おれは噴き出して笑いそうになるのを必死にこらえた　たしかに／もつともだ　一階の誰でも簡単に近づけてしまうテラスに下着を干す女つてのも、どうかと思う。

だがまあ、それはそれでしのぶらしい

「興奮するのはただだ。おれがいなくなったらあの男と一緒に下着の匂いでも嗅いでいろ」

おれはそう言って、車からそつとおりた

タクシーで新宿東口へ 最近はタクシーまでもが禁煙で困る。

さつきかかってきた番号を選んで発信ボタンを押す 呼び出し

音ノ一回弱

「どこにいる？」

「片桐さんはどこななの？」

「東口を出た喫茶店の前だ」

「その喫茶店の中にいるよ。二階」

「すぐに出てこい」

「うん……」

おれは喫茶店の二階を見た 窓際の席ではなかったようだ／誰も見えない

新宿東口／休日前の夜つてわけでもないのに人がうじゃうじゃといる／酔っ払いのサラリーマン／若い男女数人のグループ／男女のペア どれもこれも酒にまつわる出来事でこの街の夜に生息しているように見える。

喫茶店の自動ドアが開く音 振り返る 愛莉／クレイジー・クレッシェンドで見たときと同じ格好。

愛莉はおれの格好を見て少し驚いた顔をした おれはそれに対しては何も言わなかった。

「どこでなにをしていた？」

「べつにどこでなにをしていたっていいでしょ」

タバコが吸いたい ほかにすることがない。

「ずっとここにいたのか？」

「ずっとつてわけじゃないけど……」

ずっとならばいな 「さつきは逃げたのに、なんで電話してきた？」

愛莉は少しだけうつむいた。「終電逃しちゃって、おかねがなく

って帰れなかったから……」

かねもないのに遊び歩けるってのはかわいい女の特権だ。おれはこれといって目的もなく歩き出した。じっとしているのに耐えられなかったからってだけだ。おれのあとについてくる愛莉。

「おまえはいつもこんな時間まで遊び歩いているのか？」

「友達の家に泊まれるときはとくに寝ているよ」

「家には帰らないのか？」

「家は好きじゃない」

家は好きじゃない　ああそうだ／おれも自分の家が大嫌いだった

だが、おれが嫌いだったのと、愛莉が嫌いなのには大きな違いがあるだろう。

「おれに電話したってことは、帰る気になったってことなんじゃないのか？」

なにも言わない愛莉。歩くのが辛くなってきたおれ　足がまだかなり痛いのだ　立ち止まってガードレールに手をついた。

「いつもかねがないときはどうしているんだ？」

「どうしても行くところがないときは、ママに電話する。そうすれば立川さんが高橋さんが迎えに来るから」

立川さんはいい　だが　高橋さん／あいつに『さん』がつくのは笑える　もっともおれにも『さん』がついていたな／それもじゅうぶん笑える。

「いつもは友達の結衣に頼むんだよ」

結衣　しのぶと同じ顔をする女

「結衣なら彼氏が車を持っているから、どこにいても向かえに来てくれて、泊めてくれるの。だけど今夜は用事があったためだった。家には帰りたくないし、それで片桐さんに」

「おれに電話したって、家に連れ戻すのは変わらんぞ」

愛莉はさつきからおれの体のあちこちに視線を飛ばしていた。

「それ、あの店でやられたの？」

「おまえにや関係ないことだ」

それに結衣が慰めてくれた

「片桐さんなら……」

「有二でいい」

「有二さんなら、まだ今日会ったばかりだし、交渉の余地があるかなと思つてね」

おれのボロ雑巾のような体を見ると、なにかしゃべるときでは顔つきが変わる愛莉　無理に強がっているのがわかる／その強がりと言葉の語尾までは続かないつてのもわかる。

「なんの交渉だ？」

「有二さんの家に泊めて」

オー・マイ・ガット！　「バカかおまえは。そんなことしておれになんの得があるんだ」

合わせ技で四十万なんだぞ　今こうして捕獲に成功してるんだ／ボーナスが出るかもしれない。

「だって、本当に帰りたくないんだもん！」

交渉どころか怒り出す愛莉

「帰りたくないなら、さっきの店にでもどこにでも戻つて、どっかの男に尻でも振つてみせれば、寝るところもかねも簡単に手に入るんじゃないのか？」

「あの店には戻りたくないだよ。本当はあんまり好きじゃない、ああいう店は。行くところがないからしかたなく行くだけだよ」

ほう　その点はおれと意見が合いそうだ／あんなマリファナ臭い店には二度と行きたくない。

「なんだってそんなに家を嫌がる」

「知らない男がいつつも家にいるんだもん……」

知らない男？

「ママが家に連れてくるんだよ、ママの遊び相手」

知らない男

「ママは愛莉よりその男たちとばかり遊んでるんだよ」

男たち

「もう、知らない男の匂いのする家なんていやだよ！」

知らない男の匂い　匂い／匂い／匂い／雄と雌の匂い　震度
六で脳みそが揺れた　マツハ六が来る　だめだ／ここでマツハ
六はまずい／愛莉の前だ／やめろ！／誰もおれを救っちゃくれない
！

目の前が堕ちていく　冥王星が見える／ねずみのカウボーイが
いつもと同じでオスカー・シュニツェルをぶら下げてニタニタし
ている　まだ子供のおれが見える／母親が帰ってきた／おれと姉
が学校に行く用意をしているところに帰ってきた　知らない男を連
れて　子供のおれが見ている／知らない男のオスカー・シュニツ
ェルを口に咥え込んでいる母親の姿を　あれがすべての始まり
だったんだ　おれはどんだん気が狂っていった／どんだん／どん
どん／どんだん／どんだん／どんだん　たのむ！／もう許
してくれ！

目の前がスクロールしている　なにも見えない／体が浮いてい
る　違う／おれはなにかを握っている／ガードレールを／ガード
レールを握っている　握れ！！／もつと強く！！／飛ばないよう
に／冥王星から戻ってくるために　握れ！！！！

ガードレールを握る手に力を入れた　爪がガードレールを擦っ
た／ギギギツと嫌な音がした　目の前が見えた

愛莉が心配そうにおれを見ていた　汗が噴き出す／肩が震える
抑える／震えを止めるんだ

「大丈夫？　どうしたの？」

おれに手を差し出す愛莉　おれはその手を払いのけた。

「大丈夫だ。なんでもない」

「ぜんぜん大丈夫そうじゃない　って顔をする愛莉。

「体、痛いのか？」

おれの崩れそうな体　ガードレールを握る右手一本で体を支え
ていることに気がついて、左手もガードレールに乗せた　頼む／
震えよ止まってくれ　口をあけると歯がカチカチと鳴るのがわか

つていたから、鼻で息を吸い込み鼻で息を吐いた　それを何度か繰り返す／ゆっくり／何度も　手を離す　大丈夫／もう大丈夫だ

愛莉のほうに向く　なんてことないって顔をする。

「今夜だけ特別だ」

「え？」

「うちに泊めてやる」

タクシーを捨てる　歩いててもそうたいした距離じゃないのだが、歩く元気はもうない。五分かそこらで事務所につく

一階のエレベーターホール／いつもなら階段で上がるのだが今夜は無理　エレベーターを待つ／乗る／愛莉も乗る／二階のボタン／エレベーターのドアはすぐに開いた

エレベーターを降りてすぐに目の前のドア　小さな表札／片桐探偵事務所　鍵を開ける／ドアを開ける　ドアのすぐ脇／照明のスイッチ。

「入れ」

「おじゃまします」

潰れた中折れ棒を帽子かけにかける　おれはそのままカウンタ―に向かい、キッチンの棚からグラスを取り出した／おれのオールド・ファッシュヨンド・グラス／愛莉にはコリンズ・グラス

自分局にでかい氷を選んでグラスに入れる／サザン・カンフォ―トを注ぐ　冷蔵庫には水／缶ビール　コーラがあるのを発見／取り出す／愛莉のグラスに氷を入れる／コーラを注ぐ。

まだ入り口の前で突っ立ったままの愛莉。

「突っ立ってないで取りに来い」

愛莉は言われた通りにカウンターの前まで来た。

「座れ」

一番左のハイスツールに座る愛莉　その前にコーラの入ったコリンズ・グラスを置く／自分のグラスを手取る／キッチンから抜出す／一番右のハイスツールに座る

タバコに火をつける　サザン・カンフォートを喉に流し込む／おれにしちやかなり珍しい／この時間まで酒を飲まずに過ごすとは　いや　ハイネケンを半分飲んだな／もうずっと前の出来事のように思える。

「コーラは嫌いだったか？」

グラスを握ったまま口をつけない愛莉。

「ううん」

「毒なんか入ってないぞ。もちろん睡眠薬も入ってない」

おれは自分のグラスをカウンターの上でまわした　氷がグラスに触れて綺麗な音を出す

「いただきます」

そう言っただけ愛莉はコーラを一口飲み、カウンターにグラスを置いた。

「ねえ、ここって有二さんの仕事場？」

「そうだ」

事務所の中をゆっくりと見まわす愛莉　特に目新しいものはないのだが、高校生には新鮮な場所なのかもしれない。

「こつちに来い」

おれは立ちあがって、寝室に向かった　愛莉もあとからついてくる／寝室のドアを開ける／照明をつける　中に入る。

何もなし　あるのはベッドと壁一面のクローゼットだけ。

「ここで寝ていい。トイレと風呂はそこだ。タオルや洗面用具は脱衣所にある。好きに使い」

「有二さんは？」

「おれはいつも、飲んだくれてソファがカウンターか、それとも机に突っ伏して寝るんだ。気にしないでいい」

そう言っただけおれはカウンターに戻った。サザン・カンフォートを口に含んで舌で転がした　甘い香りが体に広がる。

愛莉が戻ってきてさっきと同じところに座った。

「どうして泊めてくれる気になったの？」

タバコを吸う 灰を灰皿に落とす。

「ただ、なんとなくだ」

本当は違った 知らない男を見ることがどれだけ嫌なことか知
っているからだ だが、そんなことは言わない。

「ありがとう」

「気にするな。千鶴にはおまえに最初に逃げられたときに報告して
ある。だから今夜はもうおまえは自由だ。だが、明日からは違う。
おれはまたおまえを監視する仕事をする」

コーラを飲む愛莉 その顔が少し和らいだ。

「なんか、落ち着いたらお腹空いてきちゃったな」

「その要求には答えられんぞ。ここには食う物は何も無い」

微笑む愛莉 「外食ばかりじゃ体壊すよ」

「見た通りもうぶっ壊れてるさ」

笑う愛莉 笑えばかわいいんだ 突っ張って気取ってなんか
いないほうがいい。

「何か材料があるなら作ってあげたのに」

「何もない。おれは腐るものの管理はしない主義なんだ。食い物だ
ろうが人間だろうがな」

シャワーの音／遠くで 壁の向こうのさらに向こう

しのぶか 違う／しのぶは変態野郎に下着の匂いを嗅がせていた いや違う／それはさっき見ていた夢／しのぶが昨夜どこで何をしていたのかは知らない／部屋にいたのかはわからない。

シャワーの音／誰だ そうか／愛莉だ

ソファーに横になって寝ていたおれ 痛い／体中が痛い ああそうだ／ボロ雑巾になったんだ 体を動かすのが面倒だしばらくこのままでしょう。

タバコ ソファーターブルの上／手を伸ばす／腕が痛い なんとか届いた／啜える／火をつける。

入り口のスチールドアが開く音 「おはよう」

元気な声 真由美だ／毎朝決まって九時に朝食を持ってきてことはまだ九時か。

「ちょっと、どうしたの有二君！」

トレイを手を持っておれを見下ろす真由美の顔／質の悪い紙切れのように蒼白になっている。

「救急車！」

慌てる真由美／トレイをソファーターブルに置く／机に向かう／電話／受話器を取る 何ごとだろうか ああそうか／おれはボロ雑巾なんだ 見た目もきつとひどい有り様なんだ／昨日よりもさらにひどく／殴られたあちこちが腫れて痣になっているのだろう。

「大丈夫だ。なんともないから電話はやめてくれ」

真由美に寝起きの声を聞かせてやる。

「本当に大丈夫なの？」

おれは体を動かさずに器用にタバコを吸い続けた 単に啜えたまま。

「ああ、大丈夫だ。ただちょっとあちこち痛いだけだ」

受話器を置く音 「何があつたの？」

おれの向かい側のソファ―に腰を下ろす真由美。

「極秘事項だ」

やれやれって顔をする真由美 店のエプロンのポケットからタバコを取り出し啜える／火をつける。

「ところで、お風呂に入っているのは誰？ わたしはいないほうがいいのかしら？」

さっきまで顔面蒼白だったのに、あつという間にニヤニヤ顔になっている ゴシツプ嗅覚を呼び覚ました顔だ。

「依頼人に保護を頼まれた女だと思う」

「やっぱり女なのね」

ニヤニヤがさらに増す。

「たぶんな。おれも今起きたばかりだからわからん。それと、あんたがニヤニヤしながら想像しているようなことは何もないぞ。おれは仕事の女に手は出さない」

「出さないんじゃないかって、出さないように心がけている、でしょ？ で、わたしはここにいてもいいのかしら？」

おれは体をなんとか頑張って自力で起こした 昨日よりもあちこち痛い

「好きにしな」

持ってきたコーヒ―をカップに注ぐ真由美 おれの前に置く／おれはタバコを消してコーヒ―を飲む。

おれの背中側／真由美の真正面／住居スペースのドアが開く音

「あらやだ！」 驚き顔の真由美 「若い子！」

おれは後ろを見た 化粧を落とした愛莉 濡れた髪をアップにしてタオルで包んでいる。

愛莉も真由美に負けなくらい驚いている 真由美を見て。

「あ、あの……」

どっちの女も何か大きな誤解をしているようだ やれやれだぜまったく。

「有二君、紹介しなさいよ」

ニヤニヤ顔がおれを見つめる　目を輝かせて。

「二人とも何か誤解があるようだから、はっきりさせておく。依頼人に保護を頼まれてる愛莉だ。こっちはこのビルのオーナーで下の喫茶店の店長、真由美。おれの朝飯を持ってきてくれたただけだ。いらぬ誤解はするな」

そう言っておれはタバコに火をつけた。

「はじめまして、愛莉ちゃん」

ニヤニヤをニコニコに変えて挨拶する真由美。

「あ、はじめまして。こんな格好ですいません」

照れる愛莉　服を着ているとはいえ、風呂上りだからな。

「朝飯、食っていいぞ」

「でも、それ有二さんでしょ」

「おれはあとでまた作ってもらってから大丈夫だ。食べ」

愛莉がこっちに来る　おれの隣に座る。

「ありがとう」

「愛莉ちゃんって、いくつ？」

真由美のゴシップ探偵調査が開始された

「十七です」

またもや驚きの表情　「若い！　まさか有二君、君が援交グル

ープのリーダーなんじゃないでしょうね？」

「なんだそれ？」

真由美が立ちあがって、入り口のドアの脇のロッカーに置いてある週刊誌を持って戻ってくる　真由美のようなゴシップ好きのバ
イブルとも言える女性週刊誌。

「これよ、これ」

ペラペラとめくられた週刊誌　真由美が開いたページの見出し

にはこう書かれていた。

『援助交際をグループ化』

『マリファナを売る援交グループ』

『リーダーは男か!?!』

つまりこういうことだろう。援助交際をしている女子高生を集めて組織化し、顧客にマリファナを売る

なんという。五十年代のロサンゼルスじゃあるまいし、これじやそのまま売春斡旋じゃないか。

「なんの冗談だ、これは」

「冗談なんかじゃないわよ。実際に新宿でこういうことが目撃されているそうよ。それにほら、こっちのページも見て」

ページをめくる真由美。出てきた見出し。

『マリファナ所持でサラリーマン逮捕!』

『会社内で売買』

『社内で売っていた男は行方不明』

「なんだこれは?」

「サラリーマンが会社内でマリファナを売っていたらしいのよ。それで、売った男はどこかに雲隠れしちゃって捜索中。部屋を捜査したのにマリファナは見つからなかったそうよ。だから、どこかほかの誰かから買ったマリファナを会社で売っていたんじゃないかって書いてあるわ。その会社は社員の半分が逮捕されて潰れそうなんだって」

サンドイッチを摘んでいる愛莉に、コーヒーを差し出しながらしゃべる真由美。そりゃ社員の半分が逮捕されちまうような会社じゃ、仕事に支障が出なくたって潰れるだろう。

「これはおそらく嘘だ。こんなことしても儲からん。サラリーマンのほうは事実だとして、援助交際のほうはでっちあげだ」

おそろくな。たとえば/援助交際による事故や事件。つまり危ない男に出会わないようにするために、いくらかのマージンをとって仲介するっていうならわかる。

だがそれじゃ、援助交際の金額なんてたかがしれているわけだから、仕切る側も仕切られる側も得がない

そうか。それでマリファナだ/マージンを取らないかわりにマ

リファナをさばかせる／売り上げは元締めの人にそのまま入る／女たちはマリファナを売るかわりに問題が起きたら保護してもらえない／安全に体を売れる　あり得ない話じゃない。

だが、ここは日本だ　話が突飛過ぎる。所詮はゴシップ週刊誌のネタ／事実だったとしてもかなり大げさに書かれているのだろう。瞬き／ゲームセンターの女子高生

だがしかし　売らずに自分で吸っちゃったら意味がない。

だがしかし　援助交際をグループ化して困い込むための前段取りかもしれない。

だがしかし　おれには関係がない／どうでもいい／ほうっておけ。

「で、なんでおれがそのリーダーなんだ？」

真由美がニヤリと頬を吊り上げて笑う　「だって、喧嘩したよ　うな体で、若い女の子と朝まで一緒なのよ？」

揉め事を片付けた援交グループのリーダーってことか　真由美のような想像力がゴシップ誌の売り上げを伸ばす一番の材料だったことはよくわかった。大げさに書けば書くほど想像力が増大して売り上げも増大するってのもわかった　真実なんてのはブタに食われちまえてことなんだってのがよくわかった。

「バカらしい」

笑う真由美　「そうよね、こんなかわいい子がそんな悪いことしているわけないもんね」

「そうじゃないだろう。おれみたいな人間がマリファナなんか売るわけないってことだろう」

顔を見合わせる真由美と愛莉　二人同時に嘖き出して笑いやがった。

「君はじゆうぶん、援交リーダーに間違われてもしかたない格好と人相だと思っわよ。ねえ、愛莉ちゃん？」

「うんうん、怖い顔しているし」

ニコニコと笑う愛莉　笑いのネタにされるのは気に食わんが、

愛莉の笑顔は気に入った。「なんとも言ってくれ」

おれはリュウマチのじじいみたいにして立ちあがり、住居スペースに向かった。トイレ／洗顔／歯磨き。事務所に戻ると、愛莉と真由美は楽しそうに話をしていた。

「有二君、愛莉ちゃんって小さい頃、新宿に住んでいたんですって。ご近所さんよ、ご近所さん！」

情報をかき集めてゴキゲンな真由美。おれは女どもの会話には混じらないように、机の前のアームチェアに座った。

「西新宿だから、そんなに近いつてわけじゃないんですけどね。中央公園ではよく遊んでました。花時計が大好きで、今でもたまに行くときがあるんですよ」

「へえ、花時計かあ。ホームレスさえいなければ、綺麗で安全で、とつてもいい憩いの場なんだけどね」

「ですよねえ」

タバコに火をつける。背中のカートンを開けて外を眺める／いつも通りの変わらぬ景色／真由美の店に出入りする若者

「ねえ有二さん」

愛莉の声。わざと女どもの会話が聞こえないように外の世界に集中していたから、すこし驚いた。

「なんだ？」 振り返るおれ。

「ママに頼まれているもう一つの仕事ってなに？」

興味津々な笑顔。昨夜までの怯えるような顔はもうどこにも見えない。

「極秘事項だ」

今回は普通に言ったから、愛莉は笑わない。と思ったら笑いやがった。昨日の姿を思い出したのだろう。

「教えてくれてもいいじゃない。愛莉はママの娘なんだから、知っなくても問題ないでしょ」

「娘かもしれないが、依頼人じゃない。おれは依頼人を裏切る行為を自分からはしない」

「ケチ！」

そう言って真由美のほうに向き直る愛莉　何かあるなって顔を
する真由美／愛莉とおれを交互に見る／愛莉に話かける。

「愛莉ちゃん、わたしの店にならいつ来てもいいからね？　朝七時
から夜十二時まで開いているから」

真由美は愛莉が家出少女なんだと悟ったのだろう。危ない場所で
夜を過ごすくらいならと、店においでと言ったのだ　面倒見のよ
い真由美らしい気遣い。

「うん、ありがとうございます」

今までにない笑顔を見せる愛莉　母親からの逃げ場所を手に入
れる。

「でも……」笑顔のあとのうつむき　「わたし、バイトもしてい
ないし、お金そんなにないから」

取り巻いてチャホヤかねを浪費してくれる男がいない真由美の店
じゃ、自分の小遣いでないと来れないってことが。

真由美がおれを見る　どうするの？　って顔で。

「かねのことは心配するな。バカみたいに注文しなきゃ、おれのツ
ケにしておけばいい」

愛莉の監視にかかる経費は奈津子から出る　愛莉が真由美の店
でいくら使おうが、痛くも痒くもない。

おれを見て今までにない笑顔に戻る愛莉　「ありがとう！　有
二さん大好き！」

電話が鳴る　なんだかよくわからない着メロ　愛莉の携帯電
話。

おれはまた外に目を向けた。

「ねえ、有二さん」

ねえねえとおれを一人にさせてくれない愛莉　「今度はなんだ
？」

「友達と遊びに行くから、お金貸して」
満面の笑みでおれを見る愛莉

「バカかおまえは」ムツとする顔になる愛莉を見ながら続けるおれ
「今日は平日だ。おまえはこれから学校に行くか、そうじゃなきゃ家に帰るんだ」

電話が鳴る おれの携帯電話 しるぶから。

アームチェアをクルリとまわして、また窓の外に目をやる／通話ボタンを押す 「なんだ？」

「なんだじゃないわよ！ 下着が盗まれているじゃないの！」

「なんだって!？」 そんなバカな。

「なんだってじゃないわ！ 盗まれているのよ！ し、た、ぎ、が！……！」

「そんなはずはない。昨日は高橋が張り込みをしていた。おれも途中までは一緒にいたんだ」

「言い訳はあとで聞くから、とにかく今すぐこっちに来なさい！」

わかったわね、間抜けなくそつたれ探偵さん！！」

強制的に切れる電話。

おかしい 高橋はあの男が下着に手を出したら捕まえると言っ

ていた。もし捕まえ損ねたのなら連絡があるはずだ いったいど

ういうことだ？ 高橋が盗まれるのを見逃したのか？ / いや

高橋はそんな間抜けじゃない 意味不明だ / 何が起こった？

おれはアームチェアから立ちあがった。

「何かあったの？」

真由美が心配そうな顔をしている。

「いや、たいしたことじゃない」

なんだかよくわからなくて、キョトンとしている愛莉 やれやれだ。

電話をかける 千鶴へ / 呼び出し音二回。

「おれの事務所に愛莉がいる。おれはこれから別の仕事でちょっと出かけなきゃならない。すぐに来れるか？」

「二、三十分かかると思いますが」

「わかった。事務所に誰もいなかったら、愛莉は一階の喫茶店にい

るから覗いてみてくれ」

「わかりました」

電話を切る　財布から一万円札を抜き出す／愛莉のところへ進む。

「いいか、おれは別に学校にはちゃんと通えとか、家には毎日門限を守って帰れとか、そんなことを言う気はない。だが、おまえを危ない目に合わせたくないという親の気持ちはなんとなくわかる。やり方には問題があるかもしれない。だから少なくとも、おれと真由美をがっかりさせるようなことはするな。おまえはここにも、真由美の店にも、いつでも好きなときに来たい。おれたちをがっかりさせたらおまえは逃げ場を失うんだ。それをよく考えろ」

おれはそう言っ、愛莉に一万円札を差し出した　え、こんなに？　って顔の愛莉。

「これは好きに使っていい。下で飲み食いするならこれを使わずにツケにしている。おれはこれから別の仕事で出かせなきゃならん。千鶴が来るまで真由美の店にいる。わかったな」

真剣な顔をする愛莉　「わたし、友達と遊びに行きたいんだけど……」

「それは千鶴と相談しろ。おれはおまえを千鶴に引き継がなきゃならん。それがおれの仕事だ。だが、おまえがちゃんと千鶴が来るまで真由美のところに行けば、今後いつでもこと真由美の店には好きに出入りできる。行きたくもない危ない店で危ない真似をするとはなくなるし、毎晩泊まる場所を探して友達にメールしまくる必要もなくなる。おれの言っていることはわかるだろう」

「うん……」

「おれはおまえを子供扱いする気はない。だからこれは取り引きだ。おれの仕事にもおまえの今後にも、悪い取り引きじゃないはずだ」

しばらく考える愛莉　考えてからおれを見た。

「うん、わかった。本当にこれからはここにもいつでも来ていいんだね？」

「ああ。おれがいないときは、真由美の店にいる。真由美の店が閉まる前までに来るんだ」

「店が閉まっていたら、ここの五階にいらっしやい。泊めてあげるから」

そう言って愛莉に微笑みかけ、おれにウインクする真由美　恩にきるぜ。

「すまんが真由美、そういうわけでおれはこれから出かけなきゃならん。迎えが来るまで、愛莉のことを頼む」

「お安いご用よ。君の世話よりずっと楽だわ」

そう言って笑う真由美。おれは愛莉に一万円札を握らせた。それから住居スペースに向かう／シャワーを五分で浴びる／髭を二分で剃る／着替えを五分で済ませる　クローゼットから新しい中折れ帽を取り出す／ベッドの脇の戸棚から予備の度入りサングラスを出してかける　オレンジ色のサングラス／世界がオレンジになる。

事務所に戻る／真由美も愛莉もない　鍵を閉めて事務所を出る／エレベーターで一階に／外に出て真由美の店を覗く　カウンターに座る愛莉／おれに小さく手を振る真由美／おれも小さく手を振り返す

しのぶのマンションに向かうまでに、高橋から電話で事情を聞いた

「あれからしばらくして、近くでパトカーのサイレンの音がしてな。男は結局、何もしないでベランダから出たんだ。それでおれは車であとをつけた。相手は歩きだったから大変だったぜ。男は阿佐ヶ谷駅の方向に歩いて、途中でタクシーを拾った。女もそれまでは一緒に尾行していたんだが、タクシーをすぐに拾えなかったみたいだ。おれは男のタクシーを尾行した。男はおまえの言っていたアーバンなんちゃらの前でおりて、四〇四号室に入った。おれはしばらく、アーバンなんちゃらの前の通りで張り込みをしていた。タクシーが来て女がおりた。例の女だ。女は三〇三号室に入った。それからおれは集合ポストで四〇四号室の表札を見た。名前は書いてなかったし中身も空っぽだったから、部屋の前まで行って表札を見た。苗字は田辺だ。車に戻って三十分ほど粘ったが、動きがないからおれは帰った。そういうわけだ」

男の名前は田辺か　南阿佐ヶ谷からしのぶのマンションに向かう途中　急ぎ足のおれ。

「じゃあ、田辺も七海もしのぶの下着は盗まなかったんだな？　もちろんおまえも盗まなかった」

笑う高橋　「何度となく盗みたい衝動には駆られたがな。誰も盗んでいない。それにおれは下着よりも女の体そのもののほうが好きだ」

「しのぶの下着が盗まれているらしい」

「なんだって？」　当然の反応をする高橋　「そんなはずはない。田辺も七海も、もちろんおれだって盗んでいないぞ。どうということなんだ？」

「どういふことをこれから確認する。今しのぶのマンションに向

かっているところだ」

「あのあと、別の下着泥棒が現れたってことか？」

「どうかな。一日に下着泥棒が二人も現れるもんなのか」

笑う高橋 「そりゃそうだな。だが、しのぶちゃんちのあのテラスじゃな。あんなに簡単に忍び込める場所に、下着が大胆にぶらさがっているんだ。通りすがりの酔っ払いだつて、軽はずみな気持ちで盗むだろうよ」

高橋の言う通りに思えた 「まあとにかく、しのぶから話を聞いて何かわかったら連絡する」

「オーケー、ボス」

電話を切る しのぶのマンションが目の前に見えた。おれはしのぶの部屋のテラスに向かった。植え込みの中の細い石畳を歩くテラスの策の扉を開く／ウッドデッキ 足跡は一つ／昨日の男のだろうか／あちこち歩きまわっている／どれもすべて同じ足跡に見える おれもそこに足を踏み入れる／歩いたあとを見てみる 足跡はできない／自分の靴の裏を見る 硬い靴底 スニーカーのような柔らかい靴底のほうか、こういう場所では足跡が残りやすいのだろうか／それともただ単にあの男の靴が汚かったただけか？ わからん。

そのままウッドデッキを進み、窓をノックする リビングの窓を カーテンが開く／チビのしのぶが怪訝な顔で突っ立っている 白いＴシャツ／ピンクとグレーのボーダー柄ストレッチパンツ 化粧は落ちてている／髪は濡れて束ねられている 風呂上り／窓が開く。

「あなたはなんでそんなところから登場するのよ」

「これ、おまえの足跡か？」ウッドデッキの足跡を指差すおれ。

「あたしの足がそんなにでかいと思っていたの？」

不機嫌 よつぱど高い下着でも盗まれたか／そんな下着を夜中に外に干すのがそもそも悪いんだ。

「下着はそこにあった。昨日おれが見たときはな」

ウッドデッキの隅っこ／窓の目の前／床置き式の小さな物干しを指差すおれ。

「そうよ、でもあたしが今朝帰ってきたときにはなかったわ」

おれはカメラを取り出し、ウッドデッキの足跡の中から一番はっきりしているやつを写真に収めた。

「ねえ、あんたちゃんと張り込みしていたの？」

「していただき。高橋がな」

「高橋さんなら、あんたと違うから間違いないわね」

そう言つて、部屋の中へ消えていくしのぶ　おれもあとに続いて中に入る／蛇革のポインテッドトゥを持って

しのぶの家　リビング／おれの事務所と変わらない広さ　六人掛けダイニングテーブル／五人は座れるソファ／電気屋でしか目にしないどでかいテレビ／カウンターバー／その奥にどでかいキッチン／部屋に続く廊下

靴を持って玄関へ続くドアを開ける／短く幅の広い廊下／左にドアのない出入り口／奥はバスルームとトイレ／それ以外は左右ともに壁一面クローゼット　玄関に靴を置いてリビングに戻る。

キッチンから缶ビールを二つ持って出てくるしのぶ。

「座りなさいよ」

おれはソファに座った。しのぶがおれの隣に座る／缶ビールを一つソファテーブルに置く／手に持っているほうの缶ビールのプルトップを弾く　グビグビと音を立てて飲むしのぶ　色気のかけらもない／だが、そんなところがおれ好み。

おれも缶ビールを手を取ってプルトップを弾いた　飲む。

「その怪我、どうしたの？」

顔に痣　腕も痣だらけだったからタンクトップの上に長袖の柄シャツを羽織ってきた

「転んだだけだ」

「転んでそんなになるヤツがこの世にいるなんて思いもしなかったわ」

嫌味たっぷりなセリフ　グビグビ飲むしのぶ／缶ビールがどん
どん減っていく。

「何時に帰ってきたんだ？」

「あんたに電話したときよ」

十時過ぎだな　「帰ってきてすぐ気が付いたのか？」

「帰ってきたときに、洗濯ものが出っばなしなのに気が付いたのよ。それで取り込もうと思ったら、タオルしかなかったの」

ビールを飲むおれ　「たしか、昨日はタオルが二枚と下着が上
下二セットだったな」

「あんたって、そういうところはよく見ているのね」

「おれだけじゃない、高橋も見ていたぞ」

顔を赤くするしのぶ　人並みの羞恥心は持ち合わせているよう
だ。

「高橋だけじゃない、ベランダに侵入した男なんか匂いまで嗅いで
いた」

赤い顔　想像中／変態野郎が自分の下着の匂いを嗅いで

興奮／高揚／光悦　股を濡らしているに違いない／乳首が立つて
いるに違いない。

「あんたそれで、なんでその男を捕まえなかったのよ！」

「いろいろ調べて尻尾を完全に握ってから捕まえるつてのが探偵の
やりかただ。いや、そもそも普通の探偵は逮捕なんてしやしない。

動かぬ証拠を集めるのがおれたちの仕事だ。だから、下着を盗んだら捕まえて、盗まなかったら尾行しようつてことにしたんだ。それでおれはべつの仕事でその場を離れた。高橋はそいつが下着を盗まなかったからそのまま尾行を続けて、そいつのマンションまで行った。それ以上動く気配もないから家に帰ったつてことだ」

タバコに火をつけるしのぶ　「それじゃあ、いったい誰が下着
泥棒なのよ」

おれもタバコに火をつけた　「それがわかってるなら、わざわざ
どここまで来ない」

田辺は下着を盗んでいないだろう　あの時間に一度家に帰って、
またここに戻ってくるとは思えない　別の人間だ／それはほぼ間
違いない。

七海は？　田辺が帰るのを尾行していたが、タクシーに乗った
田辺の尾行はしていない／高橋は田辺を尾行していたから七海の行
動は把握していない　タクシーに田辺が乗ったあとにここに戻っ
て下着を盗む／それを持ってタクシーで帰宅　可能だろう　だ
が動機がさっぱりわからん／七海がしのぶの下着を盗む動機／七海
が田辺を尾行していた動機　何もさっぱりまったくわからん／証
拠も動機も何もかもさっぱり。

缶ビールを飲み干して、タバコを揉み消したしのぶ　「ねえ、
早く飲んじゃいなさいよ」　甘い声。

おれはしのぶを見た　半開きの唇／誘惑する目／妖気がみなぎ
る表情　おれの胸に顔をくっつけてくる。

「下着の匂いを嗅がれて興奮したか？」
しのぶの頭に手をあてる。

「バカ言っでんじゃないわよ」
鼻で笑うおれ　「洗濯した下着なんて洗剤の匂いしかしないだ
ろう」

「だから違うっていつてるじゃない」
おれはビールを一気に飲み干した／しのぶの頭に手をあてたまま
体を起こしてタバコを消した　「それじゃあ、おれがおまえの体
中の匂いを嗅いでやる」

しのぶはおれを押し倒した　ソファーに倒れ込むおれ／体中が
痛い。

「あたしがあなたの匂いを嗅いであげるわ」
おれのタンクトップをまくり上げるしのぶ　痣だらけの胸板
しのぶの目が凍る。

「ちよつとあんた……本当に大丈夫なの？」
「おまえが見てるのはほんの一部だ。これで驚いていたら、おれと

のファックは無理だぜ」

「格好つけてる場合じゃないでしょ！ 病院に行きなさいよ」

おれはしのぶを引き寄せた　どこもかしこも痛かった　だがしのぶの匂いに包まれたかった／目の前まで引き寄せたしのぶの顔

キスをする／ビールの匂い／タバコの匂い／口の匂い　舐めまわす／唇も／歯も／歯茎も／舌も　上唇と歯の間に舌を滑りこませる　しのぶの性感帯／交わる口と口の隙間から吐息が洩れる

しのぶが体を引き離す／おれに馬乗り状態　しのぶのＴシャツをまくり上げる／ブラジャーはなし／硬くなつた乳首が斜め上を向いている　それを摘む　ビクツと体を震わすしのぶ／たいして大きくない乳房を手で覆い揉みしだく　体がくねる

しのぶがおれから離れる／ストレッチパンツを脱ぐ／白いＴシャツを脱ぐ／白いシヨーツだけになる　おれのジーンズのジッパーを下ろす／ジーンズを脱がす／ゆっくり　痣だらけの足があらわになる／特にひどい左の太もも　それを見て目が潤むしのぶ

「あなた、本当に何したのよ」

おれは体を起こした　シャツを脱ぐ／タンクトップも脱ぐ

「転んだだけだ」

「格好つけて、いつか死んじゃうわよ」

しのぶに手を差し伸べるおれ　その手を握るしのぶ／立ちあがるおれ／ソファアに座るしのぶ　ボクサーパンツがずりさげられる／ジャンボサイズでジャンプ芸を披露したがるジヨンの登場

「ここだけは無事だったようね」

ニヤリ顔のしのぶ　啞え込まれるジヨン／根元をしごく／先を舐める／喜ぶジヨン

しのぶを押し倒す　両足を広げる／びっしり濡れたシヨーツ

脱がす　匂いを嗅ぐ。

「ちよつと、やめてよバカ！」

本気で恥ずかしがるしのぶ　おれはニヤリ顔を見せる。

「下着泥棒だって、濡れたて脱ぎたての匂いは嗅げないってもんだ」

「バカ！」

おれはショーツをその辺にほうり投げしのぶに覆い被さった
キス　キスしながらジョンをぶち込む／仰け反るしのぶ　奥ま
で／押し込む　おれの背中を掴む手に力が入る／キスをやめる／
首を舐める　声を出すしのぶ／耳を舐める　声を出すしのぶ／
腰を振る　息を飲むしのぶ／深く導入したところで動くのをやめ
る　おれの恥骨がしのぶのクリトリスにあたる／細かく振動させ
る　大きな声を出すしのぶ／八の字を書くように腰をまわす
おれにしがみつくしのぶ／体中が痛いはずなのにそれを感じない

しのぶのいやらしい声がおれを癒す。

十秒だか十年だか／しのぶは絶頂に達し体を大きく震わせた
おれはジョンを抜く／ジョンはしのぶの薄い陰毛をロックオンして
射精した

おれはしのぶにキスをしてソファアに座った　タバコに火をつ
ける。

「怪我が治ったら、もっといろいろやってあげるわ」

そう言って、しのぶはジョンをつま先で触り、体を起こしておれ
のタバコを奪い取り口に啞えた。陰毛におれの精液をくっつけたま
ま、キッチンまで行き缶ビールを持って戻って来る。

「ねえ、その下着を盗まなかった男って、どこに住んでいたの？」

ブルトップを弾くしのぶ　一口飲んで喉を潤す／缶ビールをし
のぶから奪い取り、おれも喉を潤した。

「高円寺だ。アーバンビルド高円寺ってマンションだった」

「え？　それってあたしのマンションじゃない」

「なんだって？」

思わず缶ビールを落としそうになるおれ　ソファアテーブルに
置く。

「あたしの所有するマンションよ。向かい側にビリヤード場がなか
った？」

なんてこった　「あつたぜ」

「部屋番号を覚えてくれれば、契約情報は全部わかるわよ」

「そりゃ素晴らしい。知りたい住人は二人いるんだ」

「なんで二人なのよ？」

「まさかおまえが、おれが今抱えている仕事すべてに関わってくるとは思いもしなかった」

「よくわからないわ、どういうことよ」

おれはしのぶを引き寄せ、もう一度キスをした。おまえはいつでもおれの女神ってことだ」

おれの事務所　しのぶとのファックで余計に体が痛くなった／ファック中はほとんど痛みを感じなかったのに　単にアドレナリンが放出されていただけ。

しのぶ／不動産屋に電話　三〇三号室と四〇四号室の契約内容が書かれた書類／不動産屋にひとつ走り。

真由美から／愛莉は迎えに来た女と一緒に出て行った

千鶴に電話をする　呼び出し三回／千鶴の声　「もしもし」

「愛莉はどうなった？」

「着替えさせて学校に行ってもらいました。今、学校の前にいます。そろそろ出てくる時間なので」

なんともまあ　奈津子のためにそこまでする理由がわからん　そんなにいい給料だとは思えない。

「そうか、じゃあ愛莉の件はまた何かあったらってことでいいな」

「はい、今のところなんの問題もありません。保護していただいて感謝しています」

真面目な女　千鶴が男と抱き合っているときの声が想像できない。

「門脇七海の件なんだが、あんたに報告でいいんだよね？」

「はい、何かわかりましたか？」

「いまのところ、住んでいるマンションがわかったただけだ」

住所を伝える　千鶴がメモをしている様子はない／携帯電話の簡易録音機能ってやつだろうか。

「そのマンションの持ち主から契約情報を教えてもらえることになった。これで、あんたのボスが知りたい情報のほとんどがわかるはずだ」

「すごいですね。探偵ってというのはそんなことまでできちゃうのですか」

驚いている声　千鶴が驚いた声を出したことに驚くおれ。

「いや、それはたまたまなんだ。契約情報なんてそう簡単に手に入るものじゃない。今回はラッキーだったただけだ」

張り込みと尾行、それに聞き込みが探偵の基本で、それがすべてと言つてもいい。信用情報を手に入れたりなんてのは、おれみたいな私立探偵じゃ無理つてもんだ　コネを使わなきゃな

「まあとにかく、そういうわけだから、あんたのボスによるしく言つといてくれ」

「はい、ありがとうございます。それではまた」

電話を切る　タバコに火をつける／キッチンに行く／棚からグラスを出す　いつでもいつの間にか綺麗に洗つてあるおれのグラス／真由美　おれのいないときに合鍵でここに入り部屋を掃除しておいてくれる　まるでホテルのような待遇。

冷凍庫から氷を出してグラスに落とす　サザン・カンフォートを注ぐ／グラスをゆする　いい音を出す。

一口飲んだところで、入り口のスチールドアが開く　しのぶだ。「もらつてきたわよ」

カウンターに座っているおれの隣にくる　おれの酒を飲むしのぶ。

「どつちから知りたい？」

「いいから見せてくれ」

「だめよ。あたしに説明させて」

なんでだ　見せてくれりゃ早いのに　得意顔のしのぶ／探偵ごっこが開始されたつてことか／おれの相棒を演じるつてわけだ。

「それじゃあまず、三〇三号から頼む」

封筒から書類を取り出し読み上げるしのぶ　「門脇七海。一九八六年四月二十二日生まれ。株式会社フリージア勤務。契約時の保証人は、門脇大輔。六十七歳。おじいちゃんのような年齢だけど、父親のようね。大栄警備保障に勤務しているわ。有名な大手警備会社ねこれ」

「母親についてはわからないか？」

「保証人は一人でいいからね。これ以外であんたが欲しがっている情報は無いわね」

父親の家に行けば、近隣のゴシップ好きなおばちゃんたちがベラベラしゃべるだろう。高橋に聞き込みしてもらうか　聞き込みはおれより高橋のほうが上手い／年寄りあいてとなればなおのことだ
面倒臭がつて超タフガイになったりはしないからな、あいつは
「わかった。もう一人のほうを頼む」

「田辺洋一。一九八一年六月八日生まれ。株式会社コスモタッチ勤務、これはIT企業みたい。保証人は父親らしいけど、知りたい？」
「いや、いまのところ重要じゃない。その書類をコピーしてくれればそれでいい」

サザン・カンフォートを口に含み舌で転がすおれ。書類を封筒に戻してカウンターに置くしのぶ。

「で、何かわかったの？」

「何が？」

「何がじゃないわよ。この情報で調査は進展したの？」

おれのタバコを一本抜き取って啜えるしのぶ　火をつける。

「門脇七海のほうはいろいろわかった。あとは母親の名前と血液型くらいか。それにプライベートの行動」

プライベート　深夜の尾行／しかも変態ストーカー野郎を
いったいなんなのだろうか。

「あんたの仕事なんかどうでもいいのよ。田辺よ、田辺のほうはどうなのよ」

「田辺については、おまえのベランダに侵入していたってことだけしかわかっていない。それが、おまえの言っていたストーカーなのか、それともストーカーは別にいるのか、それすらもよくわからん
下着泥棒が田辺じゃないとも断言できない。つまりなんにもわからんってことだ」

やれやれって顔のしのぶ

まったくだ／謎が多すぎる

下着

はいつ誰が盗んだのか／七海はなぜ田辺を尾行していたのか／田辺は迷わずしのぶのマンションに向かった　ストーリーカーが田辺な確立は高いだろう　唯一予想できるのはそれくらいか。

おれは酒を飲み干してソファーに横になった　今夜の行動を考える　七海／田辺／愛莉　どれに手をつけるか。

進展が大きいのは七海だ　またフリージアに行き七海の同僚を捕まえて聞き込みするか。

それともそのまま尾行してアーバンビルドで田辺とセットで張り込むか。

愛莉のほうは問題がない限りは千鶴からの連絡はない　今朝の取り引きを愛莉が自覚していれば、問題のある行動には出ないだろう。

七海から片付けるか

「ねえ」おれの頭の上でしのぶがニヤニヤしている　「不動産屋から、こんなものも借りてきたのよ」

しのぶの指の先にプラプラとぶらさがっている鍵。

「なんだそれは」

おれは手を伸ばしてその鍵を取った　鍵に結ばれた札に『アーバンビルド高円寺』と書かれている。札を裏返すと『四〇三』と書いてある。

「四〇三号室は空き部屋なのよ」

ニヤリ顔のしのぶ　おいおい

「おまえ、なんかよからぬことを考えているだろ」

ニヤリがさらに増す　「あんた探偵なんだから、侵入くらいお手のものでしょ？」

「バカか。アメリカンドラマじゃあるまいし」

ニヤリ顔はまだまだ続く　「なんにしても、四〇三号室に入るのはなんの問題もないわよ。四〇三号室は、あたしのマンションで空き部屋なんだから」

ニヒルに笑うしのぶ　おそらくしのぶの脳みその中ではミッシ

ヨン・インポッシブルのテーマが流れているに違いない／あるいはダブル・オー・セブン／あるいはチャーリーズ・エンジェル　　ま
ったくもってやれやれだ。

おれは体を起こした　　やる気満々のしのぶを止めるのはもはや不可能／おれはしのぶを満足させるために生きている／それにだ

おれも田辺についてはかなり気になる／七海についても何かわかるかもしれない／昨日の田辺と七海の行動はどう考えても偶然じゃない　　隣の部屋ならベランダから侵入できるだろう

「オーケー、やるだけやってみよう。ただしその前に」

「その前に？」

「少し眠らせてくれ。体が痛い」

おれは住居スペースに向かった。

「そんな体なのに、張り切って腰を振るからよ」

しのぶもおれについてきた

尻のポケットが振動する　携帯電話／バイブレーション／尻をまさぐり電話を取り出す　高橋から。

「おまえに言われた通り、コスモタツチを張り込んでいたら田辺が出てきた。これといって不審な行動は何もない。まっすぐ帰宅している。今、アーバンなんちゃらの目の前だ。このまま張り込んでりやいいか？」

「田辺の張り込みはおれが引き継ぐ。おれは今、四〇三号室にいる」「なんだって？」

「このマンションはしのぶの持ち家の一つだったんだ」「なんだって!？」

『なんだって』が多い高橋／おれもだ　『なんだって』だらけの仕事。

「おれもびっくりしている。今回の仕事はびっくりすることだらけだ」

「それじゃあ何か？　しのぶちゃんはおまえが抱える仕事の中心にいるってことか？」

「中心かはわからん。隅っこかもしれん」
笑う高橋　「田辺がしのぶちゃんに目をつけたのはそれでか」

「おそろくな。ストーリーされていると感じるようになった少し前、二週間ほど前らしいんだが、マンションを囲う策の塗装工事の件でしのぶは不動産屋と一緒にここを訪れているらしい」

「そのときにしのぶちゃんを見た田辺は、一目惚れしてしまった。尾行したか、それともどこかで調べたかして、しのぶちゃんの自宅を知ったってことか」

「そうだろうな」

玄関のドアが開く音　四〇四号室　ドアが閉まる音／田辺が部屋に入ったようだ。

「女のほうは？ 門脇七海だっけか」

「七海の行動は謎なままだ。田辺を尾行していたんだと思うが、もしかしたら、しのぶを張り込んでいたのかもしれない。どっちにしても動機がいまいちわからない。なにせよ、奈津子の依頼に関してはしのぶのおかげでかなり進展した。七海の母親の件は頼むぜ」

「ああ、明日にでも聞き込みしてくる」

「それと、状況によってはこの部屋から隣と下、つまり四〇四号室と三〇三号室の、盗聴をしようと思っている。そのときはプロのおまえに頼む」

「コンクリートマイクがあれば、どっちも簡単に盗聴できる。お安いでご用だ。それで、おれは今日はもう帰っていいのか？」

空っぽのコーヒーの缶にタバコを突っ込む。

「おまえはそのまま、七海の部屋を見張っていてくれ」

「なんだ、帰れないのか。まあ時給一万円だから文句はこれっぽっちもない。動きがあったら連絡するぜ」

電話を切る 真つ暗な部屋／カーテンがないから照明をつけられない。真つ暗な中でしのぶがタバコを吸っている タバコの先端の赤い火／緊張とスリル／興奮／高揚／光悦 おれを見ながら笑みを浮かべるしのぶの顔をぼんやりと照らす。

しのぶはタバコを消して、四〇四号室側の壁に耳をあてる しばらく無言 何も聞こえないようだ／やれやれってポーズをしている。

「いつてらっしやい」

そう言ったしのぶ 暗くて表情まではわからなかったが ぜったいにニヤリ顔をしているに違いない／おれは立ちあがった／ベランダに向かった。

窓の鍵を開ける ゆっくりと窓を開ける／少しだけ／音を立てないように おれがベランダに出られるだけの隙間

部屋の中は埃だらけだったから靴は履いたままでいた そのままベランダに出る／音を立てないように／窓を閉める／窓際でしの

ぶが手を振っている　　月明かりに照らされる顔／絶対に股間を濡らしている顔。

ベランダの手すり／上半身を乗り出す／下の部屋が見えないか試す　見えない／明かりがついているかもわからない。

隣のベランダとの敷居／非常時に簡単にぶち破ることができるようになっている敷居／ケイ酸カルシウム板で作られた隣のベランダとの敷居　ベランダの手すりから頭を出してその敷居の向こう側を覗く　部屋の窓／明かり／カーテンで中は見えない

ベランダの状態を確認　敷居の前にクーラーの室外機／物干し竿が二本／それ以外は何もなし　四〇四号室は角部屋／反対側にケイ酸カルシウム板の敷居はない／コンクリートの壁／隠れる場所はない

考える　田辺がベランダに出てきたら　逃げも隠れもできない／もし見つかったら　住居侵入／逮捕か　四階じゃ飛び降りて逃げることもできない／飛び降りたらこの世からの逃亡になっちゃう。

顔を引っ込めて四〇三号室の窓に目を向ける　しのぶ／月明かりで薄っすらと見える表情　さっさと行ってきなさい！　って顔。

覚悟を決めるか　万が一見つかったら、田辺をぶん殴って玄関から逃げることにしよう　こっちに戻ったらしのぶを巻き込むこととなる／おれ一人で責任を背負い込む／男らしい考えに勇気が湧く。

しのぶへ／二本指を額にあてスツと振ってみせる／誰かに見られていないか外を確認　大丈夫そうだ／敷居を越えるべく手すりに乗り出す／こういうときはポインデットトウは不便だ　今度からはスニーカーにしよう／今度はないに越したことはないのだが。

上手く音を立てずに四〇四号室に侵入　室外機に足をかけて着地／カーテンの隙間を探す　隙間なし。

窓に耳を近づける　くつつけると皮脂と脂がつく／手袋をした

手だけを窓にあて指の隙間に耳を寄せ

音 いや／声

「何これ、すごいいよ」

なんだって!？ 女の声だ／田辺の部屋から女の声がする／七

海だろつか 田辺が帰宅する前から女はいたのか／高橋から女のことばは聞いていない 最初からいたのだろう／まったく驚きだらけの毎日だ。

音 振動音 聞き覚えあり／電動アンマ 地鳴りのような

轟音／音が鈍くなる／体に触れているのだろう 女の喘ぎ マ

ジか!

O o o h h h h h ! ! ! D a d d y O o o h h h h h h h !

!!

これからファックが展開されるのか／ファックが始まる前に電動アンマでぶつ飛ぶというのか おれは他人のファックにそば耳を立てる変態野郎になるのか ファッキン・ジーザス!

ジーンズの中でジョンがジャンボサイズになる ものすごい喘ぎ／いやらしい言葉を連発する田辺 絶頂に達する女／息を切らす女 何かが不自然／聞こえる音を画像に脳内変換する／おれの予想と想像／窓の向こうの尋常じゃない事実／噛み合わない 噛み合わない理由がわかった。

電動アンマを手にしたのは女だった／田辺が女を愛撫していたのではなかった つまり自慰／それを見ている田辺／あるいはそれを見ながら田辺も自慰 ファッキン・ジーザス!!

「何するの?」

女の声／服を脱ぐ音 田辺が脱いでいる／紙袋 ガサガサノ

袋の中から何かを取り出している。

「似合うと思うかい?」

「まさか、それを着るの?」

何を着るんだろうか コスプレか?

「わたしは匂いでも嗅いで楽しむのかと思っていただけ」

「身につけたほうが興奮するんだよ。どうだい？」

女のクスクス笑い 「なんか変。でもかわいいよ」

かわいい 女装か？／それとも 下着女装 しのぶの下着か？／田辺が盗んだのか？／七海が盗んで田辺に渡したのか？

この女は七海なのか？

「これでオナニーすると興奮するんだよ」

変態すぎる 田辺は変態で確定だ。

「セックスするんじゃないの？」

「しないよ。僕はオナニーが好きなんだ。相互オナニーをしよう」

クスクス笑いの女 「いいよ」

「なあ、僕のことを『お兄ちゃん』って呼んでくれないか」

驚愕／なんとという！／罰あたりな／神をも恐れぬ行為 『お兄

ちゃん』と呼ばせる田辺 近親相姦好きな下着女装フェチの変態

オナニー野郎。

近親相姦 おれとめぐみ／脳みそが揺れる／震度六 目の前

が墮ちる／だめだ！ 耐えるんだ！

「お兄ちゃん、気持ちよくして」

その気になって、いやらしくしゃべる女 相互オナニーが開始

された 喘ぐ女／喘ぐ田辺 ジャンプ芸を披露したがるジョン。

なんともんでもないものを聞いてしまっているおれ 田辺の

性癖は常識の域を超えていた 叫ぶように喘ぐ田辺／『お兄ちゃ

ん』を連発する女／しのぶにも聞こえたかもしれない田辺の喘ぎ／

あつという間のクライマックス 二分十三秒の男。

ゼイゼイと息を荒くする田辺 「今度はセーラー服を着てほし

いな。セーラー服のほうが好きなんだ。セーラー服のリボンで首を

締めるととっても気持ちいいんだ」

なんとという！ セーラー服フェチ／首締め もうおれにはつ

いて行けない世界。

「セーラー服は持ってないけど、リボンくらいなら用意できるよ。

今度持ってきてあげる」

『今度はセーラー服』 『セーラー服のほうが好き』 っことは、今はなんなのだろうか？ セーラーじゃない学制服？ / 高校生か / あるいは中学生 あるいはコスプレ？

「ねえ、これってマリファナじゃない？」

「なんだって！？」

「そうだよ」

「なんだって！？」

「いっぱいあるんだね、栽培しているの？」

「なんだって！？」

「そうだよ、吸ってみるかい？」

マリファナを栽培しているだって！？」

「吸えるの？」

「それは吸えないよ。乾燥させないとだめなんだ。ほら、これを吸ってごらん」

なんとという 下着女装フェチ / セーラー服フェチ / 近親相姦フェチ / 相互オナニーフェチ / 首吊りオナニーフェチ / そしてストーカー そしてマリファナ

やばい 脳みそが揺れそうだ 震度六が来る / マツ八六が来る ここでそれはめちゃくちやばい / 戻れ / 戻るんだ / しのぶのところに戻れ

もしかしたらおれは、かなり大きな音を出していたかもしれない だがとにかく戻らないとやばかった 不法侵入中にマツ八六はまずかった / 急いで戻るのが何より重要だった

四〇三号室のベランダに着地 しのぶが窓を静かに開けた

おれは中に入った / しのぶはおれの顔を見た / マツ八六寸前だって気がついた 窓を閉めておれを抱きしめた

「どうしたの、何があつたの？ 大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。まだぶっ飛んでない」

「あんた、こういう仕事には向いてない体質なんじゃないの？」

「最近おかしな事件が多すぎるんだ。おれじゃなくっても気がおか

しくなる」

しのぶはまだおれに抱きついていた　いつも通りの高飛車なし
やべりだったが、おれの背中を撫でる手はとてやさしかった。

「何があったの？　何か聞こえたの？」

思い出すと冥王星にぶっ飛びそうだ　もう少し／もう少しだけ

「ちよつと待て。落ち着かないと冥王星にぶっ飛んじまう」

おれの背中のおれを落ち着かせる　／目の前の赤毛の匂い
がおれを落ち着かせる／しのぶの体が／体臭が／存在が　おれを
落ち着かせる

落ち着いて思い出す　七海　あれは七海だったのか？／三〇

三号室　おれはしのぶから離れた。

玄関に向かう

「ちよつと、どこ行くのよ」

「三〇三号室だ」

玄関を開ける　ほんの少し／静かに　誰もいない／外に出る
／しのぶも出てくる　四〇四号室を見る／ドアの脇の格子付き窓
／明かりが見える　人影は見えない　部屋にいるのだろう。

足音を立てないようにゆっくり歩く　しのぶは八センチのピン

ヒールで意味のない背伸びをしながら歩いていった。階段を降りて三

階へ　三〇三号室の前　ドアの脇の格子付き窓／真っ暗　辺

りを見まわす／外の通り　電柱の影／高橋　ほかは　誰もい
ない／はず。

ドアに耳をあてる　何も聞こえない／ドアのポストを静かに押
す　中は郵便受けになっているわけだから部屋が見えるわけない
／ポストの扉を押したまま耳を近づける　何も聞こえない。

七海はいないのか　田辺のところか／それともただの外出か
わからない／わからなすぎる　何がなんだかさっぱりだぜまっ
たく。

「ねえ、あそこにいるのって高橋さんじゃない？」

外を見ていたしのぶ。

「ああそうだ。行こう、三人で飯でも食おう」

「何よ、もう終わり？ あの部屋で抱き合つのも悪くないと思っ
ていたのに」

ふてくされ顔のしのぶ 子供みたいに頬を膨らませている。

「おまえのその、異常な状況で興奮する性癖は、田辺に負けず劣ら
ずキワモノの域に達しているな」

午後六時　フリージアの入り口前／灰皿があるベンチ

昨夜は高橋と合流してラーメンを食って解散／しのぶの好奇心をたっぷり満たせるだけの／田辺のベランダでの話　ラーメン屋での話題はそれ一色。

女装／下着／相互オナニー／首締めオナニー／近親相姦　そしてマリファナ

しのぶは鶯色の瞳を卑猥に光らせおれの話聞いていた　乳首は間違いなく月に向かってツンと突っ立っていただろう／好色な股間は好戦的に高揚していただろう。

だがストーカーに関してわかったことは何もない／しのぶの下着の行方もわからない／奈津子からの依頼に関してはなんの問題もない　愛莉は大人しくしているようだ／七海の調査は順調に進んでいる　だが

しのぶのストーカー　それが奈津子の依頼に絡んできた。

おれはまだ七海が田辺を尾行していた事実を千鶴には話していない　奈津子はそれが知りたくておれに依頼したのだろうか／あるいはそれを知っていて新たな何かを手に入れようと依頼したのだろうか

わからない　想像ならいくらでもできる／とてつもないドラマを頭の中でいくくらでも描ける　だが／結局何もわからない／わからないという結論／たどり着くのはそこだけ。

フリージアの入り口　自動ドアが開く　七海が出てきた。

同僚らしき女が二人　この前と同じ女たち／仲がいいのか／仲がいい振りをしているのか／いつも同じ顔ぶれで帰る／女つてのは団体行動が好きだ　尾行開始

一人は真面目そうな顔　長い髪は染めたりしてなさそうなナチユラルな黒／束ねて後ろでまとめてある／細い目／太い眉／低い鼻

／細い唇　　いかにもアジア人という顔／紺のスーツ／ブルーのワイシャツ／色気というものを捨ててしまったかのような／真面目としか表現しようのない女。

もう一人はその真逆　　派手過ぎない茶色い髪／豊かに膨らみ毛先はカールされ背中を覆う長さ／細くソフトなラインの眉／大きな目／眉毛にくつつきそうなくらい長い眉毛／赤く塗られた頬／それほど高くはないがすっきりした鼻／艶やかなピンクの唇／白いシャツは胸元までボタンがはずされ、茶色のスラックスは腰の位置が低いデザインで、尻の穴の位置まではっきりわかるんじゃないかと思うほどにびったりしている。

決めた　　今日の尾行相手はこの派手な女で決定。

女三人はこの前と同じで、どこに寄るでもなくまっすぐ駅に向かって歩いていった。この前と同じで三人まとまって電車に乗り、新宿で降りた。そこでまた、この前と同じように二十分ほど立ち話をし、七海は中央線に向かった。真面目な女と派手な女は、そのままそこで立ち話を続け、しばらくすると派手な女が手を振っておれがいるほうへ歩き出した。

当然だが／おれのことなんかまったく見ていない　　おれはその女の前にヒョイっと現れる／女の進路を妨害する　　おれを見る派手な女／おれも派手な女の目を見る。

おれは言った　　「門脇七海の知り合いですよね？」

「そうですけど、何か？」　　ものすごく怪訝な顔をする派手な女。おれは勤めてやわらかい表情を演出した　　「いや、その……じつはおれ、七海の交際相手なんです」

わざと／大げさに／怯えるように／オドオドと話した　　おれにしちゃ珍しいタフガイじゃない戦法。女はキョトンとした顔に変わった　　「もしかして、わたしたちのことをつけていたの？」

ここでもし七海に本当に交際相手がいて、しかもこの女がそれを知っていたとしたら、すっかりさっぱりおしまいとなる。

「ああ、ええと……その、どうもすいません。つまり、その、ちょ

つと伺いたいことがありまして」

オドオドモード全快　女は怪訝な顔をまったくしなくなり、おれの三流ホストな格好からは想像もできないオドオドっぷりに、危険はないと感じてくれたようだ。表情も姿勢もリラックスしている。「あ、すいません……おれは、ええと、藤井といいます。その……なんていうか、つまり、七海に指輪を買ってあげようと思っているんですよ。つまりその……サプライズってやつです」

サプライズって言葉に反応して笑う派手な女。
「それでその、申し訳ないんですが……七海の指輪のサイズを知っていたら教えてほしいなと思ひまして……」

オドオドの極み　演じているおれ／オスカー級の迫真の演技だ
目を泳がせ／汗をかき／頭をポリポリかく

ニヤツとする派手な女　「それはもちろん、左の薬指ってことよね？」

「ええ、まあ……恥ずかしいな、なんか」

照れ笑いをするおれ　探偵なんかやめて俳優にでもなるうか。

「七海にこんな素敵な彼氏がいたなんて驚いたわ」

「いや……ああ、そうだ、立ち話もあれなんで、もし予定がないのでしたら、お茶でもお酒でも夕食でもご馳走しますよ」

派手な女はまた笑った　「もしかして、七海をダシに使った新
手のナンパじゃないわよね？」

「まさか！　そんなつもりじゃないんですけど、あの……どうもす
いません」

わざとシユンとしてみるおれ　派手な女がまた笑う

「そんなオドオドした人がナンパなんかするわけないわね。いいわ、
どこかお酒の美味しいお店に連れていってくれるなら、いろいろ教
えてあげるわよ」

ナイスおれ！　作戦成功／オスカーはいただき

おれは派手な女をエスコートするように東口を目指して歩いた。
歩いている間に派手な女の名前を聞いた　もちろんオドオドと

女の名前「早坂亜美　オドオドした間抜け男だから天然ボケを装って歳まで聞ける　二十五歳。

亜美はすっかり騙されていた／おれが気の弱い男で七海の彼氏だと信じていた／少なくともおれにはそう見えた／仮にそうじゃなかったとしても　亜美を誘い出すことには成功したわけだ／なんの問題もない。

おれたちは東口を出ておれがよく行くバーに入った　小さなバーだがカクテルは美味しい／ダーツができるからおれのダーツの腕前を披露することもできる　だが今日はオドオド男だからダーツはしない。

店長はおれが探偵だと知っている　チップをちょこつと渡せばいろいろと協力してくれる／一緒にいる女の酒を濃くしたり／話が聞きだせる雰囲気を作ってくれたり／おれの代わりに写真を撮ってくれたり／なんでも協力してくれるのだ。

おれと亜美はカウンターに座った。
「なんでも好きなものを飲んでください」

おれはオドオドを演じながらも、少し緊張をといたような態度に変えて話した。亜美がメニューに目を奪われている間に、店長に目配せで合図を送る　目配せで『了解』と返事をする店長　段取り終了／店長はおれを、たまに来る情けない客として扱っだろう。

「モスコ・ミニールを」　亜美が店長にオーダーする。
「ああ、おれはえつと、ジン・フィズをお願いします」

おれの演技にニヤつとする店長　おれは財布からかねを出してカウンターの上に置いた。

「タバコ、吸つてもいいですか？」
本当のおれだったら絶対に聞かないセリフ。

「どうぞ、わたしも吸うから遠慮しないでいいわ」
おれはタバコに火をつけた。ニヤリ顔の店長が酒をカウンターに置く。

「あの、それじゃ……えつと、お疲れ様です」

おれはグラスを手を取って亜美の前に出した。

面白い男　　って顔をして笑う亜美　　「お疲れ様」

それぞれ一口だけ酒を飲みグラスを置く。

「それで？　七海の指輪のサイズだっけ？　それも左の薬指の」

「ええ、そうなんです。本人に聞いたらサプライズにならないと思
って」

笑う亜美　　「たしか、十一号よ。本当は十号なんだけど、十号
って既製品だとあんまりないんだって言っていたのを覚えてるわ」
「ありがとうございます」

さて、ここからが勝負だ　　指輪のサイズなんかどうだっ
ていい
おれが知りたいのは、七海の血液型と母親の名前／どうやって
それを聞き出すか。

おれはジン・フィズをもう一口飲んでから話した　　「亜美さん
は血液型はなんですか？　おれはA B型なんです。七海とうまく付
き合っ
ていけるか不安で……」

亜美はタバコに火をつけて、煙を天井めがけて勢いよく吐き出
した。

「わたしはA型よ。七海はB型でしょ？　A BとBって相性悪いん
だっけ？」

ナイスおれ！　　名演技過ぎる　　顔の痣を真由美の化粧品で隠
してきたか
いがあった。

「さあ、どうだったかな？　たしか悪かったように記憶しているん
だけ
ど」

頭をポリポリと搔くおれ　　笑う亜美。

「そんなの気にすることないじゃない。それよりもその、気の弱そ
うな態度を直したほうがいいと思うわ」

そう言っ
てさらに笑う亜美　　笑いを止めるためにモスコ・ミユ
ールを飲む。

「ついでにもう一つ聞いてもいいですか？」

「なんでも聞いて」

「七海の両親の名前なんて、わかりますか？ いやその、そのうちお会いすることになると思うんだけど、前もっているいる知ってないと落ち着かない性質なんですよ」

また頭をポリポリと掻く　笑う亜美　おれのポリポリが気に入りのようだ。

「名前まではさすがにわからないけど、七海の親は離婚しているのよ。七海はお父さんについて行ったって言ってたわ」

ほう　てことは戸籍上は母親はいないってことになるのか

親権がどうなっているのか／父親について行ってて母親に親権があるとは思えんな。

「七海は兄弟はいるんですっけ？」

モスコ・ミュールを飲む亜美　「藤井さんって、七海のことなんにも知らないのね？」

笑う亜美　おれも笑ってみせる。

「たしか、お兄さんがいるって言うていたかな。どっちにしても、離婚後はしばらくお父さんと二人で暮らしていたって言うてたから、いたとしてもお母さんのほうについていったんでしょね」

なるほど　ジン・フィズをググツと飲む。

「でもよかった。亜美さんみたいないい人に声をかけてラッキーでした」

本当のおれじゃありえない笑顔を見せてやる　笑う亜美。

亜美は得意げになって言った　「わたしは友達や同僚のことならなんでも知っているのよ。これからは、藤井さんのこともチエツクさせてもらうからね」

得意満面の笑み　わかっている／おれの事務所の家主もおまえみたいな見た目でゴシップが大好きなんだ　とは言わなかった／言わなかったが　「ええ、でもじつは……おれは藤井じゃないんですよ」

え？　って驚き顔でおれを見る亜美。

態度を普段のおれに戻す／タフガイを気取るおれに　「それに

おれは七海の恋人でもない」

最初に見せた怪訝な顔に戻る亜美 「じゃあ誰なの？」

「おまえをナンパするのに成功した男だ」

そう言つて、さっきまでのオドオドした藤井役のおれじゃ絶対に
見せなかったニヤリ顔でウインクしてやった 怪訝な顔がキョト
ンとした顔になる そして笑い出す亜美。

「なんだ、騙されちゃったのね、わたし」

そう言つて、モスコ・ミユールを飲み干す亜美。

「帰るか？ それともこのまま騙され続けるか？」

亜美は店長を見て言った 「おかわり下さい」

そしておれを見て、大きな目でウインクした。

「騙されるのはごめんよ。でも帰るのもごめんだわ」

田辺の会社　池袋／コスモタツチ　オフィスビルの八階。
そのオフィスビルの一階ロビー／そこには二台のエレベーターがある／そこにはコンビニがある／そこには喫茶店がある　喫茶店の中から二台のエレベーターを見張るおれ。

田辺が出てくるのを待つ／時間は午後八時過ぎ　田辺登場
同僚が二人セット／尾行開始。

オフィスビルの多い区域から飲み屋街へ　サラリーマンのお決まりコースを歩く　どこにでもあるありふれた居酒屋に入る／おれも入る

田辺たちがどこに案内されたか確認　四人掛けのボックス席／おれに声をかけてきた店員　あとから連れが来ると言う／田辺たちが座った席の隣のボックス席に入る　簡易的な敷居／敷居の間　田辺はおれに向かって座っている／同僚二人はおれに背を向けている／おれは席を向かい側に変える／同僚に背を向けるようにして座る　生ビールを店員に注文する。

三十分が過ぎた　ビール三杯／タバコ五本／から揚げとサーモンの刺身がおれの体に吸い込まれた。

今のところたいした会話をしていない田辺たち　仕事の話ばかり。早くしてくれないと酔っ払って尾行も張り込みもできなくなりそうだと　店員を呼ぶ／四杯目の生ビールを頼む。

突然／唐突に　同僚の一人がとんでもないことを口にした
「なあ、田辺。おまえまだマリファナの栽培はしているのか？」
「バカ、声がでかいよ」　もう一人の同僚。

おれは敷居の隙間に目をやった　田辺がうるたえている。
小さい声で話す同僚　「栽培しているなら、また売ってくれよ。おれ、麻薬なんてはじめて体験したけど、癖になりそうだし」

小声だけど興奮気味に話している。

「いいけど、誰にも言っちゃだめだぞ」

「当たり前前だろ、言ったらおれだって逮捕されちまうんだからな。言うわけないだろ」

なんともまあ　マリファナでぶっ飛ぶサラリーマンたち　世の中どんどんおかしくなつていく／おれが言えた義理じゃないのだが

その店でたつぷり酒を飲んだ田辺たち　そしておれ　店を出て駅に向かう田辺たちの尾行を続けた。

駅の地下で三人は別れ、それぞれ違うホームに向かった　おれが追うのは？／マリファナを売ってくれと言った男　埼京線の下りホーム。

もう十時になるというのに混んでいる　到着した電車に乗り込む男　おれも乗る　グレーのスーツ／青と銀のボーダー柄のネクタイ／短髪を七三わけにした髪／鼻から離れるほど太くなる眉／垂れたでかい目／みたらし団子のような脂の浮いた鼻／酔っ払って締まりのなくなった口　広い額は汗で汚れている／背の高いデブ。男は赤羽で降り、駅のコンビニで缶ビールを買い、その場で一気に飲み干してから、京浜東北線の下り電車に乗り込んだ　おれも乗る。

そこから十五分　南浦和駅で降りる男　おれも降りる／埼玉県まで来てしまうとは思ひもなかった。

駅を出て東口に出る男　そこから千鳥足で十分ほど歩き公園に立ち寄る　団地だらけの区域／広い公園／誰もいない／誰にも見えない／真つ暗な茂み／立ち小便をする男　おれは忍び足で近寄った／小便が終わったのを確認する／まだイチモツをしまっていないのを確認する／そのイチモツが皮をかぶっているのを確認する

背中を掴んで思いつきり引つ張る　イチモツを握ったまま後ろに仰け反る男。

ものすごいびっくりした男の顔／おれを見る　皮をかぶったイチモツ／ブラブラしている／小便が滴っている／声も出ない。

おれは言った 「声を出したらマリファナの件をばらすぞ」

超超タフガイモードのおれ 地べたにへたり込んでイチモツをしまいこもうとする男／襟をグイツと引きあげる／首が締まる／イチモツをしまおうとしている手を蹴っ飛ばす 「動くな」

男はイチモツを手で隠して言った 「な、なんなんですか」

おれは男の襟を掴んだまましゃがみこみ、男の顔の前に自分の顔を近づけた／臭い 酒と汗と小便の匂い。

「おまえがマリファナを吸っているのは知っている」

ビビる男 汚い顔からさらに汗が噴き出る／酒臭い息／汗臭い体

「マリファナは田辺から買ったんだろ？」

何も言わない男 ジーンズからプラスナツクル／指にはめる／男に見せる

「マリファナは田辺から買ったんだろ？」

何も言わない男 腹の贅肉目掛けてプラスナツクルをぶち込む 踏んづけられた猫みたいな声を出す男／イチモツを握っていた手で腹を押さえる／情けないイチモツが丸出しになる もう一度プラスナツクルを男に見せる

「マリファナは田辺から買ったんだろ？」

恐怖に歪む顔 目が泳ぐ 「許してください……」

贅肉を切り裂くプラスナツクル 腹を抱えて体を丸める男／襟を引っ張り体を起こさせる。

「マリファナは田辺から買ったんだろ？」

恐怖／痛み／汗／歪んだグチャグチャの顔 「は、はい、そうです……」

「おまえはマリファナを吸って、また売ってくれと頼んだ。そうだな？」

「そ、そうです……もう許してください」
泣きそうな顔の男。

「田辺について答える。田辺の交際相手は？」

「もう許してください、出来心だったんです」

だらしなく垂れ下がって小さくなっているイチモツを握り締める
力一杯に。

「田辺の交際相手は？」

「し、知りません。もう許して……」

金玉を握る 力一杯にノ踏んづけられた豚みたいな声を出す男。

「田辺の交際相手は？」

「く、詳しくは知りません。本当です！ な、何人かいるとは、い、
言っていたけど……」

「たとえは？」

「わわ、わかりません」

ブラスナツクルでイチモツのすぐ上をぶつ叩く 体をよじって
痛がる男。

「たとえは？」

「た、たとえは……その……」

イチモツを握りねじりあげる 踏んづけられたウシガエルみた
いな声を出す男。

「え、え、え、援助交際とかって……い、い、い、いえ、家出、け、
掲示板で見つけるって……」

「ほかに？」

「ほ、ほかに……昔から、つ、付き合っている女がいるって……」

「妹とファックしてるとは言っただけか？」

「え？……」

腹にブラスナツクル もんどり打つ男ノ襟を離すノ腕を取り背
中側でねじり上げる 体を起こさざるをえない男。

「妹とオナニーの見せ合いをするって言っただけか？」

「し、知りません……」

顎にブラスナツクルをあてて顔をこっちに向かせる。

「妹とファックだ」

「あ、あんたバカじゃないのか！ それ、そ、そんなこと……アダ

ルトビデオじゃあるまいし」

顔面にプラスナツクル 顎が切れる／血が滴る／滴る血がワイシャツを赤く染める／顔面蒼白の男。

「妹のセーラー服のリボンで首を絞めてオナニーするとは言ってなかったか？」

「し、知りません！ そんなのまるで変態じゃないか！」
腕をさらに絞めあげる。

「妹の下着を身につけてオナニーするとは言ってなかったか？」

「聞いてません……そんな話はしたこともないです！ お願いだ、もう許して……もう何も知りません」 泣き出す男。

「本当に知らないんだな？」

涙／鼻水／血 ワイシャツが汚れていく。

「本当です……本当にそんなことは知りません」

プラスナツクルを腹に三発 転がる男／自分の小便に顔を埋める。おれは男の尻のポケットから財布を取り出した 免許証を抜き出す／名前「原田哲也／男の体を起こす。

「おまえがマリファナをやっていた証拠は持っている。今日ここでおまえは小便をしていたらすつ転んだ。そうだな？」

何も言わずに首を縦に振る原田 涙が落ちる。

「おれはここにはいなかった。そうだな？」

首をブンブンと縦に振る原田 汗が飛び散る。

おれは原田の手を離して立ちあがった 原田の腹に蹴りを入れる 腹を抱えてゲロを吐く原田／皮をかぶったイチモツ丸出し

それを写真に撮る／もう一度座る ゲロと小便にまみれた臭い顔に近づく。

「最近インターネットつてのがあって、いろんな画像が簡単に世界配信されたりする時代なんだ。たとえば、汚くって包茎で小さいナニを丸出しにしてゲロを吐く小便まみれのブタ野郎の画像とかがだ」

「絶対しゃべりません。もう許してください！」

涙がボロボロと溢れだす原田ノ鼻水とゲロが合体している原田
おれはその場を立ち去った。

駅に着く　タフガイは疲れるノどこかでくつろぎたい　喫茶
店か何かノなし　牛丼屋ノ入る　瓶ビールで疲れを潤す。

小便の匂いがするノゲロの匂いがするノ汗の匂いがする　瓶ビ
ールでそれを忘れようとする。

タバコが吸えない苦痛ノ瓶ビール二本を三十分かけて飲み干す。

尻の携帯電話が鳴った　しのぶから。

携帯電話ノしのぶの小さな声

「どうした？」

無言 震える息遣いだけが聞こえる ただ事じゃない予感ノ店を出る。

「おい、どうした」

声にならない声 空気の振動ノ唇がパクパクする音 駅に向かいながらまわりを気にせず大声を出した 「おい、しのぶ！ まわりの酔っ払いどもが振り返るノタクシー待ちのヤツらが振り返るノ交番のおまわりが怪訝な顔をしている。

「し……が……」 小さい声ノしのぶらしからぬまったく力のない声

「なんだって？」

「死体が……」

「なんだって!？」 おれは通話口を手で押さえた。

「死体？ 死体がどうした？」

「田辺が……」

「田辺がどうした？」

「田辺が死んでるのよ」

「なんだって!？」 田辺ならさっきまでおれが張り込みしていたじゃないか。

「おまえどこにいるんだ？」

「田辺の部屋よ……」

「なんだって!？」 なんでそんなところにしのぶがいるんだ。

「早く来てよ」 ぜんぜん声に魂がないノこれはまずい。

「いいか、よく聞け。おい、しのぶ！」

「うん……」

「そこを動くな。いや違う、隣だ、四〇三号室にいる。誰にも見ら

れないように注意して移動するんだ。それから、田辺の部屋のものにはなんにも触るな。すぐに行く。わかったな？」

「すぐつて、どれくらいよ」

ガツテム！！　　よりによつて、ここは埼玉じゃないか！！

「わからん、一時間はかからないはずだ」

「遅いわよ……もつと早く来てよ」

「とにかく、絶対になんにも触るな！　わかったな！」

「あんたが慌てると、安心できないじゃないの」

おれは深呼吸して目を閉じた　　「大丈夫だハニー。なんてことない、おれがついてる」

おれの得意な格好悪い格好つけ／しのぶお気に入りに　　クスッと笑う声が聞こえた。

「ちよつとだけ元気になったわ」

電話を切る　　タクシー乗り場　　人の列／十人くらい／この忙しいときになんてこつた　　電車にするか／電車だと一時間かかる車ならばつ飛ばせばもつと速いはず／タクシーは何台も待機している　　並ぼう。

イライラしながら二分ほど／おれの順番　　タクシーに乗り込む

「高円寺まで」　　イライラしながら言うおれ。

動き出すタクシー。

「どのくらいかかる？」

「そうですねえ、今の時間なら五十分くらいですかねえ」

おれは財布から一万円札を三枚出した　　運転手に見せる。

「料金とは別にこれをやる。とにかくできる限りの速さで走ってくれ」

運転手はびっくりしている　　「お客さん、そんなこと言われても困りますよ」

さらに二枚追加する　　「頼む、急いでくれ」

運転手は一万円札を五枚握り締め、猛スピードで走り出した。

おれは後部座席でシートベルトを締めシートにもたれた　　いつ
たい何がどうなっているんだ？／田辺が死んでいる？／なぜだ？
落ち着け／落ち着いて頭を整理しろ。

田辺　マリファナの売買／変態性欲／しのぶのストーカー／援
助交際　わからん／何がなんだかさっぱりわからん。

だいたいにして、なんで死んでるのがまだわからない／自殺／
事故／他殺

自殺だとしたら？　動機／わからない

他殺だとしたら？　犯人は？／マリファナがらみ？／援助交際
がらみ？　わからない。

まさか　しのぶが殺したなんてことは　そんなことは考える
な／あり得ない／動機がない　じゃあなぜしのぶは田辺の部屋に
？／わからない　とにかく高円寺だ。

行ってみなきゃなんにもわからない

奇跡としか言いようがない速さで高円寺に到着　あこのことを
考えて、アーバンビルドとは関係がなさそうな、それでいて近い場
所で降りた／もっともこんなことをしたって、もし万が一田辺の死
で警察が動き、おれやしのぶに疑いがかかれば、すぐにばれるんだ
が　なんでもいい、しのぶに疑いがかからないように最善を尽く
せ。

おれは走ってアーバンビルドに向かった　財布は空っぽだった
が、だからと言って体が軽くなったと言えるほどではなかったし、
全身の痣のせいで速くは走れなかった。

アーバンビルド／エレベーター／四階　静かに歩く　四〇三
号室。

玄関のドアノブを回す　鍵は開いている／少しだけ開けて中に
入る　真っ暗／人の気配　手探りで照明のスイッチを探す／つ
ける　狭いキッチンの隅っこにしのぶが膝を抱えて座っていた。

「遅いぞバカ」

「すまん、埼玉にいたからな」

立ちあがるしのぶ　おれに抱きつく　おれはしのぶを抱きしめて赤毛を撫でた／しばらくそのまま　十秒だか十時間だかもわからぬ時間の経過／しのぶがゆっくり顔を上げた。

「何があっただんだ？」

「田辺が死んでいるのよ」

「なぜだ」

「知らないわよそんなの」

いつも通りとまではいかないが、さっきよりはるかに元気なしのぶ。

「とにかく、隣に行ってくる。おまえはここで待っている」

「嫌よ、あたしも行くわ」

やれやれだ　元気になったらなつたでやっかいな女。

四〇三号室の照明を消して廊下に出る　静かに／そつと　外

部廊下の様子を伺う／誰もいない／四〇四号室の前　腰のシザーバッグ／薄い皮の手袋を出す／手にはめる　ドアノブに触れる／ゆっくり／静かに／ドアを開ける　中に入る。

二人で中に入りドアを静かに閉める　照明のスイッチ／オン

「あれよ」

しのぶが指を指した方向　部屋／キッチンと部屋を区切る袖壁の脇に足が見える　靴を脱ぐ／ゆっくり進む／しのぶがおれにしがみついたままついてくる／部屋の照明をつける　田辺がろくでもない形相で死んでいる

そこに死体があるとわかっていのに／見た瞬間／体が後ろに下がった　思わず声が出そうになった。

あまりにも恐ろしい顔で死んでいる田辺　もがき苦しんだその顔はどんなホラー映画の恐怖シーンよりもはるかに恐ろしい形相をしていた／夢に出るとかそんな生ぬるいレベルの話じゃない／それはまさに地獄絵図

死因はすぐにわかった　首にロープが食い込んでいる／窒息死だ　そのロープは田辺がもたれかかっている袖壁の上／袖壁に取

り付けられたハンガーラックに結ばれていた　座った姿勢での首吊り

だが、それは単なる首吊りではなかった

首に無数の引っかき傷　ロープをなんとかはずそうと自分の手で掻きむしったのだろう／手も血だらけになっている／それほどきつくロープは首に食い込んでいたのだ。

田辺は下着姿だった　それも女性の下着／青いブラジャー／青いショーツ／ショーツからはイチモツが出ている　硬いのか柔らかいのかはわからない／首に食い込んだロープの下には赤いリボン　セーラー服の赤いリボン　リボンを首に巻いた上からロープが巻かれている。

まだある　田辺の足元に飛び散った精液　足をばたつかせたのか擦れてあちこちになすりつけられているが、間違いなく精液だ。首吊りオナニーの話をしていた田辺　自分で首を吊ってオナニーをして、ロープがほどけなくなって死んだってことか？　だとすれば事故死になる。

つまりこういうことか　下着を身につける／首にセーラー服のリボンを巻く／ロープで死なない程度に首を吊る　酸素の供給量を制限した状態での変態首吊りオナニー　絶頂に達し射精／あまりの快感に体が脈打つ／首のロープが締まる／ほどけない／苦しい／慌ててロープをほどこうとする／首に食い込んだロープには小指一本入り込む隙間もない　死亡

下着愛好家でセーラー服フェチで近親相姦好きな変態首吊りオナニー野郎はイチモツをゴシゴシしごいて射精して昇天／そしてそのまま命も昇天

死亡

脳みそが揺れた　下着／オナニー／赤いリボン／お兄ちゃん

震度六　目の前が揺れて墮ちる　マツ八六が来る。

だが踏みとどまる／おれがぶっ飛んだらしのぶをここから救えない　おれには今しのぶがいる／マツ八六で冥王星に行ってる場合

じゃない　守れ！／しのぶを守るんだ！

おれはしのぶを見た　死体に目を向けずにいるしのぶ　この状況を突破できるのは今ここにはおれしかない。

しのぶの腕／触れる　やわらかい／温かい／細かい震え　いっつもおれの震えを抑えてくれる腕が震えている　おれがしのぶの震えを消し去る番だ。

おれは根性をこんこんと沸きあがらせた　タフになれ／見掛け倒しの探偵なんかじゃないところを見せる。

「おまえ、なんでこの部屋にいたんだ？」

「四〇三号室から声が聞こえないかなって思ったのよ。ほら、昨日あんたがでかい声で喘いでいたって言ったから、もしかしたら壁に耳をあてていれば何か聞こえるかもってね。田辺が犯人だって証拠を掴んで、とつちめようと思ったのよ。それで来てみたら、この玄関が中途半端に開いていたのよ。それで中を覗いたら、真っ暗で……」

「人の気配がしないから侵入したってことか」

「そうよ、まさかこんなことになってるとは思いもしないじゃないの」

おれの腕にしがみついたまま絶対に部屋のほうに目を向けないしのぶ。

「それは何時だ？」

「あんたに電話したときよ」

尻のポケットから携帯電話を取り出す　しのぶからの着信時間／十二時二分　今は十二時四十八分。

「これはおまえの下着か？」　田辺が身につけている下着を指差す。

「そうよ。盗まれたやつだわ」

「これがおまえのだって証拠は？」

「小学生じゃないんだから、下着に名前なんか書いてないわよ。匂いでも嗅いでみれば？　あんたならあたしの匂いがわかるんじゃないな

いの？」

強気で冗談を言うしのぶ　だがまだ震えている／おれはその冗談には答えなかった　あえてスルー／笑っている場合じゃない。

田辺の部屋にしのぶの下着　これから足がつくとは思えない
ついたとしてしのぶは被害者だ／ほうっておこう。

おれはもう一度部屋の中をゆっくりと見まわした　入ってすぐに死体／右にベッド／左にテレビ／パソコン／本棚／半透明の衣装ケース／床はフローリング

田辺は座った状態　ロープを縛ったハンガーラックは田辺が暴れたせいだろう、片側が壁から取れかかっている。

ベッド　木製の家具調／何も無い／寝具は乱れていない　誰かが寝ていた形跡は見られない／枕がある側の上／棚になってナイトランプがついているところに携帯電話の充電器　携帯電話はなし。

ベッドの脇の壁に写真が何枚か画鋏で留められている　女の写真／しのぶの写真がある　おれはしのぶの手を離しそこに近づいた／田辺の精液を踏まないように。

写真はぜんぶで六枚　しのぶの写真が二枚／知らない女のが二枚／残りの二枚も知らない女

しのぶの写真は南阿佐ヶ谷のマンションから出てくるところを盗撮したもの　残り二人の女の四枚の写真もおれたち探偵が撮るような隠し撮り写真。

予測　ストーカーしていたのはしのぶだけじゃない／ここに貼られた三人の女をストーカーしていたってことか

その六枚の写真は輪になって貼られている　そしてその輪の中央にも写真が貼ってあったであろう画鋏の穴／それにその中央はわずかだが写真サイズに壁の色が新しい　つまり、その写真は壁が変色するよりも前に貼られ、まわりの六枚は変色後、つまり最近貼られたと言うことだ　だが、中央の写真はない／どんな写真が貼ってあったのだろうか

このしのぶの写真を剥がしてしまうべきか　悩む／とりあえず
ほかに何かないか見てみよう。

パソコン　電源はオフ／起動させる　パスワードがないと開
けない　考える。

sailor　だめ。

sailorhuku　だめ。

marijuana　だめ。

marijuana　だめ。

sister　だめ。

kinsinsoukan　だめ。

お手上げ　電源オフ。

テレビの脇の壁　電源コンセント　差し込み口が二つ／一つ
にパソコンのコンセント　もう一つは何も刺さっていない／その
下に差し込まれていないテレビのコンセント／差し込まれていない
DVDプレイヤーのコンセント　あいてる差し込み口は一つなの
に、コンセントは二つ　なぜ？

テレビもDVDプレイヤーもいちいち抜いたり差ししたりするもの
じゃない　通常は常に差し込まれたまま　どういうことだ？／
わからない　あるはずのものがない／あるはずのもの　三又プ
ラグ。

さらに部屋の中を見てまわる　ベランダも見る／キッチンも見
る／トイレも／バスルームも　ない！　あるはずのものがない！
マリファナがない！！

田辺はマリファナを栽培していたはずだ／そう話しているのをお
れはベランダで聞いた／脅しをかけた同僚と田辺が話しているのも
聞いた／プリンターか何かがあるはずだ／乾燥させて袋か何かに詰
めたものがあるはずだ　なのに何もなし　おかしい。

バスルームに行く　洗面所に乾燥機と兼用の洗濯機／開ける
顔を突っ込む　マリファナを乾燥させるのには乾燥機を使うは
ずだ　匂いは？／洗剤の匂い　カスが落ちてないか？／わから

ない

「なにやってんのよ？」

不思議な顔をしているしのぶ　そりゃそうだ／洗濯機に頭を突っ込んで鼻をクンクンさせているんだからな　頭を出して蓋を閉める。

「おまえ、ここにきたとき、マリファナを見なかったか？」

マリファナ！？　って顔をするしのぶ／驚き顔。

「今ここにないなら、見てないってことね。それとも、あたしが隠したとも思っているの？」

しのぶがそんなことをするはずがない　もし見ていたら、隠さずおれに見せて、持って帰ろうとか言うに決まっている。

「とにかく、指紋を拭いてここを出よう」

「あたしの下着と写真はどうするのよ？」

持って帰ってもおそらく写真はパソコンの中にもあるだろう

下手に現場をいじらないほうがいい／このままにしよう。

「何もいじらないほうがいい。おれたちがここに来た証拠だけを消す。それであとは知らん振りしていよう」

おれはシザーバグからハンカチを出して、しのぶが触った場所を聞き、そのすべてを念入りに拭いた　キッチンと部屋をわける袖壁／部屋の照明のスイッチ／キッチンの照明のスイッチ／そのほか気になった場所、しのぶの行動した場所で、無意識に触りそうな場所はすべて拭いて、照明を消し、最後に玄関のドアノブを拭いて部屋を出た。

外部廊下でまわりを気にしながら、静かに歩き、階段を使って下に降りた。マンションを出て、ビリヤード場があるのを思い出す　もし人がいたら丸見えじゃないか。

工事現場の影に隠れながらビリヤード場を見ると、窓際には誰もいない。おれたちは足早にビリヤード場のビルのほうまで走り、ビルの壁伝いに歩いた。真下にいれば窓から顔を出さない限り見られることはない。ビリヤード場を過ぎいつもの張り込み場所の電柱

のところまで来て、アーバンビルドに目を向けた。明かりがついている部屋はなかった。ほかの建物にも明かりがついてる窓は見当たらなかった。そのままその通り抜け、あとはもう何食わぬ顔で普通に歩いて駅に向かった。

「ねえ、これからどうするの？」

「帰るんだ。おまえかねはあるか？ おれはここに来るのに六万以上使ってもうタバコも買えない。タクシー代を出してくれ」

「六万？ どちらからどうやってくればそんなにおかねを使うことになるのよ」

おれはタバコに火をつけた。そして立ち止まった。

「タクシーに乗った。運転手に猛スピードを出させるために五万くれてやって、料金が一万以上だった。だから六万以上だ。おかげで五十分以上かかるところを四十分にする事ができた」

しのぶはおれの腕にしがみついた。

「あんたにしちゃよくやったほうね」

「当然だ、おれはおまえのためならなんでもできるんだ」

フツツと笑うしのぶ。

「でも、あたしがどうするのか聞いたのは、田辺のことよ」

おれは辺りを見まわして酒が買えるコンビニはないか探した

なかった。近くに自動販売機を見つけたからそこに向かって歩き出した。しのぶがしがみついたままくっついてきた。

「そのうち誰かがあれを発見するだろう。明日かもしれないし、ずっと先かもしれない。明日は土曜だ、田辺が無断欠勤をするのは月曜からになる。会社が連絡を取るために行動に出るのは来週末だろう。保証人に連絡が行ってあの部屋のドアが開けられるのはそれよりも先だろうな」

おれはジーンズのポケットから小銭を取り出した。缶コーヒーを買うかねは本当になかった。しのぶに取り出した五十三円を見せる。財布を出すしのぶ。ブラックの缶コーヒーを買ってもらおうおれ。

「それまでは誰にも発見されないってこと？」

おれは取り出し口に落つこちた缶コーヒーを手に取った　プル
トップを弾く／一口飲む／しのぶが缶を奪い取る　一口飲む。

おれの予想　田辺の女が発見する／女は合鍵を持っている／少
なくともおれがベランダに潜入したときにいた女は持っているはず
だ　だから田辺がいなくてもあそこに現れる／いや　もう現れ
てあの現場を見たかもしれない／あるいは田辺がもがき苦しむ姿を
目撃していたのかもしれない

セーラー服のリボン　あの女は今度来るときにリボンを持って
くると言っていた／女は約束通りリボンを持ってきたのだ／それは
今日かもしれない／昨日かもしれない　わからないが　持って
きたのは間違いないだろう。

あのとときのあの女　消えたマリファナと関係があるのか／事故
じやなく事故に見せかけた殺人なのか

「ちよつと、なんとか言いなさいよ」

缶コーヒーをしのぶの手から取る　ジーザス！　空っぽ。

「たぶん、誰かがあの部屋を尋ねて、おまえみたいに鍵があいてい
るからってドアを開けるようなヤツがいない限りは、連絡が取れな
いことを心配した会社の人間か、親兄弟が、あそこに出向くまでは
発見されないだろうな」

「女は？　田辺には女がいるんでしょ？」

「女は数人いたらしい。恋人と言える存在かは知らないがな。おそ
らく恋人って関係じゃないだろう。そうなると、田辺と連絡が取れ
ない状況であそこに出向くのは、合鍵を持っている女だけだ。何人
も女がいて、その全員に合鍵を渡す男なんていやしない。持って
いるのは一人だろう」

おれの不満な顔を見て缶コーヒーをもう一つ買ったしのぶ　取
り出し口に手を伸ばすおれ。

「じゃあ、その合鍵を持った女が現れれば、すぐに発見されるかも
しれないってことね」

ブルトップを弾く／飲む　「女はたぶん現れない。現れても通報なんかしないだろう」

怪訝な顔のしのぶ　「なんでよ？」

「おれの勘では、田辺が死んだとき女はその場にいたんだ」

驚き顔のしのぶ　タバコを啜えようとして開いていた口がさらに大きくあぐりと開く。

「あんたこの前、高橋さんとラーメン食べたときに、田辺は女装して首吊りオナニーするのが趣味の変態野郎だって言っていたじゃないの！　あれは事故なんじゃないの？」

「忘れていることが一つある。田辺は女装して首を吊る変態オナニー野郎なだけじゃない。女装して首を吊って、さらに相互オナニーをする変態オナニー野郎だ」

「じゃあ、田辺が死んだときに、女と一緒にオナニーしていたってこと？」

「じゅうぶん考えられる」

「それって、事故じゃないってこと？」

「それはわからん。事故だったが通報しなかったってこともかもしれない。なにしろ田辺は自分で首を吊ることをほめかしていたんだ。手足を縛られていたわけでもない。女が男の首を吊るのは、とんでもなく大変なことだからな。たぶん自分で吊ったんだろう」

「ごめん、ちょっと何がなんだかわからなくなってきたわ」

難しい顔をして考え込むしのぶ　名探偵がやりそうな仕草をしているが、なんの知恵も出てきてなさそうだ。

電話が鳴る　誰だこんな時間に　愛莉から／出る。

「どうしたこんな時間に？」

「終電がなくなつて帰れないの」

またか　いい子にしているって約束はどうなったんだ。

「まったく」　溜め息　「どこにいるんだ？」

「高円寺……」

高円寺??　なぜ?

「南口にいろ、五分で行く」

「うん」

電話を切る　　なんで愛莉が高円寺にいるんだ？

「誰よ？」

眉間に皺を寄せて怪訝な顔をするしのぶ

「保護観察を押し付けられた依頼人の子供だ。高円寺にいるらしい、行くぞ」

歩き出すおれ　　おれの前に立ちはだかるしのぶ／ニヤリ顔になる　　「女でしょ？」

やれやれだぜまったく　　何も言わずに歩き出すおれ／ピンヒールをカツカツ鳴らしてついてくるしのぶ。

「凶星なのね、あたしはお邪魔かしら？」

ニヤリ顔から洩れる嫌味な笑い　　やれやれすぎる　　おれはしのぶの腰に腕をまわした。

「おれの女らしく堂々としている、バカたれが」

「バカたれだけ余計よ。あたしはいつでも堂々としてるわ」

高円寺駅南口　　愛莉を発見　　黒のＴシャツ／ギンガムチエツクのミニスカート／ライダーズブーツ／体のあちこちにくつつけられた装飾品はかね持ちの娘らしく豪勢　　金ぴかのネックレス／金ぴかのイヤリング／金ぴかの腕時計　　とてもじゃないが子供が身につけるような代物じゃない。そんな豪華な装飾品の数々のせいか実際の歳よりも大人に見える。肩からさげたでかいバッグだけが、愛莉のファッションに似つかわしくなく地味／紺色で無地の薄っぺらいトートバッグ。

おれに気がついた愛莉　　同時にしのぶにも気がつき、笑顔になりかけた表情が曇る。

愛莉に聞こえない小さな声でしのぶが言った　　「あの子あなたに気があるんじゃないの？」

やれやれだぜ　　おれはおれの腕にくっついたしのぶを引き連れたまま、愛莉の前まで行き立ち止まった。

「なんだって、こんな時間にこんなところにいるんだおまえは。約束はどうなった？」

うつむき気味な愛莉。

「友達の家にいたんだけど、急に帰ることになっちゃって……」

「てことは今夜はちゃんと家に帰るのか？」

うつむいたまま 「家には帰りたくない……」

しのぶの手に力が入った 何を言ってるのこの子？ あたしが
見えてないの！？ って顔をしている。

「だったら友達のところ朝までいればよかつたろう」

無言 うつむいたまま 様子がいまいまいちおかしい。しのぶを
もう一度見るおれ／おれを見るしのぶ おれの言いたいことがわ
かった顔のしのぶ あんたバカじゃないの！ って顔をしてお
れの腕から離れる／やれやれだ／本当にやれやれだ

「事務所に行くぞ」

おれは愛莉の肩をポンツと叩いてタクシープールに向かって歩き
出した 不機嫌なしのぶの手を引いて

午前七時　　ぜんぜん寝れなかった。

昨夜ノタクシーで事務所に戻ったノ寢室に愛莉をぶち込んでからしのぶとカウンターで一杯飲んだ。

「なんであの子があんたのベッドで、あたしがソファアーなのよ!」
絶対に愛莉に聞こえているだろう大声でわめくしのぶ　　おれは
小声でしのぶをなだめた。

「あの娘は、おれに毎日四十万も与えてくれる仕事のネタなんだ。
それにおまえはどうせ、ベッドでもソファアーでもおれの上に乗っか
って寝るんじゃないか」

やれやれね　　って顔のしのぶ。

「あんたの情けない喘ぎ声をあの子に聞かせてやるから、覚悟しな
さい」

そう言ってニヤリ顔に変化。

そんなわけで昨夜はぜんぜん寝れなかった

しのぶはソファアーの上　　小さい体をさらに小さく丸めて寝てい
るノ愛莉がいるせいでしのぶにしちゃ珍しく服を着て寝ているノサ
テンのピンク色をしたショーツが見えている　　その向かいのソフ
アアに座ってタバコに火をつけるおれ。愛莉はもう起きていて、シ
ヤワーを浴びている。

カウンターに移動して、電話をかける　　千鶴へ。

「おはようございます」

「愛莉がうちにいる」

「学校に間に合う時間までに向かえに行きます」

「そうしてくれ」

「門脇七海の件は進展していますか?」

冷蔵庫に向かう　　水のペットボトルを取り出す。

「普段の行動を探るために張り込みをしているんだが、仕事が終わ

るとまっすぐ家に帰ってこれといった動きはない。明日と明後日、土日でどう動くか張り込んでみようと思う」

田辺を尾行していた件は内緒　亜美から聞き出した情報も伏せる／依頼を引き伸ばしてかねを多くもらう作戦。

「わかりました。その通り報告しておきます。ではのちほど」

電話を切る　水を飲む／カウンターに座る　しのぶが起きる／ボザボザの赤毛を撫でつけながらこっちにくる。

入り口のスチールドアをノックする音　しのぶがドアまで行って鍵を開けた／開けられたドアの外　真由美。

「あら、しのぶじゃない。おはよう」　少し驚いた顔をする真由美。

「おはよう、真由美さん」

しのぶの崩れた化粧を見てニヤリとする真由美　そんなことはまったく気にせずカウンターの上的水を取ってソファアに戻るしのぶ。

おれは真由美に言った　「こんな朝っぱらからどうした？」

真由美はコーヒーとトーストとハムエッグを乗せたトレイを持っていた。

「愛莉ちゃんからメールをもらったのよ。だから朝食を持ってやってきたってわけ。まさか三人一緒に仲良く寝ていたなんてことはないのよね？」

真由美のニヤニヤ光線がおれに突き刺さる　なんとというゴシツプ的妄想。

愛莉が住居スペースから出てくる　この前と同じように濡れた髪をタオルに包んでいる。

「おはようございます！」　元気な愛莉。

「おはよう」　ニヤニヤ顔の真由美。

何も言わないおれ　あからさまに不機嫌な顔のしのぶ／それを見てニヤニヤが増す真由美　ソファアテーブルにトレイを置く／ソファアの下に落ちている毛布を拾う／折り畳んで寝室に運ぶ

我が家の家政婦／真由美

愛莉はしのぶの向かい側に座った 「しのぶさん、おはようございませう」

しのぶに対してはまだ緊張気味の愛莉 そりゃそうだろうしのぶは山猫のような目をして愛莉を睨んでいるのだから。

そんなしのぶが、おれに向かつて手を差し出した おれはキッチンシンクの脇にあるマグカップを持ってしのぶのところに行つた／マグカップを差し出された手に渡す コーヒーを注ぐしのぶ／飲む。

真由美が事務所に戻つてきて愛莉の隣に座る おれはマグカップをもう一つ取つて、真由美にコーヒーを注いでもらい、それを持つて机の前のアームチェアに座つた なんともいえない気まずい空気が流れている／冗談でも言わなきゃ解消されそうにない気もだが、つまらない冗談を言つてしまつとさらに気まずくなるであらう空気。

「愛莉、千鶴が迎えに来る。おまえは千鶴と学校に行け」

おれは冗談を言うのはやめにして、仕事の話をした。

「え、立川さんがくるの？ 友達をここに呼んじやつたよ」

は？ 「なんで友達までここに呼ぶんだおまえは。ここはおま

えの遊び場じゃないんだぞ」

「違つよ、学校に一緒に行こうと思つて呼んだんだよ」

はあ 溜め息 「まあいい、友達と行くかどうかは千鶴に自分で交渉するんだな」

しのぶが愛莉に作つてきたであろうハムエッグを食べている怖い顔をしたままで。

「愛莉ちゃん、学校に行くのに制服は？」 みんなのコーヒーを

注いでから、しのぶが昨夜飲み散らかした缶ビールの空き缶を持ってキッチンに向かいながら話す真由美。

「駅のロッカーに閉まつてあるの」

駅のロッカーがクローゼット／駅のトイレが更衣室つてことか

スチールドアがノックされる音　真由美がドアに向かう　開ける。

結衣だ　なんという　しのぶに似た笑みを浮かべる少女。

「あの……」

真由美を見てなんて言えばいいのか考えている結衣　制服姿の結衣を見て愛莉が呼んだ友達だとわかった真由美。

「愛莉ちゃんね？　いるわよ、どうぞ」

結衣を中に招き入れる真由美　愛莉を見つけて笑顔になる結衣／そしてついでおれのことにも気がつく。

「あら、あなたこの前の……」　驚き顔の結衣／それからここが片桐探偵事務所だと思い出し、納得した顔になる。

不思議な顔をする愛莉　「もしかして知り合いだった？」

「さあな」　すつとぼけるおれ。

クスクスと笑う結衣　その笑いにゴシップ嗅覚が反応する真由美／ニヤリとする。

そしてしのぶ　そんなあれこれにはまったく関心がなくトーストをパクついている。

「有ニつて探偵だったんだ」　またクスクスと笑う／しのぶの仕事にそっくり

トーストをモグモグしていたしのぶが、急に結衣に視線を飛ばした　今『有ニ』って呼び捨てで呼んだわね！？　って顔で睨んでいる／それを見てニヤリが増す真由美　やれやれだ／まったくやれやれすぎる

「なんでもいいから、とにかくさっさと学校に行ってくれ」

おれは溜め息をついてからタバコに火をつけた。

「探偵事務所ってところは、朝からこんなにたくさん女の人が集まるところなの？」

結衣が波風を立てる質問をしやがる　そんなところまでしのぶそっくり。

「ここは特別なのよ」　ニヤニヤ顔な真由美。

結衣がもの珍しそうに事務所の中を観察しながらうつつく。「カウンターがある探偵事務所って素敵ね」　そう言いながら、ロツカーやスチールラックが並ぶほうへ移動／ロツカーの上段はガラスの扉で閉じられていて中が見える／デジタル一眼レフカメラ／デジタルコンパクトカメラ／ハンディカムが二台／盗聴用のワイドバンドレシーバーが二台／盗撮用の小さなレンズのカメラ　探偵が使うには違法な代物もある。

コーヒーを飲み干して、結衣のところに行き、一緒になってあれこれと観察をはじめた愛莉　ガラスの扉を開けようとガチャガチャやっている。

「鍵がかかっているから開かないぞ。あちこちいじくるな」

「ねえ、これって盗聴器でしょ？　スパイ映画みたい！」

盗聴器を見て目を輝かす愛莉　たしかに子供にとっては興味津々なものばかりかもしれない。

「いいからさっさと学校に行けよ」

真由美がおれのうんざりな態度を見て笑っている。不機嫌なしのぶはすっかり食事を済ませ、コーヒーを飲んでタバコを吸っている。

電話が鳴る　おれじゃない／しのぶの携帯電話がソファアートのブルの上でガタガタ動いていた。しのぶは電話を取ってディスプレイを見てから、住居スペースに消えていった。

「ねえ有二さん」　ロツカーやスチールラックの上のものを一通

り観察しておれの机の前まできた愛莉。

「なんだ？」

「ママに頼まれている仕事って何？」

またそれか　「おまえの監視だ」

「それじゃなくって、もう一つのほうだっけば」

「何度も言わせるな。極秘事項だ」

口を尖らせる愛莉／チエ！　って舌打ちが聞こえた／ワイドバンドレシーバーが入っているロツカーのガラス戸をカツカツと指で叩いている／それから何か思いついたようにおれを見る。

「ねえ、お金貸して」 ニッコリ微笑む愛莉。

「は？ おまえバカか。なんでおれが毎回毎回おまえにかねを貸さなきゃならないんだ」

「どうせ、ママから経費をもらっているんでしょ？」

「なんという 子供の小賢しい知恵。」

「何に使うんだ？」

「駅のロッカーを開けるおかねがないし、お昼代もないし、遊びに行くおかねもないの」

ニッコリ顔 したたかなのは母親似なのだろう。おれは財布を取り出してから、財布が空っぽなのを思い出した やれやれだ。

鍵の束がぶらさがったカラビナを腰からはずす／机の引き出し／鍵を開ける／引き出しの中にある鍵を二つ取り出す 愛莉と結衣が観察していたスチールロッカー／下段の扉に鍵を突っ込む／扉を開ける／金庫／別の鍵／金庫に突っ込む 金庫を開ける／かねを出す 一連の動作を逆戻りする／アームチェアに座る 愛莉に一万円札を渡して、残りを財布に入れる。

「無駄使いするんじゃないぞ」

「はあい！ 有二さん大好き！ 結衣、行こう」

愛莉と結衣は真由美に挨拶をして、仲良く事務所を出て行った

出がけに結衣はおれにウインクをした 真由美がそれを見逃す

はずもない／おれを見てニヤニヤしている。

住居スペースから戻ってきたしのぶ 真剣な顔。

「どうした？」

「不動産屋からよ」

四〇四号室のことだとすぐにわかった しのぶの様子を見て、ただならぬことなんだと感じた真由美はソファテーブルの上の食器を片付け、トレイを持って出て行った。入り口のドアがきちんと閉まるのを待ってしのぶが話し出した。

「警察から連絡があったらしいわ。四〇四号室のことで」

早い／まだ八時前だ なぜ？

「ねえ。どづいうことよ。通報されるのはまだずつと先だったんじゃないの？」

「わからん。誰かが発見して通報したってことだ」

「こんな朝早くに誰が？」

「わからん」

「いったい誰が？ ドアを開けて中を覗くような誰かがいたのか」

七海か／それともほかの女が現れたか

「とにかく、行ってみましよう」

「は？ 「なんだって？」

「行ってみましようって言ったのよ。聞こえなかった？」

しのぶはニヒルな笑みを浮かべていた 興奮／高揚／光悦

顔が淫猥な笑みを浮かべる／危険とスリルで股を濡らす女／危険とスリルで乳首を勃起させる女。

「おまえバカか。なんでわざわざ出向く必要があるんだ？ そうでなくっても疑われそうな要素がいろいろあるって言うのに」

しのぶはおれの前まで進んできた。

「あたしもあんたも田辺は殺してないのよ？ ビビることなんかなんにもないわ。そうでしょ？」

「不法侵入している。死体を発見したのに通報していない。どつちもそれ相応な罪だ」

しのぶはおれの膝の上にちょこんと腰をおろした 軽い／三十五キロ／鶯色の卑猥な瞳でおれを射貫く おれにキスをする。

「だいじょうぶよ。あんたあたしを守るためならなんでもするんでしょ？」

アーバンビルド高円寺　しのぶを着替えさせるために南阿佐ヶ谷に行つてから高円寺に向かった　万が一の安全策／昨夜おれたちが目撃されていたときのための気休めにしかならない着替え。

ビリヤード場の通りからマンションに入るための路地を曲がる／ゆるい坂を登りきった空き地にパトカーが二台／黒いワンボックスが一台／マンションに入る　エレベーター／四階のボタン／閉まるドア

緊張する　おれとしのぶは現場を一度見ている／見たことがないはずの現場を

警察の質問に余計なことを言つてしまわないか不安だ。そうでなくともあそこにはしのぶの写真がある　それがしのぶだつてことはすぐにわかる／なぜかと聞かれれば隠せることはほとんど減る。

だが／警察を敵にまわすのは得策じゃない　隠すのは昨晚ここに来たことだけ／それはもうしのぶとは打ち合わせ済み。

エレベーターのドアが開く　降りる／外部廊下　四〇四号室の前／制服警官が一人　おれとしのぶはそこに向かう／おれの前／ピンヒールをカツカツ言わせながら歩くしのぶ　制服警官が立ちはだかる／第一関門。

「どなたですか？　今ここは……」

「このマンションを所有している酒井です」制服警官が話すのを遮つて話し出すしのぶ　「不動産屋から連絡があつたので来てみました。どうということなのか詳しく説明してくださらない？」

その声は生クリームよりもはるかに甘い　制服警官を見あげる目は色気を通り越し妖気を放っている／背が低いことを最大限に活用し、胸元が大きく開いたシャツを強調するように胸を張る　しのぶを見上げる制服警官は嫌でもしのぶのエロいブラジャーが目に入るだろう　しのぶの色気にノックアウトされる制服警官／鼻の

下が長くなる／下心丸出しのスケベな目つきになる。

「ここでお待ち下さい」 制服野郎は玄関の中に入った。

おれに振り向きニヤリ顔をするしのぶ 警察を色気で取り込む
作戦なのだろう／まったくやれやれだ。

制服野郎が戻ってくる あとからもう一人私服警官が出てきた
／背が高く太っている／茶色のくたびれた汚いスーツを着ている
見覚えのある／いや よく知っている男だ。

その私服警官はしのぶを見てからすぐにおれを見た 眉毛が怪
訝に吊りあがる私服警官 「なんでおまえがここにいるんだ、ゴ
ミ虫野郎」

おれをゴミ虫呼ばわりする私服警官 本当にゴミ溜めでも眺め
ているかのような顔をしている。自分を見てくれないことに苛立つ
しのぶは、私服警官に話しかけた。

「マンシヨンの所有者の酒井です」

お色気ビーム光線が発射される しのぶのたいして大きくない
胸に目がいく私服警官 だがしかし／ノックアウトされない。

「わざわざ起こしてくださって申し訳ないんですがね、何かあなたに
関係のあることがわかったら、こちらからお伺いしますんで、お引
取りください」

でかい態度でしのぶをあしらおうとする私服警官。

しのぶがおれに振り向く こいつノックアウトされないわよ！
？ って顔。もう一度私服警官に話しかける。

「所有者として、どういう状況なのかくらいは知っておきたいと思
いまして。人が亡くなっていたって聞いたんですが、この住人な
んですか？」

妖気ムンムンな目／肩も腰も足もくねらす／ガムシロップ三十杯
分の甘い声 後ろの制服野郎は鼻血が出そうな勢いでしのぶを見
ている だがしかし／私服はノックアウトされない。

おれを見るしのぶ こいつ絶対にホモよ！！ って顔。

私服は三日くらい風呂に入ってなさそうな脂ぎった頭をポリポリ

と掻きながら、面倒くせえなあって顔でしのぶを見ている。

「わかりました。お話できる限りのことはお伝えしますよ。私も一つ聞いていいですかね？ その後ろにいるゴミ虫野郎はなんなんですか？」

顎を突き出す私服野郎／しのぶとおれを見下す態度の私服野郎／軽蔑をあらわにした声の私服野郎／しのぶがおれを見る あんたなんかやらかした？ って顔。

「お知り合いなんですか？」 甘い声のまま私服に聞くしのぶ。マンションの所有者であるしのぶがいなきや、間違いなく廊下に唾を吐いているであろうふてぶてしい態度の私服警官。

「私はゴミ虫に知り合いなんていませんよ、なあ片桐」
そう言つて、外部廊下の手すりの外に唾を吐いた私服警官 警官とは思えない悪びれた態度／虫歯だらけの歯を向き出してニタニタとおれに薄ら笑いを向ける。

「おれだつてそんな汚い格好をした中央公園で暮らしていそうなヤツに知り合いなんかいないぜ？ なあ藤井」

そう こいつこそおれが悪さをするときの偽名に使う藤井の正体だ。

「藤井じゃない。藤井警部だ、ゴミ虫野郎」

ゴミ虫じゃない、片桐だ なんてやり取りに付き合う気にはならないから無視。

「なんでおまえがここにいるんだ？」

白目が黄ばんだ汚い目でおれをジロリと睨み、凄みをきかせる藤井。

「なんだっていいじゃないか。さっさとこの家主様に事情を話せよ」

おれは手すりにもたれて、外を眺めながらタバコに火をつけた。

「まあいい、あとでじっくり絞りあげてやる。おい、村山！」

ドアの中に向かって怒鳴り声をあげる藤井 中からもう一人の私服が出てきた 紺のスーツ／身なりのきちんとした中肉中背の

なかなか好青年／二十代後半くらいだろうか　狭い廊下に人が集まる。

「こちら、このマンションを所有している酒井さんだ。状況を説明してやれ」

そう言つて藤井は部屋の中へ入つていった。村山と呼ばれた私服はおれにチラツと目を向けてから、しのぶを見た　童顔で色黒の顔／厚い胸板　女にもてそうな村山。

「私、警視庁の村山と言います。ここの所有者さんなんですか？」

悩殺ビーム準備完了／発射　「酒井です。不動産屋から連絡をもらったので来てみました。状況がまったくわからないので、説明していただけます？」

くねる腰／突き出す胸／真由美の店のチョコレートパフェより甘い声　ノックアウトされる村山／しのぶの胸と唇を交互に見る村山。

おれを見るしのぶ　やっぱりさっきの藤井はホモよ！！　つて顔。

「そうでしたか、すいませんでした。藤井さんは口が悪いんで驚かされたでしょう。根はいい人なんですが」

頭をポリポリと搔く村山　根がいいなんて単なるお世辞だつてことくらい誰でもわかる。

藤井とは何年か前に仕事に出会つた。ある権力者に頼まれ、麻薬売買の調査をしていたのだが、家宅侵入に失敗して逮捕された。おれを逮捕したのが藤井で、おれは目的を吐かせるためのリンチのような取調べを受けた。藤井はおれから麻薬密売人の正体を吐かせようと必死になっていた。おれは藤井に、藤井のイニシャルが入つたお気に入りのブラックジャックでポロポロのポロ雑巾になるまで殴られた。おれの依頼人はかねと権力にものを言わせておれに対するリンチを告訴すると言い出した。警察は告訴を取りさげる代わりにおれを自由にして捜査を打ち切つた。藤井はそれ以来、おれをゴミ虫扱いしている。暴力が正義を迫行するのに有効な手段だといま

だに信じている古いタイプの人間。秩序を守るのには多少ルールを無視しようが不正を働こうが構わないと思っっている古いタイプの人間。ブラックジャックなんかをいまだに持ち歩いて、犯罪者に度胸を試させる暴力警官。もともと探偵が嫌いなようだったが、おれのせいでさらに嫌いになったようだ。

村山がしのぶに状況を話し出した　ほとんどはおれとしのぶがすでに知っていることばかりだった。

「ええと、亡くなられていたのはこの部屋の住人、田辺洋一さんです。その……なんといいですか、女性にこのような話をするのは、ちよつと気が引けるのですが……」

頭をポリポリと掻く村山　死体の状況説明か　そりゃ気が引けるだろう。

「裸で、女性の下着を身につけた状態で首を吊って死亡していました。ええと、その……なんといいですか、射精をした痕跡があったので、その……田辺洋一はそういった趣味を持っていたんだと思われます。つまりその……」

村山のしどろもどろがかわいそうになってきたから、口を挟んでやった。

「下着フェチの変態首吊りオナニー事故」

村山としのぶがおれを見た　おれは何食わぬ顔でタバコを吸って、外を眺めた。

「ええ、まあ……言っつてしまえばそんな感じですよ」　頭をポリポリと掻く村山。

「じゃあ、事故死つてことなんですか？　それとも自殺？」　すつとぼけて聞くしのぶ。

「ええ、最初はそう思っていたのですが、それがどうもそうでもないような……」

「もしかして殺人事件なんですか？」　甘い声と突き出される胸／村山の視線はしのぶのブラジャー！。

「ええとですね、事件を通報した人間がいるんですよ。この部屋か

ら

「なんだって!？」

「それは誰なんですか？」　ブラジャー攻撃ノブラジャー攻撃に
うるたえる村山。

「それがその、誰だかはわからないんです」

頭をポリポリと搔く村山。しのぶがおれを見た　おれは目で合
図をした。

「あの、もしよろしければ、部屋の中を見せてもらえませんか？」

甘い声とブラジャー攻撃ノソックアウトされる村山。

「いやそれは、藤井さんに聞いてみないと、なんとも」

藤井に聞いたってだめって言うに決まってる。

「おい、村山!!　その人をこっちに連れてこい!!」

藤井の怒鳴り声　部屋の中からおれにはすぐにわかった
ベッドの脇の壁ノあの写真がしのぶだとわかったのだ。

村山に促されて中に入るしのぶノあとに続くおれ。

「誰がゴミ虫を中に入れていいって言った!!　摘み出せ!!」

怒鳴る藤井ノ頭をポリポリと搔く村山。

「こいつが一緒じゃないなら、中には入らないわよ？」　ナイス
フォローのしのぶ。

「好きにしろってんだ!!」　藤井の怒鳴り声ノ頭の悪い男だ。

おれは村山の肩をポンツと叩いて言った　「ああいうバカには
ならないようにしたほうがいいぜ」

キツチンより先に進みたがらないしのぶ　昨日の田辺の形相を

思い出したのだろうノだが今はもう死体はない　おれはしのぶの

隣に立ったノしのぶはおれに腕をまわしてきた。

藤井が写真を持ってこっちに来た　「これはあなたですね、酒
井さん」

壁に貼られていたしのぶの盗撮写真　昨日も見たからわかって

いるのだが、わざとその写真に顔を近づけてマジマジと見るしのぶ。

「はい、そうみたいです。それがここにあったんですか？」

ハリウッド女優も顔負けのオスカー級演技をするしのぶ。

「じゃあ、これもだ。そうですね？」

もう一枚の別角度からの写真を見せる藤井　それもマジマジと見るしのぶ。

「はい、そうです」

「それじゃあ、こっちは？　あなたじゃないが、お知り合いですか？」

残りの四枚の写真を見せる藤井　これはおれもしのぶも本当に見覚えがない。

「さあ、あたしの知り合いではないと思いますけど」

「この写真はこの部屋の壁に貼られていたものです。あなたは田辺洋一と知り合いだったのですか？」

藤井のものすごい疑いを込めた視線がしのぶに注がれる。

「いいえ、まったく知りません」それからちよつとうつむいて考える振りをするしのぶ／顔を上げる　「でも、もしかしたら……」

藤井の目が鋭くなる　「なんです？」

「あたしは、一週間ほどまえからストーカーの被害にあっています。自宅のポストを荒らされたりしていたんです。片桐が今一緒にいるのは、ストーカー退治を依頼したからです」

なんて上手い演技なのだろう　しのぶは今、世界中の誰よりも真実味のある迫真の演技をしている。

「それじゃあ、田辺洋一はあなたのストーカーだったんですか？」
バカ丸出しな藤井。

「それを調べるのがおまえの仕事だろ」　おれは思わず、人差し指を自分の額にコツコツとあててから、クルクルとまわして藤井を指差した　クルクルパーという意味を込めて。それを見て小さく含み笑いをした村山　藤井の視線に気がつき慌てて真剣な顔になる。

バカの相手はしのぶに任せて、おれは部屋の中を一望した　見た感じには昨日と変わりがない／変わっているのかもしれないがお

れにはわからない　おれは、村山の肩をチヨイチヨイと叩き、指で外に出るように合図した。

おれが外に出ると、村山がついてきた。村山に向かってタバコを差し出す　手でいらないとジエスチャーして自分のタバコを出した村山。おれは自分でタバコを啜えて火をつけた。

藤井には聞こえないくらいの声でおれは言った　「通報したのは誰だつて？」

「誰だかはわかりません。この部屋にあった田辺の携帯電話からの通報だと思われます。通話記録に残っていました」

田辺の携帯電話　昨日は見つけられなかった。

「それはどこにあったんだ？」

「玄関です」

玄関だと？　おれが見落としていたのか？／いや違う／昨日はなかった

「ほかに、他殺を匂わす理由は？」

「部屋の中に無数の手袋のあとが見つっています。指紋を採集しようとして見つけたものです。それと、ハンカチか何かの布で、おそらく指紋を拭き取ったであろう痕跡も見ついています」

それはどれもこれもおれとしのぶのだ

「死亡時刻は？」

「まだはつきりとはわかりませんが、昨夜の十時から一時くらいかと」

田辺は十時近くまで池袋にいた　家についたのは十時半くらいだろう／しのぶが死体を発見したのは十二時

「聞き込みなんかはしたのか？」

「ええ、いくつか情報が入りました。昨夜九時頃から、外の通りの工事現場前にワゴン車が止まっていたようです。色はなんともわかっていません、何しろその通りは夜は外灯とビリヤード場の明かりだけであとは真っ暗らしいもんで。いずれにしても暗くてわからないと言うことは黒っぽいつてことでしょう。十一時半頃に走り去

っているのがわかっています。それから、この部屋に女子高生が入ったのが目撃されています。九時頃だそうです。部屋から出たのは目撃されていませんが、そのワゴンに女性が乗り込むのが目撃されています。それもやはり十一時半頃です」

女子高生　高円寺にいた愛莉　まさかな。

「それに、部屋の中で言い争う声が聞こえたという証言もありました。それから、十二時四十分頃にエレベーターが動いているのが確認されています。それと一時過ぎに階段から足音がしたのも確認されています」

エレベーターと足音はおれとしのぶだ　女子高生／言い争う声

／黒の車　高円寺にいた愛莉　おれがベランダで聞いた女の声は愛莉だったのか？

それともう一つ　消えたマリファナは？

藤井が出てくる　ひっぱたかれる村山。

「てめえ！！　そんなゴミ虫野郎に何をベラベラとしゃべってんだ！！」

おれは藤井目掛けてタバコの煙を吐き出した　「おれにしゃべらなくたって家主にしゃべりゃ同じことだぜ？　それにあいつにしゃべらなくたってすぐにわかるんだ。おれは探偵だからな」

すかしたおれの態度　頭から湯気が出そうな藤井／顔を真っ赤にして怒りをあらわにしている。

しのぶが部屋から出てくる　藤井を押しつけて村山の前に／村山のひっぱたかれた頬に手をあてる／甘い声／ブラジャー作戦／くねる腰　黒のショーツが透けそうなくらいに尻を突き出し体のラインを強調してみせる

「とにかく、あたしの写真がこの部屋にあつたわけだし、何かわかったらちゃんと報告してね、ボクちゃん」

藤井にダウンさせられた村山は、カウントエイトで立ちあがり、再びしのぶにノックアウトされた。

おれは自分の事務所で机に向かってパソコンのメモ帳を開いていた。これまでになかったことをまとめようと思ったからだ。だが、おれの脳みそはパソコンのメモ帳相手に考えをまとめられるほど高機能にはできていなかった。潔く諦めて机の隅にあるレポート用紙とボールペンを取った。

しのぶが入り口のスチールドアをドカンツと開けた。手には真由美の店のトレイが乗っていたノトレイの上。キャラメル・アップル・トーストのバナライス&生クリーム乗せ。通称しのぶスペシャル。しのぶは大酒飲みのかせして甘い物が大好き。その点だけは絶対におれとは気が合わない。

ソファーに座るしのぶ。トレイをソファーターブルに置くノしのぶスペシャルにナイフとフォークを突き刺す。バナライスと生クリームがたっぷり乗ったトーストノおれのジョンを啜るときよりもでかい口を開けて頬張るノ口のみわりに生クリームがべったりノそれをいやらしいことにはびっくりしている舌で舐めまわす。色気のかけらもなさそうな行動なのにノいやらしい色気に満ちているしのぶ。

おれはそんなしのぶをじっと眺めていた。どんどん消えていくしのぶスペシャルと共に。

「ねえ、あんたあの刑事となんか揉めてるの？ 相当嫌われているみたいけど」

藤井か。おれは別になんとも思っちゃいないんだがなノ警察の人間なんて所詮あんなもんだノいちいち腹を立てていたらやっつられん。

「あいつは誰にでもああなんだ」

「そうかしら？ あんただけ特別に嫌われていそうだけど。まあどうでもいいけど、警察に嫌われているんじゃないやっつらい商売なんじ

やないの？ 探偵つてのは」

「そりやまあな。だけどあいつに媚を売る気にはなれないからな」

おれはタバコに火をつけた 煙が漂う あてどなく。

「ホモで下品で暴力好きなおまわりが警視庁捜査一課の警部だなんて、世の中どうかしてるわね」

ホモかは知らんがな おれは立ちあがってカウンターに向かった。頭がまったく冴えない 一気に多くの問題を背負い込み過ぎているときに起こるオーバーヒート現象だ。こんなときは飲んじまうに限る キッチンの棚からグラス／冷凍庫から氷／カウンターの上のサザン・カンフォート 氷を入れたグラスにスリー・フィッガー注ぐ。

「これまでにわかったことを話してちょうだいよ」

しのぶスペシャルをあつという間に食いつくしたしのぶ タバコに火をつけている。おれは酒を一口飲んだ 舌の上で転がしてから一気に飲み込む 喉が焼ける快感／気分がすぐれる
「そうだな、いろいろと複雑でおれも何がなんだかわからないんだがな」

「あんたがわからないんじやお手上げじゃないのよ」

おれはグラスを持って机に戻った アームチェアに座る／ボールペンを握る こういうときは書きながら考えるといってことを経験で知っている。

「何からいくか」

「田辺よ」

「田辺か、そうだな」 レポート用紙の真ん中に田辺と書いて丸で囲む。

「田辺はマリファナの売人だ」 適当なところにマリファナと書く。

「田辺は下着フェチだ」 適当なところに下着と書く。

「田辺は援助交際をしていた」 援助交際と書く。

「田辺には女がいた。一人は女子高生だ」 女子高生と書く。

「七海は田辺を尾行していた」 七海と書く。

「おれの依頼人は七海の調査を依頼してきた」 奈津子と書く。

「そして、おまえの下着が盗まれた」 しのぶと書く。

声には出さずに愛莉とも書く。

「さてここで問題だ。これらの事柄を線や点で結ばなきゃならない。いったいどうやって？」

「それを考えるのがあんたの仕事でしょう」 タバコの煙を天井に向かって吐くしのぶ。

「違うぞ。おれの仕事は七海の調査と、ストーカー退治だ」

「その七海って女が田辺に関わっているわけだし、あたしをストーカーしていたのは田辺なんでしょ？ 全部あんたに関わる仕事じゃないのよ」

「やれやれだ なんでこんなことになったのだろうか。」

「よし、じゃあまずおまえの件からだ。田辺はおまえの家のベランダに侵入していた。だからおそらくストーカーなのは間違いない。だが、下着を盗んだのは田辺なのだろうか？ これは疑問だ」

「なんでよ、あいつ、あたしの下着を身につけて死んでいたじゃないの」

「だが、盗んだところは誰も見ていない。あの晩、あいつはいつでも盗める状況で、盗まずに立ち去っている。おまえの下着の匂いまで嗅いでいるのに盗まずにあの場をあとにして自宅に戻っているんだ。それからまた盗みに行っただとは考えづらい」

「じゃあなんで田辺の部屋に下着があるのよ？ おかしいじゃない」
「そう おかしいんだ／なぜだ 誰かが田辺に渡しているんだ／売ったかあげたかはわからないが／誰かの手から田辺に渡っている」

可能性 七海／あの晩しのぶのマンションの前にいた／高橋が田辺を尾行している間に盗むのは可能だ となると、田辺と七海はつながっていることになる。申し合わせたかのようにしのぶの家に向かった二人 つながっているのか。

もう一つの可能性　田辺にセーラー服のリボンを渡した女がいる／おそらく女子高生　この女は田辺がリボンの話をしたらリボンを用意している／田辺が下着の話をしていたとしたら？　用意したかどうか／女は田辺と相互オナニーをして楽しむ間柄だ／可能性はじゅうぶんある。

「可能性として、下着を盗んだのは七海か、あるいは目撃情報にもあった女子高生かもしれないな」

酒を流し込む　頭がさらに冴えてくる。

「ほかに？」

「消えたマリファナだ」

「だけど、あんたマリファナを見たわけじゃないんでしょ？」

「見てはいないが、話しているのを聞いた。それに田辺の同僚が田辺から買ったのを吐いた。田辺がマリファナを栽培して売っていたのは間違いない」

それなのにマリファナはあとかたもなく消えていた　なぜだ

可能性　女子高生が持ち出した　何のために？／女子高生はあの晩、田辺にマリファナを勧められて吸っていた／そして黒い車で逃走している／プランターごと持ち出すこともできただろうということとは仲間がいるってことか。

田辺の死が事故なのか他殺なのか　マリファナを奪ったための偽装殺人とも考えられる。

だが　マリファナなんて種さえ手に入れば誰でも育てられる。ほつときゃグングン育つ雑草だ。そんなもののために殺人なんかするだろうか？　謎だ。

「もう一つ、おれの依頼人は田辺に関係があるのだろうか」

「そんなこと知らないわよ」

七海と田辺の関係を探るための依頼だって可能性はあるのかあるとしたら、田辺ってのはいったい何者だったのだろうか　謎だ。

「そう、要するに何もかも謎ってことだ。これだけいろいろなこと

が起こっているのにも関わらず、なんにもわからないってことだ」

「あんたそれでよく報酬がもらえるわね」

「それは別だ。依頼されたことはちゃんとこなしている」

「あたしの依頼はどうなのよ？」

「ストーカーが退治されればいいんだろ？ 田辺は死んだ、もう大丈夫だろう」

「あんたがどうかしたわけじゃないじゃないの」

「それでも、おれは仕事をしたし、依頼人の要望は達成されたんだ。文句はないだろう」

「だからちゃんとかねは払えってことが言いたいよね？」

「ああそうだ」

「やれやれってポーズのしのぶ 「じゃあ、新たな依頼よ。下着泥棒の正体を突き止めなさい」

「なんともまあ 「そりやちよつと難儀じゃないのか？ 下着泥棒が田辺じゃなかったとしても、下着を欲していたのはおそらく田辺だ。その田辺が死んだんだから、もうおまえの下着は盗まれないだろうし、盗まれたとしたら、それは別の犯人だ」

「文句言わないでやりなさい」

「だいたいおまえ、あんな誰でも簡単に侵入できちまうところに、下着なんか干すなよ。子供だって簡単に盗めちまうぜ。高橋だって言っていたぞ」

高橋と聞いて顔が赤くなるしのぶ おれ以外のすべてに羞恥心が働くらしい。

「何よ、なんて言っていたのよ！」

「あんな派手な下着をあんなところに干していたら、下着泥棒じゃなくたって興奮するってな」

顔が真っ赤 おれはその、かわいい処女の少女のような顔をするしのぶを見ながら、サザン・カンフォートを飲み干した。

高橋に電話をかける 呼び出し四回

「ようボス、これからちよいと野暮用なんだ。用件は簡単に頼むぜ」

「田辺が死んだ」

「なんだって!?!」

「しのぶの下着を身につけて、首を吊ってオナニーしたまま死んでいた」

「なんだって!?!」

「昨夜の十時半から十二時までの間の出来事だ。ちよつといろいろあつて、おれとしのぶがその死体を目撃しちまつた」

「なんだって!?!」

なんだつてのオンパレード　そりゃそうだ／誰だつてそうなる。

「まあそれはいいんだ。おれとしのぶのことはこつちでどうにかする。用件はこつちだ、事故死に見せかけた他殺の疑いがあつて、警察が動いている。それもあの藤井がだ」

「なんだつて!?!」

「それで、おれがああのマンションに出向くのが難しくなつた。田辺が死んだ前後に女子高生と黒い車が目撃されているんだ。それについて聞き込みをしてほしい。それと、七海がもしかしたら絡んでいられるかもしれない。それについても聞き込みしてくれ」

「それはおまえの仕事と関係があるのか?」

「あるのかないのかを、知りたい。それに、おれのエンジェルが興味津々なんだ」

笑う高橋　「おまえのエンジェルは、ただの天使じゃなくつて墮天使だからな」

「まつたくだ、反論の余地もない」

「それにしても田辺のヤツ、なんとも素晴らしい死にかたじゃないか」

「射精してから死んだんだ。本望だろうよ」

大笑いの高橋　「真似する気にはなれんがな」

「まあそついうことだ、頼んだぜ」

「ああそつだ、頼まれていた七海の母親の調査だがな。まだ途中なんだが、実家に行つて近所のおばちゃんたちにいる聞いてきた」

名前はさちこ、佐賀県の佐、知性の知、子供の子だ。六年前に離婚して、七海は父親と暮らしていたらしい。その後、七海は就職してアーバンビルドに引越した。今のところこれくらいだ」

「そうか、助かったぜ。母親の名前がわかればそれでじゅうぶんだから、調査は終了してくれていいぞ」

「いや、なんかもつと面白いことがわかるかもしれないから続行する。別にかねを払えとは言わん、これはもうおれの興味の世界だ。おまえが背負い込んだ事件はおれを興奮させる面白さに満ち溢れているからな」

おれは笑った　笑ったというにはあまりにも愉快じゃない声で。
「覗き屋の性分ってやつか？　まあおれも人のことは言えないところまで首を突っ込んでしまったけどな」

高橋も笑った　おれと違って愉快に。

「お互いにそういう性分だからこんならくでもない仕事をして生きているんだ。まあ任せとけ。面白そうだから野暮用はキャンセルする。今すぐアーバンビルドに行くてくるぜ、ボス」

電話を切る　しのぶがあくびをしながら立ちあがった。

「あたしちよつとお昼寝するわ」

そう言つて寝室のベッドに消えていく　おれも眠い／少し仮眠するか

電話が鳴る　千鶴だ。

「申し訳ありません、遠藤様から別の仕事を頼まれました、愛莉さんの見張りをお願いできないでしょうか」

「今は学校だろ？　見張ることなんかないんじゃないのか？」

「今日はたぶん、三時半頃に学校から出てくると思うので、それまでに校門の前で見張りをお願いします。校門の斜め向かいに喫茶店があるので、そこから見張れます。お願いできますか？」

「返事を選択する権利がおれにあるなら、迷わずできないって言うんだけどな」

「ありがとうございます。それでは、お願いいたしますね」

「ああ、ちょっと待ってくれ、門脇七海の血液型がわかった。B型だ」

少しは仕事をしているんだってところを見せておかないと、かねがもらえなくなるかもしれない。集めた情報は小出しにしていくことにする。

「わかりました。その通り伝えておきます、それではまた」

電話が切れる　やれやれだ　寝る時間も与えてもらえない。

おれはレポート用紙に新たな書き込みをして丸で困った　マリ
フアナと女子高生と栗田の手ぬるい巡回

そのレポート用紙を破って丸めてゴミ箱に投げ捨てた

目白 愛莉が通う高校／校門の前の喫茶店 そこは民家の一階を改造した店だった。入り口は普通の玄関／茶色いドア／土足でいいように外部用の木製パネルに変えられた床の広いリビング／壁も天井も木造りで全体にココア色をしたアンティークで清潔な空間

丸テーブルが四つ／椅子がそれぞれに四つ 入り口から一番奥にカウンターがあり、その手前から庭に出られるようになっていゝる。庭はリビングと同じくらいな広さで、ガラス張りのアーチ型屋根があり、その下に丸テーブルが四つ。椅子もやはりそれぞれに四つ 客は三人。一人はカウンターに座る白髪で背の高い男 綺麗に揃えられた豊かな髭を蓄えたジェントルマン風で、ホットコーヒーをゆっくりと味わっている。フランスのカフェでタバコとコーヒーをたしなむようなそんな男だ。庭のオープンカフェに女が二人、同じテーブルに向かい合っている 中年の主婦で大きな声でベラベラと話し、とてもやかましい。カナリアのような声ならまだしも、カラスが喧嘩しているような声だからたまつたもんじゃない。だが、校門を見張るにはオープンカフェに座らなきゃならない やれやれだ。

カウンターに行く アイスコーヒーを頼む／ガムシロップとミルクはいらないと言う／かねを払う／灰皿とグラスを持ってオープンカフェに出る 校門が見える席に座る。

千鶴は三時半くらいに愛莉が出てくるはずだと言っていた 今は三時十五分 タバコに火をつける。どんよりとした曇り空に昇って消える煙

携帯電話 メール一件／二時四十二分着信

しのぶから 『勝手にいなくなるとはいいい度胸ね！』

よく見ると電話の着信も四回あった すべてしのぶ／音を消していたから気がつかなかった／留守番電話に三件のメッセージ

これもすべてしのぶ／恐る恐る聞いてみる

一件目 『どこにいったバカ!』

二件目 『出ない電話なんか捨てちゃいなさいよ!』

三件目 『もついい! あたしも男と遊んでくるわ!』

『あたしも』 おれが女と遊んでいると思っっているしのぶ

まったくはずれってわけじゃないが／どっちにしても返事はしない
でおこう しのぶは喜怒哀楽が激しい／明日になれば忘れてい
る女だ／おれたちは今までもずっとそうやって生きてきた 恋人同
士じゃない／男と女として 好きなときに好きな相手と好きなよ
うに付き合う それがおれたち。

ただほかの相手と違うのは、おれはしのぶに自分をさらけ出せる
ということ。しのぶもおれに自分をさらけ出せるということ。もち
ろん普段は突っ張っているとしても

タバコ三本分の時間が過ぎた アイスコーヒーをもう一杯頼む
べきか悩む中途半端な時間 愛莉はまだ出てこない／おそらく/
たぶん／きつと

なにしろ学校というところはみんなして同じ格好をしているもん
だから、よく目を凝らして見ていないとどれが愛莉かわからない。
もしかしたら見逃しているかもしれない そしたらおれはきつと、
アイスコーヒーを五、六杯も飲んで日が暮れて閉店ですと言われる
までここにいるだろう。

テーブルの上で携帯電話が震える 高橋から。

「聞き込みしたぞ、いろいろわかったぜ、ボス」

おれは校門を睨んだまま言った 「聞かせてくれ」

「まず、向かいのビリヤード場の受付にいるおばちゃんの証言だ。
受付は窓際にあつて、このビリヤード場は大会でも開いていない限
りは暇だ。おばちゃんはいつつも外を眺めている。昨夜九時頃に黒
っぽいワゴンが工事現場の前に止まったのを見ている。そのワゴン
はすぐにその場を立ち去っている。女子高生がワゴンから降りたの
は見えないが、そのすぐあとで、四〇四号室に女子高生が入って

いくのは見ている。それからあと、十一時十五分くらい、たぶん十一時半にはなつていなくなつたらしいんだが、黒いワゴンがまた同じところに止まつたらしい。次に見たとき、それは十一時五十分くらいだつたらしいが、ワゴンはもう止まつていなくなつたそうだ」

村山の証言に一致している　目新しい情報はない。

「それから、アーバンビルドの住人にも聞き込みをした。こつちはもつといろいろ聞けたぞ。一〇一号室の住人からの情報だ、時間は正確じゃないんだがな、エレベーターの動きについてだ。十一時以降に何度か動いている音を聞いたらしい。十一時半ぐらい、十二時くらい、十二時四十五分くらい、十二時五十分くらいとそのあとすぐ、五十五分くらい」

「十二時はたぶんしのぶだ。十二時四十五分はおれ」

口笛を吹く高橋　「それじゃあ、一時過ぎの二人分の足音もおまえとしのぶちゃんか」

「ああ、おそろくな。十一時より前はどつなんだ？」

「一〇一号室の住人が帰宅したのが十一時なんだよ」

今度はおれが口笛を吹いた　「もつと早く家に帰れと言つておけ」

笑う高橋　「それから別の部屋の住人の証言もある。十一時頃に四〇四号室から言い争う声を聞いた。十一時半頃に女が例の車に乗り込んだのを見た。それにもう一つ、十二時から一時までの間に四〇三号室で足音を聞いている、これはおまえらだろうな。おれが言いたいのは、この証言をしたのはいつたい誰でしょうつてことだ」

「四〇三号室の足音が聞こえるんだから、三〇三号室の七海だろ」
「ご名答。ほかの住人にも何人が聞いたんだがな、とりあえず、おまえとしのぶちゃんを目撃したつてヤツは一人もいなかったぜ。どつちにしろ、車の目撃情報と女、おそらく女子高生の目撃情報については、今のところそれだけだ。平日の昼間だからな、家にいないヤツが多いんだよ。それに今さつき藤井がやつてきたから、聞き込みはしばらく無理だ。なにしろ警察の振りをして聞きまわつたから

な。そうそう、ビリヤード場のおばちゃんかな、『あんだで警察って言ってる人間が来たのは三人目だよ』って言っていた。どういうことだと思っ？」

一人は藤井か村山かその部下ども／もう一人が高橋／警察は同じことを二度も聞き込まない／もう一人は？

「おまえのほかにも、警察の振りをして聞き込みしたヤツがいるってことか」

「まあそう考えるのが妥当だな。ちなみに、その人物の人相はよくわからん。おばちゃんは客の顔をよく見ていないみたいだ。よれよれのスーツでおれよりでかいつてことしかわからなかった」

「わかった、いろいろすまん」

「なに言っただ、おれとおまえの仲じゃないか、それじゃおれはキャンセルした野暮用を済ませてくる」

「ちよつと待て、今夜開いているか？」

「九時頃には帰ってこれると思う。飲みにも連れていっけてくれるのか？」

「いや、今後の打ち合わせも兼ねて、一緒に張り込みでもするかと思っただ」

笑う高橋 「おまえとデートか。たまにはそれも悪くないな。」

おまえに尻を撫でられる前に女の尻を撫で行ってくるぜ。十時に電話をくれ。それじゃあな、ボス」

電話が切れる 女子高生と黒い車 車は一度立ち去りまた戻ってきた／なぜだろうか／単に駐車違反になるからか 深い意味などないのかもしれない。問題はそこじゃない 車が止まっていなかった／それはつまり 女子高生が単独で田辺を殺害したということになる／他殺ならの話だが

それともう一つ 十二時五十分と五十五分のエレベーター

おれとしのぶが四〇四号室にいる時間／事件と関係はあるのだろうか／まったく関係ないのだろうか／あるとしたらどんな関係なのだろうか。まあ、独身だらけのマンションだからその時間に帰宅する

住人もたくさんいるだろう。田辺が死んだと思われる時間から一時間以上過ぎていくわけだし、関係ないと考えるのがスムーズだ。特別重要な情報はこれと違ってないってわけか やれやれだ。

校門 人がたくさん出てきた 目を凝らす／愛莉を探す／愛莉じゃない女を発見 結衣／近くに愛莉はいないか探す 見つけれられない。結衣に接近せよ 脳みその中に生息する男の本能が そう言った 探偵の勘じゃない／男の本能が

喫茶店を出る 大勢の制服集団が駅に向かって歩いている／探す／後姿がどれも同じに見える／探す／肩にかかるくらいの茶色い髪 いた／十五メートル前方。

足早に進む／結衣の隣に並ぶ ほかの学生たちの不審な視線を浴びる。

隣の女と話をしている結衣／おれに気がつく／立ち止まる おれも立ち止まる。

結衣がおれを見る おれも結衣を見る／目と目が合う／クスクスと笑う結衣 しのぶに似た笑い 脳みそと股間を刺激する笑い。

一緒にいた女に別れを告げる結衣 おれの腕を取る／学生の集団から離れる／来た道を少し戻り路地を曲がる そこでまた立ち止まる。

「こんにちは」 そう言っただけでまた歩き出す結衣／おれも歩く。

「今朝はどうも、探偵さん」 またクスクスと笑う。

「愛莉を探していたんだ」

「愛莉とデート？」 クスクスと笑う／そのたびにおれは癒される／癒されるのに刺激的。

「ああ、えらくやつかいなデートの申し込みをするつもりだった」

「あんなところであなたみたいないい男が待っていたら、愛莉は学校中で噂の的になっていただろうに、その役はどうやらあたしが奪っちゃったみたいだね。いいの？」

「いいも悪いも、あんなに同じ格好をしたヤツらがたくさん出てく

るところで、愛莉を探すのは無理だ」

結衣がおれを見た　そしてまたクスクスと笑う。

「わたしのことは見つけられたのに？」

「おれは危険な匂いを嗅ぎわかる嗅覚を持っているんだ」

「それはわたしが危険な女ってことかな？」

「どう危険なのかは自分が一番よくわかっているんだろう？」

クスクスと笑う結衣　男を引きつける匂いがする／しのぶと同じだ／種類は違うが／引きつけるという結果を招く匂いであるのは同じ。

「つまり、気に入ってもらえたってことかな？」

気に入ったとは言わない　十七歳のガキにのぼせるわけにはいかない／だがこのままにしておくのはもったいない。

「愛莉についていろいろ聞きたい」

「わたしは聞き込み相手に選ばれただけってことかな？」

おれは立ち止まった　何歩か先で結衣も立ち止まった／そしておれに振り返る。

「まだ仕事の時間なんだ。どこか、タバコが吸えてコーヒーが飲めるところへ案内してほしい。仕事が終わったら正式にデートに誘わせてくれ」

クスクス笑う結衣　「腕を組んで歩くのは仕事が終わってからだね」

おれたちは駅に向かって歩き、手ごろな喫茶店に入った。

おれの前ノアイスコーヒー 結衣の前ノアイスココア 小さな白いテーブルノ小さなガラスの灰皿 ハイライト・メンソールに火をつけるおれ。

「さっさと終わらせてくれる？ 退屈な質問攻めは好きじゃないから」

携帯電話をポチポチといじくっている結衣 どのメーカーのなんの機種かもわからなぬほどのデコレーション。

「愛莉の男関係を知っているか？」 仕事らしくタフに振舞うおれ。

「さあ、詳しくは知らないかな」

「友達関係は？」

「いつばいいと思うよ。どう答えればいいの？」

「あいつは普段、家にほとんど帰ってない。夜はどこで何をしているんだ？」

「有二のオフィスで寝泊りしているんじゃないの？」

「まだ二回だけだ」

「んー、ほらあのクラブ、あそこにはよく出入りしてて、そこで友達になった人のところに泊まったりしているみたいだけど。わたしのうちにもよく来るよ。でも、わたしも家に帰らないことが多いから、そんなときはどうしているのかわからないな。うちは親がそんなにうるさくないからね」

アイスココアを飲む結衣 携帯電話がひっきりなしに鳴るノその都度ポチポチするノテーブルに置くノそしてまた鳴るノポチポチする 其の繰り返し。

「高円寺に知り合いがいるとは言ってなかったか？」

携帯電話をポチポチしている手が止まる 「どうして高円寺なの？」

「いや、別に深い意味はない。おれが愛莉を追いかけ仕事をしているのは、最初に会ったときにもうわかってるんだろ。高円寺で愛莉を捕まえたことがあったから、それで聞いただけだ」

「最初に会ったときか……」 何か言いたげな顔をする結衣ノだがすぐにおれの好きな笑顔になる

「高円寺ねえ……どうかな、思い出せないな。愛莉とは学校が同じっていうのと、あのクラブでよく会って以外は、そんなに付き合いがないからね。あの子は親に反発して家出みたいなことしているから、いろんな友人と仲良くしてないとだめでしょ。だからわたしにもよくメールが来たりするけど、実際には親友ってほどの付き合いじゃないんだよね。クラスも違うし。だから今日も一緒に帰ったりしてないしね」

そう言っ てまた携帯電話をポチポチ 両手で器用にタイピング。

「そうか、学校で愛莉と仲のいい友達は何人か知っているか？」

「何人かは知ってるよ。教えようか？」

結衣は愛莉の学校での友人の名前を何人か言った 千鶴に聞いていたのと同じノどれも田辺にはつながらないノ新情報はなし。

「わかった、これで仕事は終わりだ。ありがとう」

携帯電話をしまう結衣 「さて、それじゃ正式にお誘いしてもらおうかな」

「どこでもおまえの行きたいところに連れて行ってやる。ただし、おれが気後れしないところにしてくれ」

クスクスと笑う結衣 「もつとかつこいいセリフを期待していたのに。いいよ、二人つきりになれるところに連れてって。でも、その前に洋服を買って」

「洋服？ なんでだ？」

「わたし昨日からこの格好なんだよね。それに制服じゃ有りと釣り合いが取れないでしょ？」

ニヤリとする結衣 ニヤリ顔もしのぶっぽいノこっちの願いに對して条件をつけてくるあたりもしのぶっぽい 子供っぽい顔を

しているくせに、大人な思考の女なのだろう。

「それじゃあまるで、援助交際みたいじゃないか」

「違うよ。彼女へのプレゼントだよ」　クスクスと笑う／癒される脳みそ／刺激される股間。

「おまえ、車持ちの彼氏がいるんだろう」

「ん？　ああ、あのときのね。あれは彼氏ってほどの相手じゃないよ。それを言ったら有二だって、今朝オフィスでソファーに座っていた綺麗な女の人、彼女なんじゃないの？」

しのぶだ　「彼女と呼ぶようなルールのもとで付き合っている相手じゃない」

首をかしげる結衣　そしてまたクスクスと笑う　「難しいこと言うんだね。ま、わたしべつに有二に彼女がいてもなんにも気にしないけど」

おれはタバコをシャツの胸ポケットにしまった。

「わかった、服でもなんでも買ってやるよ。おれに買える金額ならなんでもな」

おれとしても、制服姿の女を連れて歩くよりはそのほうがいい。

結衣はアイスコアを一気に全部飲み干して、席を立った。

「ありがと。大好きだよ」

あどけない笑顔を見せる結衣　それはおれをノックアウトするのにじゅうぶんな笑顔とセリフだった。

幼さと妖艶さを合わせ持つ女　中年の男を魅了する子供の姿をした女。おれは席を立ちレジで会計を済ませた。結衣がおれの腕に絡みついて歩き出す。店を出ると、結衣と同じ学校の制服を着た生徒たちが駅前に大勢いて、おれと結衣はそいつらの視線を一気に集めた。

「ね、わたし学校で噂的になっちゃう。でも本当は、噂になるのはわたしじゃないの、有二だよ。明日学校に行くと、あの男は誰なんだってね。みんな有二のことをわたしに聞いてくるんだから」

結衣はみんなが自分に注目していることに満足げな顔をしていた。

だがそれは、おれも同じだった。結衣のような容姿のいい女を連れて歩いて悪い気になる男はどこにもいない。

「明日は土曜日だ。学校新聞の取材を受けるのは月曜だな」

ブツと噴き出す結衣　「学校新聞に載ったら一躍スターになれるかもね」

「学校にゴシップ雑誌を取り扱う機関がなくなってよかったな」

おれと結衣は池袋につくまですっと、カメラマンや雑誌の記者に囲まれる有名タレントの気分を味わっていた。

ラブホテル 何度となく利用している店だが、未成年と来たのははじめてだった。自分の見境のなさに驚く反面、そういえばおれはこんなろくでもないヤツだったなと思いつく。

結衣はおれが買ってやった服を脱いでいる 黄色とピンクのチエックノ上下揃いの下着 まだ成熟しているとは言いがたい体型ノ顔と一緒に体も幼い。

布が今にも擦り切れそうなソファに座るおれ 結衣がおれの膝に座るノキス 酒の匂いも汗の匂いもしないノタバコの匂いはほんの少しする 酒を飲まずにファックするのはいつ以来だったか思い出せない。

「シャワー浴びよう」 そう言っておれのシャツを脱がしにかかる結衣 されるがままのおれノ上半身が裸になる 痣だらけノまだ赤黒いのもあるノもう黄色っぽいのもある。

さっきまでニコニコしながらおれの服を脱がせていたのに、驚きの顔になる結衣。

「これって、この前の？」

「まあな」

「ひどい……」

「おまえが気にすることじゃない」

「よく我慢できたね」

合わせ技で一日四十万の収入だからな とは言わない。

「そういう仕事だからな。いちいち手を出していたらきりがない」
クスクスと笑う結衣 「女にはすぐ手を出しちゃうのにな」

ジーンズのジッパーを下げる結衣ノされるがままのおれノ靴下を脱がす結衣ノされるがままのおれノオレンジ色の度入りサングラスをはずす結衣ノボクサーパンツだけになるおれ 結衣はおれの手を引いたノ立ち上がるおれ 結衣を抱き締めるノキスする 半

開きの唇に舌をねじ込む／酒の匂いはしない／タバコの匂いがかすかにする　キスしたままブラジャーをはずす／小さな胸／小さな乳首／おれの手にすっぽり収まるサイズ　手におさめた乳房を揉む／吐息／おれの口の中に洩れる

「ねえ、シャワー浴びようよ」

おれから離れショーツを脱ぐ結衣　火照った顔が幼さを消し女の色気を漂わせている　おれもボクサーパンツを脱ぐ／ガラス張りのバスルーム／浴槽に湯を張る結衣／シャワーの蛇口をひねる結衣／おれにシャワーをかける結衣　無邪気／邪気がないんじゃない／邪気存在に気づいていない　そんな笑顔。

おれはなぜかいつも女に先導されながら生きているなど、そんなことをふと思ったりした　こんな無邪気な子供にまでされるがままのおれ　だがそれも悪くない。

ボディソープを手に取り自分の体に塗りたくる結衣　その体をおれにくっつけてくる／互いの体を撫でまわし合う／泡をシャワーで流す　まだほとんど湯が溜まっていない浴槽に入る。

無邪気に湯をバシャバシャと叩いている結衣の手をつかむ　引き寄せる／されるがままに体をおれに預ける結衣　首に吸いつく／喘ぐ結衣

「キスマークなんか作ったら、間違いなく学校新聞に載っちゃうよ」
おれの耳元で吐息混じりの声を出す結衣。

「もしそうだったら、おれがキスマークをつけた犯人を探し出してやる。おれは探偵だからな」

クスクスと笑う結衣　「依頼料は取らないでね」

「おれは儲からない仕事はしないんだ。それがたとえかねじゃなかったとしても依頼料はちゃんといただく」

そう言っておれは、結衣の口をおれの口で塞いだ　絡み合う舌と舌／乳首を摘む／喘ぐ結衣／乳房を揉み乳首を擦る／喘ぐ結衣　流れ出る湯の音に掻き消される程度の喘ぎ声。

ジョンが捕獲される／小さな手の感触／喜ぶジョン／ゆっくり撫

でまわされる／喜ぶジョン　ジョンはジャンボサイズでジャンプ芸を披露した。

結衣がクスクスじゃなく　フツツと笑った　それはしのぶの笑いそのものだった／おれは思わず目を擦って結衣の顔をマジマジと見つめてしまいそうになった　毒のない女に毒を見た瞬間／処女の少女が売女に変身した瞬間　おれが結衣に感じていた結衣の中にある危険を具体的に察知した瞬間だった　十七歳にしてひとときのファックを楽しむ女／それが結衣　危険とスリルを共有し共感し共謀する女／おれが抗うことを諦め／惹かれ／溺れる／すべてを待ち合わせた女　それが結衣。

おれはそれでよかった　それ以上は何も求めないし求められないもどろすることもできない。遊びでよかった　同じ墮ちるならマジになってのめり込み墮ちるより、自墮落に遊び自墮落に生き自墮落が原因で墮ちるほうがよかった。要するにおれはまともな恋愛のしかたを知らないしできない男なのだ　結衣はおれのそんなところを知っていておれとファックしようとしているのだろう　だからしのぶと同じ顔で笑うのだ／望むところだ

おれは結衣の股の間に手を突っ込んだ／陰毛を掻きわけクリトリスを摘んだ／体を持ちあげて感じる結衣／膣に指を突っ込んだ／湯の中でもわかるほどに愛液が溢れ出していた

「ベッドのほうがいいな」　しのぶと同じ顔でおれを見おろす結衣　おれは結衣を抱きかかえ浴槽から出た／バスルームから出て結衣をおろした／バスタオルで適当に体を拭いた／そのまままた結衣を抱きかかえベッドまで行き、なだれ込むように転がった。

「荒っばいんだね」

「豆腐を掴むように扱われたかったか？」

「そんな女だと思って誘ったわけじゃないんでしょ？」　またフツツと笑う。

「自分で足を持って股を開きな」

結衣は自分の太ももに手をまわして両足を抱えて開いた　子供

のような陰茎／皺の少ない尻の穴／どつちも綺麗な色をしている

おれはジョンをぶち込んだ／目をギュツと閉じる結衣　自分の太ももから手を離しおれにしがみつく／おれは腰を振った／しがみつく手に力が入った／さらに腰を振った／長い爪が筋肉を引き裂くほどに力が入った／実際におれの二の腕には結衣の爪が食い込んでいた　目を閉じて小さい声で喘いでいる結衣を眺める　あと五年したら男の目をマジマジと見つめながら大きな声で喘ぐ淫らな女になっているんだと思うた／腰をさらに密着させた　結衣は簡単に絶頂を向かえた／体がビクツと小さく揺れた／二度目の絶頂に向かつてまた喘ぎ出した　おれは結衣を抱きかかえ体を入れ替えた／おれの上で腰を振る結衣　目は閉じられたまま／乳首を摘む／体を仰け反らせる結衣／小さな乳首は天を仰ぎビクツと小さく体を揺らした　おれは結衣を横に倒しジョンを抜いた／ジョンはピンク色に火照った結衣の腹に精子をぶちまけた

呼吸を整えるために大きく息を吸う結衣　小さな胸が膨らんだりしぼんだりしている。おれは立ち上がりソファの脇に散らばった服からタバコを取ってベッドに戻った。結衣の脇に座り火をつけて煙を吐いた。

「惚れちゃいそうだよ」　クスクス笑いに戻った結衣／おれの太ももに顔をくつつける。

「それはだめだ。おれといってもなんにもいいことなんかない」

またクスクスと笑った　「大人になるって大変なのかもね」

「大人になるのは大変じゃない。おれといてるくでもない人生を歩むのが大変なんだ」

「わたし年上が好きなの。だから年上とばっかり付き合っていたけど、有二を見ているとみんな子供に見えてくるよ」

おれは結衣の濡れた茶色い髪に触れた　「それはただの勘違いだ。おれは大人なんかじゃない、ただの男だ」

クスクス笑う結衣　ふと、何か思い出したような顔をしてクスクス笑いをやめ、体を起こした。ベッドから抜け出し、腹にジョン

が吐き出した精子をくつつけたまま冷蔵庫に向かった。小銭を投入しないと品物が取り出せないチープな冷蔵庫だった。おれは立ちあがってジーンズを拾い財布を取り出した。小銭を出し結衣に向かつて手を伸ばした。結衣は小銭を受け取り冷蔵庫に投入して自分用に緑茶を引っ張り出した。さらに小銭を投入しておれ用に缶ビールを引っ張り出した。それを持っておれのところまで来て、おれに缶ビールを渡してベッドに戻った。おれはタバコを消して結衣の隣に座った。結衣はおれの肩に手をかけ顔を寄せてきた。おれは少し前屈みになり結衣にキスをして細い肩を抱いた。緑茶の入った缶のプルトップを弾く結衣。

「そういえばね、愛莉も年上が好きだって言ってたよ」

おれも自分の缶ビールのプルトップを弾いた　豪快に半分近くまでゴクゴクと飲んだ。

「おまえくらい歳の女はみんな年上が好きになるんだ」

「そうじゃないよ。年上の彼氏がいるってことが言いたかったんだよ」

おれはまたタバコに火をつけた　タバコと酒のコンビネーションが頭の回転をよくすると錯覚しているからだ。

「それは高円寺と関係があるのか？」

「高円寺にこだわるんだね。そんなに魅力的な街なのかな？」
クスクス笑う結衣。

「ある意味ではな。はっきり言おう、おれは昨日の晩に愛莉が高円寺で何をしていたのかが知りたい」

おれの胸に頭を預けておれの目を覗き込む結衣　子供っぽい顔に戻っている。

「情報っていうのはおかねになるんでしょ？」

「飯くらいおごってやるよ」

「ご飯だけじゃだめ、今夜ずっと一緒にいてくれる？」

缶ビールを飲む　「それはだめだ、仕事があるからな。別の取り引きを考えな」

「じゃあ、わたしの彼氏になって」　クスクス笑わない／目がマジに見えた。

「それもだめだ。会いたいと思ったときに会うことはできる。恋人ごっこならいつでもしてやる。だが、マジになるのはだめだ。たとえなっていたとしてもなっていないようにしか付き合えん」

タバコを吸う　おれの腹にまわされている結衣の腕に力が入る。
「それでもいいよ。仕事がなくなつて別の誰かとの約束がないときでいい」

「それが懸命な判断とは思えないのはおれだけじゃないと思うんだがな」

「いいじゃない。それで手を打つて」

缶ビールとタバコ　おれはこの女の魅力に負けている／思考はぜんぜん鮮明にならなかった

「オーケー、それじゃ夕飯は少し贅沢なものにしてやるわ」

「やったね」　クスクスと笑う結衣。

「それで、何を知っているんだ？」

「年上の彼氏が誰だかは知らないよ。でもたしか高円寺に住んでいるって言っていたと思う。それとね……」　口ごもる結衣。

「なんだ、はつきり言つてしまえ」

「だつてなんか、友達を売るような真似をしているなと思つて」

おれは結衣にキスをした　それから腰に手をまわして乳房までゆっくり上に撫でながら移動させた　体がくねる結衣。

「もう一回エッチしてくれろ？」

「何回でもしてやるから吐いちまいな」

クスクスと笑う結衣　「その彼氏ね、援助交際で見つけたつて言つてた」

目の前が真っ白になりそうだった／援助交際　真由美のゴシツプ情報／揺れる脳みそ　結衣の体にしゃぶりついてなんとかこらえた　缶ビールを置いて結衣を押し倒したときに電話が鳴った　しのぶだ。

なんてタイミング　恐るべきしのぶ。出るのをためらったが、あまりシカトしていると面倒なことになると思って電話に出た。

「どこで何してんだバカ！」

絶対に結衣にも聞こえたであろうでかい声　いや／おそろく月で餅をついているバニーガールにだって聞こえただろう。

「仕事でな、ちよつと忙しかった」

結衣を見る　ベッドに横になっておれを見ている／クスクス笑いながら

「まあいいけどね、これから飲みに行くから出てきなさい」

『出てこれる？』ではなく　『出てきなさい』／命令／断ると

あとが怖い／だが今は無理

「今夜は無理だ」

「何よ、そんなに忙しいの？」

「まあな、おれだつてたまには忙しいときもあるんだ」

おれは結衣のそばまでいき細い太ももを撫でた　だんだんとまた処女の少女から売女の目が変わっていく結衣。

「女とホテルで激しいファックをするほど忙しいってわけね」

驚愕／なぜわかった！　恐るべきしのぶ／おれよりはるかに探偵に向いてるだろう嗅覚。

「まあいいわ、別の男を探すから。それじゃまたね、色男のタフガイさん」

電話は切れた　やれやれだ。

「今朝の綺麗な女の人でしょ？」　クスクス笑わずに大人の女の

目でおれを見る結衣／なんでわかるんだ　女つてのはどいつもこいつも　やれやれすぎる。

「帰らなくてよかったの？」　フフツと笑う結衣。

「情報料をまだ払ってないからな」

おれはそう言って結衣の体にむしゃぶりついた

アーバンビルド高円寺　　ビリヤード場のビルの手前／高橋のワゴン車　　三〇三号室の格子付き窓からは明かりが洩れている。七海は部屋にいる　　だが動きはなし／金曜の夜なのに外出したりはしない。

ビリヤード場はさっきまで賑わっていたが、徐々に人が減っていつている。警察はうるついでいない。いろいろと問題はあるが事故死で片付ける方向なのだろう。もう四〇四号室の封鎖も解除されている。

運転席でタバコを吸ってる高橋　　「おれはどうしても気になることが一つある」

「なんだ？」　　助手席で缶ビールを飲むおれ。

「下着泥棒の正体だ」

「ああ、それが本当に謎なんだ」

「おれはこっちの仕事は自分の興味でおまえに付き合っている。分け前はもらっているけどな。だけど、しのぶちゃんのストーカーに關してはおまえからちゃんと依頼を受けて報酬をもらっていた仕事だ。うやむやなままじゃ気が済まん。誰が下着を盗んだのか知りたい」

缶ビールを一口飲む　　「田辺がもし、一度ここに戻ってからまたしのぶのところに行つて盗んだのだとしたら、なぜそんなことをしたのだろうか」

窓からタバコの灰を振り落とす高橋　　「おれが見張っていたのがばれていたのかも知れない。それで大人しく引きさがつた。だが、諦め切れずにまた出向いた。あるいはおれが張り込みをやめたのを見計らつて行動に出た。そんなところか」

納得できるレベルの推理だ　　だが納得できない／おれの勘が納得するなど言っている。納得していないおれの顔を見る高橋。

「七海の可能性もある。あのときあそこにいたんだからな、おれが田辺を追ってここに向かっている間に盗んだのかもれない」

それもじゅうぶん考えられる　だが　そうなると七海は田辺を尾行していたんじゃないかってことか／田辺が何をしているのか探っていたんじゃないのか／しのぶの下着を盗むのが目的だったのだろうか。

「だがおれは、田辺が盗んだって考えるのが一番スマートだと思っている。事実、あいつがしのぶちゃんの下着を持っていたわけだから」タバコを灰皿に擦りつける高橋　「おまえの説を聞かせろよ、ボス」

「おれのか、そうだな」　タバコに火をつけるおれ／ゆっくり吸い込みゆっくり吐く　「おれは女子高生が犯人だと思っている」

「田辺殺しのか？」

「田辺は殺されたのか事故死なのかはわからん。警察がやる気を出していないから、おそらく一生わからないだろう。だが、田辺が死んだときに女子高生が四〇四号室にいたのは間違いないと思う。女子高生がしのぶの下着を盗んで、田辺に渡したんじゃないかと思う」
「下着泥棒ってのは、常習犯がほとんどだ。田辺のためにそのときだけってのは考えづらいんじゃないか」

カップホルダーに収まっている缶コーヒーを手に取る高橋　揺すって中身があるかを確認してから飲む。

「あんな誰でも侵入できちゃうベランダだ、通りがかりの幼稚園児にだって簡単に盗める。プロだのマニアだけに限定するような難しさじゃない。女子高生は、田辺がセーラー服のリボンがほしいと言ったら持つてくると言った。そして実際に首に巻いて死んでいた。しのぶの下着も田辺がほしいと言って女子高生が用意したんじゃないだろうか」

高橋が何か思いついた顔をしてシートから体を起こした　「しのぶちゃんの下着を外に干さなくなったのか？」

「ああ、おまえが見て興奮してるって言ったら、部屋に干すように

なった」

笑う高橋 「もう一度外に干させるよ、おれが興奮しながら張り込んでやる」

「もし、常習犯の仕業なら、また現れるってわけか」

「ああ、おびき寄せ作戦だ」

「明日の晩に決行しよう。もしかしたらこの車を覚えられているかも知れない。どこか離れた場所に駐車して、おれたちは別の場所に隠れていよう」

「目の前の駐車場なら隠れるのに都合がいい。それとしのぶちゃんの部屋から見張れば目の前で犯人を見ることが出来る。おれはカメラを用意して駐車場に隠れる。おまえはしのぶちゃんの部屋で、明かりを消して息を殺して覗いている」 高橋の声にやる気がみなぎってきている。おれは缶ビールを飲み干してコンビニの袋に突っ込んだ。それから同じ袋に入っているもう一本の缶ビールを取り出してプルトップを弾いた。

「めぐみとはどうなんだ？」 素っ気ない声で聞いた。

「ん？ ああ、まあぼちぼちな」 高橋も素っ気ない声で答えた。

「野暮用つてのはそれだったんだろ？」

「ばれていたか」 笑う高橋／＼タバコに火をつける 「なんていうか、寄りを戻しつつあるって感じた。まだわからんがな」

「そうか」

「あれつきり、つまりチヂミを買っていたときからってことだが、連絡を取り合っている。今日は飯を食って買い物に付き合った。だからこれから、かねがかかる生活になりそうだ。それでこんな風におまえに雇われて働いているってわけだ」

「そうか」

「風俗情報誌の仕事はかねにならんからな。今どきはインターネットに押されて、雑誌はぜんぜん売れない。おれのところもホームページから配信している有料コンテンツはバカみたいにアクセスが上

がるんだが、雑誌の売れ行きは日に日に低下している」

「おれに頼らずとも、おまえは盗聴で儲けてるんだろ」

「まあな、だけどもまえ、昔の女と寄りを戻そうって思っている男つてのは、昔よりも格好つけてみたりするんだよ。だからかねがかかるんだ」

笑うおれ 「そりゃ大変だな」

「おまえこそ、今日はどこの女と一緒にだったんだ？」

おれは何食わぬ顔をして缶ビールを飲んだ 「そういう嗅覚は女だけの特権かと思っていたが、どうやら違うみたいだな」

笑う高橋 「そりゃおまえ、いつもは酒とタバコと埃の匂いをさせている男が、ボディソープの、それも安いボディソープの匂いをプンプンさせて、洗顔したばかりですってなすつきりした顔で登場すれば、誰だってそう思うさ」

「そうか、ラブホテルで顔を洗うのはやめたほうがいいんだな。今度からは気をつけよう」

笑う高橋 「当ててやろうか？ この前言っていた女だろ。小銭をばら撒いたおかげでって言っていた女、ハイネケンに感謝するとか言っていた女だ」

「よく覚えているな、そんなこと」

「情報化社会だからな。ちょっとしたことでも記憶に留めておかないといかん」

笑うおれ 「おれはどうも、こんな商売をしている割には、そこから辺に疎い」

「ああ、おまえは情報なんかよりも根性を大事に仕事してるからな。細かい情報を少しずつ集めるような手間を惜しんで、超タフガイで勝負しちまうタイプだ」

「そうか、だからこんなないつもボロボロなんだな」 笑うおれ。

「そろそろ知恵を使うことを考えないと、いつか本当にボロ雑巾になつて捨てられちまうぞ」

缶ビールを飲んだ 「そしたらきつと、今日抱いた女も、おれ

が今まで抱いてきた女たちもみんな、おれを捨てていなくなるんだろうな」

「かもしれないな。おまえのタフガイっぷりに惚れている女は、みんないなくなるだろうな。残るのはきつと、しのぶちゃんだけだ」

しのぶか 危険とスリルがなくなつたおれを相手にしてくれるとは思えないがな 牙の抜けた狼は死ぬのを待つだけだ。

「それで、今日の女はどんなだった？ 美味かったか？」

「ああ、危ない香りのするおれ好みの女だった。まだ子供なのにな」「ついに子供にまで手を出すようになったか、おまえは」 笑う

高橋。

「たぶん、しのぶがあ歳のときはもつとろくでもなかったんだろうが、今日の女もしのぶみたいなの危険な匂いがする女だった」

「おまえは結局いつも、しのぶちゃんだ。ほかの女の中にしのぶちゃんを見てるんだ」

「ああ、あいつはおれのエンジェルだからな」

笑う高橋 「あまりにふしだらなことばかりしていたから、神様に翼を折られて墮ちてきた墮天使ってことだろ」

「いや、あいつはきつと、自分で羽を折って、汚れた世界に舞いおりたに違いない。天国じゃあいつ好みのファックができなかったんだろっ」

笑う高橋 「そっちのほうがかもつともらしく聞こえるから不思議だ」

おれは缶ビールを一気に飲み干した 「めぐみと再開してから、寝たのか？」

顔が引き締まる高橋 「いや、まだだ。まだって言うても、おれもおまえと同じで、そんなに身持ちがいいほうじゃない。つまり、試みてはみたんだがな、だめだった」

タバコの煙が車内に充満している おれは窓を全開にした。

「めぐみは今でも、セックスには臆病だ。臆病って言うよりも、恐怖を感じている。だが、おれはおまえと違うからな。一人の女と抱

き合つ覚悟をしたら、ほかの女には手を出さん、雑誌の仕事以外ではな。安心しろ、おまえの姉貴を軽率に扱ったりは絶対にしないさ」
おれは結衣の顔を思い出して、フツツと笑ってみた　上手い
かなかつた。

「そんな心配はしてないさ。おまえがどんな男かはよく知っている
からな」

「そうか、おれもおまえがどんな男かはよく知っているけどな」
笑う高橋。

おれも笑った　めぐみの話をしてマツ八六にならなかったこと
で、いつも以上に愉快に笑えた。

千鶴からの電話／昨日の愛莉の監視をすっぱかした言い訳をするおれ。

「ああ、すまない。別件の依頼で急に状況が変わってな。今度からはちゃんと連絡する。で、愛莉はどうしているんだ？」

「昨夜はちゃんと帰って来られました。今日はまだご自分の部屋にいます」

「そうか、そりゃよかった。ああそうだ、門脇七海の父親の名前がわかった。門脇大輔、大きいに、車偏の輔。六十七歳だ」

「ご苦労様です。その通りお伝えしておきます。それではまた」
電話が切れる。

昨夜は明け方まで高橋の車で張り込みをしていた。明け方に帰ってきてさつきまでぐっすり寝ていた。今の時間　午後五時過ぎ。まだベッドの中。起き上がる元気がない。七海は結局まったく動かなかった　途中から張り込みなどどうでもよくなっていた。ただ男同士であれこれと話をしていたかっただけ。

事務所のスチールドアを叩く音　ノックと言つにはあまりに乱雑／憎しみさえ感じるほどの勢い　しのぶだろつ。

だるい　体を起こして寝室を出る／鳴り続けるノック／シヨツトガンをぶつ放しているようにも聞こえるノック　鍵を開ける／ノブをまわす／銃声がやむ　ドアを押す。

何も言わずにカツカツと甲高いヒールの音をさせて入ってくるしのぶ　ソファーにバウンドする勢いで座り込む。

「ああ、喉が渴いた！」

おれはドアを静かに閉めて、キッチンの冷蔵庫から缶ビールを取り出し、しのぶのところへ持っていった。奪い取りプルトップを弾くしのぶ　ゴクゴクと喉を鳴らして飲む。それからおれを見て睨む

「あんだ、あたしのこと無視してんの？」

「なんでだ。そんなつもりはないぞ」 おれはしのぶの隣に座った。

「何回電話したと思ってるのよ！」 おっかない顔のしのぶ。

「寝てたんだ、今さっきまでな」

「朝まで女と何回ファックしたのよ」

タバコに火をつけるしのぶ 旦那の不倫を咎める人妻ような勢いだ。

「高橋と七海の張り込みをしていたんだ。昼間は警察がうるついでいるだろうから、夜中に張り込んでみた」

「やれやれって顔のしのぶ」 「どうせならもっとマシな嘘にすればいいのに。まあいいわ、別にあんたが誰と寝ていようがどうでもいいのよ。今夜は飲みに行けるんでしょ？」

忘れていた 結衣と一緒にいるときにかかってきたしのぶからの電話で、そんな約束をしていたんだ。結衣の相手をするのに夢中でしのぶとの会話は適当だった。

「今夜はだめになった」

ものすごい形相でおれを睨むしのぶ 「どういうことよ、また女なの！？」

「違う、落ち着けよ。おまえの家の張り込みだ」

「なんで、うちを張り込むのよ？」 怪訝な顔になるしのぶ。

おれはタバコに火をつけた 「おまえがおれに下着泥棒を捕まえろって依頼したんだろう。だから張り込むんだ」

「どういうこと？」

「段取りはこうだ。おまえはまた、外に下着を干す、高橋が目の中の駐車場で張り込む。おれとおまえは、おまえんちのリビングで明かりを消して声を潜めて、カーテンの隙間からベランダを監視する。わかったか？」

あつという間に機嫌がよくなり、目を爛々と輝かせているしのぶ 「それで？ それで？」

「それでも何も無い。それだけだ。それを可能な限り毎日続ける。もしも下着泥棒が田辺じゃなくなつて、しかも常習犯であるなら、また盗みにくるはずだからな」

おれはしのぶの手から缶ビールを奪つて一口飲んだ。

「なんかとつても面白そうじゃないの」　もうさつきまでの不機嫌はブラジルの先まで吹っ飛んでアマゾン川のピラニアにでも食わせちまつたようだ。

「時間は九時。その前に高橋と三人で飯でも食おう」

「わかつたわ、女子高生とホテルにいたのは許してあげる」

なんとという！　なんで女子高生だつてわかるんだ??

「そんなに驚かなくつてもいいわ。あたしは別に超能力者じゃないわよ」

「じゃあ、なんだ？　おれの体に盗聴器でも仕掛けていたか？」

フツツと笑うしのぶ　「男つてなんでも顔に出ちゃう生き物なのよ」

そう言つておれの顎に手をあて、キスをするしのぶ　「で？」

結衣ちゃんだっけ？　いったい何発やったのよ」

やれやれ　なんでわかるのか本当に不思議だ。

「何発だつていいだろう」

「あんたの粗チンで満足させられたの？」　ニヤリ顔のしのぶ。

「さあな。おれはじゅうぶんに満足だつたがな」

おれの腹にしのぶのパンチ！　「嘘言わないの。あんたはあたしじゃなきゃ満足できないんだから」

そう言つて、またキス　いやらしい舌がおれの唇を押し開いて侵入してくる。しのぶの手がジーンズの上からジョンを捕獲する。

「中学生じゃないんだから、キスしただけでビンビンにしてんじゃないわよ」　ニヤリ顔のしのぶ。「これじゃ、いまどきの高校生は満足させられないわよ？」

「いいんだよ、こんなんでもヒイヒイと喘いで何度もいっちまうチビのアバズレ女だつているんだからな」

ウインクするおれ　　ジヨンが握り締められる。

「本当あんたって、憎たらしいヤツだわ」

「鍵ぐらい閉めたほうがいいんじゃないか？」

「開いていたほうがスリルがあつていいのよ」

「おまえはいつもそうだ。じゃあ遠慮しないぜ」

おれはしのぶの乳房を服の上から揉んだ／しのぶはおれのジーンズのジッパーをおろした／ジヨンはジーンズから顔を出してジャンプする　おれはジーンズを脱いだ／しのぶがボクサーパンツをおろした　あらわになつたジヨン／しのぶの手の温もりでさらに元気になる

しのぶはショーツを脱がずに横にずらしてそのままおれにまたがった　飲み込まれるジヨン／カウガールのじゃじゃ馬馴らし

しのぶのシャツをまくりあげる／ブラジャーを上にはずらす／たいして大きくない乳房を揉む／喘ぐしのぶ／腰を振るしのぶ／乳首を摘む／喘ぐしのぶ／乳首をつねる／喘ぐしのぶ／乳首を弾く／喘ぐしのぶ／乳首に吸いつく　仰け反るしのぶ　乳首に吸いついたまましのぶの腰に手をあてる／おれの腰をグツと押し付ける　魂が抜けるような息を吐くしのぶ　腰の振りが激しくなるしのぶ／乳房をおれの顔に押し付ける／ビクンビクンと体を震わせ絶頂を向かえるしのぶ

「まず一回目だ」

「バカ……」

おれはジヨンをぶち込んだまま体を入れ替えてしのぶをソファーに寝かせた　しのぶのドアノックのような勢いで腰を突く／真っ白な肌がピンク色に変わる／ピンク色の乳輪との境目があやふやになる／揺れるといえるほど大きくない乳房をわし掴みにする／喘ぐしのぶ／シヨットガンがマシンガンに変わる／喘ぐしのぶ　おれを見たまま喘ぐしのぶ　そして目をきつく閉じて二回目の絶頂を向かえる　膣がものすごい勢いで痙攣する／ジヨンは耐え切れずにしのぶの中で射精した

「絶対に真由美にも聞こえていたぞ」 おれはわざと意地悪くそう言った。

「あの人はこんなことじゃ驚かないわよ」 おれから離れてビシヨビシヨになったシヨーツを脱ぐしのぶ／それをおれの前でヒラヒラと振って見せる。

「ねえ、これをそのまま干しておいたら下着泥棒もすぐに現れるんじゃないかしら？」

「だめだ。そいつの匂いを嗅いでいいのはおれだけだからな」

「それは違うわよ。あたしはあんた専用の女じゃないんだから」

しのぶのマンション　高橋は向かいの駐車場／車の影から赤外線カメラを構えている。

おれとしのぶは、しのぶの部屋のリビング　いつでも飛び出せるように靴を履いている／窓の鍵を開けてある。

ベランダ　小さな床置き式の物干し台　しのぶの下着／しのぶコレクションの中でもとりわけど派手なヤツ／五セットまとめて放出

高橋から電話　「おれは真っ赤なヤツが好みだ」

おれの返答　「おれは青と白のヤツだな。おまえ赤外線カメラなのによく色までわかるな」

笑う高橋　「見るんじゃない、感じるんだよ、ボーイ」

大笑いするおれ　「おれはまだまだ修行が足りないってことか」

おれの隣のしのぶ　「恥ずかしいからやめてよね、バカ！」

何もかもが作戦通りに展開している　あとは下着泥棒が現れればいいだけなのだが、こればかりはおれにも高橋にも、しのぶにだってどうすることもできない。そもそも下着泥棒が常習犯かどうかさえわからない。ただし、もし常習犯ならば、下着が干してあるうがなかるうが巡回しているはずなんだ　つまり、昨日も一昨日もその前も、下着が干してないか見に来ている可能性が高い。そしてもちろん今日もだ

おれは真っ暗闇の中にいた　明かりはマンションの通路にある外灯と、目の前の通りにポツポツとある外灯のみ。こちらへんは閑静な住宅街だから、静かで暗い。部屋の照明を消して、カーテンを閉めている状態のリビングは真っ暗闇と言つていいほどだ。おれはカーテンをほんの少しだけはだけ、外を見ている。しのぶはそんなおれを見ている　見えているかわからない暗さなのだが、なんとなくは見えている。ここのカーテンは遮光カーテンになっている

から、外からおれとしのぶが見られることはない。おれがカーテンに近づきすぎて、カーテンを揺らさない限りは問題ない。

おれはしのぶを見た　正確に言えばしのぶがいるほうに向いた。だが、そこにしのぶはいなかった。飽きてしまつてソファアに座り携帯電話をポチポチいじくっているようだ。ソファアがあるだろう辺りに、ぼんやりと携帯電話の画面が見える。時間は十一時　前回下着を盗まれたのはもつとずっと遅い時間だった。おれは音を立てないように静かに靴を脱いで、しのぶがいるであろう場所に移動した。

手探りで歩き、ソファアが薄つすら見えたところで、しのぶの隣に座る。

「何やってんのよ、あんたはちゃんと見張つてなさいよ」　ヒソヒソと言つしのぶ。

「どうせまだ来ないだろう」　おれも小声で言つ。「自分の下着が盗まれるつてのはどんな気分だ？」

「盗まれるだけなら、高い下着だったのにつて思うくらいで済むけどね。あんなことに使われているのを見ちゃうと、ぞつとするわ」

田辺はしのぶの下着を身に着けていたから　しかもそこからイチモツを出して射精までしていた　尋常じゃない。

「その割には、この作戦にずいぶん乗り気だったじゃないか」
「だつて、面白そうじゃない。それにちよつと興奮するしね」

しのぶの興奮には二つの意味がある　一つは犯人を捕まえる興奮／もう一つは自分の下着で欲情する男を見る興奮　おれはしのぶの太ももに手を乗せた／ビクツと反応するしのぶ／指を太ももの内側に這わせる／自然に足が開いてしまつしのぶ　そのまま足の付け根まで指を這わせる。

「何してるのよ、バカ」

「興奮するんだろ？」

「そついう意味じゃないでしょ」

真つ暗闇でしかも小声という状況がさらなる興奮を生む　おれ

はしのぶの首に舌を這わせた　　仰け反るしのぶ／声を出せない興奮／シヨーツの上に指を這わせる　　もう湿っている。

「素直な体だな」

「誰のせいよ」

おれはしのぶにキスをした　　静まり返ったりビングにしのぶの吐息と唾液が絡み合う音が響く　　ゾクゾクする興奮。

「これじゃ下着泥棒に気づかれるな」

「だったら離れてちゃんと見張っていないさい」

見張っていると言う割にはおれから離れないしのぶ　　シャツの下に手を突っ込む／腰／背中／へそ／手を上へ　　ブラジャーの中に手を突っ込む／尖った乳首／撫でる　　興奮／スリル／快感

合言葉／ばれるな／うまくやれ　　いったい誰にばれるんだ？／そういう問題じゃない／そういう妄想を抱ける環境が興奮を生むのだ。

しのぶがジーンズのジッパーをさげる／ボクサーパンツをずりさげる　　おれにまたがる　　導入／揺れるソファアの音／喘ぎ声を押し殺す／振られる腰／服が擦れる音／荒い息遣い　　あつという間に絶頂を向かえるしのぶ／おれに抱きつき息を整える　　ジヨンを抜いておれの前にしゃがみ込む／ジヨンを飲み込むしのぶの口

口の中に精子をぶちまけるジヨン　　精子を飲み込む音

しのぶがおれの膝の上に座る　　「こんなことしてて高橋さんに怒られるわよ」

小声の色気／小声の魅力／小声の魔力

「おれが高橋の雇い主だ。文句は言わせん」

「パンツさげたまま格好つけてもサマにならないわよ」　　フフツと笑うしのぶ。

通常サイズに戻ったジヨンがしのぶの太ももに触れる　　おれはしのぶをソファアにおろして立ちあがり、ジーンズを履き直した。尻の携帯電話が振動する

「現れたぞ。いちやついてないで仕事しろ」

おれのまわりはおれの行動をお見通しなヤツばかりだ　　おれは

電話を切って静かに窓に向かった。

カーテンの隙間　通りからベランダにつながる石畳の通路に人影　足音一つさせない／ベランダの敷居の扉を静かに開ける／慎重な行動／素早い行動／手馴れている／常習犯

しのぶがおれの背後に来る　おれの頭の下からカーテンの隙間を覗く／俺の腕にしがみつく手が震えている。

おれは見た　ベランダ／黒い野球帽／黒いＴシャツ／黒いジーンズ／黒い男　床置き式の物干し台／しのぶのハレンチな下着

洗濯バサミを音も立てずにはずしていく／手際がいい／ものの何秒かですべてはずす　上下五セットの下着が黒い男のバッグに収まる　目の前／わずかメートル／捕まえる！　俺の腕を握るしのぶの手に力が入った　ゴー・サイン。

おれは窓を勢いよく開けた　驚く黒い男／後ろ向きに倒れる／飛びかかるおれ　横に避ける黒い男／起き上がり石畳の通路に向かって走り出す／追う　正面の駐車場から高橋／黒い男をカメラに収める／黒い男は右に曲がる／走る／おれも走る／高橋も走る／走る／走る／走る　黒い男の背中／Ｔシャツを掴む／転がり込む黒い男　おれも転がる／転がりながら蹴られる／Ｔシャツが破ける音／地べたを這いずる／手足をばたつかせる／だがおれは掴んだ手を絶対に離さない　蹴られる／黒い男の足がおれの顎をかすめる／絶対離さない　高橋がカメラバッグを置いて黒い男を取り押さえる／暴れる黒い男　おれも黒い男を抑え込む／暴れる黒い男　三人の荒い息が閑静な住宅街に響く。

おれは言った　「大人しくしろ、警察は呼ばない。約束する」
暴れる男　「はいそうですかと大人しくなるバカがどこにいますんだ」

おれは言った　「このままここで暴れていたら、だれかに通報されるだけだぞ。警察は呼ばない。おれの質問に答えればその下着はくれてやる。持って帰って好きに使え」

男は大人しくなった。おれは続けて言った　「立て。大人しく

ついて来い」

おれは男の腕を背中側でねじり立ちあがらせた。背後からカツカツと甲高い足音が聞こえる。しのぶだ。

おれはしのぶに言った。「予定通りに決行する。部屋の戸締りをして、マンションの前で待っている」

何も言わずに引き返していくしのぶ。

高橋が言った。「ここからが本番だな」

男が言った。「何をやる気だ」

おれは言った。「なんにもしやしない。いくつか質問したいだけだ。ついて来い」

高橋が歩き出す。おれは男の腕をねじりあげる／高橋に続いて歩き出す／男もおれに押されて歩き出す。

阿佐ヶ谷 廃ビル／しのぶの持ち家の一つ 地上二階／地下一階／ワンフロア二十平方メートル程度の小さなビル／おそらく飲み屋かなんかだったのだろう おれたちはそのビルの地下にいる。場末のスナックを思わせる店内 濃い茶色のカウンター／紫のスエード張りのハイスツール／ワインレッドのスエード張りのソファ／ガラスのソファアールテーブルが四つ／下品を絵に書いたような店内 今はもう埃と蜘蛛の巣だらけ。

ここはおれの超タフガイ尋問部屋。

おれたちは下着泥棒をカラオケ用の小さなステージに座らせた手は背中側で手錠に繋いである／その手錠にさらに手錠を繋げカラオケの機材をセットしてあったラックに繋いである。

男の隣に高橋／男の正面におれ／少し後ろにししのぶ

男は四十代後半くらいに見えた／帽子を取った髪は白髪混じりの短髪／痩せた顔で頬はこけて無精髭にも白髪／爬虫類のような細くも大きくもない不気味な目／浅黒い肌／薄っぺらい唇を蛇のような舌でペロツと舐める。

男は言った 「そのねえちゃんの下着か？ 興奮するねえ」

ニタリと笑みを浮かべる男 ししのぶの眉間に皺が寄る。

おれは言った 「無駄口は叩くな。おれが質問したことにだけ答えればいい」

「タフガイかい？ 今どきそんなの流行らねえぜ。おまえら警察か？」

高橋は何も言わずに、男の脇でタバコを吸いながら男が暴れださないか目を光らせている。高橋とおれ／どっちも身長はたいして高くない 高橋は一七五センチ／おれに至っては一七一センチしかない／体格がいいわけでもない 筋肉はそれなりにあるがおれも高橋も線は細い 二人並んでもタフガイを気取るにはいささか迫

力に欠ける　だがそれでも超タフガイ戦法を貫く。

「だったらどうだったってんだ。いいか、これからおれがおまえにいくつか質問する。おれの欲しい答えが聞けたら、おまえは自由の身だ。おれの欲しい答えが聞けなかったら、おまえは刑務所行きだ。わかっただな」

ニタリと笑みを浮かべる男　「おまえが知りたいことをおれが知らなかったらどうするんだ？」

「さあな、知っていることを祈るんだな」

おれはタバコに火をつけた　高橋の車に乗っけておいたワイルド・ターキーのキャップを開ける／一口だけラツパ飲みする／舌の上で酒を転がし感触を味わってから一気に飲み込む　喉が焼ける快感。

ワイルド・ターキーと一緒に持ってきたオールドファッション・グラスに酒を注ぐ／男の口にグラスをあてて傾ける　男はツーン・フィンガーを一気に飲み干した／さらに注いでまた飲ませる　今度はワン・フィンガー。

「さっさと質問しろ。おれをさっさと自由にしろ」

酒の勢いで機嫌が良くなる男。

「おまえのバッグにはほかに下着があった。おまえは下着泥棒の常習犯だ。そうだな？」

「だったらどうだったってんだ？」

「なぜあの家の下着を盗んだ？」

笑う男　「下着泥棒が下着を盗むのは当然だろ」

「五日前にあの家の下着を盗んだのもおまえか？」

「そんな昔のことは忘れたな」

「答える」

「知らねえなあ」

男の太ももに蹴りを入れる　「五日前だ、月曜の深夜、火曜の未明」

「盗んだかもしれねえなあ。おれは下着泥棒だからな」

「誰かに頼まれたのか？」

「知らねえなあ」

脇腹に蹴り 前屈みになって苦しがる男。

「答える」 おれは男の前にはやがみこんだ／男の髪の毛を掴み

顔を上げさせる／ニタリと笑みを浮かべる男

「下着が好きなのか？」

「おれは下着しか盗まねえ。おれはもう二十五年下着泥棒をやっている。一度も捕まったことはない」

「殺しはやらないのか？」

怪訝な顔をする男 「下着泥棒しかやらねえ」

「盗聴はやらないのか？」

「下着泥棒しかやらねえ。おれはそれに誇りを持っている」

「盗んだ下着は何に使うんだ？」

「バカがおまえ。そんなの決まってるだろ。おれは十四歳のときにおふくろの下着の匂いを嗅いで以来、下着でしか射精してねえ」

脳みそが揺れた 震度六／目の前が墮ちる おふくろの下着

／おふくろの匂い おれはワイルド・ターキーをラツパ飲みした。

「月曜の深夜、火曜の未明。あの家の下着を盗んだのはおまえか？」

「知らねえなあ。だったらどうだってんだ？」

いつの間にか右手にブラスナツクルがはまっていた 腹を殴る

／口から涎を垂らして喘ぐ男。

「誰に頼まれた？ 誰にその下着を渡した？」

「知らねえ」

腹にブラスナツクル ウシガエルが鳴いたみたいな声を出す男

／涎が溢れる。

「誰に渡したか言え」

「知らねえ」

ブラスナツクル 目玉が飛び出そうになる男／涎が垂れる。

「田辺か？」

「誰だそいつ？」

プラスナツクル 顔が歪む男。

「田辺を殺したのか？」

「田辺つて名前の知り合いはいる。だがおれはそいつに下着を渡したりはしていない。ましてや殺したりなんかしていない。おれは下着泥棒しかやらない」

「アーバンビルド高円寺、四〇四号室の田辺洋一だ」

「何を言っているのかさっぱりだ」

みぞおちにプラスナツクル 呼吸が止まる／呼吸が再開されるまでに三秒／思いつきり息を吸い込み涎と一緒に息を吐く。

「わ、わかった。そうだ、おれの知っている田辺はそいつだ。だが本当にそいつに下着は渡してない。殺しもしていない。あいつは死んだのか？」

「じゃあ誰に売った？」

「知らねえ」

プラスナツクル 顔面に／頬を切り裂く／血と涎が口から垂れる男。

「男か？ 女か？」

「知らねえ。だが、下着で興奮するのは男だけとは限らねえ。おれは昔、見たことがある。弟の下着の匂いを嗅ぐ女をな。もつとも、その弟は母親の下着の匂いを嗅いでいたけどな」

震度六 揺れる／墮ちる 冥王星が見える／ぶっ飛ぶ／マツ

八六 姉貴がおれの下着を／おれがおふくろの下着を 酒だ／酒が必要だ ワイルド・ターキー／ラツパ飲み／焼ける喉／地球に舞い戻るおれ

「売ったヤツの名前を言え」

「知らねえ。だが、おれが昔見た家族のように下着の匂いが大好きなヤツはみんなおれの仲間だ。兄弟だ。黒んぼが言うところのブラザーつてヤツだ。ブラザーが下着を欲しがるなら、いくらでも売ってやる。家族の下着が大好きな変態にならいくらでも売ってやる！」

マツ八六 冥王星でねずみのカウボーイがオスカー・シュニツ

ツエルにしのぶの下着を巻きつけてしごいている／ニタリと笑うカ
ウボーイ／息荒げにしのぶの下着の匂いを嗅ぐカウボーイ／それは
さっきしのぶが濡らしたばかりの下着／まだ濡れている下着／おれ
も嗅いだ／おれが嗅いだのはしのぶの下着じゃなかった／おれが嗅
いだのはおふくろの下着だった／めぐみの下着だった／堕ちていく
気が狂う　　堕ちていく／気が狂う／堕ちていく　　酒だ／ラ
ツパ飲みしろ

口に含んだワイルド・ターキーを男に向かって嘔きかけた　目
を焼かれる男／大声でわめく男／暴れる／手錠がガチャガチャと音
を立てる。

「言え！　誰に売ったか言え！」

おれは男の胸倉を掴み腹にプラスチックを打ち込んだ／三発
胆汁を吐く男。

「言え！　誰に売ったんだ！　田辺か？　七海か？　女子高生は誰
だ！！　言え！！！」

「し、知らねえ！　やめてくれ！！！」

プラスチック　　腹／顔／腹／顔／腹／顔　　顔／顔／顔

「言え！！！！！」

振りあげたおれの腕を誰かが掴んだ　　高橋だ。

「もうやめろ！　殺しちまうぞ」

男は白目を向いていた　おれはワイルド・ターキーをラツパ飲
みした／立ちあがる　ワイルド・ターキーをカウンターの中にぶ
ん投げる／割れて砕け散る　下着／誰が下着を／おれじゃない／
おれはおふくろの下着の匂いが好きだったただけだ／めぐみの匂いが
好きだったただけだ／おれは／おれは／おれは！！！！！！

「こいつは痛めつけても吐かない、これ以上は無駄だ。このままど
こかに放り出しておこう。警察にたれ込んだりはしないでらう」

カラオケのラックから手錠をはずして、男を抱え引きずっていく
高橋　ピクリともしない男／めぐみもそうだった　何時間も動
かなかつた／ピクリともしなかつた／生きているのかわからなかつ

た／死んでいるのかわからなかった／おれは叫ぶしかなかった！！

おれの体はガタガタと震えていた　目の前の高速スクロールが
加速する／見えない　記憶が遡る　二十五年前／やめてくれ／
おれを連れ戻すのはやめてくれ／おれはもうあの頃のおれじゃない
！／やめてくれ

「やめろ！！！！！！！！！！」

スクロールが止まる／震えはぜんぜん止まらない　おれの目の
前にはしのぶがいた／おれを見ていた／震えるおれを／涙が止まら
ないおれを

しのぶは泣いていた　誰だしのぶを泣かせたヤツは！！！！

おれに抱きつくしのぶ　「大丈夫よ……」

体の力が抜けていく　しのぶを抱きしめようとして、血だらけ
のブラスナツクルに気がついた／拳の皮が擦り剥けていた／男の血
とおれの血が混じり合って滴っていた　こんな手じゃしのぶを抱
きしめてやれない。

しのぶを泣かせていたのはおれだった

下着泥棒は高橋の車に乗せて阿佐ヶ谷の線路下の空き地に投げ出してきた。下着泥棒を二十五年も続けていたというのが本当なら、ベランダやコインランドリーだけじゃなく、住居侵入もしているだろうから、おれたちのやったことを警察に通報するようなことはないだろう。それに、あれだけ痛めつけても何も吐かないタフな男だ、余計なことに関わるようなヤツじゃない。放っておいても問題ないだろう。

むしろ心配なのはおまえだ　高橋にそう言われた。あれだけ酒を飲んでいたのに、過去のトラウマがフラッシュバックしていたおれ　マツ八六を抑え込むために酒を飲んでいたのに、マツ八六はおれを襲った　ワイルド・ターキーを一パイントも飲んでいたのに、マツ八六はおれを襲った

やれやれすぎる　もう本当にこの商売には向かない体質になってしまったのかもしれない／トラウマに囚われ／フラッシュバックでフラフラする／そしてそれは日増しにひどくなる

おれは高円寺にいた　アーバンビルドの張り込み／昨夜のことはもう考えないようにしよう。辺りはもう暗くなっている　七海の部屋の明かりはついていない。

七海が帰宅するまでビリヤード場にいることにする　階段／両開きのガラスドア／中に入る　台はざっと見ても十台以上／常連と思われる客が数人／それぞれ一人で一台を使って練習に励んでいる　窓際の奥にあるカウンターに向かう。おそらく高橋の言っていたであろうおばちゃんのカウンターの奥にいる。おれはおばちゃんにかねを払い、窓際の台を要求した。窓際が一番隅っこの台が空いている　あそこがいいとおばちゃんに言った。おばちゃんはどこでも好きなところでいいよと言った。おれはビールを注文してかねをもう一度払い、渡された缶ビールを持ち、壁にかけられたハウ

ス・キューを取って、その台に向かった。

並べられた玉を手で適当に崩して、玉を突く　一回突くことに外に目をやる　この席からは七海の部屋のドアが見えない。見えるのは各階の四号室だけ

缶ビールのプルトップを弾く　ビールを飲む／タバコに火をつける　そしてまた外を見る

おばちゃんの見聞はたしかこうだった　四〇四号室に女子高生が入っていったのを見た

もう一つ　アーバンビルドより手前の道路つばたにある工事現場の前に黒い車が止まっていた

たしかにここからなら両方目撃できる　ここからなら

何かがおかしい　なんだかわからない　玉を突く／五番をコーナー・ポケットに落とす／外を見る　何かがおかしい　玉を突く／八番をサイド・ポケットに落とす／外を見る　何かがおかしいんだ　玉を突く／二番が狙ったコーナー・ポケットをかすめる／外を見る　なんだいったい　タバコを吸う／缶ビールを飲む

瞬き／タバコとビールで頭が冴えるつてのは嘘じゃなかった！

おれは走った　走って店を出た／階段を三段飛ばして駆けおりた／アーバンビルドに向かった／階段を三段飛ばして駆けあがった

三階／三〇三号室の前

見えない！！　見えるわけがない！！　こんなに息を切らして走ってこなくつてもわかったことだ／頭より行動が先に出るおれのくたびれ損

三〇三号室の目の前は工事現場なんだ　ビリヤード場も見えないきや工事現場の前に止まっていた車も見えないんだ！！

三〇四号室の前に移動する　ビリヤード場の端っこが見える／おばちゃんがカウンターに座って真由美が好きそうなゴシップ雑誌を読んでいる　だが工事現場の向かいに止まっていたであろう車はここからでも見えない！！

七海の目撃証言は嘘っぱちだったんだ

瞬き／下着泥棒が言っていた　『下着が好きなのは男だけとは限らない』

女だ！！　あの変態下着泥棒がしのぶの下着を売った相手／それは女だ

おれが四〇四号室のベランダに潜入したとき、七海の部屋は真っ暗だった

おれとしのぶが四〇四号室で田辺の死体を発見したとき、帰り際に見たアーバンビルドに、明かりのついた窓はなかった

おれは腰にぶらさがったシザーバッグから自分の名刺を一枚取り出した　ボールペンも取り出した　名刺の裏にボールペンで書く。

『田辺の件で知りたいことがある　これは警察とはなんの関係もない　話す気があるなら連絡をくれ』

名刺には事務所と携帯電話の番号が書いてある　七海がこれを見たら連絡があるかもしれない　連絡がなくても何か動きがあるかもしれない。

おれはそれを縦に半分に折り、それから横に半分に折った　そしてドアの上のドアとドア枠の隙間に突っ込んだ　外からは見えない／だがドアを開ければ落ちてくる／七海が帰ってくれば気がつくはずだ。

おれは階段をおりてアーバンビルドを出た　出たところの空き地でろくでもないヤツに出くわした　藤井だ。

黒のワンボックスからノソノソとおりてきておれに気がつく

相変わらず汚い格好の藤井　この前と同じ格好／着替えさえしていないんじゃないかと思う汚さ　おれの二メートル前方で立ち

止まる藤井　おれは何も言わずにタバコに火をつけた。

「汚いゴミ虫野郎じゃないか。なんでこんなところにいる」

だみ声／汚いものを見たときの顔　おまえのほう汚いぞとは言わない。

「べつに、ただいるだけだ」

嫌悪感をあからさまに顔に表す藤井 「なんの用もないのになんところにいるはずがないだろう、バカめが」

おれは藤井に対していつもそうしているように、わざとクールに素っ気なく振る舞う。

「そうか、じゃあなんでこんなところに来たんだろうな」 タバコを吸うおれ。

「四〇四号室の件に首を突っ込んでるんだろう？ ゴミ虫野郎、おまえがなんであの事件に首を突っ込むんだ？」

「あいにくだが、おれはその事件に首なんか突っ込んでじゃいない。まったくの別件だ。それにおまえだって、なんだって一人でここに現れるんだ？」

砂利に唾を吐く藤井 「村山のノロマ野郎は今日は非番だ。田辺は事故死つてことになったんだよ。だが不審な点が多すぎるからおれは納得してねえ」

不審な点 ほとんどはおれとしのぶが残したものだ。

「それで個人的に捜査つてわけか。そんな暇があったら、たまには風呂にでも入つたらどうだ？ その格好で中央公園に行つたら、住人と間違われるぜ？」

藤井がイラついて砂利を蹴っ飛ばす 「別件つてのはなんだ？」
「それをおれが言わないつてことぐらい、ジャングルで暮らす猿にだつてわかるだろうさ」

一歩前に出る藤井 「法律は変わったんだ。おまえらゴミ虫はおれたちになんでも話さなきゃならなくなったんだよ」

「本当にそう思っているなら、おれをしょっ引いてまたランチでもなんでもすればいいだろう」

藤井がまたイラついて砂利を蹴つた／それからすぐにニヤリと笑みを浮かべながら言った 「おまえとあの女家主の指紋が四〇三号室から採取された。不動産屋に聞いたら二日前に女家主が鍵を持つていったそうじゃないか」

まずい 「だからなんだ？」

「おまえら、田辺の事件に関わっているんじゃないのか？」 鋭い目／＼やり顔。

「ただ単におれが住む場所を探していただけかもしれないぜ？ そんなこと言っていたら、殺人事件の犯人はみんな隣人つてことになっちゃう」

「おまえのそのスカした態度は本当に気に食わねえ！ 四〇三号室で何をしていたのか言えっつてんだよ！」

「だから、何かあるならしよっ引けばいいって言ってるじゃないか」砂利を蹴る藤井 「本当におまえは腹の立つやつだ」

「おれにしてみりやおまえも一緒だ」

唾を吐く藤井 「おまえのその右手はなんだ？ 誰をぶん殴ってきたんだ？」

「壁だよ、壁」 おれは藤井の足元に向かってタバコを投げ、なんてことない顔で歩き出した。

「おまえみたいなゴミ虫は必ずひねり潰してやる」

すれ違うときにそう言った藤井／おれは無視してそのまま通り過ぎた ビリヤード場の通りに出たところで、右手十メートル先に車が一台止まっていた 運転席に村山が乗っていた／ダークグレーのステーションワゴン／非番なのに何をしているのか 村山が手を振った。

おれはそこまで歩いた 運転席の窓を開ける村山。

「非番だつてゴリラ野郎が言っていたぞ」

「藤井さんのことですね？ ええまあ、非番なんですけどね」頭をポリポリと掻く村山。

「何しているんだ」

「いやあ、藤井さんが単独行動を始めちゃったんで、見張っているんですよ。とんでもないことをやらかして上司に怒られるというくらい面倒なんです」

おれは笑った 「あんたもあんな上司を持って大変だな」

「ええまあ……」

おれはタバコに火をつけた 「田辺は事故死だったらいいな」
頭をポリポリと掻く村山 「そうなんですよ。不審な点はたくさんあつたんですがね。田辺の同僚数名から、田辺が首を吊って自慰をしているらしき証言がとれましたし、田辺のパソコンから実際に首を吊って自慰をしている田辺本人の画像が何枚も出てきたんですよ。どれもいわゆる自分撮りと思われる画像でした。だから、あの部屋に誰かが出入りしていたとしても、事故死だったことに変わりはないってことで。何しろ他殺を決定づける証拠がまつたくないわけですからね、仕方がありません」

おれは村山の肩をポンと叩いた 「またそんなにベラベラとしゃべっちゃうと藤井にひっぱたかれるんじゃないか？」

「もう慣れましたよ。それにあなたは藤井さんが言うほど悪い人には見えません。あなたはおそらく、このマンションに関わりのある依頼を受けているんでしょう？ もしかしたらそれは、田辺にも関わりがあつたのかもしれない。だから少しぐらいは情報を流してもいいかと思ひましてね」

「そうか、最初に会ったときに思った通り、あんたはものわかりのいい刑事だ」

「日本じゃ探偵はあまり評価も認知もされていない職業ですが、世界的に見れば、とても重要な存在で、警察との関わりもとても大事だと思ひますよ」

おれは柄にもなく微笑んだ 「あんたはいいヤツだ。だからおれとはあまり関わらないほうがいい。藤井の部下でいるうちはな」
そう言っておれはウインクして、また村山の肩をポンと叩いた。
「ついでにもう一つ教えてくれないか？ 田辺の首吊りオナニーについて証言したって男は、背の高いデブじゃなかったか？」

驚く村山 「ええ、何人かのうちの一人にそういう体格の人がいましたね。名前はたしか……」
「原田だろ」

驚愕の表情／額に汗を滲ませて驚いている村山 「そうです、なぜ知っているんですか？」

おれは村山にウインクした 「おれは探偵だぜ」

「そうでしたね。それもおそらく、とても優秀な探偵だ。なるほど、あれはあなたの仕業だったんですか。いくら優秀でも、暴力でなんでも解決できる時代じゃないってことは覚えておいたほうがいいですよ」

原田の怯えた顔を思い出す 村山は原田をボロボロにしたのがおれだつてわかったのだろう タバコを捨てる／足で踏む。

「いろいろ教えてくれたお礼に、一ついいことを教えてやろう。田辺の首吊りファッキングオナニー事件を事故だと思わないって点で、おれは藤井を評価してる。あいつの脳みそじゃ解決できないだろうがな」

真剣な顔になる村山 藤井なんかよりよっぽど刑事っぽい面構えだ。

「でもこの捜査はもう打ち切られたんです」

「そうだな、せいぜい藤井が無茶をしないように見張っておくんだな。でないとおんたまで悪い立場になっちゃう。それじゃまたな」

おれは軽く手を振って歩き出した そして、まだ帰ってきていない七海を張り込むために、ビリヤード場へ向かった まだあの台で玉が突けることを祈って

月曜日　奈津子からの依頼を受けてちょうど一週間／一週間前と同じ店／恵比寿の創作イタリア料理店　マエストロ。

何もかも同じ　同じ時間／同じ部屋／同じ黒い男その一／それに黒い男その二。

「この前と同じ飲み物でいいかしら？」

出てきた飲み物までこの前と同じ　フェラーリ・ブリュット。

この一週間はとても忙しかった／毎日がとんでもなくタフに過ぎていった／毎日がまるで夢のように感触を感じたのかどうかわからぬままに過ぎていった　もしかしたら本当に夢で、一週間前のあるときからほんの一、二分しか経過していないんじゃないかと思うくらいだ。むしろそのほうがいいんじゃないかと思えてくる、そんな一週間だった。唯一現実であって欲しいと言える出来事といえば、結衣に出会ったってことだろう。

「依頼していた調査の報告をお願い」

奈津子は細くて長いタバコに火をつけた。おれは相変わらず、行儀悪く椅子に座り、行儀悪くフェラーリ・ブリュットを飲んだ。

「報告なら、ほとんど千鶴にしているぜ」

「聞いているわ。それ以外には？」

おれはタバコに火をつけた　「頼まれていたことでまだ報告していないのは、門脇七海の母親の名前と、普段の行動くらいだ」

「そうね」

「母親の名前はさちこ、佐賀県の佐、知性の知、子供の子。六年前に離婚している」

フェラーリ・ブリュットを飲むおれ／タバコを吸うおれ。

「普段の行動については？」

「この一週間、ほとんど毎晩尾行と張り込みをした。結果として七海はほとんど毎晩職場から家へ直行している。これといって寄り道

もなけりや、帰ってからの外出もない。さすがにおれだって、家中で何をしていたかまではわからない。」

「そう、わかつたわ。ご苦労様でした」　眉一つ動かさない奈津子。

「聞きたいことがある」

「なにかしら？」

「なぜ門脇七海のことを調べた？」

「それには答えられないと言ったはずよ。調査はこれでもうじゅうぶんです。最初の二百万で足りなかったぶんは、立川を通して渡します。請求も立川にしてちょうだい。では」

「待て」　おれはテーブルを平手で叩いた。「あんたはじゅうぶんでもおれはぜんぜんじゅうぶんじゃない。七海はおれが関わっているやつかいごとに大きく関与している」

奈津子は目を閉じて、そしてすぐに開いた　「そのやつかいごととやらに私が関わっているとでも言いたいのかしら？　とにかくこの調査を依頼した理由は絶対に言えません」

何度頼んでも無理だろうとわかる奈津子の目。

「でも……」　奈津子が何か言いかけてためらった。そしてまた口を開いた　「門脇七海がもし本当に、あなたのやつかいごとに関わっていると云うなら、彼女をそのやつかいごとから解放してあげなさい。それができないのなら、そのやつかいごととの関係を揉み消しなさい。それが新たな依頼です」

なんだって！？　「新たな依頼だと？」

「そうです。でもこの依頼は、私があなたのやつかいごとを知らないと成立しないわね。だけど、私が理由を話さないのに、どんなやつかいごとで、彼女とどんな関係があるのか、あなたに聞くのは虫が良過ぎるから、聞かないでおきます。ただし、依頼をしたからはちゃんと報酬を払わなければならぬし、払うからにはあなたの言っていることが真実だと納得しなきゃならない。だから聞きます。本当なんでしょうね？」

「何がだ？」

「門脇七海があなたの抱える問題に関わっているって話がよ」

おれはタバコを灰皿に擦りつけた　フェラーリ・ブリュットを飲み干して、おかわりを要求した。

「本当だ。それももしかしたら重罪級かもしれん。まだわからんがな」

奈津子はおれの目をまっすぐに見た。そして目を閉じて、また開いた。

「そう、わかりました。解決するまで今まで通りの報酬を払います。必ずあの子をそのやつかいごとから救ってあげなさい」

おれは新たに注がれたフェラーリ・ブリュットを一気に飲み干した。

「おれは探偵だ。情報集めがおれの仕事だ。もし万が一、門脇七海がやつかいごとに関与していて抜けだせなかったとしても、おれにはそれを揉み消すだけの力はない。最善は尽くすが、それは理解してほしい」

「わかったわ。とにかくお願いします」

おれはタバコに火をつけた。頼んでもいないのにフェラーリ・ブリュットがまた注がれた。

「愛莉の件はどうする？」

「前にも話した通りです。これまで通りお願いするわ」

おれは奈津子を睨みつけた　タフガイぶったりしたんじゃない、真剣だっただけだ。

「愛莉の件に関しては、探偵の仕事じゃない。それにこんなことはやるだけ無駄だ。おれや千鶴が監視なんかしたって、なんの解決にもならん。愛莉はあんたが男と抱き合っただけかっているような家に帰りがらないだけだ。男の匂いがする家には帰りたくないってだけだ」

脳みそが一瞬揺れた／震度三くらいだった　だからなんとか持ちこたえた。頭をブンブンと振って奈津子を見た　顔が怒りで燃

えていた／見ず知らずの薄汚い探偵なんかに、情事のこととやかく言われて腹が立っているのだ。

「だったら、私がもうそんなことはしていないってことをあの子にわからせなさい！ それであの子が毎日ちゃんと帰ってくるようになったら、ポーナスでもなんでも払ってあげるわ！ わかった？

愛莉の見張りは続行です、異論は認めません！」

やれやれだ　おれは席を立った／立ってからフェラーリ・ブリュットを一気に飲み干した。

「仰せのままに、ボス」　おれはやれやれってポーズをして、奈津子に背中を向け、ドアを蹴っ飛ばして部屋を出た。

事務所の電話が鳴る　カウンターで飲んだくれていたおれ／机
に向かう／灰色の平たい受話器を取る　「はい、片桐探偵事務所」

「もしもし……」

アームチェアに座る　「どちら様ですか？」

「門脇七海です」

タバコに火をつける　「待っていたぜ」

無言の七海　おれは灰皿を手前に引いて、まだたいして灰が出
ていないタバコを灰皿の上で叩いた。

「あの名刺に書いた通りだ。警察とはなんの関係もない。むしろ関
係したくない。おれはただ、田辺の死についての真相が知りたいだ
けだ」

「なぜ、わたしに？」

「あんたが田辺を尾行していたのを知っている。いや、それだけじ
やないんだ。むしろそれはきっかけでしかなかった。そのきっかけ
のおかげで、いろんなことを知ることができたし、いろんな推測を
立てることができた。それでいろいろと満足のいく答えを導き出せ
た。ついさっきもある依頼人から貴重な情報を手に入れることがで
きた。それでほしい全部つながった。たぶん、おれの推理は完璧
なはずだ。その推理からあんたが田辺の死について少なからず知っ
ている人間だと思った。だが、証拠なんてもんはなんにもない。だ
から、警察には関係ないし、たとえ証拠があつたとしても、警察と
関わる気はまつたくない。おれはただ、知りたいだけだ。何もかも
をな」

約二分の沈黙　もし高橋だったら、秒数まできっかり計ってい
ただろう。

「わかりました。でもその前に、やっておきたいことがあります。
明日の午前十時にあなたの事務所に行きますので、そのときにすべ

てお話します」

「やっっておきたいことってなんだ？」

「それは、明日すべてお話します」

この女は頑固だ　さつきも頑固な女と会っていた／だからもう押し問答をする気になれない。

「わかった。明日十時、待っている」

「では」

電話は切れた　やっっておきたいこととはいったいなんだろうか。入り口のスチールドアがドンドンと鳴る　シヨットガンノック／しのぶだろう。

「開いてるぞ」

ドアが開く　「この事務所はお客さんに対してずいぶん口の聞き方をするんだね」

クスクス笑い　しのぶじゃない／結衣だ　ノックの仕方までそっくりとは／ジーザス！

結衣はドアをドンツと閉めた／ツカツカと歩いてソファアにドカツと座った／なんともまあ　その一連の行動すべてがしのぶにそっくり／ファツキン・ジーザス・クライスト！！

おれは結衣をじつと見ていた　そして自分に驚いた／ときめいている自分に　こんな気持ちで女を見たのは、いったいいつ以来だったろうかと考えた。考えたが思いだせなかった

「何か飲むか？」

おれはアームチェアから立ちあがりキッチンへ向かった。そして、冷蔵庫には水とビールしか入っていないことを思い出した。

「子供が飲むようなものは、ないかもしれん」

クスクスと笑う結衣　「お客さんに出すお茶くらいあるんじゃないの？」

そうかもしれない　そんなものさえも真由美が用意してくれているもんだから、あまり気にしたことがない。

冷蔵庫を開ける／作り置きのアイスコーヒー／ガラスのポットに

入って置いてある。

おれはそれを取り出した／カクテル用のコリンズ・グラスを出す／氷を入れて注いだ／そしてたしか　目白で喫茶店に行ったとき／結衣は反吐が出るほど甘いアイスココアを飲んでいた／ミルクとガムシロップがどこかにないか／キッチンの戸棚をガサゴソと探してみる　やはり真由美が用意してくれたらしき真由美の店のミルク／ガムシロップ／ストロー／束になって引き出しの中に収められている／それらを一つづつ持つ／グラスと一緒に結衣のところへ持っていく。

「ありがとう。なんか喫茶店みたい」　またクスクス笑い。

おれは自分用の酒を取りにキッチンに戻り、オールド・ファツシヨンド・グラスに氷を入れ、サザン・カンフォートをツイー・フィンガーだけ注いだ。戻るときに入り口のスチールドアの鍵を閉めた／しのぶが来たら面倒だと思ったからだ　ああなるほど　これが浮気とか不倫とか二股とかっていう心情なのか。

それまで、しのぶと十年も付き合っている中で、何度となく別の女とも遊んでいたのに、はじめてしのぶに対して自分が嘘をついているんだと実感し、後ろめたさを感じた。

おれは結衣の向かい側に座った／酒のグラスをソファーターブルに置いた／タバコに火をつけた。

「どうした、急にやってきて」

結衣はアイスコーヒーにミルクとガムシロップを加え、ストローでかきまわしてから一口飲んだ。

「苦っ！」　　いかにも苦そうな顔をする結衣。真由美の店のコーヒーだから、普通の苦味だと思うのだが、結衣には耐えられなかったのだろう。おれはガムシロップをもう一個持ってきてやろうと思つて立ちあがった。

「あ、いいよ座つてて、わたしが持つてくる」　　そう言つてキッチンに向かう結衣。キッチンの中まで行って、いったいどこにあるのだろうかと首を傾げている。

「シンクの下の右側の引き出しだ」

おれの言った引き出しからガムシロップ二個とミルク一個を取って戻ってきた結衣。コーヒーにそれを全部入れて、一口飲んだ。

「さつきよりは苦くない」　そう言ってクスクス笑う。「で、なんだっけ？」

「何しに来たんだ？って聞いたんだ」

「ああ、そっか」　クスクス笑い　「べつに何しにっってわけじゃないよ。ただ、会いたくなっただから来ただけ。この前のことが忘れられなくってね」

この前のこと　ラブホテルでの情事　おれも忘れていない／子供に溺れるのは格好悪いからそんなことは言えないが

「ねえ、ここにはこの前の続きができるような場所はないの？」
クスクスがフツツに変わった　しのぶと同じ笑い。

「寝室ならそっちだ」

おれは住居スペースに向かって顎を突き出して見せた。サザン・カンフォートの甘い香り／飲む／酔っ払うべきだ

「べつにここでもいいんだけどね」　そう言っって立ち上がり、おれの隣に移動してくる結衣。

「有二つていつでも女にリードさせるように仕向けてるの？」

仕向けているわけじゃない　自然とそうなるだけだ　おれは基本的にいつでも流れるままに生きていくだけだ。

「そのお酒、すごいいい匂いだね。なんだろうこの香り」

「桃だ」　おれは結衣の鼻先でグラスを揺すってやった　桃の甘い香りが埃臭い部屋に広がる。

「おいしそう！　ねえちよつとだけ飲ませて」

グラスを渡す　口をつける結衣／ほんのちよつと　すごい顔になる。

「うえ……苦い」　泣きそうな顔になっている。

「子供が飲むもんじゃないからな」

クスクス笑う結衣　「タバコなら吸えるんだよ！」

「格好つけて早死にしても誰も褒めてくれない。やめておけ」

「じゃあ有二是早死にしちゃうかもね」　クスクス笑う結衣。

おれは結衣にキスをした　「おまえのその笑顔がおれは好きだよ」
「わたしは有二のその、格好悪い格好つけが好きだよ」

Ooohh!!　Daddy　ooohhh!!!!

しのぶと同じことを言いやがった　サザン・カンフォートを飲み干す／立ちあがって結衣に手を差し出す／おれの手を握る結衣　ベッドがおれたちを待っている。

尻の携帯電話が鳴る　なんてバッドなタイミング／結衣の手を握っていないほうの手で携帯電話を開く　高橋。

「すまん、ちょっと待ってくれ」

おれは結衣の手を離れた　離れた手を振り一人でベッドに向かっ
っていく結衣　住居スペースのドアを開けっぱなしにしてベッドに飛び込む。

電話に出る　高橋の快活な声。

「よう、気分はどうだ？　もう落ち着いたか？」

—昨日の下着泥棒をぶっ叩いたときのおれを心配してのセリフだろう。

「ああ、大丈夫だ」

「そうか、そりゃよかった。変態オナニー事件のほうは進展しているのか？」

「ああ、三〇三号と明日会うことになった」

「なんだって!？」　もはやお決まりとなったセリフを言う高橋

「それじゃあ、いよいよ解決って感じか？」

「さあな、それはわからん。解決も何も、警察はもう事故扱いにして手を引いている」

おれは空っぽのグラスをソファテーブルから取り、小さくなた氷を口に入れた。

「じゃあ、おまえとしのぶちゃんがあそこにいたことはばれずに済んだってことか。よかったじゃないか」

「いや、ばれた」

「なんだって!？」

「まあでも、捜査は打ち切られているから問題ないはずだ。かなりヒヤヒヤさせられたがな」

笑う高橋 「おまえたちはいつでも、ヒヤヒヤしたりドキドキしたりして興奮していないとだめみたいだからな」

笑うおれ 「そういう性分なんだ。黒人が音楽を聴くと勝手に踊りだしちまうのと同じさ」

笑う高橋 結衣を見る／結衣も笑っていた

「ところで話は変わるんだがな」 笑うのをやめた高橋。「ああ、つまり、おまえをまたおかしくさせようって気はないんだ。だが、隠していたくない。だからはっきり言うが、大丈夫か？」

めぐみのことだつてのがわかる前置き 「ああ、大丈夫だ」

「めぐみと真面目に付き合うことになった。昨日な、一緒に飲んで、それでホテルまで行った。まあ結局セックスはできなかったんだが、それでも一緒にいたいと思ってな。正式に寄りを戻そうと言った」

「そうか」
「ああ、そうだ。だが、結婚までは考えていない。おれの仕事を考えるとまだそこまではな、踏ん切りがつかん。表も裏も性と暴力にまつわる仕事だからな」

不思議だ めぐみの話をこれだけしているのにマツハ六が来ない。
い。

「おれはきつと、おまえを本当に信じているのかもしれない。おまえって存在がおれを安心させているのかもしれない」

「おいおい、なんだよ急に。そういうのは女に言うセリフだぞ」
照れ臭そうに笑う高橋。

「ああ、言うんじゃないかと後悔してるぜ」 おれも笑った。
「まあ、おまえはどんな仕事をしていても、おれよりははるかにまともな人間だ。祝福するぜ」

「ありがとう。いずれ、おまえとめぐみの状態がいいときに一緒に

飯でも食おう」

「そつだ、七海の母親の件なんだがな。名前のほかに何かあったか？」

「いや、まだ調査をしていない。何が知りたいんだ？」

「苗字だ」

「オーケー、調べておく。それじゃまたな、相棒」

電話は切れた　おれは結衣を見たノベッドに寝転がって手足をバタバタさせて遊んでいた　制服の短いスカートがはだけピンクのショーツが丸見えになっていたノジョンが小さくジャンプした。

結衣の待つ住居スペースに向かうノ住居スペースのドアを閉める

結衣が体を起こす　おれに向かつて両手を差し出す結衣。

その手を握ろうとしたとき　事務所の入り口のスチールドアでショットガンノックが炸裂したノ本家のショットガンノックだ

さっきの結衣のノックと比べると迫力が桁違いだつてことがわかる。

「いるのはわかってるのよ！」

ドアの外でわめいているしのぶ　ショットガンノックは続く。

「返事くらいしろ、バカ！！」

さらにわめくしのぶ　ショットガンからガトリングガンに変わるノそしてノックが止む

「真由美さんのところにいるから、一発やったら出てきなさいよ！！」

ファツキン・ジーザス・クライスト！！

おれは結衣を見た　しのぶの叫びに圧倒されてポカンと口を開けている。

「やれやれだぜまったく」

クスクスと笑う結衣　「有二の彼女って面白い」

「彼女だつたら、一発やったら出てこいとか言わないだろ」

「そういうことが言える人じゃないと、有二と一緒にはいられないつてことね」

「ま、なにせよ、許可が出たから気兼ねなくおまえを抱けるつて

もんだ」

フツツと笑う結衣 「わたしはあの人の次でもいいよ。有二と一緒にいければそれでもいい」

おれは結衣の隣に座りキスをした 「そういうことは言うもんじゃないぜ。もつとずつと素敵な出会いを棒に振るだけだ」

今度は結衣からおれにキスをしてきた フツツともクスクスとも笑わなかった／激しいキスだった／舌と舌がグネグネと絡み合った／口の中すべてが性感帯となった／舌も／唇も／歯も／喉の奥までも 結衣のアイボリー色のベストを脱がせた／ブラウスのボタンをはずした／結衣がおれのＴシャツを脱がせた／ピンクのブラジャーをずりあげて小さな乳房を揉んだ 小さく喘ぐ結衣 押し倒してチエックのミニスカートの中に手を突っ込んだ／ピンクのシヨーツはもう湿っていた／太ももを撫でた／中心部を撫でた／両手で足を開き顔を埋めた 喘ぐ結衣 シヨーツを脱がせた／顔を埋めた 喘ぐ結衣 ジーンズを脱いだ／ボクサーパンツを脱いだ／ジヨンが天井を見あげていた 結衣の口にジヨンを突っ込んだ 唾液で光るジヨン／ジヨンを口から抜き中心部にあてがった 息を飲む結衣 ぶち込んだ／目をギュツと閉じて息を漏らす 結衣 ゆっくり腰を振った／小さなクリトリスを指で擦った 仰け反る結衣 高速で擦る／悲鳴のような喘ぎ／腰の動きを速める 体をよじって絶頂に達する結衣 おれは結衣に抱きついた／抱きついて腰を振った／結衣がしがみついていた／そのまま腰を振り続けた／結衣の体がビクンと跳ねあがったときにジヨンを抜いた ジヨンは結衣の薄い陰毛に精子をぶち撒けた

結衣と一緒にシャワーを浴びた／そしてそこでもファックした

しのぶがシヨットガンノックをして怒鳴り散らしてから二時間が過ぎた／結衣は真由美の店にいるであろうしのぶに見つからないように帰った。

だが、しのぶはもう真由美の店にはいなかった。

「しのぶなら、ちよつと前に一人でどこかにいつちやっただわよ？」

ニヤニヤ顔の真由美　　いかにも結衣についてあれこれ聞いたそのうな顔。おれは真由美の店じゃ酒が飲めないから、事務所に戻るところにした。おれのあとについてくる真由美。

「仕事はしなくていいのか？」

「アルバイトがいるから大丈夫よ」　　ニヤニヤ顔。

事務所のドアを開ける　　キッチンに行つて缶ビールを二本取り出す。カウンターに座つた真由美に一本渡す。残りの一本のプルトップを弾く。

「しのぶに電話しなくていいの？」

真由美も自分のプルトップを弾いて一口飲んだ。

「用があれば、葬式の最中に坊主が説教をたれていても電話してくるヤツだから、ほうつておいても大丈夫だ」

笑う真由美　　「目に浮かぶわ、それ」

タバコに火をつけて真由美の隣に座る。真由美もタバコに火をつける。

「今日の子には特別な思い入れがあるみたいね？」

なんでもお見通しのおれの世話係り。

「そんなことないさ」

「そうかしら？」　　ニヤリ顔の真由美。「君が誰と何をしていても、しのぶはいつもまったく気にも留めないのに、今回の子に対してはそうじゃないんだもの。とんでもなく不機嫌で、ずっと文句ば

「つかりだったわよ？ おかげでほかのお客さんが帰っちゃったくらいよ」

「笑うおれ　しのぶがブーブー文句を行っている姿が目には浮かんだ。」

「そろそろ二人とも、身を固めちゃえばいいのに」　タバコの煙を見ながらそう言う真由美／何も答えないでビールを飲むおれ。

「しのぶと二人で暮らすのが怖いの？」

「夫婦探偵になっちまいそうだからな」

「噴き出して笑う真由美　「それも、目に浮かぶわ」

「おれは誰とも結婚する気はない、一生な。子供なんかもつてのほかだ。おれの遺伝子を後世に残す気はサラサラない」

「口から煙を輪っかにして吐いてる真由美／その輪を見ながら言う

「一人の女に縛られるのが嫌？」

「おれには、たぶんしのぶもそうだろうが、安住の地はいらない。おれたちは可能性の中で生きていたい。可能性はおれたちに結果を見せない。安住の地へ導かない。もうこの世の中におれとしのぶの二人だけしかいなくなっていくって思うこともある。逆におれとしのぶの間に距離があったほうがいいと思うときもある。おれたちはくつついたり離れたりしながら、いつでもスリルに身を焦がしている生活が似合っているんだ。それでいいと思っている」

「タバコを灰皿に擦りつける真由美。」

「そっか。ま、いろんな愛の形があるからね」

「あれだ、おれもしのぶもヨボヨボの年寄りになったら、二人つきりて暮らすかもしれないさ。ティファナで馬肉のチリドッグでも売ってつつましげに暮らすだろうよ」

「笑う真由美　「今回の子にはそれは当てはまらないんだ？」

「どうだかな。おれはしのぶと一緒に危険なことをやる気にはなる。あいつが望めばどんな危険にでも飛び込むし、あいつをその危険に連れ立ってやる気にもなる。だが、しのぶ以外のどの女とも危険なことを一緒にやるうという気にはならない。むしろ危険なことから

はなるべく遠ざけてやるうって思う。つまり、それがおれのしのぶに対する思いだろうな」

「やっぱり君たちは、夫婦探偵がお似合いよ」

「もうすでにそんなようなことをしているさ」

缶ビールを飲み干すおれ。

「さてと、仕事に戻らなくっちゃ。ごちそうさま」

真由美は缶ビールを持って席を立ち、缶ビールを持ったまま出ていった。おれは新しい缶ビールを冷蔵庫から出して、ソファーに移動した。結衣とのファックで疲れていた。酒を飲んだから眠くなっていた。ソファーでウトウトとしながら、それでも缶ビールを飲み続けていた。愛莉がまた家に帰らないってなことになってここに現れるか、それともどこかに迎えに行くかってことにならない限り、今日はもう何もする気がなかった

どれくらいの時間が過ぎただろうか。缶ビールはとつくに空っぽだった。タバコは灰皿の上で燃え尽きていた。静まり返り窓の外の繁華街特有の騒音がチープなラジオから洩れる音のように、ぜんぜんリアルじゃない作りものの白黒映画の音声のように、デッドな音になって聞こえていた

静かに。とても静かにゆっくりと。入り口のスチールドアが開く音がした

おれは目を開けた。そんなドアの開けかたをする知り合いはいないからだ。開けた目が天井の照明を捉えた瞬間。それは消えた

真つ暗闇。

おれは体を起こしてソファーの影に隠れた。静かでもなく。ス마트でもなく。ガタンツとでかい音を立てて。カーテンの隙間から洩れる繁華街の明かりでわずかにまわりが見える。人影を探す。見えない。だが人の気配はする。慎重な足音が聞こえる。右。おれのすぐそば。右側。カーテンから洩れる光の筋に照らされる足。黒いスニーカー。でかいサイズ。男だ。非常事態。絶対。に非常事態!!!

瞬間　空気を切り裂く音／何かが振りおろされた／反射的に左に避ける　ボンツとものすごい音／何かがソファアを叩いた
何かがなんなのか音でわかった／鉛入りの棍棒「ブラックジャックだ　おいおい勘弁してくれよまったく！」

いつだったか／藤井にとっ捕まってリンチされたとき　あいつが得意げに振り回しておれをボロ雑巾に仕立てあげたブラックジャック。

立ち上がる／もう一つのソファアに足を捕られる／よるめく／よるめいたおかげで二回目の空気が空振りになる　走る／男から離れるために　目を凝らす／暗闇に慣れてきた目／男が見える

暗い影が／それだけ見えればじゅうぶん　ではなかった！

ゆっくり近づいてくる男　おれの背中／スチールロッカーにぶつかる／まわりに武器になりそうなものがないのはわかっていた

男から目を離さずにゆっくり左に移動する／汗が噴き出す／生唾を飲む　部屋の角まで来たところで目の前がいきなり眩しく光った／そしてまた暗闇　懐中電灯か何か　それでまた目が見えなくなつた／空気を切り裂く音　避け切れなかつた／脇腹に激痛／体がくの字によじれる／また空気を切り裂く音　頭を低くして男がいるであろう方向に飛び込む／足にぶつかる／男と共に倒れ込む／ブラックジャックが背中を叩く　激痛　いてえ！／くそつたれが！！

おれは男目掛けて体重を乗せた肘鉄を振り下ろした／腹に直撃した　転げまわつておれから離れる男／ソファアテーブルにぶつかる音　おれは立ちあがつた／おそらく男がいるであろう場所目掛けて蹴り／ヒット！　だが足をつかまれ再び転げる／もう一本の足で蹴り／男の体のどこかにヒット／男が足を離しておれから離れる

おれは走つた／入り口へ　照明のスイッチ／オン　男がはつきり見えた　全身真っ黒な服装／顔には目出し帽／目には黒縁メガネ　誰だかわからない／逃げるか／とっ捕まえるか　ゾーン

ズのポケットノブラスナツクル　右手に装着ノ捕まえる！

男は立ちあがっておれに向かつて懐中電灯を投げた　避けるノ男に向かつて突進するノ横からブラックジャックノ頭をさげる空振りノ男の腹にブラスナツクル　めり込むノ体を丸める男ノ背中に肘鉄　丸まった体が一段さがるノさがったところに膝蹴り　男の腹にめり込むノさつきブラックジャックで叩かれ破裂したソファーに座り込む男ノそこに蹴り　はずれノ破裂したソファーの裂け目が広がるノブラックジャック　ソファーにめり込んだおれの太ももにヒット　オー・マイ・ガット！！ノ痛すぎる！！

男が立ちあがるノ拳が飛んでくるノ顔面にヒット　いてえ！！

ブラックジャックが腹にめり込むノ蹴りがさつきと同じ太ももにヒットするノ膝が落ちる　上からブラックジャックが振りおろされるノ避けるノ避け切れず肩に直撃ノソファーテーブルの上　灰皿ノ握る　灰を振り撒きながら男の顔目掛けてアッパーノ空を切る灰皿　ブラックジャックが振りおろされる　避けられない腹に直撃ノおれはうずくまった　また振りおろされるブラックジャック　頭に食らったら脳みそが弾け飛ぶだろうと思しながら、握った灰皿で男の脛を叩いた　ブラックジャックは空を切り男は叫び声をあげておれから離れた　くそつたれだ！！ノくそつたれすぎる！！

立ちあがるおれ　「だれだおまえ」

返事はなし　体制を立て直してブラックジャックを構える男

本当にやばいノブラックジャックなんてそう何発も食らえるもんじゃない　腹も背中もバラバラになりそうな激痛。

おれは入り口までさがり帽子かけを手に取ったノ男に向かつて帽子かけを構える　突進してくる男ノ帽子かけを振りかざすおれ

帽子かけは男の腹に直撃したノ前屈みになった男は突進してきた勢いのまま入り口のスチールドアに激突する　ブラスナツクル　顔面に打ちおろしノヒット！　スチールドアと板ばさみになる

顔面／二発目を打ちおろすために振りかぶる　とどめを刺すんだ
！／逃がすんじゃない！！

ドアを開ける男／後ろ向きに転がりながらドアの外に出る男／閉まるドア　打ちおろしたプラスチックはスチールドアに直撃した　いてえ！！／ファツキン！！／くそつたれだ！！／くそつたれすぎる！！！！

ドアを開ける　階段を転げ落ちながら逃げ出す男／追う　悲鳴！／真由美の声　階段の踊り場に真由美が見えた／男を見て目を見開いて怯えている／恐怖の表情　男は腹を抱えながら逃げていった

おれは真由美のところに駆け寄ろうとした／ブラックジャックでひっぱたかれた足がうまく動かない／階段を転げる　真由美の前に不時着。

「大丈夫、有二君！！」

「大丈夫だ、あいつを追う」　立ちあがる／足を引きずって階段をおりる　事務所の前の通り／右　いない／左　いない／いない！　いないだと！！！！

左は大通りに出るまで百メートル／右は二十メートルで国道の高架下にぶつかりT字路／右だ　走る。

T字路まで行き右を見る　高架下　黒いワンボックス／走り去る

左を見る　おれの哀れな姿に注目している通行人たち　いない／黒い男は見あたらな

「有二君！」　あとを追ってきた真由美。

おれは真由美の顔を見た途端に体の力が抜けた／アドレナリンが抜けていった／全身がゼリーのようになってグニヤリと座り込んだ。
「大丈夫！？」　おれに駆け寄り寄る真由美。

「大丈夫だ」

「何があつたの？」

「何がなんだかさっぱりだ」　立ちあがろうとしたが力が入らな

い。

真由美がおれの体を支えて立ちあがらせてくれた。事務所に戻るおれと真由美 エレベーター／開きっぱなしのスチールドア／転がる懐中電灯／転がる灰皿／ぶつ壊れた帽子かけ／破裂したソファ／ガラスの天井が斜めにずれたソファ／テーブル／ばら撒かれたタバコの吸殻 おれは破裂したソファ／テーブルに座った。

「いったいどうなっているのよ」

キッチンにいつて冷蔵庫から水を出してきた真由美。

「酒がいい」

「どうなっているのか説明してくれたらね」

そう言つて、戻ってくる途中で灰皿を拾った真由美。斜めになったソファ／テーブルの天井を直して灰皿と水を置く。おれはタバコに火をつけた。

「寝ていたんだ、ウトウトと。ここでな、こんなふう」

ソファ／に持たれて足を伸ばし、天井に向かって煙を吐き出すおれ。

「そしたら、ドアが開いて照明が消えて、気がついたらこんな具合だ」

真由美が立ちあがって冷蔵庫から缶ビールを取って戻ってきた。

「ぜんぜん説明になってないけどまあいいわ」

おれは缶ビールを受け取ってプルトップを弾いた 一気に半分を飲み干した。

「殴られたの？ 救急箱とってくるからじつとしていなさいよ」

住居スペースのドアを開けて寝室に入っていた真由美。

「いったいなんだったのだろうか なぜおれは襲われた？／あの

男は誰だ？ いや／予想はつくんだがな。

真由美が戻ってくる 救急箱を持っておれの隣に座る。

殴られた顔に消毒液を染み込ませたガーゼをあてがう真由美
「いえ！！」

「手当てはいらない。大丈夫だ」 おれは真由美の手を払いのけ

た。

「ぜんぜん大丈夫じゃない！ 一人で歩けないくらい重症なのよ、少しは自分の無鉄砲振りを自覚しなさい！！」

怒られた おれは黙ってされるがままにした。服を脱がされるノまだ治っていない痣だらけの体に、さらに痣が増えていた。だが、傷といえるようなものはなかった。

「痣だけね。シップでも貼っておこうか」

「いらぬ。骨が折れたって感じでもないし、ほっっておけばいつか治る」

「ジーンズを脱ぎなさい。足も怪我しているんでしょ？」

おいおい 「おれにここで素っ裸になれっていうのか？」

「パンツまで脱げとはいわないわよ。それとも、パンツの中も怪我しているの？」 ニヤニヤ顔の真由美。

おれは立ちあがってジーンズをおろした 左の太ももノ前にできた痣の上に新たな痣 ブラックジャックの二倍の太さ。

「何よこれ……」 その太ももを見て息を飲む真由美。「救急車呼ばなきゃ」

「必要ない。ほっっておけばそのうち治る」

「だめだつて！ それはいくらなんでもひどすぎるわ」

立ちあがって携帯電話を店のエプロンのポケットから取り出す真由美 おれは携帯電話を握った真由美の手を押さえた。

「だめだ。医者に行けば事情を聞かれる。この状態で転んだだけですと言ったつて、医者つてのは笑っちゃくれん」

溜め息をついて携帯電話をポケットに戻す真由美 「どんな仕事をしてこんなことに巻き込まれているのか知らないけど、もう少し自分を大事にしなさいよ」

おれはジーンズを履き直してソファに座った 缶ビールを飲む。

「別に危険な仕事はしていないつもりなんだけどな。おれだってなんでこんな目に遭っているのかさっぱりわからない」

「でも、依頼人につながるとまずいから病院には行けないってことね？」

「まあそんなところだ」

救急箱の蓋を閉める真由美 ソファアームテーブルに救急箱を置く。

「ちゃんと鍵を閉めて寝るのよ？ 何かあったらすぐに連絡してね」

立ちあがる真由美。

「なんだ、裸で寄り添って看病してくれるんじゃないのか？」

笑う真由美 「それこそしのぶに電話してお願いしなさい」

そう言っ、真由美はニヤニヤしながら出ていった。

いろいろなことがそろそろ解決するんだろうということがわかってきた。それはおれが昨夜襲われたことが何よりの証拠だ。どう解決するのはおれにかかっているってことだろう。警察はもう田辺の首吊りファッキングオナニー事件の捜査をしていない。田辺のことしか知らない藤井じゃ解決はできない。いろいろ知っていたところで、ゾウリムシくらいの藤井の脳みそじゃパズルは完成しない。七海に会えば何もかもすべてがわかるはずなんだ。おれのボロ雑巾にされまくった行動がすべて報われるはずなんだ。

時間 九時半過ぎ／七海との約束 十時

おれはベッドから這い出た。体中が痛かった／腹も／足も／背中也／顔も。どこもかしこも痛くてどこが痛いかわからなかった。

事務所に行き、キッチンの冷蔵庫からコーヒーの入ったポットを取り出す。コリンズ・グラスに氷を入れる／コーヒーを注ぐ／カウンターに置く。カウンターに座る。

タバコ／ぺっちゃんこのハイライト・メンソール／袋を破く／一本取り出す／まっすぐに伸ばす／啜える。火をつける。

携帯電話が鳴る。ベッドの脇のナイトテーブルの上／遠い／取りに行くまでに切れる。着信ありの表示／千鶴から

事務所に戻る。事務所の電話が鳴る。机に向かう／灰色の平たい受話器。取る。

「立川です」 ただならぬ声／震え／怯え／そういった類の声

「何があった？」 タバコの灰を灰皿に叩き落とす。

「門脇七海が……」

脳みそが揺れた。いつもの震度六じゃない／違う理由で生きているのか!？」

「たぶん……」 泣き出しそうな千鶴の声。

「どこにいる？」

「門脇七海の部屋です……」

「その状況を誰に話した？」

「あなただけです。今来たばかりなので……ドアが開いていたので中に入ってみたら……」

ドアが開いていると中に入りたくなるヤツばかりだ／それで問題をしよい込む／そしておれに連絡が来る　やれやれ過ぎだ。

「救急車を呼べ」

「でも……私がここにいることが世間に知れたら、遠藤様が……」

「そんなことを考えている状況じゃないんじゃないか？　目の前に虫の息の七海がいるんじゃないのか？　七海を救えるのはおまえだけしかないんだぞ！」

沈黙　たぶん三秒。

「わかりました、救急車を呼びます」　覚悟を決めた声／意思の

強さが現れている声。

「搬送される病院がわかったら、連絡くれ」

「はい、では」

瞬き！　「ちょっと待て」

「なんですか？」

「確認して欲しいことがある。七海の部屋に盗聴器はないか？」

「盗聴器？」

「ワイドバンドレシーバー、ああつまり、トランシーバーみたいな手に握って使う無線機のようなものだ」

「ちょっと待ってください」　探している／十秒　「目に付く

ところにはなさそうです。なんでそんなものを……」

「ちょっと気になることがあってな。救急車が来るまで、探してみてくださいれないか？」

「わかりました」

電話を切る　昨日から着たままの服を脱いでシャワー室へ／五分で終わらせたかったが体中が痛くて無理だった／それでも頑張っ

た 髭まで剃って十二分。

着替え ジーンズとTシャツ/痣を隠すための長袖の柄シャツ。
スチールドア ショットガンノック/しのぶ 鍵を開ける。
「どうしたの、その顔。女子高生にやられた？」

いつも通りカツカツとピンヒールを鳴らしてソファアの前まで行く
ソファアが弾けているのに気がつく/おれを見る。

「何があったの？」 真剣な顔のしのぶ。

「いろんなことがあった。そして今もまた問題が発生している」

尻のポケットで携帯電話が鳴る 千鶴。

「場所がわかりました」

救急病院 高円寺の駅のそば

「今から行く」

電話を切る 尻のポケットにしまう。

「行くつてどこに行くのよ？」

「七海が重症らしい。どう重症なのかはわからない。高円寺の救急病院だ」

「あたしも行くわ」

「おまえはべつに来なくていい」

「あんたまた絶対に冥王星にぶっ飛ぶわよ」 おれを見るしのぶ

/真剣な目。

「オーケー、そのときは頼むぜハニー」

救急病院／集中治療室の前　千鶴を発見。

駆け寄って聞く　「状況は？」

「これから手術だそうです」　顔面蒼白の千鶴／だが気丈にしている。

おれは座るところを探した　壁際に横長のベンチ／そこまで行き座る　千鶴も来る／おれから少し離れて立っている。

「座ったらどうだ？」

「いえ、座ると立てなくなりそうなので……」

しのぶが自動販売機を見つけてコーヒーを買ってきた。受け取るおれと千鶴／プルトップを弾くおれ　飲む／千鶴は缶を両手で握ったまま。

おれは千鶴の目を見た　「全部話せ」

「はい……」

「その前に座れよ。立てなくなったらずっと座っている」

「はい……」　千鶴はおれから少し離れて座った。「遠藤様の申しついで門脇七海のマンションに向かったんです」

「それで、チャイムを鳴らしたが誰も出てこない。ドアノブをガチャガチャやったら開いた。だから中を覗いた。そしたら七海が倒れていた。そこまでは想像できるさ。やれやれだ、おれのまわりには鍵が開いているからといって勝手に人の家に入ってしまうヤツが多過ぎる」

しのぶを見る　素知らぬ顔。

「まあいい、それで七海に何があった？」

千鶴は缶コーヒーのプルトップを弾いて一口飲んだ。それから震える唇をゆっくり開いた。

「ひどい有り様で倒れていました。顔も腕も足も腫れて痣だらけで……そ、それで……」

「それでおれに電話した。救急車を呼んだ。それもわかっている。医者はなんて言っているんだ？」

「暴行されて……レイプされているって……」

おれのすぐ脇で立っていたしのぶ／ハツと目を見開きおれを見た

それは見えた／だがそのあとはよくわからない おれの脳み

そは揺れていた 震度六／スクロールする世界／墮ちる世界

「救急隊の話では、右腕と右足首、それにあばら骨が骨折していて股関節が脱臼、内蔵も損傷しているだろうって……何か硬い棒のようなもので殴られていると……とにかく意識不明でものすごく危険な状態だつて……」

聞こえていた そこまでは それから先はわからない／マツ八六で冥王星にぶつ飛んだ／ねずみのカウボーイがオスカー・シュニツェルを七海にぶち込んでいる／七海の腹をブラックジャックで殴打しながら腰を振っている／やめる！！ カウボーイはニタニタ笑っている やめる！！／やめるんだ！！ ぐったりして動かない七海の体が揺れる／カウボーイの腰振り揺れる／揺れる／揺れる／めぐみも揺れていた やめるんだ！！／おれの叫びは月まで届くでかさだったのに／それなのに 誰も助けにこなかった／カウボーイは七海の首を絞めた／腰を振り続けた／揺れるだけの体がビクンビクンと脈打った それでカウボーイは射精した／膣に／口に／尻の穴に／いたるところに止まらない精液をぶちまけた やめる！！／やめるんだ！！／もうやめる！！ 「大丈夫よ、あんたは悪くない」

突然目の前にしのぶが見えた しのぶの顔／赤毛／しのぶの匂い 腕がおれを包み／赤毛がおれを包み／頬が頬に触れた

北極にいるかのように寒かった体が体温を取り戻した 震えが収まっていく おれはしのぶに抱きつこうとしてやめた／ここは病院だった／二人きりじゃなかった／隣には千鶴がいた

おれを見ている千鶴 何ごとかという顔。

「大丈夫ですか？ いったい何が……」

「なんでもないわ、大丈夫よ」

まるで泣いている子供をあやすかのようにおれを抱きしめ頭を撫でているしのぶ　その腕の中で震えているおれ／ぜんぜんまったく大丈夫そうには見えないうらう。

「話を続ける」　おれは精一杯に強がってそう言った。

おれから離れたしのぶが言った　「もう終わったわよ。彼女は今、かなりやばい状況だけど、手術はそれほど難しくもないし、意識もそのうち戻るだろうし、命は助かるだろうってことよ」

そうか　冥王星にいたから聞こえていなかったんだ。

「奈津子には連絡したのか？」

「はい、今こちらに向かっています」

向かっている？　それはまずいな

「そうか、警察は？」

「それも今向かっていると思います」

「そうか」　面倒なことになりそうだ。「奈津子に電話して、ここにはこないほうがいいと言え。警察と鉢合わせじゃ面倒なことになる。おまえがやることはこうだ、警察にはありのままを話す。ただし、七海との関係だけはごまかせ。七海の友達だったと言え。どうせすぐばれるだろうが、ばれたらおれに指示されていたと言え。奈津子の名前は出すな。おまえの雇い主はおれだと言え。わかったな？」

「はい、わかりました。でも私がおあなたの名前を出したら、あなたは？」

おれは立ちあがった　「おれはもともと、警察にはよく思われていない。おれがああのマンションで起きた事件に首を突っ込んでいることは警察も知っている。だから、どうとでもごまかせる。そうだ、盗聴器はあったか？」

「いえ、クローゼットの中とか戸棚とかあちこち見てみたんですが、それらしきものはありませんでした」

「そうか、わかった。それじゃあ、うまくやれよ」

おれは歩き出した　しのぶがおれの腕に絡みついてきた。

「ね、あたしがいてよかったでしょ？　感謝しなさい」

「ああ、やっぱりおれはおまえがいけないと生きていけない男みたいだな」

しのぶはおれの腕に頭をもたれた　「そんなこと十年前にあんたと出会ったときから、あたしにはわかっていたわよ」

おれたちは病院を出た　黒いワンボックスが病院の前に止まり、藤井がおりるのが見えた。おれはそれを横目で見ながらしのぶの肩に腕をまわして知らん顔で歩いた。藤井はおれに気がつかず、病院の中に入っただけだった。

携帯電話が鳴る　奈津子から。

「どこにいるの？」

「今、病院を出たところだ」

「そう、状況は立川から聞いたわ」

「今すぐ会いたい。会う場所を指定しろ」

溜め息　「そうね、それじゃ病院の裏の駐車場にいるから、そこまで来て」

おれは電話を切ってしのぶと一緒に病院の裏の駐車場に向かった。ピカピカのワンボックス車が駐車スペースから出てきておれとしのぶの前で止まった。黒い男その二が助手席からおりてきて、後部席のスライドドアを開いた。おれとしのぶはそこに乗り込んだ。車は走り出した

一番後ろの座席に奈津子がいた。おれとしのぶはその前の座席に座った。

「ずいぶん綺麗な女性を連れてくるのね」　タバコを啜えている奈津子。

「おれの天使に気軽に話しかけるな。それから、こいつはおれたちの話を聞いても誰にもなんにも言わない。気にせず話していい」

しのぶは奈津子を見て、それがメイクアップアーティストの遠藤奈津子だと気がついた。有名人を見るミスターな眼差しになるしの

ぶ。おれは奈津子をマジマジと見ているしのぶを前に向かせた口を尖らせてふてくされるしのぶ。

「状況は聞いたんだろ？ これからどうするんだ？」

「それを聞くのがここに来た理由だったの？」

おれはタバコに火をつけた。「そうだ、これからどうするかが知りたい。警察は千鶴に事情を聞く。なんで七海の部屋にいたかな。千鶴にはあなたの名前は絶対に出すなど言っている。おれに雇われていたと言えとな。だが、警察するのはどこそぞの猿軍団じゃない。すぐにばれる」

溜め息をつく奈津子。「あなたを責めるつもりはないんだけど、もっと早くどうにかして欲しかったわ」

「昨日、七海と会う約束をしたんだ。本当は昨日会いたかったんだがな、七海がどうしてもやりたくないことがあるからと、今日になった」

「あの子がやりたいことっていうのはいったいなんだったの？」

「それはわからん。いや、だいたい想像はできているんだがな。本人からは聞いていない。おそらく、そのやりたいことをやった結果、あんなことになったんだ」

「暴行されたのが？」

「そうだ」

「そう……」 溜め息。「七海は私の娘なの」

「それはもうわかっていた」

「そうみたいね、どうして七海の調査を依頼したのか聞かなくなっただものね。でも、どうしてわかったの？」

タバコの灰を灰皿に落とす。「本来、あなたが自分の立場を守ることで、相手がどうなるかは関係ないことなんだ。あなたが面倒に巻き込まれてスキャンダルにならなきゃそれでいいはずなんだ。あんたみたいな人間は、まわりを蹴落として今の地位にいるんだからな。実際あんたには、それくらいの非常さが伺えた。それなのにあんたは、七海が面倒に巻き込まれないようにしると言った。巻き込まれたら揉み消せとも言った。愛莉の件とまったく同じことをだ。

愛莉は自分の子供だから、守ってやろうとするのはわかる。やり方が正しいかは別だけどな。それと同じことをおれに依頼し、愛莉のことを話すときと同じように感情をあらわにする。それはつまり、七海も愛莉と同じで、あんたの子供ってことだ」

「さすがね」　タバコを消す奈津子。「七海は私が十七のときに付き合っていた男との間にできた子なの。その男には家庭があったし、私はまだ子供だった。だから七海は養子に出すことになったの。その男が段取りしてくれて、七海は産まれてすぐに、門脇って名前の年配の夫婦に引き取られて行ったわ。最初のうちは七海に会わせてもらっていたんだけどね。そのうちに別の男と付き合うようになって、子供がいるなんてことは言えなくなるし、愛莉の父親と付き合うようになってからは、七海とはもうぜんぜん会わなくなっていたわ。それが、この前たまたまフリージアで新製品の共同開発をする会議があったときに、七海を見たのよ」

「手の痣か」

「そうよ。あの痣は産まれたときからあったの。形や大きさはちょっと違ってはいたけど、なんとなく七海じゃないかって。それで、あの子の身元を調べてもらったの」

「血液型を調べると言われたときに、おかしいと思っただけなんだがな」

「今の私は、仕事が昇り調子なの。この状況でスキャンダルがまずいってというのは、あなたにだってわかるでしょ？」

「ああ、わかるぜ」

「だから公にしないように調べたかったのよ」　奈津子はタバコに火をつけた。「あなたのやつかいごととやらに、七海がどれだけ関わっていたのか教えてもらえないかしら？」

おれはタバコを消した。「七海が住んでいるマンションで人が死んだ。事故死ってことになっているが、どうも胡散臭い。その男は、おれが別件で調査を依頼されていた仕事に大きく関わっていた。だからおれはその事故死扱いになった事件を調べている。七海がそ

の事件に関わっているのは間違いない。おれの予想ではかなり大きく関わっているはずだ」 新たにまたタバコに火をつけるおれ。

「それだけじゃない、愛莉も大きく関わっている可能性がある」

奈津子が驚きの表情をした 「どういうこと？ なんて愛莉まで？」

「女子高生が男の部屋に入ったという目撃情報がある。愛莉は男が死んだ晩に高円寺にいた。ほかにもいろいろあるが、とにかく、愛莉と七海は事件の真相を知っている存在だとおれは思っている」

溜め息をつく奈津子 「詳しいことは話す気がないのね？」

「おれは探偵だ。別の依頼人からの仕事内容をあなたに話すわけにはいかない」

また溜め息 「そうね、そうでなきゃ私はあなたに依頼してないものね」

「あなた、溜め息が多すぎるぜ？ 化粧の乗りが悪くなっちまうぞ」

「一つ教えてほしい。愛莉は七海が自分の姉だっことを知っているのか？」

またもや溜め息 「私が愛莉に話したことはないわ。でも、私と千鶴の会話を愛莉は聞いていたのよ、あなたに七海のことを依頼する話をね」

そついや、愛莉はおれにもしつこく聞いていたな

瞬き！ 突然／いろいろいるなことがつながらる瞬間／イメージネーシヨンのピントが合う瞬間 最初に聞いてきたとき／二度目に聞いてきたとき。

消えたマリファナ／愛莉が援助交際をしていた話 援助交際と麻薬密売をグループ化／リーダーは男！

おれを襲ったのは男！

七海はレイプされた 犯人は男！

「そうか、それでもうほとんどぜんぶわかった。おろしてくれ、愛莉を探す。愛莉を捕まえないと、事件が拡大する」

援助交際と女子高生

愛莉を探せ！

おれは愛莉に電話をした　　現在電源が入っていないためとかなんとか

奈津子が学校に電話をした　　今日は祭日だとしのぶが言った／
愛莉は学校にはいなかった。奈津子は自宅に戻ってみると言った。
おれとしのぶは高円寺駅で車を降りた

愛莉を探せ　　捕まえるんだ　　だがいったいどこを探せばいい。
おれは真由美に電話をかけた　　「愛莉が来たら、捕まえておい
てくれ」

「何かあったの？」

「詳しいことは言えない。もし愛莉が店に現れたら、おれに連絡し
てくれ、頼む」

「わかったわ。有二君、無茶はしちゃだめよ」

「無茶だと思ふことはしたことがない」

「まったくもう！」

電話を切る　　「しのぶ、おまえは事務所に戻っていてくれ」

「なんでよ！　あたしも一緒に搜索するわ」

夫婦探偵　　やる気満々のしのぶ。

「愛莉が事務所に現れるかもしれないんだ、戻っていてくれ」

おれを睨むしのぶ　　いつもいつもあたしを除け者にして！
つて顔。

「わかったわよ、あの子が来たら連絡すればいいのね？」

「ああ、頼む」

おれはしのぶに事務所の鍵を預けた。しのぶは事務所に戻るべく
タクシーに乗り込んだ。

「おいしいところを独り占めしようなんて考えるんじゃないわよ！」
「わかってるさ」

タクシーは走り去っていった。

尻のポケットから携帯電話を取り出す　高橋に電話　いや、やめておこう／あいつはめぐみとうまくやっているはずだ　面倒に巻き込むわけにはいかない／それもこんな二十五年前を思いださせるようなくそつたれな事件に。

行こう　アーバンビルド高円寺へ

時間短縮のためにタクシーを使おうかと思つたがやめた。もしかしたら歩いている最中に愛莉に出会つかもしれない。通行人を注意深く観察しながら徒歩でアーバンビルドに向かった。十分も歩くと人通りがほとんどなくなる　歩く速度を上げる／ビリヤード場の通りに入る　いつもの張り込みスポットまで行き三〇三号室を見る。

警察　制服警官／鑑識班　案の定／三〇三号室には近づけない　おれはしばらくここで愛莉が現れないか見張ることにした。

タバコに火をつける　ビリヤード場の入り口まで行き、缶コーヒーを買う。それからまた電柱に戻り、三〇三号室に出入りしている警官たちを見ていた。

黒いワンボックス車が工事現場の前に止まった　藤井が運転席からおりてくる／おれに気がつく　唾を吐いてこっちに来る。

「何してやがる、ゴミ虫野郎が」

「風呂に入れつて言ったのに、入ってないみたいだな」

おれを睨む藤井　「警察を監視して何をするつもりだ？　探偵は引つ込んでろ」

「あんだこそ引つ込んでろよ。この事件の担当じゃないんだろ？」

「なんだと！」　おれの胸倉に掴みかかろうとする藤井。

「汚い手で触るなよ」　藤井の手を払いのけるおれ。「助手がないじゃないか、今日も非番か？　それとも今日はあんだが非番か？」

唾を吐く藤井　汚い野郎だ。

「レイプされたのは、おまえが関わっている女なんだろ？　立川千鶴がゲロつたぜ？」

ナイス千鶴 予定通り／時間稼ぎにはなる。

「だつたらなんだ？ おれは別に違法なこととはしてないぜ。ただここに突つ立つてコーヒーを飲んでいるだけだ」

「本当にそうかな？ おまえレイプしたヤツを知っているんだろ？」

ものすごい目でおれを睨む藤井。「おまえ、田辺の件についても何もかも知っているんだろ？ 田辺と門脇がどう絡んでいたかも知っている。そうだな？」

おれは缶コーヒーを飲んだ。「おれを脅したってどうにもならないぜ？ それとも何か？ おれがあれこれ知っていると何か都合が悪いのか？」

急に怒りが爆発した藤井 拳が飛んでくる／顔面直撃 いてえ！

「てめえ、何を知っているか全部吐け！」

おれは口から血の混じつた唾を吐いた むかつく！ ニヤリと笑つてやる。

「昨日の夜だ。おまえがおれをリンチしたときと同じ、おまえのイニシャルが入ったブラックジャックで殴られた。その黒い車にそっくりなのをおれの事務所のすぐそばで見た。犯人は犯行現場に戻ってくるつてよく言うが、おまえそれでここに来たのか？」

また殴られる いてえ！！ くそつたれ！／むかつくぜ
それでもおれはニヤリと笑つてやる。

「何をしたつておれは何も言わないぜ？ あのと一緒だ、おれは何も言わない」

今度は腹に拳が食い込んだ 昨日殴られた痣だらけの腹／いてえ！！ おれは激痛に耐え切れずに前屈みになって座りこんだ
くそつたれが！！／こいつが警官じゃなかったら今ここでぶつ潰しているところだ！！

座りこんだおれに蹴りを入れてくる藤井 いてえ！！／やめろつてんだ糞野郎が！！

「藤井警部！」

三〇三号室の前にいる制服警官が外部廊下から身乗り出して叫んでいる。

チツと舌打ちをして唾を吐く藤井 「命拾いしたなゴミ虫野郎」
「おまえこそ、おれにこれ以上犯人扱いされずに済んだな」

「あのとき、おまえをリンチしたときに、殺しておくべきだったか
もしれんな」

藤井はおれを無理やり立ちあがらせ、思いっきり電柱に叩きつけて車に戻った おれはまた座り込んだ／黒のワンボックス車は走り去っていった。

「君、大丈夫か？」 制服警官が走ってくる おれはヨロヨロと立ちあがって歩き出した。

「待ちなさい！」 おれを呼び止める制服警官。

「おれなら大丈夫だ。それにおれは何も悪いことをしじゃない。だからあんたに尋問される理由はない」

愛莉が現れるかもしれないからまだここにいたかったが、くそつたれ藤井のおかげで無理になった。移動しよう どこに？

携帯電話が鳴る 奈津子から。

「家にはいなかったわ」

「そうか」

考える 次に何をすべきか／約十秒 「愛莉の部屋で、探して欲しいものがある。それからもうひとつ、知りたいことがある。七海の父親は誰だ？」

散々探しまわったが愛莉は見つからなかった。思いついたところはすべて探した。千鶴に愛莉がよく泊まっていた友達を聞き、奈津子に電話してもらった。夕方になるのを待って愛莉が出入りしていた店をすべてまわり、店員にかねをやって愛莉が来たら連絡しろと伝えた。ついでに警察が来なかったかも聞いた。来ていない／警察はまだ愛莉に目をつけていない

奈津子に探してくれと頼んだものは、愛莉の部屋にはなかった。おれの脳みそで考えつく場所はあと一箇所。だが、そこに行っておれの欲しいものを手に入れるためには、愛莉がいなきゃ意味がない。

ほかにできることがもうない。一度事務所に戻ろう。

真由美の店の前　店の外から中を覗く　真由美がおれに気づく／身振り手振りで愛莉は来ていないとおれに伝える真由美

エレベーターホール　体中痛いからエレベーターを使う／二階

片桐探偵事務所／スチールドアを開ける

驚愕／なんともしがたいろくでもないものが目に飛び込む

散々に散らかされた事務所　ロッカーの中身も／机の中身も／キッチンの中身も／何もかもぶちまけられている　場所が大幅に変えられているソファ／テーブルの上　金庫が開けられて空っぽ／まだ三分の二ほど残っていた奈津子からの前金がつくりなし。おれは住居スペースに足を運んだ　しのぶがいらない／バスルームにも／トイレにも　事務所に戻る／洗面所／トイレ　いない

電話をかける　電波が届かない場所にいるか電源がなんたらか
んたら

机の上　消してあったパソコン／電源が入っている／マウスを動かす　画面に映るメモ帳／ゴシック体で書かれた文章　『持

つべきものを持って来い』

その下に住所　下着泥棒を打ちのめしたしのぶのビルの住所／おれのタフガイ尋問部屋

持つべきもの　それが何かはわかる／おれが奈津子に探させたもの／愛莉の部屋にはなかったもの／おれはそれを持っていない

どうする？／決まっている　手ぶらで行くのみ

おれの武器　真鍮のプラスチック／ボロ雑巾になって捨てられかけてる体　あとは何も無い

おれは住居スペースに行って着換えをした　目いっぱい気取って登場してやるために　タフガイを気取るために筋肉を見せびらかす白のタンクトップ／いきり立って根性をこんこんと沸かせる股間を象徴するでかい角の水牛のバックルがついたベルト／いつも通りのブーツカットジーンズ／蛇革のポインデットトウをピカピカに磨く／紫と黒の柄シャツ／お気に入りのスカイブルーのサンダグラスは消滅した／オレンジの度入りサンダグラスで我慢　黒のテンガロンハットをかぶり机まで行く　机の上にぶちまけられた引き出しの中身を漁る／事務所の合鍵　キッチンに行く／サザン・カンフオート／封を開けていない瓶を棚から出す／キャップを開ける　ラッパ飲みする　根性がこんこんとみなぎる／キャップをしつかり閉める／瓶の首を握り締めスチールドアに鍵をかけて事務所を出る

真由美の店の前／真由美に目配せをする／真由美が外に出てくる

小声で話す。

「事務所が荒らされている。しのぶがさらわれた」

「なんですって!？」

驚き顔／ゴシップ探偵も現実の事件には敵わない。

「事務所に誰か入っていくのを見なかったか？」

「見てないわ。しのぶは大丈夫かしら」

「居場所はわかってる。おれはこれからしのぶを助けに行く」

「わかったわ。あのね、愛莉ちゃんのことなんだけど、どこに
か思いあたる場所があるの。これからちよつと、そこに行つてくる
わ」

なんと！／おれにはもう思いあたるどころがないと言つのに
／真由美に愛莉の居場所がわかるなんて 驚いた／ゴシップ探偵
もまんざらじゃない。

「そつか、それじゃそつちは任せた」

「有二君、絶対に無理はだめよ。危なくなつたら警察を呼ぶのよ。
仕事よりも君としのぶの命が何よりも大事なんですからね」

おれは、真由美に向かって手を小さく振り、今の体で出せる精一
杯の速度で走つた。

待っている、しのぶ

阿佐ヶ谷 安っぽい町並み／風情があると表現すれば印象が悪くならない駅前／くたびれた飲み屋だらけの細い通り／住宅街に出る手前　しのぶのビル／今にも傾いて崩壊しそうなくたびれ具合　鍵のかかった一階のドア／かつてはスナックか何かだったオンボロの木戸／その脇　二階にあがる細い階段／その奥　地下に　おりる細い階段／一人通るのがやっとな狭さ　わざとでかい足音を鳴らしておる。

安いスナックだったとすぐにわかるようなドア　開ける　薄暗い照明がついた店内／埃の匂い／おれがぶん投げて撒き散らしたワイルド・ターキーの匂い　埃だらけのソファアに座っているしのぶ／両手を後ろ手に縛られている／布切れで猿ぐつわをされている／いやらしい顔がSMチックに進化している　カウンターに黒ずくめの男／顔に殴られた傷　おれが殴った傷だ／プラスナックルで　ドアを閉める。

おれは言った　「しのぶを返せ。それとおれのかねもな」
男は言った　「あれ？　もつと驚いてくれると思っただんですけどね」

おれはタバコに火をつけた　「おまえじゃ役不足だ。おれを驚かしたかったら、もつと頭を使わないとな、村山」

狂気じみた目を光らせてニタリと笑う村山　右手には藤井のブラックジャック／左手には缶ビール／潰された缶が散らばるカウンター。

「なんでばれたんだろうなあ、上手くやっていたのに」
「ぜんぜん上手くない。お粗末極まりないぜ。だいたい、藤井に罪を着せようなんて姑息な手段を使ったところで、藤井が犯人なんかじゃないってのは、最初からわかっている」　おれは握っていたサザン・カンフォートを飲んだ。

村山は藤井のブラックジャックでカウンターを軽く叩いた。

「これで、あちこち破壊していけば、あなたは藤井さんをつけまわすと思っただけどなあ」

「藤井はな、くそつたれの悪徳警官だが、麻薬絡みの悪事だけは絶対にしななんだ。あいつは麻薬を憎んでいる。そのせいでおれはあいつにリンチされたんだからな。藤井だっておまえのことを怪しんで、尾行していたぜ？ 昨日おれをおそったときもな。おまえがやっっていることは間抜けすぎだ」

ニタニタと笑う村山ノビールとマリファナで頭がぶっ飛んでいる／おれの話なんかどうでもいいって顔をしている／単純に人を殴ることで興奮を覚えるただのジャンキーになっている。

「さっさとしのぶを離せ」

缶ビールを飲む村山 「あなたは今、指図できる立場じゃないと思っんですがね」

「気取ってないで、もっと悪党らしくしゃべったらどうだ？」

鼻で笑う村山ノ狂気の目が鋭くなる ブラックジャックで空き缶を叩き潰す。

「ここに来たってことは、『持つべきもの』を持って来たってことですよね？」

「なぜおれが、おまえの言う『持つべきもの』を持っていると思っただ？」

「門脇七海は『持つべきもの』を持っていなかった。あなたはあの晩、遠藤愛莉を事務所連れて帰っている。そしてあなたは田辺の同僚を脅したときに、マリファナについて聞いた。つまりあなたは田辺の同僚を脅したときには田辺がマリファナを栽培していたことを知っていたことになる。あなたは事件の真相を知っている。あなたはあの晩に、門脇七海から持つべきものを預かったんでしょ？」

あなたが『持つべきもの』の持ち主だ」

おれは村山の話を見殺ししてしのぶに歩み寄ろうとした 飲んだくれてないでさっさとなんとかしなさい！！ っって顔のしのぶノ

ウーウーとわめいている。

「おっと、誰が勝手に動いていいって言いました？」 おれの前に立ちはだかる村山 おれを狂気の目で睨みつけたまましのぶのほうへ近づく／しのぶの顔をブラックジャックで撫でる／しのぶのはだけた胸元にブラックジャックを突っ込む

「やめろ、しのぶには関係がないことだ」

「この女はとても美しい。田辺がストーカーをする気持ちがよくわかる」 ブラックジャックでしのぶのたいして大きくない乳房を愛撫する村山 しのが体をよじる／ワーワーわめく。

「やめろと言っているだろう」 タバコを捨て足で揉み消すおれ。「この女を犯したらとても気持ちがいいだろうなあ。ぶち込んで腹を殴打すると、絞まりがとつてもよくなるんだ。首を絞めるとさらに絞まりがよくなる」

目を見ればそれが冗談じゃないってことがすぐわかる 狂気で興奮し見開かれた村山の目／現実と幻想を往来している脳みそ。

七海がレイプされている姿が見えた 脳みその中の画面にでかでかと写し出されてすぐに消えた 脳みそが揺れた／震度六強 恐怖がおれを襲った／体が震え出した／サザン・カンフォートをラッパ飲みした／目の前がスクロールしないようにしのぶをじっと見続けた。

「やめろ」 おれは目の前が消えてしまうそうなかでそう言った。「そうだよ、そんな顔をするべき立場なんだよ、あなたは」 二タリと笑う村山。「タフガイなんて時代遅れだ。もつとビビってくれなきゃ面白くない。さあ、この女をめちゃくちやにしてやることをそこで眺めていてもらおうか」

しのぶの赤毛を引っ張る村山 ブラックジャックがしのぶの首を撫でる。

「やめろ！」 マツ八六／冥王星 ねずみのカウボーイがオスカー・シュニツェルを七海にぶち込んで二タニタと笑っている／七海の腹を殴っている／ぐったりして動かない七海 めぐみもぐ

つたりして動かなかった／動かないのに体が揺れていた／カウボーイの腰振りでぐったりした体が揺れていた　声も出ないのに／突然体がビクンビクンと波打った／それっきり何時間もまったく動かなくなつた　おれは叫んだ／月に届くほどの声で叫び続けたのに／喉が裂け血が吹き出しても叫び続けたのに　誰もおれたちを助けてくれなかつた　カウボーイはニタニタしたまま七海の中に射精した／尻の穴にも射精した／口の中にも／腫れ上がった腹にも／手のあとがつくほどに握られた乳房にも／絞められた首にも／目を見開いて動かない顔にも　おれは叫び続けた　恐怖で震えていたのに／おれは勃起していた

体がガクガクと震える　酒だ／サザン・カンフォートをラツパ飲みする／しのぶが見えた　しのぶがおれを見ていた／ブラックジャックがブラジャーの中に侵入しているのに　おれを見て『大丈夫よ』って顔をしていた

おれの震えは瞬時に止まつた　守る／しのぶを守る　今は二十五年前じゃない／おれはもう子供じゃない／手も足も自由動く　あのとときは違つんだ／叫ぶことしかできなかったあのとときは違つ！

おれは今にも壊れそうな木の椅子を手に取つて投げた　村山にヒット／バラバラになる椅子／破片がしのぶにもぶつかる　体を丸めるしのぶ／ブラックジャックを握っていない手で顔を覆つ村山　おれは飛んだ／村山の目の前／ソファーターブルの上に飛び乗つた　蹴り／壁にぶつ飛ぶ村山　しのぶと村山の間割つて入る／しのぶが埃だらけのソファアを転がりながらおれたちから離れる　立ちあがる村山／構えるブラックジャック／振りおろされるブラックジャック　避ける／ソファーターブルにぶつかるブラックジャック／碎けるソファーターブル　サザン・カンフォートを振りあげるおれ／村山の後頭部　碎け散るサザン・カンフォート／碎けたソファーターブルに崩れ落ちる村山　動かない／桃の香りが部屋中に充満する。

おれはしのぶに駆け寄った／猿ぐつわをほどく　すごい形相のしのぶ。

「あんたバカじゃないの!?　椅子なんか投げてあたしにあたったらどうするつもりだったのよ!」

助けてやったのに怒られるおれ　何かがおかしい。

「あたらなかつたんだからいいじゃないか」

「破片があたつたわよ!」　ワーワーわめくしのぶ／いつも通りのしのぶ／そうか　いつも通りだ／何もおかしくない。

「暴れるな、縄がほどけない」　しのぶの腕を縛っている縄をほどく／手首が真っ赤になっている。

「だいたいあんた、来るのが遅いのよ!　どれだけここにいたと思っっているの!」

「村山が飲んだ缶ビールの数を数えればだいたいわかる」

「そういう冷静なことを言っているあんたって、ほんとむかつくわ!」

「おまえ、文句が多いぞ。映画なんかじゃ、ヒロインがヒーローにキスするシーンだっていうのに」

しのぶは真っ赤な手首をさすりながら言った　「あんた、ヒーローみたいに格好よく登場するつもりで、わざわざ着替えてきたの?　ほんとバカね」

そう言っただちあがり、目いっぱい背伸びをするしのぶ。

「ほら、キスしてほしいなら少しかがみなさいよ」

おれはしのぶの首筋に手をあてた　大好きな赤毛をかきわけた／猿ぐつわのせいで口紅が擦れて広がっている／その唇に狙いを定めた／そしてキスをした

情熱的なキス／危険とスリルで興奮し高揚し光悦の笑みを浮かべるしのぶ　おれはおれに吸いつくしのぶの唇から離れた。

「このままここでファックってわけにはいかないな」

「あら、それはそれで興奮するわよ」　やる気満々のしのぶ。

「まずあいつをどうにかしなきゃな。おまえにぶち込んでる最中に

後ろから殴られたりしたら、たまつたもんじゃない」

「あたしとファックしている最中に死ぬつてのも悪くないんじゃないの？」

「七十か八十のヨボヨボのじじいになったときに、そうするさ」

おれはしのぶを縛っていた縄を持って村山のところに向かった。

「ヨボヨボのじじいになつてもあんたのカシューナッツが元気だつたらそうしてあげるわ」

フツツと笑うしのぶ／おれを癒すしのぶの笑いを聞きながら、村山の腕を後ろ手に縛った。気絶して動かない重い体を引きずつてカウターのハイスツールに縛りつけた。

「これでおまえを素っ裸にしてもいいんだがな。まだやらなきゃならないことがある。こいつはここに置いて、いったんここを出よう」

「何よ、犯人はこいつだつたんじゃないの？」

「いつたいたいなんの犯人だ？ おれたちは田辺の首吊りオナニー事件の真相を探っているんだぜ？」

おれはタバコに火をつけた。「こいつは変態オナニー野郎の事件を揉み消すための脇役だ。おれを襲つたのも、七海を暴行したのもこいつだが、こいつは何をやるのにも詰めが甘いし、頭が悪い。

おれも七海も生きているんだからな。拳句の果てには、自分に酔つてなんの関わりもないおまえを犯そうとして、このざまだ」

おれはぐつたりして動かない村山に蹴りを入れた。

「じゃあ主犯がほかにいるってこと？」

しのぶは村山のスーツの内ポケットをまさぐつた／札束／おれのかね　自分のバッグを拾ってしまい込んだ。

「主犯と言えるのかはわからんがな。実際にほとんどのことを実行していたのは村山だからな」

「いつたいたれが主犯なのよ」

「シエルシエ・ラ・ファミ」

しのぶは怪訝な顔で首をかしげた。「何よそれ？」

おれはタバコを床に捨て足で揉み消した
ていつか

「女だ。女を探せっ

しのぶのビルノ地下の埃臭くて酒臭い部屋　おれたちはやるべきことをやるためにここから移動することにした　女を探せ

しのぶはやる気満々で先頭を切ってドアの前まで進んだ　おれはいつも通りにしのぶのあとについて歩いた

しのぶがドアノブに触れようとしたとき、ドアが勝手に開いた
しのぶは一步さがった／おれは二歩さがった

「あれ？　もしかして予想外の展開になっているのかな？」

結衣がそこにいた　おれを見てクスクスと笑う結衣ノ笑いながらナイフを取り出した。ドアを閉めて中に入ってくる結衣。

「有二も、しのぶさんみたくにもっとびっくりすればいいのに」

「おまえの相棒にもさつき言ったばかりだ。おれを驚かすには、おまえらじゃ役不足だ。どいつもこいつもノコノコと現れてくれて助かるぜ。探す手間が省けた」

結衣はクスクス笑いながらドアにもたれた　「動いたら刺すわよ」

結衣が手を伸ばせば腹から血を噴射できる距離にしのぶがいる。こういうとき、度胸が座り過ぎているしのぶは、危険から遠ざかるのに遅れをとってしまう。

「しのぶ、動くんじゃないぞ」　おれは結衣のナイフだけを見つめていた。

「なんで、わたしと村山が犯人だって思ったの？」

おれはナイフをじっと見たまま言った　「おれが『持つべきもの』を持っているからだ」

「それは嘘だよ。有二は『持つべきもの』を持っていない。村山は有二が持っているって思っていたけど、わたしはそうは思わない」

クスクス笑いの結衣。

「なぜだ？」

「門脇七海が昨日、わたしに電話してきたの。話があるっていうから、村山に行かせたの。まさかレイプしちゃうなんて、思いもしなかったけどね」

クスクスと笑う結衣 「私に電話をしてくるってことは、あの女が『持つべきもの』を持っていて、わたしが何をしたか知っているってことでしょ？ 警察に通報しないで話をしようってことは、取り引きをしようってことでしょ？ 『持つべきもの』は門脇七海が持っている。どこかに隠してある。だから有二は持っていない」
村山は間抜けだったのだが 結衣はもう少しマシらしい／おれが『持つべきもの』を持っていう振りはできそうにない。

おれは言った 「援助交際、マリファナ、グループ化。おまえと村山の計画だ」

「だから、なんでそれがわかったのか聞いているんだよ」

この状況でもクスクスといつも通り笑う結衣 癒されそうになるおれ／だが癒されている場合じゃない／ナイフはしのぶの腹に向かって光っている。

「おれはおまえに、愛莉が高円寺で何をしていたのかを聞いた。おまえは愛莉に年上の男がいて高円寺に住んでいることを匂わせ、さらに愛莉が援助交際をしていることを匂わせた。それが失敗だったんだ。まったく知らない振りをしていればよかったんだ。おれは愛莉が援助交際なんかしていないことを知っている。だからおまえが言ったことがすべて嘘だと思った。じゃあなぜ嘘をつく必要がある？ それはおれが何を探っているのかがわかって、愛莉をおれが探っている女にしたてあげようと思ったからだ。報道なんかされることもないようなちっぽけな事件のことを、ただの女子高生が知っているわけがない。おまえはただの女子高生じゃないってことだ。おまえは自分のついた嘘でおれにそれを教えたんだ」

クスクス笑う結衣 「さすがだね。でもどうして愛莉が援助交際をしていないって知っていたの？」

「簡単だ」 そう／とてつもなく簡単 「愛莉は貧乏だ。親は

かね持ちだが、愛莉はかねを持っていない。身につけているものは高価なものばかりだが、現金が財布に入っていない。かねがなくておれを呼び出したり、たかだか一日かそこからのロッカー代を貸してくれと言ったりするほどにな。そんなヤツが援助交際なんかしているわけがない」

「あなたは、愛莉があ晩、あのマンションにいたと思っただんじやないの？」

思っていたさ／今でも思っている　間違いないと確信している
／だが、それは結衣には言わない。

「田辺の部屋に入った女子高生の容姿と、愛莉とは一致しない。その女子高生とは別人だ。おそらく愛莉は田辺には会ったこともないだろう。おれに愛莉を疑わせるように仕向けたおまえが、その女子高生だつて考えるのが、一番自然だ」

「なぜ容姿がわかるの？　村山の聞き込みでも女子高生だつてことしかわかっていないんだよ？　あなたはその女子高生をあマンシヨンでは目撃していないんでしょ？」

「目撃したのはビリヤード場の女だ。あそこから田辺の玄関までは距離がある。顔はわからない。じゃあなぜ女子高生だと言い切れるんだ？」

「なぜ？」

「簡単だ」　そう／とてつもなく簡単　「制服姿だったからだ。

愛莉はあ晩、制服を着ていなかった。学校帰りに駅のロッカーに制服を閉まつていて、ロッカー代をおれにせがんだんだからな。おれがおまえとデートしたとき、前の日から同じ格好だと言って、服を買ってくれと言ったおまえは、制服を着ていた。おれに愛莉のことで嘘の情報を流したおまえが、目撃情報の女子高生で決まりだ」

動かないしのぶ　おれは結衣の注意を引くためにシャツの胸ポケットに手を突っ込んだ。

「動かないでつて言つたでしょ！」　大きな声を出す結衣／ナイフがしのぶに数センチ近づく。

「タバコくらい吸わせるよ」 おれはタバコに火をつけた。その隙にしのぶが少しだけ後ずさりしたが、結衣はすぐにしのぶを睨んだ。

「ちょっと！ ベラベラしゃべってないで、さっさとこのナイフをなんとかしなさいよ！」

イライラしているしのぶ　　なんとかするためにベラベラしゃべっているんだが。

「まったくやれやれだぜ。物騒なものはしまえよ。おれはべつに、おまえと村山をとっ捕まえて警察に突き出そうなんて思っちゃいないんだ」

一歩前に出るおれ　　結衣の手／ナイフがしのぶに数センチ近づく　　タフガイも疲れる／ヘラヘラと余裕の表情で強気を装っていなきやならんのに／汗が噴き出してくる。

「あなたの推理をぜんぶ聞かせてもらってからどうするか考えるよ。わたしが事件の晩に制服姿で、愛莉を高円寺と結びつける嘘を言ったっただけで、犯人だって決めつけるなんて、単純過ぎるもん。もっとほかに何か、あなたにヒントを与えてしまっていたのかな？」

「証拠なんかどうだっていいじゃないか。今こうしていることがすべての証拠なわけだしな。こんなことはやめるんだ。ナイフをおろせ」

「嫌だよ。田辺抜きでも、この女は邪魔なんだからね」

ナイフはしのぶに向かったまま／結衣の視線はおれとしのぶを捉えたまま　　おれはタバコを深く吸った／溜め息と一緒に煙を吐いた。

「やれやれだ。大きなヒントは何もない。細かい出来事を繋いだ結果、おまえと村山に結びついたっただけだ。いいか、愛莉はタバコを吸わない。だから田辺の部屋でマリファナを吸っていたのは愛莉じゃない。ほかにもある、たとえば」

「ちょっと待って」　　おれの話を守る結衣　　「有二はどこでマリファナのことを知ったの？　　村山は田辺の同僚に、マリファナに

ついで黙っている代わりに嘘の証言をさせた。そのときに、有二がその同僚に尋問していたことを知って、有二がマリファナについて知っているんだと思ったの。あなた、いつマリファナの存在を知ったの？」

「村山は、おれが『持つべきもの』を持っているから、マリファナについて知っていると聞いた。そういうことだろ？」

おれはタバコを吸った／煙を吐いた／タバコを足元に落としたり／足で揉み消しながら少しだけ前に進んだ　しのぶに手が届く位置まで近づけた。

「そうだよ。わたしは違うと思っていただけだね」

「おれは田辺の部屋のベランダに侵入している。おまえと田辺が相互オナニーをしてマリファナを吸っているのを聞いている。おまえが電動アンマでオナニーして潮を噴いたのも知っているさ」

しのぶ／横目でおれを睨んでいる／さっさとなんとかしてよ！
って顔。

「やだ、あのとき有二はベランダにいたんだ。潮なんか噴いていないけどね」　クスクス笑う結衣。

「田辺の同僚に嘘の証言をさせたのがいけなかったな。いや、嘘の証言をおれに話したのがいけなかったんだ。おまえも村山も、おれに嘘をつくから、いけないんだ。探偵の情報収集能力を甘く見すぎている。あの男は田辺の性癖については何も知らない。自分の首を絞めることになるマリファナについてはベラベラしゃべったのに、自分に関係のない田辺の性癖についてはしゃべらなかつたんだからな。知っているはずがない。じゃあなぜ、村山は嘘の証言をさせた？　おれは田辺の死が事故だか殺人だかは知らない。どっちでもいい。だが、事故で処理してしまえば、捜査は打ち切られる。マリファナについてまで捜査が及ばない。マリファナについて捜査させないために、嘘の証言をさせたってことだ。おまえと村山がマリファナを盗んだんだ。それに、村山はダークグレーのステーションワゴンに乗っている。黒っぽいワゴン車ってのは村山の車だ。おれはあ

の車におまえが乗り込むのを、はじめて会ったときに見ている。もつともあのときはメガネがぶつ壊れちまっていたから、ぼやけていて車種まではわからなかったけどな」

クスクスと笑う結衣 「本当にさすがだね。優秀な探偵だよ」

「そりやどうも」 タバコを吸うおれ／ナイフを見たまま

「ちよつと！ あたしには何がなんだかさっぱりわからないんだけど！ だいたい『持つべきもの』ってなんなのよ。なんだかわからないもののためにこんな目に会っているなんて、理不尽すぎるわ！

ちゃんと説明してよ！！」

動けなくってイライラしているしのぶ／やってられないわ っ
て顔で向けられたナイフを睨んでいる。

「七海は田辺の部屋を盗聴していたんだよ。だから、七海は結衣と村山が何をしたのかすべて知っているんだ。その盗聴を録音した媒体、それが『持つべきもの』だ。だから七海は襲われたんだ」

盗聴ですって？ っ て顔のしのぶ。

「結衣が七海から電話をもらい、村山が出向くことになった。村山はおれが『持つべきもの』を持っていてかと思いきや、こんでいたから、おれを襲うために事務所に来て暴れた。七海と会うまえに『持つべきもの』を手に入れておけば、七海に結衣と村山を脅せるものは何もなくなるんだからな。だが、失敗に終わって逃走した。村山は自分の立場を守るために、その録音媒体をどうしても手に入れたかったが、できなかつた。間抜けな村山は、マリファナでぶっ飛んで、七海を殺すことにしたが、その前にレイプした。レイプ中に暴行までした。それで動かなくなった七海を見て死んだと思った。まったくもって間抜けだ。拳句の果てに、またもおれの事務所に来て、おまえを誘拐した。そして間抜けに磨きをかけてここで伸びてるってわけだ。おそらく今ごろは、七海をレイプしたのが村山だっつてわかつた警察が、必死になって探しているんだろうな」

「なんで、盗聴なんかしていたのよ。だいたいなんであんたは、そんなことを知っているのよ」

しのぶはしゃべりながらジリジリと後ずさりしていた／もう簡単におれの手がしのぶを掴めるところまで来ていた。

「それはだな……」

「おしゃべりはもういいよ」　一步前に入る結衣。「有二が本当に優秀な探偵だってことはよくわかったよ。今話さなかったことも、全部知っているんだろっね」

「まあな、だいたいのはわかっているさ」

おれはタバコを捨てて足で踏んだ／すぐに新しいタバコを啜えて火をつけた　あんた一人でのんきにタバコなんか吸ってるんじゃないわよ！　って顔のしのぶ。

「でもね有二、一つだけ見落としているよ」

「なんだ？」

「わたしとあなたは、クレイジー・クレッシェンドで会ったのがはじめてじゃないんだよ」

タバコを吸うおれ　結衣の顔／少しだけ勝ち誇った表情　おれも勝ち誇った顔をしてやる。

「知っているさ。おまえは、デブでブサイクな女子高生と一緒にゲームセンターのトイレから出てきた女だろ？　知っているからこそ、おまえがマリファナと関わっているって、すぐに気がついたんだ」

ナイフを握る手に力が入る結衣／勝ち誇った表情が曇る　「なんだ、知っていたんだ。知っていてわたしとエッチしたんだね。わたしのことが好きだったんじゃないかって、わたしを探るためにエッチしたんだね」

「言っただろ、おれは危険な匂いにする女が好きなんだ。それにおまえだって、おれを見張るためか、あるいは仲間に引き込むために近づいて来たんだろ？」

クスクスと笑う結衣／笑ったあとで真顔になって言った　「わたし、あなたのこと本当に気にいってたのに」

おれは結衣の真顔を受け流した／勝ち誇ってニヤリとした顔のまままで答えた。

「そうか、そりゃ残念だな。おれは、おれの人生を見届けてもらう女をもう決めてあるんだ。それはおまえじゃない」

しのぶを睨む結衣／恋敵／邪魔もの。

「この人でしょ？」　しのぶに向いたナイフが震えている。

「さあな」　タバコを捨てる／足で踏みつける

「格好つけてんじゃないわよ！　あたしがおんたの人生なんか見届けるわけじゃないじゃないの！」　動けなくってイライラが爆発しそうなしのぶ。

おれは笑った　「どうやら違っらしいな」

結衣がクスクス笑う／しのぶを睨む／なんでもつと有二に優しくできないの？　って顔をする／そしてニヤリとする。

「もう一つ、これは本当に有二は知らないことだと思っよ。『持つべきもの』の中身は、わたしと村山と田辺のマリファナや援助交際についての会話、それに田辺が死んだ晩のこと、それだけじゃないんだよ」

なんだって！？

「しのぶさんは、有二の二十五年前のことを知っているの？」

なんだって！？

「あんた……この子に話したの？」　ナイフを見つめたままの動けないしのぶ／結衣の言葉にさらにイライラしている　自分だけが知っているはずの事実なのに／目の前の小娘が知っている／おれが心を許して懺悔した女は自分だけだと思っっていた事実が崩壊しそうになる苛立ち。

話していない　おれが二十五年前のことを話したのはしのぶだけだ／高橋が知っているのはめぐみに聞いたからだ／しのぶと高橋以外に二十五年まえのことを知っっていて、尚且つその当事者がおれだっけ知っっているのは、事件の関係者だけだ　なぜだ／なぜ結衣が

「そっか、知っっているのか。でも、その二十五年前の事件が、田辺の事件と関わっっているっことは、二人とも知らないでしょ？」

なんだって！？ おれを見るしのぶ／あんたの存在が、事件を
ややこしくしてるんじゃない！！ って顔。
クスクス笑う結衣 「有二、あなたが知っている二十五年前の
事件は、偽りなんだよ」
なんだって！？

「有二のママはレイプ犯を殺してなんかいないんだよ」
「なんだって!？」

「有二のママは自殺なんかしていないんだよ」
「なんだって!!!!!!」

冥王星ノマツハ六ノねずみのカウボーイノオスカー・シユニツツ
エルノ揺れるノぶつ飛ぶノ墮ちるノめぐみが動かないノ動かないの
に脈打つ体ノビクンビクンとノビクンビクンと!!ノビクンビクン
と!!!! 動かないなのに体は勝手に絶頂を向かえていためぐみ
の体!!!!!! やめる!!!!ノやめるんだ!!!!!!

「有二!」 しのぶの声ノ天使の声 スクロールが止まる。

しのぶがおれを見ている おれの異常に驚く結衣ノしのぶがお
れを抱きしめたのにナイフは動かなかった。

体中が震えるノ汗が噴き出すノ酒 間抜けな村山の頭に吸い込
まれちまったノ酒がない! だが、しのぶの温もりがあるノ落ち
着けノ落ち着くんた。

「下着泥棒」 おれは震える声でそう言った。

おれの異常に驚いていた結衣の顔が、クスクス笑いに変わる

「あれは、わたしがやらせたんだよ。援助交際で知り合ったの。下
着フェチで下着泥棒をしているって言うていたから、田辺が欲しが
っていたその女の下着を盗んでもらったの」

「あいつは、おまえに頼まれたあと、しのぶの下着を盗んだ。こ
いつんちは幼稚園児だって簡単に下着を盗めるようなところだから
な」

しのぶがおれを睨む おれはしのぶの赤毛を撫でた。

「そのときに下着泥棒は言っていた。二十五年前の、おれとおれの
家族のことをな。あいつは何者だ、なぜ二十五年前のことを知って
いる」

アハハと笑う結衣　　やっとおれが知らない事実を知っていて、勝ち誇った気になれている。

「あいつはね、二十五年前まではただの泥棒だったんだよ。ある日、侵入した有二の家で、有二の変態っぷりに刺激されてママとおねえちゃんの下着を盗んだんだよ。それがはじめての下着泥棒だったんだから」

アハハ笑いが大きくなる結衣　　「そしてあいつは、有二のママとおねえちゃんのことを忘れられなくなって、毎日のように忍び込んで下着の匂いを嗅いでいたの。そして見た。男が現れて、有二を殴ったり、おねえちゃんをレイプしたりしているのを。レイプ犯が死ぬのも、有二のママが死ぬのも、全部見た。わたしはそれを全部聞いたんだよ」

驚愕／なんてこった　　わけがわからなくなってきた／あのときのすべてを見ているヤツがこの世にいたなんて／おれが記憶していないことを見ているヤツがめぐみのほかにいたなんて

待て！　　めぐみはおれに何も話してくれなかった／おれも聞かなかった／恐怖を蘇らせるだけだから聞かなかった　　おれは警察の話と新聞報道で事実を知った／消えた記憶をそれらで埋め合わせた／なのになぜ　　結衣の話はおれの集めた情報と違うんだ！？

おれは警察に聞いたんだ　　おふくろがレイプ犯を刺し殺したんだと／そして自殺したんだと／なぜ結衣の話はそれと違う

「こんな小娘の話なんか信じちゃだめよ！」　　しのぶの鋭い視線がおれを貫いた／すべてを包み込む目をしている／すべてを知っている目をしている　　しのぶは知っている／おれの知らないことを／結衣が知っていることを　　しのぶは知っている

「あなたたちとってもお似合いよ。わたしがその女を殺しても、有二はわたしのものになりそうもないね」

結衣がフツツと笑った／切ない顔で　　結衣は本当におれに惚れていたんだ。

「有二のびっくりした顔が見れてよかった。ここで二人で抱き合っ

て死んじやいなさい」

ナイフが動いた　瞬間／ほんの一瞬／ナイフよりも速く動いた
おれ／しのぶを突き飛ばす／勢い余ってソファーに転がるしのぶ
空振りのナイフ。

「痛いじゃないの、バカ！」　文句の多いしのぶ。

おれはナイフに手を伸ばした　ナイフを握る結衣の手首を握つた
とっさにナイフを持ち変える結衣／おれに握られていない結衣の手がおれの腹にぶつかる

「大丈夫、その女もすぐにあなたのところに連れてってあげるから」
フツツと笑う結衣／しのぶにそっくりな笑い

おれは自分の腹を見た　結衣の手／ナイフの柄／おれの腹に突き刺さっているナイフ　なんてこった！！／いてえ！！／くそつたれすぎだ！！

結衣がナイフをおれの腹から抜いた　噴き出すおれの血／返り血／水道管が破裂したように噴き出すおれの血／真っ赤に染まる結衣

「有二！！！！」　天使の声が聞こえた　おれはおれの天使を見た／大きな目がさらに大きく見開かれていた／涙が溜まっていたのが見えた

誰だ、しのぶを泣かせるヤツは！！！！

結衣がしのぶに向かって動いた　おれは結衣を捕まえようとした／すべてがスローモーションで見えていた　結衣の腕を掴む／振り返りナイフを振りまわす結衣／腕を切られるおれ／足を切られるおれ／ナイフを握る結衣の手をなんとか掴むおれ

「逃げろ！！」　おれは叫んだ　叫びながらしのぶを見た／固まったまま動かないしのぶ／見開いた目は瞬きすらしなかった／愕然とした顔のまま／涙だけがどんどん流れ落ちていた／　動け！／逃げるんだ！／逃げろしのぶ！！

おれは声を出そうとしたが出なかった　口がパクパクと動くだけだった／声が出ない／結衣の両腕を掴んだまま結衣をしのぶから

遠ざけようとした／足を動かした途端に滑って転んだ　自分の血で滑った／結衣の手だけは離さなかった／結衣はおれの上に倒れこんだ　恐怖と怒りが入り混じった顔を真っ赤に染めている結衣が見えた　逃げるしのぶ　逃げてくれ　おれはしのぶを見た／声が出ない／しのぶの目を見た　見開いて固まったままの目を見た　逃げる！！／逃げるんだ！！　頼む！！／逃げてくれ！！

しのぶが動いた　何か言っている／おれを見て何かを言っている　聞こえない／しのぶの声が聞こえない　天使の声が聞こえないじゃないか！！！！

しのぶが椅子を握ったのが見えた
結衣の体に椅子が激突したのが見えた
おれの顔の脇に落ちたナイフが見えた
それを拾ったしのぶが見えた

しのぶが結衣を刺そうとしている　だめだ／天使が人を刺したらだめだ／おれはしのぶの足を引っ張った／しのぶは転げた／おれに抱きついた　何か言っているが聞こえない　頼む！！／おれの天使の声を聞かせてくれ！！

結衣が立ちあがったのが見えた
しのぶの手からナイフを取ったおれが見えた
結衣の足をナイフで切ったおれが見えた
倒れこんだ結衣の首にナイフを突き刺したおれが見えた
おれを見てクスクス笑う結衣が見えた
クスクス笑う口からゴボゴボと血が溢れ出すのが見えた

ゴボゴボと／ゴボゴボ／ゴボゴボ／真っ赤な血が　目の前が真っ赤になった／ゴボゴボ／ゴボゴボ／ゴボゴボ　真っ赤な結衣から真っ赤な血が／ゴボゴボ／ゴボゴボ／ゴボゴボ

そして何も見えなくなつた

真つ暗闇で声が聞こえた　泣き叫ぶ天使の声
誰だ、しのぶを泣かせたヤツは！！！！

誰だ！！！！

ぶっ殺してやる！！！！

グルグルとまわる／堕ちていく 冥王星でねずみのカウボーイは死んでいた／オスカー・シュニッツェルにおふくろのショーツを絡ませて／おふくろのショーツに精液をべったりと噴射させて／めった刺しにされて／ニタニタと笑うでかい口から血を溢れさせて

ゴボゴボ／ゴボゴボ／ゴボゴボ

めぐみが横たわっていた 素っ裸で／全身痣だらけで／十四歳のままで 裁縫バサミを握り締めていた／おれを拘束している口とストッキングを切った

おれは自由を得た なんでもできる／めぐみを守ってやれる
だが／ねずみのカウボーイはもう死んでいた／めぐみはもうボロ雑巾になっていた 守られたのはおれだった グルグルとまわる／堕ちていく

声が聞きたかった

天使の声が

おれは結局何もできなかった おまえはどこにいる／逃げたのか／あの場から逃げ切ったのか

声を聞かせてくれ おまえの天使の声を。

顔を見せてくれ おまえの聖母マリアの微笑みを／マドンナたちのララバイの微笑みを／そしてマグダラのマリアのような淫美な微笑みを。

見えない おまえが見えない。

聞こえない おまえの声が聞こえない。

なぜだ！！！！！

見せてくれ！！！！／聞かせてくれ！！！！

モルヒネだ！！／モルヒネが足りない！！　　痛い／腹が痛い／

足が痛い／腕が痛い／何もかもが痛い！！　　モルヒネだ！！

おれにモルヒネをくれ！！／痛くて気が狂いそうだ　　モルヒネ

！！！！／モルヒネが足りない／モルヒネをくれ！！！！

しのぶ！！！！

どこだ！！／しのぶはどこだ！！！！

すぐに迎えに行く！！／だからモルヒネを寄せ！！／痛くて気が狂いそうだ

聞こえない／見えない／モルヒネが足りない

しのぶ！！！！／どこだ！！／どこにいるんだ！！！！

おれにすべてを見せる！！！！／おれにすべてを聞かせる！！！！

見えた　　見えなかったものが見えた

レイプされて横たわるおふくろが見えた　　オスカー・シュニツ

ツエルにひれ伏したおふくろが見えた／グチャグチャの顔で泣いているおふくろ／おれとめぐみに許しを請うおふくろ　　ごめんなさい

会いに来たの／あたしがマリファナを売ったの！／マリファナをせがみにここに来たの！　　こんなことになるなんて／こんなことになるなんて！！

めぐみが裁縫バサミで自分の腹を刺そうとした／おれはそれを奪い取った　　真っ赤な血を滴らせた裁縫バサミを

そうか　　ねずみのカウボーイをめつた刺しにしたのはめぐみだ

ったんだ

おふくろが帰った／おれたちの惨劇を見た／ねずみのカウボーイ
がおふくろを襲った／めぐみがねずみのカウボーイを刺した　そ
うか／そうだったのか

じゃあおふくろは？

ああそうか／おれか　おれがおれを縛っていたロープでおふく
ろの首を絞めたんだ　憎かったんだ／めぐみをこんな目に合わせ
たヤツが／ねずみのカウボーイが／おふくろが

めぐみがレイプ犯を殺したんだ／おれがおふくろを殺したんだ
それを下着泥棒は見ていたんだ／それを結衣は知っていたんだ
めぐみも知っていた／てことは高橋も知っていた／しのぶも高橋
に聞いていた　知らなかったのはおれだけだったんだ。

しのぶ　どこにいる／姿を見せてくれ／高飛車に笑ってくれ／
不機嫌に怒鳴り散らしてくれ／おれを抱きしめてくれ　そして言
ってくれ／大丈夫よ　って。

モルヒネをくれ！！

おれはしのぶに会いたい／しのぶの声が聞きたい

モルヒネだ！！

痛い／体中が痛い／気が狂いそうだ／しのぶの声が欲しい／しの
ぶの顔が欲しい

しのぶ！！！！

つてくる

ああそうか

しのぶを泣かせていたのはおれだったのか

病院／個室／ベッドの上のおれ／小さな窓／小さなテレビ／小さな冷蔵庫／小さなロッカー／小さい声しか出ないおれ。

折り畳みの椅子／しのぶ　小さな体の小さな尻が椅子の上。

「よくまあ、あれだけ汚い血を噴射しておいて、死ななかつたもんね」

売店で買ってきたバナラアイスをパクつくしのぶ／テレビ台の引き出し式の小さなトレイに甘いミルクティー。

「ゴキブリ並みの生命力だわ」

高飛車／傲慢／つつけんどん　いつものしのぶ／細い足を組んでいる／ミニスカートがまくれ上がっている／真っ赤なショーツが見えている。

「あんたのせいで本当ひどい目に会ったわ」

ドンドン消えていくバナラアイス。

「いやらしいパンツを見せながら文句ばっか言ってるんじゃない」

「何よ、パンツ大好き人間のくせに」

そう言っつてしのぶは、スカートの裾を引っ張って真っ赤なショーツを隠した。

「なんだ、もつとずっと見せてくれていて良かったんだぜ」

「そのカシューナッツをおっ立たせるのは、退院してからにしなさい」

しのぶは椅子から立ちあがった　「タバコ吸いに行ってくる」

ここは病院だぞと文句を言いたくなる勢いでスライドドアを開けるしのぶ／カツカツと甲高いピンヒールの音を響かせて病室から出ていった。

目が覚めたあと、真由美から一部始終を聞かせてもらった　不可解なことだらけ／まだ事件は解決していない／謎／謎がいくつも残っている。

あるとき／しのぶが所有する阿佐ヶ谷のオンボロビルの地下
村山はロープで縛られていた／縛ったのはおれ　それは間違
ない。

おれは結衣に刺された　それも間違いない。

結衣は死んだ　しのぶが結衣を刺そうとしてナイフを取り上げ
た／結衣を殺したのはおれ／足を切り首を突き刺した　それも間
違いない。

ここから先はすべて聞いた話／しのぶに

しのぶは、救急車を呼ぶために店の外に出た　地下では携帯電
話の電波が入らないためだ／それはいい／あたり前の行動だ　問
題はここからだ。

しのぶは血だらけだった／通行人がしのぶの異様な様に驚いた／
泣き叫びながら救急車を呼んでいるしのぶ／電話を終えて道路にへ
たり込むしのぶ／通行人の一人がしのぶに声をかける　地下でお
れが倒れている／助けなきゃと立ちあがるしのぶ　声をかけた男
はしのぶにそこにいるように言った／救急車が来たときにすぐわか
るようにと　しのぶはその場にいた／男は地下においていった／
救急車が来た　救急隊員としてのぶが地下におりた／状況は少し変
わっていた　村山が死んでいた／結衣が持ち込んだナイフで首を
切られて／おれが縛ったはずのロープはなかった／村山はナイフを
握っていた／そのナイフは結衣の首に突き刺さっていた　地下に
おりたはずの通りすがりの男はどこにもいなかった。

不可思議なことはそれだけじゃなかった　おれは当然、意識不
明の重態だったわけだが、しのぶはおれが目を覚ますまでその事件
については一言もしゃべらなかった。

それなのに　たいした取調べを受けなかった。

事件はこんな具合にまとめられた　田辺事件は最初のまま、田
辺の単独事故死／七海のレイプ事件は村山が犯人／そこまではいい
それは納得が行く結果だ。

だが、オンボロビルでの事件はどうだ

結衣をレイプしようとした村山／空き家になっているオンボロビル／結衣を連れ込む村山／結衣を助けに来たおれとしのぶが巻き込まれる／村山は結衣に刺され／おれは村山に刺され／結衣は村山に刺される　結衣と村山は死亡。

なぜだ　なぜそんなことになっている／おれとしのぶはおとがめなしてのはどういうことだ？／村山はなぜ死んでいた？　通りすがりの男つてのは何者なんだ

わからないことはまだあった／二十五年前の話だ　おれは重態で昏睡でモルヒネ大量摂取の最中に真実を知った／失っていた記憶を取り戻した／レイプ犯を殺したのはめぐみ／おふくろを殺したのはおれ　それはいい／それならそれで構わない

問題はそこじゃない　その真実と田辺の事件／何がどう関わっているのか

結衣は言っていた　下着泥棒がすべてを知っていた／七海が盗聴を録音した媒体の中にはその話が含まれている　つまりだ／下着泥棒から二十五年前の話聞いた結衣が田辺に話したってことだろう　だがしかし／それがなんで田辺事件と関わるのか

村山と結衣はマリファナと援助交際についての悪巧みをしていた／おそらく田辺が栽培して溢れたマリファナを利用して／たまたまか故意にかはわからないが田辺が死んだ／それでマリファナを盗んだ／ところがそれを七海が盗聴していた／だから七海を狙った／七海が盗聴記録を持っていなかっただからおれを狙った

ほら／おかしい／いつたいどこに二十五年前の真実が絡むのだろうか

タバコだな／それに酒だ　頭が冴えない／だから瞬かないんだ／イマジネーションのピントが合わないんだ。

ここを抜け出す必要がある　ベッドから抜け出す／点滴／引っこ抜く／ロッカー／着替え／ない　病院の簡易パジャマじゃ格好悪くて外に出られん／ファッキン！！／誰かに頼むしかない／高橋に電話しよう　携帯電話／おれの携帯電話はどこだ？

スライドドアが開く 「ちょっと！ あんた何やってるのよ！」

しのぶがわめく／手に持っているチョコ菓子を握り潰す。

「見ればわかるだろう、退院する。おまえ、着替えを持ってきてくれんか」

「あんたバカじゃないの！！ まだまともに歩けないのよ！ それどころか、食べることも、飲むことも、なんにもできないのよ！！ っていうか、あんたなんでそんなにボロボロなのに、一人で立つていられるのよ！！」

「酒が飲みたいからだ。それにタバコも吸いたいからだな」

「やれやれってポーズのしのぶ／おれのポーズなのに／盗まれた。」

「おれの携帯電話はどうした？」

「血だらけになってぶっ壊れたわよ」

ナースコールのボタンを押すしのぶ／逃走失敗／あきらめてベッドに戻る。

看護婦の声がスピーカーから聞こえる 「どうしました？」

おれは言った 「点滴が抜けた」

しのぶが言った 「抜けたんじゃないわ、抜いたのよ！ このバカたれが！！」

看護婦の笑い声が聞こえる 「すぐに向かいますね」

「来るときに、こいつを縛りつけておく手錠とロープを忘れないでよね！！」

病院 / 売店　おばちゃんにタバコが売ってないか確認する / 怪訝な顔のおばちゃん　どこの病院に行ってもそんな売店はないよ / 松葉杖でパジャマ姿のおれ / しのぶが買って来た趣味の悪いパジャマ　仕方がない / しのぶが帰ってくるのを待つしかない

愛莉 / エレベーターホールでエレベーターを待っている。

愛莉の隣に並んで声をかける　「登場が遅いぞ」

おれを見る愛莉　「ひどい格好だね」

「タバコと酒がないとこうなるんだ」

笑う愛莉　エレベーターが開く / 乗り込む / 二人っきり。

「話は聞いたのか？」

「うん……真由美さんから全部聞いた。有二さんのことも、七海さんのことも、結衣のことも、田辺って人のことも……」

真由美は愛莉を捕獲していた / 愛莉がいた場所　中央公園 / 花

時計の前　そう言えば、そんな話をしていたな。

「おれに渡すものがあるだろう」

愛莉は鍵を取り出しておれに渡した / コインロッカーの鍵。

「目白駅だな？」

「うん……」

「なんでもっと早く持って来なかった」

うつむく愛莉　「だって、絶対に聞くなつて言われていたから、聞いてないんだよ。だからどんなものか知らないし……」

「それなのに、七海が襲われて重症、おれも重症。結衣は死んだ。

これはまずいってことで真由美のところに行った。それで状況を聞いた。自分の持っているものが事件の鍵を握っていると知った。だから持ってきた」

涙　「うん……いったいそれはなんなの？」

「知らないままのほうがいいさ」

村山が言うところの『持つべきもの』／それがこの鍵で開くロックスカーの中にある。

エレベーターの扉が開く／病室へ向かって歩く。

「どうしてわたしが持っているってわかったの？」

「時計だ。おまえがしているその金色の腕時計。おまえを高円寺で拾ったときにもしていた。それは、七海のだろ？」

自分の左腕／金色の腕時計／見つめる愛莉 「うん……」

病室のスライドドア／開ける 中に入る／ベッドに座るおれ／椅子を指差すおれ／その椅子に座る愛莉。

「奈津子にもらった七海のスナップ写真にその時計が写っていた。あのやかましいクラブでおまえに会ったときには、その時計はしていなかった。だから、おまえを高円寺で拾ったあの晩、七海に会ったんじゃないかと思った。それでさらに思った。おまえはあの晩、おまえのファッションには似つかわしくないバッグを肩にぶらさげていた。あのバッグは七海のだろ？」

「うん……」

「翌朝、おまえはおれの事務所で、ワイドバンドレシーバーを見た。そして、それが盗聴器だとすぐにわかった。盗聴器なんて普通の女子高生が知っているようなものじゃない。ワイドバンドレシーバーが二台並んで置いてあるのを見たら、普通はトランシーバーかと思うもんだ。それでおれは、おまえが盗聴器を見たことがあると思っただ。すべて推測だが、それですべてわかった。おまえがぶらさげていたバッグの中身は盗聴器で、それは七海から預かったもので、七海は田辺の部屋を盗聴していたんだとな」

愛莉がおれを見る 「さすがだね、探偵つてすごい」

「ついでに言うと、三又プラグ型の盗聴器もそのバッグに入っていたらろっ」

「うん、なんでわかるの？」

「田辺が死んだ晩にな、田辺の部屋で、テレビとDVDプレーヤーの電源コンセントが抜かれていた。だが、コンセントの差し込み口

は一つしかなかった。あそこには三又プラグ型の盗聴器が差し込まれていたんだ。おまえが持っていたバッグに入っていた三又プラグがな。七海は盗聴で田辺が死んだのを知った。それで田辺の部屋に行って三又プラグを抜いた。田辺の携帯電話を持ち出しているところを調べようと思った。着信記録で結衣の番号を調べた。おまえは七海のところに行ったが、七海は態度が変わった。いつもは泊めてくれるのに、あの晩は追い返された。追い返されるときに、バッグを預かり、誰にも見つからないところに隠してくれと頼まれた。翌朝、七海は田辺の携帯電話で警察に通報して、田辺の部屋に電話を投げ込んだ。そんなところだろうな」

冷蔵庫を指差す　愛莉が開ける。

「好きなものを飲め。おれにはコーヒーを取ってくれ」

愛莉はしのぶのミルクティーを取った／おれに缶コーヒーを寄こした／プルトップを弾く／飲む　　コーヒーを飲むとタバコが吸いたくなる。

「その金色の時計はかなり高価なものだ。おまえにそれを渡したってことは、七海とおまえはかなり親密な関係なんだろうとも思ったんだ。それで、奈津子がなんで七海の依頼をしたのかってことも想像できた」

ミルクティーを飲む愛莉　　「七海さんとは前から知り合いだったの。ママと立川さんの話を立ち聞きしてて、名前と手の痣のことを聞いたときには驚いた。まさかわたしをたまに泊めてくれたり、ママのことで相談に乗ってくれたりしていた七海さんが、お姉ちゃんだったなんてね」

「だが、七海はおまえが奈津子の話をしているのを聞いて、自分の親が奈津子で、おまえは妹なんだとわかっていたんだろうな」

「うん……わたしが七海さんに恐る恐る聞いたときには、知っていたよって言った」

ろくでもない人間がろくでもない事件に関わった　被害者もろくでなし／加害者もろくでなし／関わったすべての人間がろくでも

なくそつたれどもだった／おれも含めて／しのぶも含めて／愛莉だけが何も知らずにたいした罪も犯さなかった／それなのに愛莉がこの事件の核心を握っていた／やれやれだ

「おまえは、七海にあずかったバッグの中にあつた盗聴記録を聞いていないんだな？」

「うん……」

「それはどんなメディアだった？」

「USBメモリだった」

「そうか」

「ねえ、わたしこれからどうすればいいのかな」

「これから真由美がここに来る。真由美と一緒に帰れ。いいか、おれがいいと言うまでは、真由美の指示に従え」

缶コーヒを飲み干すおれ。

「どういうこと？」

「この一連の事件はな、まだ解決してないってことだ。おまえは事件の鍵を握っていた重要人物だったことだ。危険に巻き込まれる可能性がある。真由美がおまえをかくまう。おれが事件のケリをつける。それまではおれと真由美以外の、誰の言うことも聞くな。いいな」

ミルクティーを飲む手が震えている愛莉 「うん……」

「心配するな、すぐにケリをつけてやる」

スライドドアが開いた しのぶ。

「てことはあんた、村山を殺した犯人を知っているってことね？」

しのぶの肩ノでかいバッグからおれの服がはみ出している。

「あたり前だ。おれにわからないことはこの世に存在しない。おまえの今日の下着が黒だったことも知っているさ」

なんでわかるのよ！ って顔のしのぶ／ビンゴだったのがわかる しのぶを透視しそうな勢いで見つめる愛莉。

「おまえ、おれについてくる気なんだろ？ おまえが大胆な行動に出ようとするとき、下着はいつも黒なんだ」

笑う愛莉ノイラツとするしのぶ。

「あんたいつも、そんな適当な推理だけで行動して、証拠をちゃんと集めたりしないから、そんなボロ雑巾になってるんじゃないの？」

「おれは警察じゃない。証拠なんか集めたってかねにならん。依頼人がいない仕事ならなおさらだ。」

やれやれって顔のしのぶ 「まるでかねの亡者ね」

「そのかねで飲み食いしているのはどこのどいつだ？ おれのエンジェルは浪費癖が激しいからな」

おれはしのぶにウインクしてみせた　しのぶはおれに向かって
でかいバツグを投げつけたノ勢い余ってベッドから転げそうになる
おれノ啞然とした顔の愛莉ノその愛莉にウインクするしのぶ

「ねえ有二さん」　しのぶのウインクに笑顔を見せた愛莉が、
すぐに真顔になった。

「なんだ？」

「わたしが七海さんから預かったバツグの中には、三又プラグも、
そのなんとかレシーバーっていう盗聴器も、二個つつあったよ」

おれも真顔になる　「そうか。ついでに写真が一枚入っていた
ろう？　七海の古ぼけた写真が」

ゲームセンター／デブでブサイクな女子高生を威嚇した場所／結衣をはじめて見た場所。

喫煙ブース／ハイライト・メンソールに火をつける　白髪／背の高い／かつぶくのいい男　栗田／喫煙ブースに入ってきて来る。

「どうした、おまえがおれを呼び出すなんて。なんの用だ？」

栗田はタバコに火をつけた。

「村山を殺したのはあんただな」

栗田はククツと笑った　「なんだ急に。なんでおれが村山を殺さなきゃならんのだ」

「あんた、もうすぐ定年だ。警察にはかなり貢献してきた。だからすべて村山のせいにして事件は収められた。そうだろ？」

タバコを吸う栗田　「おれに村山を殺す動機があるのか？ 事件つてのは動機が大事なんだぞ。状況証拠だけじゃ逮捕できないことだつてあるんだ」

「おれの手にある証拠は、あんたが血だらけのしのぶに声をかけたときに、しのぶがあんたの顔をはつきり覚えていたつてことだけだ。それだけじゃどうにもならないつてのはわかっている。だが、動機もわかっている。おれは記憶を取り戻した」

栗田の顔が変わった　青ざめる。

「まずは二十五年前だ。あんたはおふくろと仲が良かった。だが、あんたはおふくろじゃなくめぐみが好きだったんだ。だからめぐみがやった殺人をおふくろの仕業にした。そうだろ？」

「そうだったとして、どうしておれが村山を殺さなきゃならないんだ？」

「まあ聞けよ」　おれは手に握っていた缶コーヒーのプルトップを弾いた。「あんたが隠した事実を下着泥棒の野郎が見ていた。結衣がそれを知った。村山と結衣が、あんたを強請つたんだろ？ だ

が、それはたいした問題じゃなかった。あいつらだつて犯罪者だからな。強請られたとしても、あんただつてあいつらの弱みはいくらでも握れたはずだ。それにそもそも、結衣と下着泥棒の話だけじゃ、あんたの立場を悪くするほどの力はないんだ。たとえそれが録音されていようが、どうでもいいことだつた。村山と結衣はおまえを強請りきれなかった。だが、それであんたは村山と結衣の悪巧みを知ることになり、田辺や七海のことも知ることになった。自分に火の子が降りかからないように、適度に情報を集めて、村山を監視していた。退職まで、何の問題もなく過ごせればすべて丸く収まると思つていた。ところがだ、村山が七海をレイプしやがつた。それがあんたを動かしたんだ」

青ざめた顔に汗が滴る栗田

「あんたにしてみたら、二十五年前の再来みたいなもんだつたらうな」

拳を握り締める栗田

「なんたつて、七海はあんたの娘なんだからな」

拳が飛んできた　おれはそれを避けた／栗田の体を押さえた／全身包帯だらけのミイラ野郎なおれ／栗田の巨体は拘束できない／口で勝負するしかない。

「落ちつけよ。おれがどんなヤツかは知っているだろう。だいたいにして、あんたを通報したら、おれがやったことまで明るみになるんだ。そんな間抜けなことはしたくない」

おれがやったこと　結衣を殺害。

「おれはただ、真実が知りたいだけだ」

「なぜおれが、七海の父親だとわかつた。おまえの得意な推理か？それとも単なるカマかけか？」

おれはタバコを吸つた　「どつちもはずれだ。おれの依頼人が、七海の母親だつたからだ」

栗田の顔から力が抜けた　「奈津子か……」

狭い喫煙ブースにある小さなベンチに腰をおろす栗田。

「何もかもすべて話しちまいな」

栗田はタバコを深く吸い込んでから、そのタバコを灰皿に突っ込んだ／目が虚ろだった／遠くを見ているようで近くを見ていた。

「おれは、めぐみが好きだった。恋をしていた。だが、おまえの母親とは友人だった。それに立場もあつた。警官としての立場がな。

めぐみがレイプされたとき、おれはおまえの母親と一緒にいたんだ。べつにいかがわしいことをしていたわけじゃない。それで、おまえの家に母親と一緒に行くことになった。おれはタバコ屋に寄つたから、おまえの母親だけが先に家に帰つた。おれはあとから行つて、部屋に入った。二階のめぐみの部屋から、おまえと母親の叫び声が聞こえた。走つて階段を登つて部屋を見たら、血だらけの男が倒れていて、ボロボロになつたためぐみが帰り血を浴びていて、おまえが母親の首をロープで絞めていた」

おれはコーヒを一気に飲んだ／脳みそは揺れなかつた／マツハ六で冥王星にはぶつ飛ばなかつた／知つている／思い出したこととまったく同じだ。

「おれには状況がすぐにわかつた。死んでいる男がめぐみとおまえを暴行したんだとわかつたし、めぐみはその男を殺したんだとわかつた。その男が母親の知り合いで、怒り狂つたおまえが、母親を殺しているんだというのもすぐにわかつた。おれはな、めぐみを守つてやりたかつた。あのとのおれは、今のおまえくらいの歳だつた。十四歳のめぐみに惚れていたなんて、口が裂けても言えなかつた。それでもとにかく、めぐみだけはなんとかして救つてやりたかつた。だから事件を偽装したんだ。裁縫バサミを母親に握らせて指紋をつけたり、ロープを部屋のドアにくくりつけたりして、おまえの母親が男を殺して自殺したつてことにした。とにかく血だらけだつたし、おまえもめぐみもボロボロだつたから、おれは慌てふためいて部屋中を荒らしてしまつたように装つて、証拠になりそうなものを消滅した。運良く、めぐみはおまえも知つている通り、一年近くも廃人のようだつたし、おまえは記憶をなくしていた。めぐみが元気にな

つてから、事件の偽装について問い正されたときは、おまえを守るためだと言って納得させた。めぐみがやったことは正当防衛になつたとしても、おまえがやったことはまた別だからな。めぐみはそれで納得して、このことはおれとめぐみの秘密になつた。二十五年間、なんの問題もなく過ぎてきていたんだ。二十五年の間、おれはめぐみの力になることだけを考えて生きてきた。だが、めぐみはおれに、おまえの力になってやってくれと、おまえが記憶を取り戻したときに間違いを起こさないようにそばにいてあげてくれと、いつもおまえのことばかりだった。めぐみが愛していたのはおまえだったのかもしれんな」

栗田の目には涙が浮かんでいた

「奈津子のことはどうなんだ」

「奈津子はめぐみに似ていたんだ。見た目じゃない、雰囲気かな。もつともめぐみは奈津子のようにアバズレじゃない。それでも、どこか似ているところがあつて、おれは奈津子と関係した。それで子供ができてしまって、奈津子はあるときまだ高校生だったから、親にも相談できずに月日だけが過ぎて行ってしまった。おれが知ったときにはもう産むしかない状況だった。おれは奈津子の親に相談を受けて、里親を探して紹介した。それが門脇大輔だった」

奈津子がめぐみに似ていると思ったのは、おれも同じだ。はじめて奈津子に会ったときにそう思った。まさか、そんなことでこの事件にめぐみが関わってくるとは驚きだ。

気がついたら、おれの指の間でタバコが消えていた／新しいタバコに火をつける。

「七海がレイプさえされなきゃ、おまえは村山を殺さなかったのか」
「七海がレイプされたと聞いたとき、おれは二十五年前を思い出した。なあ有二、レイプするのはとてつもなく最悪な犯罪だ、そう思わんか？」

まどろむマリファナの香りがした

タバコを吸う 「そうだな」

だからおれは村山を殺したんだ　とは言わない栗田。

タバコを吸う　「だけどな」　タバコを吸う　「結衣と村山が盗んだマリファナは捨てちまったほうがいいぞ」

栗田がおれを見た／おれも栗田を見た／栗田がタバコに火をつけた。

「おまえはなんでもお見通しなんだな」

「この一連の事件には、マリファナが絡んでいた。それなのにおれはマリファナを一度も目撃していない。警察の捜査でもマリファナについてはまったく記述されていない。常に誰かの手に転がっていつてるってことだ。麻薬がなけりや、めぐみはあんな目に会わなかつたんだ。あんたは、あんたが守りたかつた女たちをボロボロにしたマリファナを、自分の手元に置いた。もう何を言つたつてすべて言い訳にしかならん」

栗田が立ちあがつた　「おれをどうするつもりだ？」

「言つたる。おれはただ、真実が知りたかつただけだ」

「そうか。真実はわかつたのか？」

おれはタバコを消した　「わかつたさ。あんたは、めぐみと七海を守るという名目のもとに、自分を守つただけのくそつたれだつてことがな」

スーツの内ポケットから封筒を取り出す栗田　おれに差し出す。

「おまえに呼びだされたときに、もう悪あがきはできないつてことぐらいわかつていた。おまえがどれだけ優秀な探偵かは知っているつもりだからな。これをめぐみに渡してくれ」

おれはその封筒を受け取つた／半分に分けてシザーバッグに突っ込んだ／何も言わずに喫煙ブースを出た　モグラ叩きのモグラと格闘しているしのぶのところに向かつて歩いた。

喫煙ブースのガラスが割れる音がした／筒型の灰皿が喫煙ブースから飛び出していた／割れたガラスで喉を掻き斬る栗田が見えた　ゲームセンターがスプラッター劇場と化すのが見えた／おれはしのぶの腰に手をまわしてプラスナックルでモグラを叩きのめした

そして背伸びをするしのぶにキスをした

エピソード

探偵事務所／おれとしのぶ　窓の外はいつも通りの景色／雑多な繁華街／いつも通りじゃないおれの体／いつもひどいがいつもよりもっとひどい／包帯だらけのミイラ男

愛莉は家に帰った／千鶴はおれに奈津子から預かった報酬を払って、愛莉の監視業務に戻った　どいつもこいつも悪いヤツはみんな死んだ　おれとしのぶだけは、どんなに悪さをしても死ねない／死なずに生き続けることがおれたちに与えられた罰。

「わからないことがまだあるのよ」

しのぶは真由美の店のしのぶスペシャルを食べている／キャラメル香り／林檎の香り／バニラの香り／生クリームの香り　吐きそうなくらいに甘い香りが入り乱れる。

「何がわからないんだ？」

おれは缶ビールとタバコで上機嫌だった。

「門脇七海はどうして田辺の部屋を盗聴していたの？」

しゃべりながらもしのぶスペシャルがどんどんとしのぶの腹に吸収されていく。

「それはたぶんな」　これはおれにも推測の域を出ない謎　「

田辺と七海の性癖だったんだ。あいつらはお互いの部屋を盗聴しあっていたんだ」

「何よそれ」

「あいつらはな、兄妹だったんだ。義理のな」

驚くしのぶ　「七海は愛莉ちゃんと姉妹だったんじゃないの？」

「愛莉と七海は父親は違うが母親は同じ姉妹だ。田辺は七海が養子に出された先にいた子供で義兄妹になる。それは推測じゃなく、高橋が調べてくれた事実だ」

「恋人だったんじゃないのね」

「いや、恋人だったんだ」

首を傾げて怪訝な顔になるしのぶ 「まったく意味がわからないんだけど」

「ここから先はただの推測だがな、田辺と七海は血のつながりがなという事実を知る前から愛し合っていたんだと思う。だからセックスをしない愛し合いかたにたどり着いた。それが、覗きだの、相互オナニーだの、下着を使つてのオナニーだのつて形で現れた。首吊りもきつと、兄妹で愛し合つてしまった罪の意識で、自殺を試みたりしたことがあつて、その影響で性癖になつていったんだろう」

「なんなのよいったい」

「変態的な性欲つてのはそんなもんだ。それで、血のつながりがないことを知つたあとも、その性癖はそのまま残る。変態野郎は変態行為でなきゃ興奮しない。だから、田辺と七海はセックスなんてしないで、盗聴でお互いの声を聞いて欲情していたんだ。お互いの同意のもとでの盗聴だから犯罪でもなんでもない。七海は犯罪者じゃなかつたつてことだ。ただの変態性癖を持つた雌ブタだつたつてわけだ」

生クリームの甘つたるい重い香り／ナイフとフォークを握つていたしのぶ／食べるのをやめた／ナイフとフォークを皿に置いた

「なんか食欲がなくなつてきたわ」

七海と田辺がお互いの声だけを聞いて、お互いの使用済み下着の匂いを嗅いで、でかい喘ぎ声でオナニーしている様子を想像してしまつているのであるうしのぶ 目が潤んでいる／興奮している／高揚している／光悦の表情になつている 間違いなく乳首はビンビンに突つ立っているだろう／間違いなく股をビショビショに濡らしているだろう／想像しただけで軽い絶頂を向かえているだろう 小さくブルツと身震いをするしのぶ。

「おまえから食欲を取つたら、残るのは性欲だけだな」

「何よそれ！ あたしは田辺や七海や、それにあんたみたいな変態じゃないわよ！」

おれは立ちあがつてしのぶの前に行った。

「まだ、おまえからの依頼の報酬をすべて受け取っていないんだがな」

依頼の報酬／足りないぶんは体で支払い　ビショビショであるう股を足を組み変えて隠すしのぶ／おれを見る／ニヤリ顔になる

「まだ傷が痛むんでしょ？　あたしを満足させられるだけ腰を振るのは無理なんじゃないの？」

おれはしのぶの隣に座った。

「おまえは、男にまたがって自分で腰を振るのが大好きな女だったろう。おれが腰を振る必要はない」

「それじゃまるでアバズレじゃないのよ」

おれはしのぶを自分の胸に引き寄せた　しのぶの匂いがする／甘ったるい匂いの中で／しのぶの汗の匂いがする。

「そうじゃないって証拠は何もない。俺の推測じゃおまえは紛れもないアバズレだ」

ムツとするしのぶ　すぐにエロい顔になる／自分の唇をいやらしい舌で舐める。

「あたしが、あんたにまたがって腰を振ったら、あんたのお腹の傷がパツクリ開いちゃうわ。口でしてあげるからそれで我慢しなさい」
いやらしい大きな目／いやらしい分厚い唇／いやらしくくねる体
もうすっかり淫乱モードのしのぶ。

「フェラチオはファックじゃないって、ビル・クリントンが言っていただろう。だから、フェラチオじゃ報酬を払ったことにはならん」
「誰よそれ？」

「知らないのか？　アメリカの大統領だった男だ」

「あら、くそつたれ大統領のありがたいお言葉なら、従わないわけには行かないわね」

しのぶはおれの首に腕をまわした／いやらしい唇を半開きにしてキスをした　キャラメルの匂い／林檎の匂い／バナナの匂い／生クリームの匂い　しのぶの口の匂い／しのぶの体の匂い／しのぶの赤毛の匂い　匂いがおれを包む。

おれはしのぶの口から離れた 「もつとも、ビル・クリントン
はその発言で失脚したんだけどな」

「なら、なおさらあんたにお似合いよ。あたしを抱いて墮ちるとこ
ろまで墮ちて行きなさい」

おれはしのぶにキスをした

痛いほどに激しい／痛いほどに熱い／おれのしのぶに／痛いほど
のキスをした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7823i/>

ファッキン・シスターズ・クライスト

2011年10月11日10時55分発行